女子文壇

第五年 三月 第[redacted]號
四



本品は最も完全なる白毛赤毛染なり又本品を以て赤毛を染る時は有に半ケ年以上を保つと云ふ奏効禮状日々多大なり

全國到る處の小間物化粧品店藥店に有り



本舗

東京市日本橋區通鹽町一番地

服部重右衛門商店

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



(其の一)

女子文壇
第五年第四號

【本欄】

目次

第五回内國勸業博覽會褒賞及評賞牌受領

壽美禮おしろい

登録商標

壽美禮おしろい

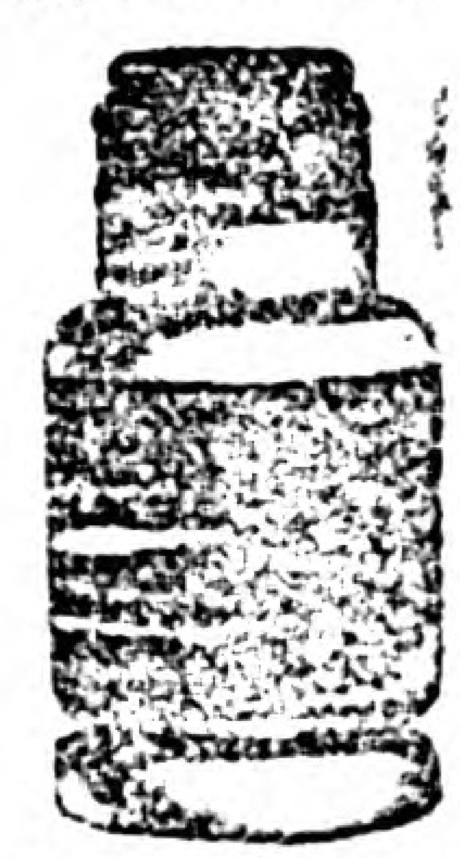
五二會品評會 功勞賞



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ヴワイオレツト煉製

錫栓附乳白硝子器入



ヴワイオレツト水製

ねり製	大壜二十錢	小壜十二錢
水製	大壜二十五錢	中壜十五錢 小壜十錢

玉製
粉製
肉色各種
錫栓附乳白硝子器入

◎壽美禮白粉

は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新發體等を以て配劑しあるを以て常に用ひて御顔肌を艶麗ならしめ漸々しく天然と色白きに至るべし殊に衣服半襟等のよごれざると汗の爲にムラを生ぜざるは本白粉の特色なり「壺おしろい」は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會、祝席、縁談の場所に臨むに衛生上又社交上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方東京横濱其他に於ても上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

◎西洋皮膚艶麗劑 壽美禮あらひ粉の特性

綠、藍、紅彩紙帶ひ錫詰入 / 別製錫詰五拾錢 / 大袋二錢 小袋一錢

◎壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞贊する香料及弊店が多年研究の上へ製せし獨特の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かにし色白く美くしくなす◎壽美禮あらひ粉は御髮洗に御用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性あり◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜ろし水又は温湯に溶し又ぬかに混ぜ御入浴の際用ふるをよしとす

登録商標
西洋白色くなるあらひ劑
SUMIRE
WASHLNG IOWDER
壽美禮あらひ粉



製造本舗 東京東兩國元町(兩國橋際) 壽美禮堂謹製

(電話浪花二一七六五番)

販賣所は全國到る處の小間物店化粧品店賣藥店等に有之候に付御近邊にて御求めを乞ふ

(第の四)

湖畔の歌



（大江原色版部）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女學校の教師生徒は婦人世界の購讀をすゝめる

婦人世界

三月一日發行 四卷第三號 一冊拾五錢

郵稅一錢五厘 半年分郵稅共一圓五錢 一年分二圓五錢

▲妻君曰く良人が弦齋先生の夫婦情愛論を讀んでから私に對する擧動がまるで一變しました。情愛論は女が見ても男が見てもためになることが澤山あります

△名流婦人の頭相判斷

△賃仕事して弟と共に苦學す 川上きん子

△髪を美しくする法 岡村博士

△名流婦人十八歲當時

▷

▲女學生曰く前號の歷史[illegible]談に大層可哀さうで私は泣かずにをられませんでした。私はあいふお話が大好きです。毎號引續き出して下さい。記者曰く本號には妙沖尼の父が行衞を尋ねる面白いお話が出てをります

△女學校の教師が一番困る生徒の癖 宮田修

△米國の令孃は如何に若き男子と交際し良人を選ぶか 森盛一郎

△納豆を賣りし孤兒が良家に嫁せし話 一記者

△日本に歸化せる感心すべき米國婦人

△西洋婦人が始めて日本料理を食べる時の話

△美人畫を描く時の苦心 清方

△內職して通學せる女學生

▽

▲記者曰く本號には記者が或る貴婦人から聞いて來た白粉の塗方が出てをります。顏を美しく見せようと思ふ方は是非一讀しなければなりません。奥樣にも女學生にも切におすゝめします

▼田中宮相の結婚は婦人社會の大問題です。本號には增田社長の意見が出てをります。これに對するその外[illegible]夫人の料理談 伊庭學士の子宮外姙娠の話など爲になる話澤山あります

◁

東京京橋南紺屋町十二 實業之日本社 （郵便振替貯金口座參貳六番）（電話新橋八七四番） 賣捌 全國書店


美術造花材料
各種
勉強販賣致候
天野卯兵衛商店
東京市日本橋區横山町一丁目拾六番地
電話浪花一六四三番
振替口座四九七〇番
營業案内は郵送料四錢封入
御申込あれ

現代の閨秀作家



瀬沼夏葉女史



小栗籌子女史



長谷川時雨女史

文士の夫人



薄田泣菫氏夫人



巖谷小波氏夫人



小杉天外氏夫人

女子文壇の廣告によりお申込の節は其旨御書添を乞ふ

水晶おしろいの特長は人目に立たず素顔の白色美人と見せしむるにあり故に婦女子は勿論男子にても欠く可らざる化粧料とす



定價 金五十銭・廿五銭・十五銭

東京市日本橋區通鹽町

本舗 大和屋小兵衛

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

早稻田大學講師

新刊 杉山令吉編

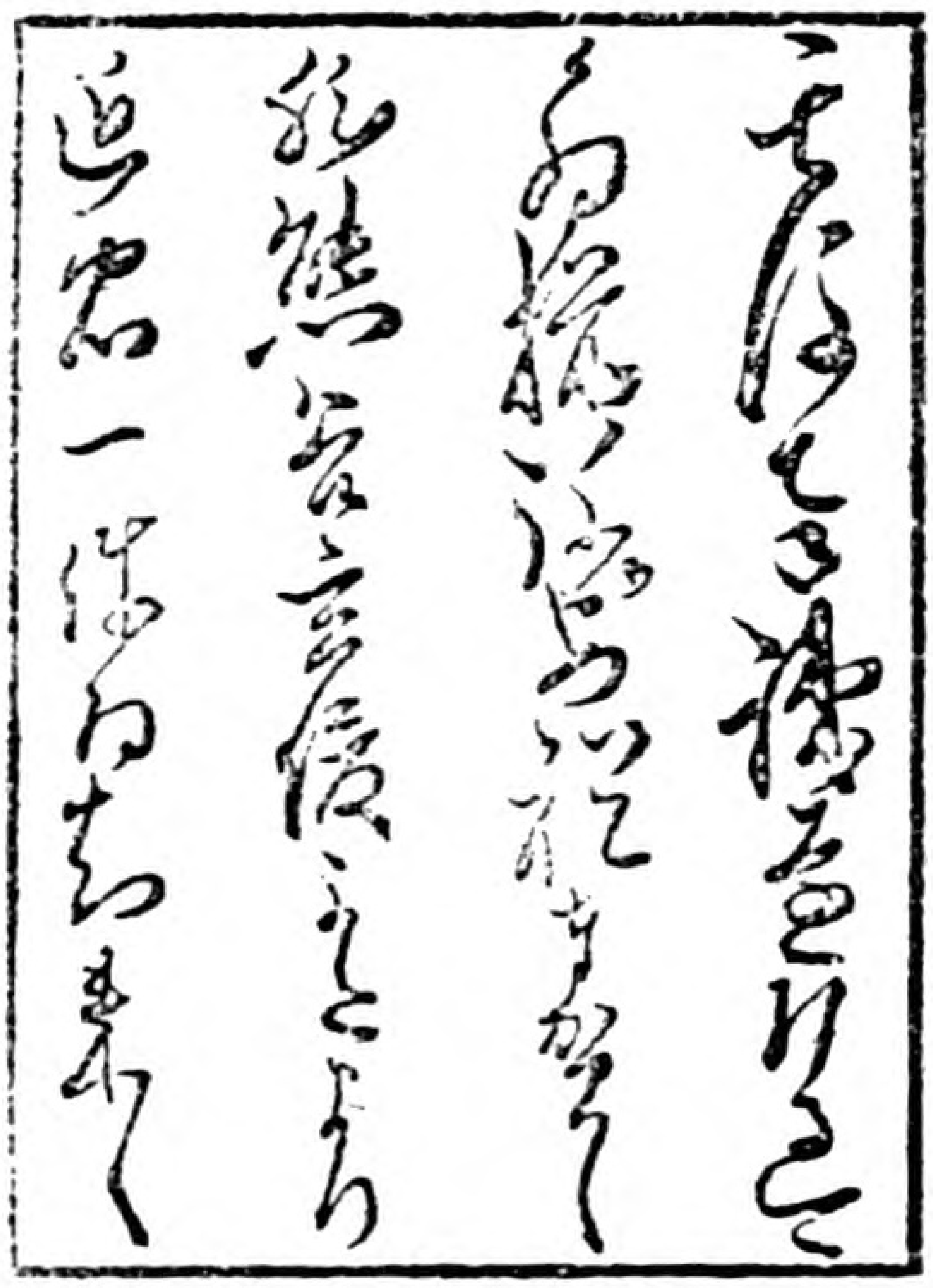
菱湖書簡選

書簡文の好惡は讀者をして先づ發信者の人品如何を想像せしむるものたり。故に書簡の認め方に注意せざるべからざるは固より男女の別なしと雖も女子に在りては特に之を重んぜざるべからず。然るに近時の女學生は槪して其素養を缺けるを以て文筆ともに拙劣にして殆んど讀むに堪へざるを常とす。是れ豈嘆くべきの極ならずや。本書は近代の能筆菱湖翁の書簡に就き文筆ともに佳麗にして日用文の模範たるべきもの大小數篇を纂め良工を選びて剞劂に附し卷末に其讀方と文法上の注意とを加へたるもの、以て書簡文熟習の臨本となすべきなり。

上等半紙木版刷
和本全一冊
正價金八拾錢
郵稅金四錢

雛形





發行所……………東京牛込

早稻田大學出版部

賣捌所　神田 東京堂　日本橋 至誠堂　京橋 東海堂

彼岸櫻



女子文壇　第二増刊

新作家

投稿締切　三月卅一日

發表期日　五月十五日

▼文學初心者の爲に新らしき方向を開拓す▲

懸賞

一等	金貳拾圓宛	一人
二等	金拾五圓宛	二人
三等	金七圓宛	三人
四等	金五圓宛	四人
五等	金參圓宛	五人
六等	金貳圓宛	十五人
七等	金壹圓宛	二十五人

一等當選者には賞金の外に月桂冠（絹製造花）を贈る○一等二等は正金にて贈り三等以下七等までは呉服物、家庭用品等凡て物品にて贈る○圖書は此表以外一等より十等までの賞を與ふ○賞與は凡て作物發表の一ケ月後に贈呈す

編輯の方法

本年の第二増刊として發行すべき『新作家』は編輯の方法を一新すべし。即ち作物に據りて分類せず、投稿作家其人の技倆に據りて優勝を判定し、個人の能所を充分に世に發揮せしめんとす。選拔の方針も全然個人を本位とし、一人にて各種の作を寄せられたる場合には、其の内最も得意と認むる作品を採錄すべく、又最優等者の如きも必ずしも何種と限ることなく、全投稿を通じて最も勝れたる作家に月桂冠を授け、順次等級を定めて小說散文詩歌等各種文學を其作家の技倆に應じて次第すべし。蓋し投稿を主としたる雜誌の編輯法に一新工夫を加へたるものにして、文藝を尊重する時代の趨勢は取りも直さず個人の人格を尊重すると云ふ時代の趨勢に應じたるのみ、此機に乘じて大いに諸君の發奮を懇望す。

▼作物選拔と編輯の方法に一新機軸を企つ▲

投稿の方法は次の四頁を見よ

新作家投稿方法

編輯法の一新に就いて、投稿の方法も多少違つて來ますから注意いたします。

▲小說は小說、美文は美文と一つ一つ分けて選拔するのではなく、其寄稿家の作を一人〲見て行くのですから、成るべく御自分の得意なものを寄稿された方がよろしい。

▲けれども御自分で詩が好いか、文が好いか分らぬと云ふやうな時は詩も文も寄稿して差支ないのです。

▲勿論一人で詩歌散文の各種を寄稿しても差支はありませんが、餘り同種のものを澤山寄稿しないやうにして下さい、成るべくなら各種一篇づゝにして頂きたいものです。

▲此度の「新作家」は個人の本領を發揮させたい爲の企ですから成るべく投稿の方法も自由にして、規則がましいことは設けませんけれど多少の制限は守つて下さい。

▲其制限は小說百行乃至二百行、脚本は一幕物、美文は五六十行から百行まで、論文、書簡文、日記文は五十行まで。

▲短文は一篇を五行乃至十行と定め、一人で十篇まで寄稿して宜し。

▲新躰詩は行數に制限を定めません、短きもよし、長きもよし、口語詩、散文詩の類もよし。

▲和歌、俳句は一首づゝでは其人の眞の詩才を認めかねますから會心の作一人十首以上二十首までを可とします。

▲右に擧げた外、散文にせよ、詩歌にせよ、自ら得意とするものなら何でも宜しい、必ずしも右の種類に宛てはまらなければならぬと云ふことはないのです、例へば世に謂ふ寫生文、紀行文の類で、詩歌中では新歌謠の如きものでも、要するに一切の文學的作物を含んで居ます。

▲小說脚本新躰詩の三種には振假名をつけること、文章は凡て二十四字詰に書くこと。

▲封筒の表に新作家原稿の字を書き添へること。

▲圖書は例の通り二寸五分に三寸の大きさにて薄葉雅皮の類を用ひよ。

▲寄稿する者は必ず日課表一枚を添へて下さい。

▲日課表には姓名（本名、雅號、年齡）住所（國郡市町村名等、或は海邊とか山中とか或は其日の天候等特色を書き添ゆるもの、但し紙上に住所本名を發表すること不可なる其旨附記せられたし）家庭（職業、父母、同胞家族等の現在）日課（朝、晝、晩の行事、通學、用事、勉強等の模樣）月日（此の表を書く時の月日）以上總て簡單明瞭に認めること、左に日課表認め方の一例を示します。

日課表

姓名	木津屋ゆき　雅號奴の小萬　十六歳
住居	大阪南區島之内
家庭	父は五郎兵衛　家は藥舗　但し私は藥は嫌ひ
日課	午前六時起床　柔軟體操を行ふ　午前は劍術自習、午後柳澤里恭先生の許に郵便を出す、和歌の添削を願む爲なり、夜、行燈の下にて六韜三畧虎の卷と古今集を繙く、外には淡雪降る
月日	延享元年二月十五日

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

ケーバ石鹸値上謹告

本品は全世界を通じて化粧品界の大立物と稱せられ今や各國如何なる片田舍と雖も愛用者を見るに至れり然る處今回本國より突然値上の電報來るに接し再三交渉の結果止を得ず



愈よ四十二年一月元旦より

壹個に付 大形 五錢 小形 參錢 の値上仕候

(理由) 生活程度の進みたる爲め本國職工賃錢非常に上りたり

東洋代理店

東京市日本橋橘町二丁目

竹間商店

異彩ある女流

ヘーウツド嬢





尾崎君子嬢

（雜報欄記事參照）



高橋和喜子嬢

挿花と造花



古流松藤齋加藤利長門人（松二齋二宮理操）



共立女子職業學校教授金子しゑ子女史門生（金曜會々員）

（寫眞研究會主事坪川長雄撮影）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

實用女學講義錄

新學期開講

▲本會は中學講義錄の發行に從ふこと既に五ヶ年通信教授に於ける甚深の經驗を基礎となし今回更に女學部を新設して「實用女學講義錄」を發行せり。

▲講習期一ヶ年半、此間に於いて高等女學校程度の學課は勿論、本邦家庭の事情に照らし女子必須の諸科目を講說し圓滿なる主婦を作る事を目的とす

▲講義錄は毎月二回發行とし講師は教育に經驗深き斯道專門の名家のみ也講述極めて平易、總ふり假名の談話體なれば何人も解し難き憂なかる可し。

▲毎月機關雜誌「新國民」を發行して會員に限り毎號無料進呈す「新國民」は現代知名の專門教育家及び斯道大家の訓話學說創作及び會員の投稿を掲ぐ

▲會長尾崎行雄親しく本部を監せらる。組織整頓し取扱最も懇切也。且つ會費極めて低廉都會一ヶ月の遊學費を以て優に全學科を修了する事を得べし

◎新學期開講＝三月三十日迄入會金を全免すべし◎

見本つき規則 無料進呈

大日本國民中學會女學部

東京駿河臺

電話本局三千〇四番
振替口座四千二百番

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

東洋婦人画報

毎月一回一日發行　三月一日發行　三月の巻　定價一部廿五錢郵税金二錢

△書報▽

▲花一枝（井川洗厓筆極彩色美人畫附錄）

▲伏見宮御一家寫眞

▲高橋是清氏令孃・村井吉兵衛氏令孃 ▲令孃の繪畫 ▲女子職業案内所

▲令孃の一日（朝より夜に至る令孃の仕事）

▲温室の花

▲混血美人 ▲雛祭り ▲五十嵐梅子孃と原田延枝子孃

▲世界各國の人形

▲將校婦人會の餘興 ▲愛らしき令孃 ▲婦人教育會新年會と令孃の合奏 ▲黑岡勝子孃と佐子ふじ子孃

▲妃殿下の御臺臨

▲喫茶家聯合新年會 ▲懸選和歌と肖像 ▲奥村女史三年忌

▲走車に乘降の稽古 ▲治庖會卒業生

▲女學生の活人畫

▲日本服を着たる英國の小兒

△讀物▽

◎私共の覺悟……宮川壽美子

◎女子と品位……大町桂月

◎四名家の雛拜見……桃子

◎娘に風變の服を着せる譯……加納子爵

◎西洋と日本の人形……久留島武彦

◎虛榮の爲めに結婚する婦人……文學博士 三宅雄二郎 法學博士 浮田和民

◎亂倫の父を持てる令孃の苦心……ふみ子

◎家事の手傳をきらふ女學生……横井博士

◎盲者の恩人……山縣五十雄

◎歳の違ひし夫に嫁入せし婦人の述懐……某辯護士夫人

◎訪問日記（二）……ゆき子

◎和洋料理の栞……鶴井まき子

◎育兒の手引……女醫 鷲山彌生

◎春の詩情……太田みづほのや

◎婦人の覺醒すべき時は今なり……下田歌子

◎雛は情愛の化身……清水清風

◎奥樣のいろ〱……かをる女

◎混血女兒の日常生活……紫川散史

◎衣服の紋……水口薇陽

◎婦人と謠曲……佐藤佳馬

◎妾腹に生れし某子爵の告白

其他[illegible]

東京市神田小川町一四　東京社

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

文字が上手に書ける程愉快なものはありますまい、

悪筆と能書の人

とは其身一生に及ぼす損德はどんなに大したことでしよ

本會獨特の特許速成通信教授の方法にて練習すれば如何なる悪筆の方にても短日にて頗る上達することは全く機械的であります

顧問伯爵東久世通禧閣下 草行假名書翰文（及和歌四十八音共）六ヶ月卒業

女子部書者 小野鵞堂先生外講師大家數名

男子部書者（文部省習字檢定試驗委員）稻川雲谿先生 楷行草三體六ヶ月卒業

見本 詳細會則無代進呈 ━ 東京本郷森川町壹番 電話下谷三〇二壹

帝國習字速成學會

新粧



石井芳子（横濱）



（東京）西島みどり

紀念撮影



四十一年十二月十八日大坂西區プール女學校に於て撮影

（田中れん子寄）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



女子文壇の廣告に依り御申込の節は其旨御特添を乞ふ

けは
發毛ヽ

本院は發毛劑に就て數年苦心の結果遂に効力完全たる方劑を發見成効せり往復ハガキにて申込あれ發見の事歷を告ぐ

東京小石川柳町跡見女學校前

塚原藥院

代々家傳の妙藥
經通丸
月やく藥

調劑元

東京市丸の內

本劑は代々家傳の妙藥にて如何なる難澁の月經滯りも又婦人子宮等を痛めず安々と通じ輕症なるは其夜にあること調合也他藥を用ひて効能なき時は本劑を服用し以て其價値を認めよ定價廿五錢五十錢一圓特製二圓但小包送料を要すまるい方は八錢を要す

有樂町二ノ三

江戸屋

男女
毛深き人僅か十分間に害なく毛を抜き亦發毛を止める秘法あり貳錢郵券送れ呈す

脫毛術發見

東京小石川柳町

東洋堂藥院

毛のはへる藥

多年實驗引手拜して特効驚くべき奇藥

一圓●一圓半●濃厚二圓半●三圓半送料十錢

美容散 やせる藥

●血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤く、のぼせ症等總の肥胖質の人用ゐて害なく身體美容となる保證藥なり

●定價(一週)七十錢(三週)二圓(五週)三圓廿錢送費十錢



にせ物御注意

皮膚病專門藥

あせも いんきん たむし

あか鼻 ざくろ鼻 あざ

ぜにがさ ひぜん わきが

本劑は獨逸國皮膚病研究所專用法劑にして特製一瓶にて全治保證又おおいこむの憂なし

小瓶十錢中瓶一圓大瓶一圓五十錢特製二圓送料十錢

專賣本舖 東京本郷區本郷三丁目 電話下谷二二一九番 新宮藥館

半身すがた



（東京）船津香雨子



（東京）板垣和歌子



（岡山）小林雪子

わが寫眞帖



（石狩）中原とみ子

（島根）小川仁壽子

（下野）瀧澤茶煎子

（水戸）菅とみ子

（小樽）井波谷清子　伊藤操子

女[illegible]の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇第一增刊 二月十五日發兌

新美文

口繪 入選作家十二人寫眞肖像挿入

▲樂譜……三隅氏寄書

大懸賞女子傑作

▲美文

▲小說……▲新體詩

▲和歌……▲書簡文

▲論文……▲俳句……▲スケッチ

▲短文

（二百餘頁充實）

附錄名家新作

◉小寒の日記……薄田泣菫
◉裏家……吉江孤雁
◉憧憬……小川未明
◉一轉機……高須梅溪
◉女床屋……兒玉花外
◉拾て犬……岡田八千代
◉火藥……澤村胡夷

定價二拾錢＝郵稅一錢五厘

發兌元 東京京橋大鋸町 女子文壇社（振替口座壹七二一壹）

賣捌所 全國到る處の雜誌書店

▲與謝野氏每週講演（明治四十二年四月[illegible]より開講）

一、[illegible]を聽講せんと欲する特志の人々の爲めに、[illegible]午後一時より同[illegible]時迄、水曜日午後四時より同六時まで、自宅に於て左の講義を開く。

△歴代古歌講義……講師 與謝野寛
（萬葉集の内、古今集、日本紀、新古今集、催馬樂、伊勢物語、[illegible]集、[illegible]小町集、和泉式部集等の歌、右は書籍持參に及ばず[illegible]）

△源氏物語大意講義……講師 與謝野晶子
（右は書籍持參）

△大鏡抄講義……講師 與謝野晶子
（右は書籍持參）

△新派和歌講義……講師 與謝野寛、同晶子
（右は筆記帳持參）

△短歌及新體詩製作談……講師 與謝野寛、同晶子

△會員の短歌批評……與謝野寛、同晶子

每月一囘若くは二囘[illegible]として、外國文學、小說、戲曲、新體詩、繪畫、音樂等に關する專門諸氏の講話會を催す◎聽講志望の諸氏（男女に拘らず）は住所、氏名、職業を記載し、束脩金[illegible]を添へて申込まるべし◎聽講料は每月金[illegible]とし、各月最初の聽講日に納附するものとす◎會員諸氏の短歌は撰拔の上雜誌「常磐樹」に掲載す。

東京市神田區駿河臺東紅梅町二番地與謝野方

文學講演會

私立 立教高等女學校 京橋區明石町

第一學年ニ八十名、第二第三第四學年ニ若干名入學ヲ許ス

四月ヨリ專攻科ヲ置ク（英語國語教育等）五ケ年高等女學校卒業程度

希望廣告

求婚 年廿五文學を好む無係累資金救助の淑女を求む [illegible]社



第五年第四號

明治四十二年三月一日發行

要らぬ事尋ねて可惜夜の更るに御休みなされと身を起して戸棚より出すは綿まづしき痩せ蒲團かと思ひの外、緋緞子の蒲團淺黄綸子の搔卷紅羽二重の裏付、獵虎の襟、驚かるゝ贅澤、サア御寢なれと我を押やりて小屏風立まはすに是非なく話しを中途にして。然らばお先へ御免蒙ると横になれば、蓬萊の夢見さうな雲鶴の錦の丸枕に茶ん詰あるやゆかしき香、鼻の先に立つ不審どうも眠られゝばこそ、ソツと屏風の外を覗けば爐の傍に倘端然と坐して何やらを讀み居る美しさ人形の様なり、一時間も經ど我は倘寢られねば又覗くに矢張動かず、二時間も過ぎて又伺ふに女は元の通り眞夜中頃にも心愈々冴て後先揃はぬ此家の始末を考へながら又覗けば女は頻りと火箸もて灰搔き退し居れど柴木最早盡て爐の暖ならず、木叢峠の巓なれば流石に寒氣を覺えてや、獨り言に溫泉にても入らんと云ひ捨てて湯殿の方へ行けるが少時して歸れば爐の火は全く細々となりしに倘其傍に端然と坐りたる樣子何の用ありとも見えず、全く寢るべき夜具なき故と知れたれば。…………

幸田露伴氏『對髑髏』より

姉

わかきいのちの
をしければ
みやにもはるの
かによはん
せめてこよいは
さほひめよ
はなさくかげに
うたへかし

妹

そらもかへりや
はるのよは
ほしもかくれて
みえわかず
よめにもそれと
ほのしろく
みだれてにほふ
うめのはな

姉

はるのひかりの
こひしさに
かたちをかくす
うぐひすよ
はなさへじるき
はるのよの
やみをおそるゝ
ことなかれ

島崎藤村氏『暗香』より



若き婦人の根本修養

羽仁もと子

第三　學校に通ひつゝ家事を學ぶ工夫

前號に簡便な家內の仕事を覺えることゝ、まめやかに働くくせは是非とも少女時代になされればならぬことであると申しました。さてそのまめやかに働く習慣はどうしたならば養ふことが出來るのでせうか。

手順を定めて働くべし

私は地方て二三年佛蘭西の尼さんの寄宿舍に居つたことが御座ます。尼さんの云ひまするに、どうも日本の人は仕事に器用だけれども皆遲い。それはすべてする仕事に順序がないからだらうと思ふ。生徒たちのすることを見てゐても朝起きると直に便所に行つて、歸つて來て床をあげ、帶をしめて顏洗ひ場に下りて來ることもあり、起るなり床を疊んで、それから便所に

行つて、顔を洗つてそれから着物を着てゐることもあり、さうしてその夜具をかたづけるのにも、毛布だの寝衣だのといふやうな小さな物から整理して、次に夜具蒲團といふやうに片附ることもあり、さうかとおもふとまづ夜着を疊んで、蒲團を疊んで、終りに小物を整理することもある、臺所の女中などは、その仕事も複雜てあるだけに、一層にきまりがないとの事てした。西洋諸國は早く世の中か忙はしくなつたからてせう。大概の人は皆仕事にきまりをつけて、キチン／＼と早くすることを知つてゐますが。日本人の仕事にはおほくキマリがありません。毎日同じ事をしてゐても、日々手順が違います故、することにも落ちがあり、その上仕事が遲くなります。コレカラコレ／＼とちやんと順序をきめてすると、手も自ら慣れてきて、まごつかず、氣も違はずにズン／＼物事が早く運びます。

まづ試みに明朝からでも、起きるから學校に行くまての仕事を、よく手順をきめて置いて、その通り少しも違はぬやうに二週間も續けてなさつて御覧なさいませ。前に一時間かゝらなければ出來なかつた學校行の支度が、間もなく五十分で出來るやうになり、段々にその手順に慣れるに從つて、四十分、三十分といふやうに、短い時間て出來るやうになりませう。まめに働く習慣をつくるには、まづ手順をきめて手早く仕事をすることよりして、習ひ初めねばなるまいと思ひます。朝の仕事の手順に充分慣れましたら、今度は學校から歸つた後の始末、また夜する事の順序を定めて、その手順に慣れるやうになさいませ。さうすると一時間づゝかゝつてゐた朝の支度が三四十分て濟むやうになつたのと同じて、ことに晝からの仕事も、又夜の仕事も早く片附き、時間の餘りが澤山に出來るやうになりませう。

身のまわりの事を自らすべし

學校に通つておいての方は、大概時間がないといふので、御自分の身のまわりを、おつかさんや姉さん又は女中にしてお貰ひになるやうてありますけれど、以

上のやうにして餘の時間をおつくりなされ、未だ十歳位の幼い方は半襟足袋、ハンケチ、靴下の洗濯、靴みがきは勿論のこと、雨降に穿いた足駄を日和になつたなら洗つて仕舞ふことなどより始め、段々仕事になれると大きくなるに從つて、足袋、靴下のつくろひ、半襟、襦袢袖のつけかへ、毎日の衣服は唯に疊むばかりでなく、襟や袖口の汚れは揮發油でふき、綻びは縫ひ、着くづれは躾で直すといふやうに細かに手を掛け、襦袢などのやうな小物は自分で縫ふことにし、追々進んで十五才位の中には、自分のすべての不斷着も自分で縫ふやうにしたいと思ひます。

さうして足袋やハンケチを洗ふにしても、唯汚れた時に、いつでもおもひついて洗ふといふ風でなく、まづ晒布などで手輕にこしらへた、二つの足袋、ハンケチ、靴下袋を用意し、一つには洗濯したもの、一つには汚れたものを入れるとにして置き、見斗つて、ハンケチは二日目〳〵に、足袋と靴下は三日目毎に取換へるときめますなら、今週の中に、その新らしい方を入れる袋に、ハンケチは三つ、足袋と靴下は二足づつ入れて置き（一日だけ勘定が惡くなりますが、日曜學校に行くとか、其外日曜外出するならば、その日だけはよそ行としてあるハンケチ、足袋を用ゐること、家にゐるならば前日のものを用ゐること）その中から一つづゝ取出して用ゐ、定めの日數だけたつたなら、モー一つの袋にその汚れたものを入れ、更に新らしいものを出し、また汚れたものを前の汚れたもの入れの袋に入れるといふやうにし、一週間分の足袋、ハンケチ、靴下各二組を用意して、土曜日にでも一週間分の洗濯をして、火熨斗をかけ、足袋、靴下の繕は、間の日にして次の土曜日までに、それが又ちやんと仕上つて、新しい物入の袋に入つてゐるとてもいふやうに自分で考へ順序をたてゝして行くことにすると、仕事も滯らず、又復習の時間をも妨げずに、安らかにこれらのことの出來るばかりでなく、將來家政を取る時のために、最もよき下稽古にもなります。裁縫にしても土曜日の夜と、日曜日の午後の二三時間とか、また間でも

學校の下讀の忙はしくない日を擇んで、何時より何時までといふやうに定めて置いて、其通りを實行するならば、必ず間に合せることが出來ませう。さうして又そのやうに、時間で仕事をいたしつけますと、知らず知らず手捷敏くなるもので御座います。

これもまたこれまで世間が左程忙はしくなかつたせいでありませうが、兎角私共は、三時間とか四時間とか纏つた時間があいてゐなければ、暇がない何も出來ないとやうな氣がいたしますけれど、前號にも記しましたやうに、時勢の進歩に伴ひ、家庭の內外に於ける婦人の責任も昔に比べて非常に重くなつて居ります。從つて學ばねばならぬこと、なさねばならぬことの數々がまた非常に多くなつてゐますから、なか／＼悠長な氣持て居ては間に合ひません。少しの時間でも利用して、サツサとなすべきことをなし、學ぶべきことを學ばねばならぬので御座います。

如何にして家事を練習すべきか

學校に通ひつゝ身のまわりのことするとは、まめやかに働く習慣をつくることにもなり、また單純な家事を習ふことにもなりますが、なほ家庭の雜務を習ふことに就て大略の注意を記しますと、これも矢張り澤山の時間がそのためにあいてゐる譯ではないのですから、學校から歸つたあとで裁縫に通ふとかなんとかいふやうな大層なことでなく、一つ／＼段々に習え覺えるといふ覺悟で、初めのハンケチ洗ひ、足袋、靴下の洗濯位を初めた頃から、木綿のハンケチはどうして洗ふもの、絹はどう、木綿ならば折々煮てさらし、また靑味をかける必要がある、さうしてそれはどういふ風にすればよいといふやうなこと、靴下もまた地質によつて、異るそれ／＼の洗ひ方、取扱ひ方をおつかさんにでも、敎へて頂いて、その通り机帳面にやつてゆき、また段く々に自分でも研究して行くといふ風に心掛けること、足袋つぎ、襦袢の袖の縫ひ方なども、他の學問のやうに、先から先と奥深いものではないのですから、初めに一二度正式の方法を敎へられますと、あとは以上の

やうにして、實地に當るまに、段々器用になるばかりて御座います。

さうして又、皆様は夏休み、試驗休といふやうな、大層重寶な時を持つて居られます。大人になるまでは、身躰を健康に發達させることに、まず何よりも意を用ゐねばなりませぬ、折角のお休を、朝から晩まで裁縫のお稽古に用ゐる譯にも行きますまい、併し又人といふものは、何程お休だからといふても、續いた休を朝から晩まで遊んで暮らすことの出來ないものてす。平日は大躰働いて、少しだけ休む時などは、休は大躰を心安くして、その心安い内て、心安い勉强をするは少しも差支ありません、長い休を利用して、矢張り朝の中の何時間といふやうに時間をきめて、裁縫の稽古をするなどは、實によいことゝおもひます。

一、裁縫の稽古

裁縫も專門に稽古するとなりますと、別て御座いますが、一通りのことは、習ひ方一つて決してこれまでの人の考へてゐたやうに、多の時間をとるものてないとおもひます。

初めより一枚づゝ縫ひ上げて、さうして次に移らうとおもひますと、慣れぬ手て長くかゝり、倦いて段々面白味がなくなるばかりか、二枚目のを縫ふ時には、初めに覺えた筈のところも、モー忘れてゐたりするやうになりますゆゑ、其は何處の家ても縫ひ物の澤山あるのを幸ひ、まづ衣服の表ばかりを三四枚縫はしてお貰ひになり、次に裏ばかり三四枚縫つて見ますと、一枚毎に手もなれ、縫方もよく分つて、段々に大層早く面白く出來るやうになりませう、表と裏が濟んだ所て、今度は單衣にかゝりますと、肩、いしきあて、袖の仕上や、裾褄下襟くけ、とちなどゝいふ特別な所にさへ氣をつけて覺えもし、慣もするとよいといふ譯になり、三度も縫つたなら、また慣れて仕舞ませう、今度は袷にかゝつて矢張り三枚も仕上げ、其特別なところを覺えることにし、一夏はまづ單物と袷せ丈けの出來る人になることに滿足します。さうして次の夏になるまで

にも、自分に出來る縫物があつた時にあてがつて貰ひ、段々練習して、早くもなり、器用になるやうにし、次の春休みには、綿の入れ方を覺え、夏休みになつて、綿入を三五枚もくけならひ、羽織の縫ひ方の大躰を覺えましたなら、大人、子供、男、女といろ〳〵の種類はあるにしても、已に單物、袷、綿入、羽織の縫ひ方はどんなものといふ大躰のことがわかつてゐると、あとは左程に骨も折れず、特別に多くの時間をとるやうなことなしに、平日縫ふもので覺えてゆくことが出來ます。

二、張物、火熨斗かけの稽古

張物はあまり間を置かず、續けて十反も張つたなら、大躰の手はなれませう、一度の春休を張物の時としてなほ足りませんでしたら、其後四五回の日曜日の平日または三四時間づゝをつぶしたならば、必ず一通りできるやうになるとは慥て御座います。品物によつて、糊のこしらへ方なども、勿論それに附屬してゐます。すべて丸洗のものにアイロンをかけると、洋服の火のしかけ、日本火熨斗の使用法等も、一夏休みの稽古で出來るとて御座います。但しいふまでもなく、縫ひものにしても張物にしても、長休みにひとつきり稽古した丈けて、放つて仕舞つては、一向役に立ちません。初めの方に記しました樣に、平日でも時々きめて、自身の洗濯、縫物などをするとにして、(なほ十五以上になつたなら、段々少しづつ、自身の〻外にも手傳ひます)常に練習するやうにするのです。

三、料理の稽古

料理も御飯と味噌汁の外に、汁物、燒物、煮つけ、和えもの、酢のもの、肉料理、菓子、間食物類といふ風にまづ大躰の目標をきめ、その内より平常度々拵へて重寶するものを、ならしの五種位づゝ擇び、まづ肉料理より始めるならば、スチユー、カツレツ、ライスカレー、コロツケー、ハムエツグス位を覺えるとにして、一應スチユーの拵へ方を教へてもらひ、次よりス

チューの出來る時には必ず自分に受持たして貰ふことゝし、よく覺えた所で今度はライスカレーにかゝり、ハムエッグスを習ひ始めるといふことにして、行くならば、別に日常の稽古を妨げることなしに、追々お料理が出來るやうになり、終には日に晩の食事の内の一品づゝは、自分に受持つていつてもよく出來るまでに錬習すると共に、臺所働きにもなれる樣にしたいとおもひます。

娘に臺所のことを覺えさせたいとおもひますが、時間がないのでといひ、娘自身もどうしても臺所に出る譯がないと思つてゐるのは、なんとなく夕方の支度の初めから終るまで手傳はせなければならないやうに、又手傳はなければならないやうに思ふからでありますが、折々一品づゝ受持つといふことは決して出來ないことではありますまい。私の友達のお子さんに、虎の門の女學校のたしか三年級に番町から電車に乘らず歩いて通つてゐる方が御座います。その方は矢張り去年の夏休みから、精出して、おつか樣に裁縫を敎へて頂き、十月過ぎまでの間に、少しづゝの時間を利用して、大小をこめてはありますが、二十二品程縫ひ上げたさうで御座います。勿論學校の方をその爲めに疎かにするやうなこともなく、また嫌や／＼に縫ふわけでもなく、一枚々々早くなりよくも出來るので、自然におもしろく、一つの樂みにして居らるゝといふことです、さうしてこの方は立派の位置のある方の令孃で御座います、裁縫でもお料理でも賢い習ひ方をして、少しの間にズン／＼進むやうですと、全く一つのよい樂みになり、苦もなく出來て、さし當り實用向の利益の外に間接に身躰のためにも精神のためにもなります。

四、掃除その他の細かきこと

掃除その他の細かなことは、學校に出掛ける前などの仕事にして（また料理などをする年齡にならぬ人は夕方も）それらのことを苦にせぬ習慣をつくりたいと思ひます。まだ年のゆかない子供は机帳面に御膳立をすることなどより始めて、成長するに從つて掃き掃除、雜巾がけ、火鉢ふるひ、食器茶器の洗ひ方にも携はること。

勿論學校に通つてゝこの外のいろ／＼のことを稽古してゐるものと見えて、大體以上の修養が出來ますと、此の間から申した。手近な一人前の女であるといふことが出來ます、次號よりはこの手近な一人前の基礎の上に築くべき種々の事に就て記します。

言葉使ひと態度の注意

山脇高等女學校長　山脇房子

一般女學生間の言語は随分紊亂致して居るやうに思はれます、それてどうか爾う云ふ風を矯正したいと存じまして、私の學校ては教師に對する時ばかりてなく、生徒同志の談話にも注意させて、「よくつてよ」とか、「さうしちやつてよ」とか云ふ樣な語は一切用ひさせない事に致して居ります。これは至躰から申しますと洵に太切な事て、東京の者が恁う云ふ語を使ふと、地方の者はそれを東京言葉だと心得て、一種の女學生言葉を郷里に持て歸る、其輕佻な調子が自然地方に惡感化を及ぼすと云ふ事にもなるのてすから、東京に居る女學生は日本女學生の模範となる態度て萬事に氣を着けねばならぬと存じます。

私の學校て用ひて居ります『交際の栞』と云ふものがありますから、それを一寸申す事に致します。

談話は先づ態度泰然として儀容正しく、沈着にして音聲は高からず低からず、中聲にして語數少なく、而も活氣ありて要領を得る樣心掛くべし。凡て人と對話せんには、先づ打向ふ人をして十分に話させ、然る後に己れの言ふべき事を簡單に話すべし。長者を措きて我より差出がましく話すべからず、人の對話中濫りに口を挾み、又は貶し侮るが如き態度を爲すべからず。

一、人の短所欠點を擧げて話すべからず。

一、卑俗の語淫猥の事柄は決して口にすべからず。

一、殘酷悲哀の甚しき談話は時と場合

を斟酌すべし。

一、議論がましき談話、説明らしき口調、又は聞慣れざる言語は濫りに用ふべからず。

一、人の失態恥辱或は隱蔽すべき事を話すべからず。

一、己れの意に叶はざる談話なりとも之を聞くを厭ふが如き態度を爲すべからず。

一、衆客に對する時は一人と長く話すべからず。

一、身振り手眞似を爲すべからず。

一、吻く話すべからず。

時々之を説明して聞かせて居ります、又言葉使ひには一々字に當て嵌め文法に照らして間違ない樣の方針を採て居ます、此矯正法の實習として同窓會同級會又若葉會と云ふ寄宿生の集會がご坐いますが、其席で實地に對話させて居ります、其他修身の時間にも綺麗な言葉で極平易なお話しする樣にさせて居ます、

物言ひぶりと共に態度の事も注意させて居ます、矢張り『交際の栞』に

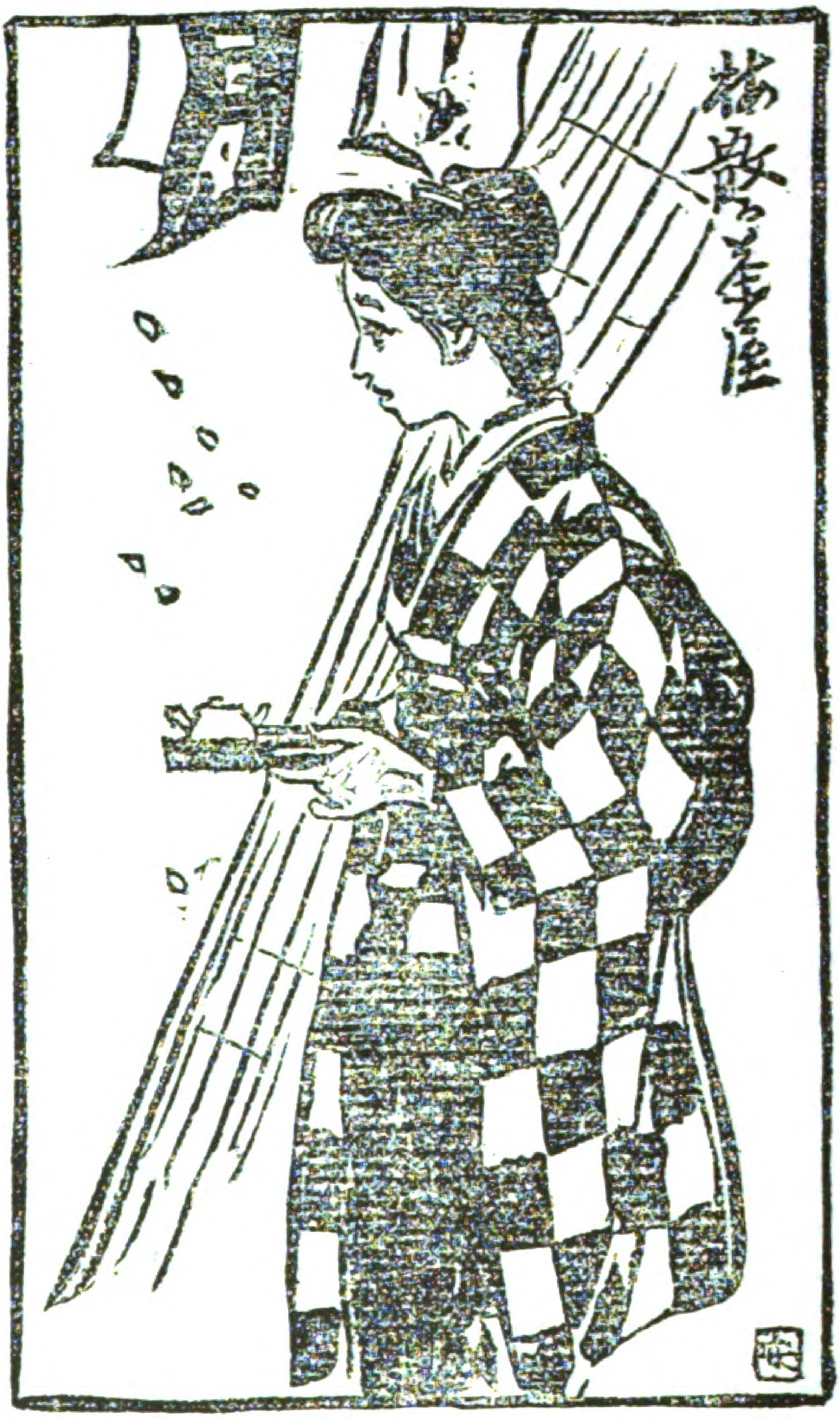
態度は沈靜にして輕燥ならず、身體は反らず踞まず、十分腰を据ゑ腹を張り、肩を平にして肱を張らず、手は斜に膝に着け、頭を眞直にし顏色を調へ、視線を正くし濫りに回顧すべからず。

よく腕のところに手を當てゝ懷ろ手をするものですが私の學校はそれなぞもさせません、それから往來は必らず左側を歩るく樣に、又饒舌つたり巫山戯たりして歩かない樣に八ケ間敷云つて居ります。

室内に在る時と雖端正に心掛けさせ、机にかゝつて習字や數學の温習をする時も、机に俯さつたり肱を突いたりする事なく、手紙を書く時でも習字の課程の時

の通り、手を正しく添えて書く樣、何日何時横合から寫眞に撮らるゝ樣な事があらう共差支の無い樣にと云ふ覺悟を持たすやう躾けて居ります。

又、泰西禮法と云つて西洋室に通る用意も敎えて居ります。座敷に通れば先づ挨拶して椅子に掛けるのですが、種々な椅子がご座いませうから、尤も安樂に己れ一人て占めて氣樂な振舞をするのも宜ろしくありませんし、又謙遜のつもりて椅子の端に掛ける事も禮てありません、又足を重ねて靴の裏が見えたりする事も宜くない、大躰慇んな事を注意させて居ます、



元來日本と西洋と服裝が違ひます事が、大變西洋室に困ります、日本人も洋服を着たら宜からうと云ふので私も若い時に洋裝致しましたがどうも姿勢が惡いのていけません、御承知の如く日本人の背の低いのは胴が短かいのではなく、座る習慣が自然脚の發達を妨げたので今日の樣に追々座る事が少なくなると共に男女共背が高くなりませう、それてすから背を圓くしたり、足を内輪に踏むだりする事の無い樣に致したい、姿勢惡き爲めに洋服を用ふる事が出來ないのは如何にも殘念の事と思ひます。

此問題の物言ひぶり態度に就いての御心着きは極めて好い事と存じますから、可成入ケ間敷云つて欲しいものです、折角の高等教育も此物言ひぶり態度の下劣の爲めに其價値を下げる事になります。（談話）

男女交際は冒險なり

女子高等師範學校教諭　文學士　下田次郎

處女時代の社交と云へば、つまり女學生時代の社交の事だと思ひますが、まだ意志が固まらず、十分誘惑に打勝つ力なきが故に、さう云ふ者を社交界に出すと云ふ事が先づ第一の問題かと思ひます。

現今の社會の制裁は實に弱い、殊に男女にかゝはる制裁が薄弱なので、男子の不品行は爲仕廻て、怎麼に不品行を行つたとて、其れが爲めに其人の位置が保てないと云ふ事は大體無い、實業家なんて云ふ者に至ては妾の一人や二人有て居ないと却て幅が利かぬと云つた野蠻時代遠からざる有樣があるので、隙があらば女を墮落させて遣らうと専問に覗つて居るのですから、此間に意志の固まらない娘を出すと云ふ事は、狼の群の中に羊を出す樣な事て、間違ひを覺悟なら出しても宜いが、まだ／＼日本の如き男女に關する思想の幼稚な時代には出さない方が間違ひなく安全て宜いと思ふ、尤も、健全な會或は倶樂部とか云ふものがあつて、性の知れた者同志とか、又は親類知人の交際に於いて若き婦人が交ると云ふ事は差支の無い限りに於いて宜いと思ひます。しかし現今の婦人はなか／＼突飛て、交際をする方が宜いとでも云ふと、前後の考へも無く跳ね廻る癖があるから滅多に云はれないと思ます。

實際無暗と交際したがる者には、どうも輕佻浮薄の分子が多くはないかと思はれるので、或は外交家の夫人或は海軍々人の妻となりたいと云ふ者ても、其動機を聞くと、夫の外交を助けたいとか、航海の留守を預からうとか云ふのては無く、たゞ交際場裡に多く出たいと云ふ虚榮心を滿足させる動機に外ならないので、餘まり社交界にのさばり出たいなぞと思ふ者は、家庭

に落着くに堪へ得ない者だらうと思はれます。

　西洋でも若き婦人の社交はなか／＼六かしく、とても日本で考へてる樣な自由なものでは無い、殊に巴里の如きは最も跳ね反つて居るもの斗りの樣に思つて居るが、高等女學校に通つて居る者でも、必らず送り迎へをする、先づ日本では小學校の下級か幼稚園かで無ければ見られない事を大きな娘に對してして居るので、日中でも良家の娘が一人で歩いてると云ふ事なぞは寧ろ厭に感じられる位固いものです。

　何分若い時と云ふものは男女共火の點き易いもので相互牽引せんとする性を有して居るから、火藥の傍に火を近づける樣な間違易い冒險は爲ないとです、故に餘まり西洋が／＼と云つて有りもせぬ西洋の手本を拵へて騷ぎ廻るには及ばないです。

　猶ほ結婚前に相互知り合つて居れば都合が宜いだらうと云ふ考への者もありませう、それは勿論一生の大事ですから談容易ではありませんが、若し結婚の相手を定めるのに父母の詮索と本人の選擇と何らが行き屆くかと云ふ事になると、父母は既に結婚の經驗も有り又世の經驗も積むで居るから其分別常識の確かな事は云ふまでも無い事です。若い者はたゞ目前のものに眩惑されて仕舞ふ。由來戀愛は盲目的のもので將來の計畫の如きは此中に含まれて居ないから、戀愛から成立した結婚は匂ひが失せ易く色が褪め易い、自由結婚なぞと云つて本人同志が結んだのに離婚の方が多いと云ふのも無理も無いとて、戀愛の最中には分らなかつた缺點が、少し褪めかゝると見え始める、無分別だつた事に氣が着くと云つた譯になるのです。それで詩や文學の方から云へば自由結婚を神聖なものゝ樣に思はれるが其實左樣で無い事が分つて來るので本人に自由に選擇させたと云ふ事が將來長く幸福であり、夫婦の中が宜く續くと云ふのが遂に疑問に了るのです、勿論今日の如く娘の少しも知らない者を兩親から當てがふと云ふ舊習は斷じて宜くありませんが、娘に一任して顧りみないと云ふのは猶更危險の事と思ひます。

　要するに若い者の交際は悪い事では無いが、今の時

に鑑みて處女時代から餘り交際を勸めない方が宜いので、娘の社交よりも結婚して後妻となり、或は若き母となつて居る者の社交はどうかと云ふ事が大切かと思ふのです、結婚もせぬ間から交際の名の下に飛び廻り跳ね返る者は、自分は勿論自分の子の嫁に貰ふ場合でも眞平御免だと心ある人は云ふだらうと思ふ。

どうも女學生の勉強には意氣と云ふものが無い、はづみと云ふものが無い、爾うして一體に浮いた樣な調子で勉强をして居るが、あれては不可ない、どうしても今少し眞面目に朴茂にやりたい、もとより讀物に小說等の交る事も全く惡くは無いが、これも同樣眞面目な實のあるものを讀む樣にしたいと思ふ。（談話）

ヴェルレーヌの詩

永井荷風

○

まつしろの　月が
かゞやく　森の中、
枝々の　さゝやく聲は
繁のかげに
おゝ　愛するものよ　と云ふ。

深い〱　池の水は
鏡のやう
まつくろに　柳がうつる、
その柳には　風が泣く。
二人して　うつとりと夢見る夜。

ひろい〱　やさしい〱
靜けさが
下りてくる　大空、
その大空に　虹を彩る星の光。
あゝ　うつくしい夜、

(La lune blanche)

○

寒い　さむしい　古庭を
今し　通つた　二個のかたち。

眼おとろへ
唇ゆるみ
さゝやく話も
とぎれ〳〵。

寒い　さむしい
古庭に、
昔をしのぶ
二人の影。

「お前は楽しい
昔のことを覚えてゐるか。」
「どうして又　そんな事をおきゝ遊ばす。」



「お前の胸は　私の名をよぶ時　いつも顫へて、
お前の心は　いつも私を夢に見るか。」「いゝえ。」

「あゝ私等二人
口と口とを合した昔
危い幸福の
美しいその日！」
「そうてしたねえ。」
「昔の空いかに青かりし。
昔の望いかに廣かりし。」
「其の望は破れて
暗い空にと消えたので御在ます。」

雑草の枯れたる中を　二人は行く、

話すはなしを　立聞くものは　夜ばかり。

(Collogue Sentimental)

○

焚き火のほとり　燈のせまきかげ、
頬に指する夢心地、
愛する人と瞳子を合すその眼とその眼、
煮ゆる茶の時　閉せる書物、
日の暮れ感ずるやさしき思ひ、
くらきかげ、静けき夜をまつ時の
云ふに云はれぬ心のつかれ。
あゝ　わが夢心地、幾月よ
幾週日の空頼み、
猶ひたすらに　其等を追ふ。

(Le foyer, la lumiere)

○本號の口繪

本號の口繪原色版『湖畔の歌』はボッカチオの十日物語の第七日目より材を取りたるものにて、レディース、パレーと云ふ森園の湖畔に坐してフィロメナの歌へるところなり。

和歌は女性に適す

與謝野寛

三十一字の歌は何うやら昔から婦人の作の方が結果が良くは無いか。古く古事記では須勢理姫、高姫命、伊須計餘理姫、宮簀媛、神功皇后、女鳥女王など何れも長歌の作者で、今の謂ゆる新體詩人であるが、萬葉集に移ると女性の手に成る長歌が跡を絶つ代りに、短歌の作者に優れた女詩人が澤山出て來た。女詩人の數は七十人に上つて居るが、中に額田女王、鏡女王、石川郎女、倭女王、檜隈女王、手持女王、大伴郎女、笠郎女、八代女王、廣河女王、などは幾多の佳作を出して居る。是等女詩人の歌を除き去るならば、如何に人麿、赤人、憶良、金村、旅人、家持其他の男性の詩人が力んでも、萬葉集の價値の三分の一は減ずるであらう。次に古今、千載、後撰の三代集を經て新古今集に至るまでの間に、女詩人の輩出は萬葉集に勝るとも劣

らぬ盛況を呈し、小野小町、伊勢、貫之丞、俊成女、和泉式部、赤染衛門、齋宮女御、本院侍從、馬内侍、中務、相模、伊勢大輔、紀伊、堀川、讃岐、小侍從、右京太夫、式子内親王、宮内卿、道綱母、大貳三位など其他多數の作家が芳を競つて居る。

是等の女詩人は各々一長一短が有つて種々の特色を發揮して居り、其の數は男子に比して（和泉式部、赤染衛門は別として）概して少いが、少い割に佳作が男子よりも多い結果を呈して居る。貫之とか定家とかを名人だと云ふけれど、多作の割には佳作に乏しいのである。

今日の新派和歌も矢張さうである。女子の作家は男子に比して少數であるに拘らず、却て佳作は女子の方に多いやうである。男子の作には一時の流行として面白い作も多いが、二三年も經つて讀返すと太抵色の褪めた感じがする。其處になると女子の歌には時々出して見て身に泌むやうな染々とする歌の多いのを覺える。之は何う云ふ譯てあるかと言ふに、本來三十一字の短い詩形の中には多くの材料を盛る事が出來ぬ。そこて印象派の畫家のするやうに、成るべく簡單にして而も刺戟の効果の顯著なる暗示法を用ゐ以て怜悧なる讀者の感受力を刺戟して、讀者が之に由つて複雜なる又は深刻なる聯想を起すやうにせねば成らぬ。短歌の作者は感想に於て秀てて居るを要するは勿論てあるが、併せて此の暗示法を自在に用ゐる技巧に於ても優れて居らねば成らぬ事に成る。然るに男子は欲が深い、此の短い詩形に色々の複雜なる材料を盛らうとする。そこて技巧に無理が出來る。感想の中心がぐらぐらする。詩が散漫若くは晦澁に成る。斬新とか奇拔とかて人目を一時驚かす作は出るが、人はいつまでも斬新や奇拔のみては甘んぜぬ、染々と胸に應へる作て無いと次の時期には直ぐ飽かれて仕舞ふ。女子の方は或は其の取る材料が狹いかも知れぬが、是と思ひつめる力が强烈のてある。瞬間に發動する感情が短くして且つ鋭い、又微細てある。其れが丁度能く短歌の内容に適して居る、些細な事にも感情が昴奮して理性を忘れる、ほれぼれ

となる、むきに成つて怒る、涙を流す、わつと云つて泣く。其の多感なる女性の特色を發揮するには短歌が尤も都合の好い詩形である。都合の好い武器を持たせたのであるから、古來女子の歌に佳作の多いのは尤もだと思ふ。此の意味に於て自分は女子諸君に短歌の製作を勸める。長い詩の作者は萬葉集の女詩人にも無いが、明治の新體詩にも女流の作はまだ物に成つて居らぬ。自分は女流に向つて新體詩を奬勵する一人であるが、短歌は特に女流に適したる詩形である旨を告げて、此方面にも作家の續出せむ事を祈るのである。

次に新派の女流歌人中、山川とみ子女史の作に就いて評釋を試みようと思ふ。

　古琴の緒にか維がむ比叡おろし寒きこの日に髪荒け居ぬ

山川女史の歌には、多く勝氣な、自暴氣味な、さうして悲觀的な女性の感じが表れる。京に住まれて居た時の實感であらうが、比叡嵐の寒く吹く冬の日に櫛も取らず髪の荒ける儘に任せて置く。寧そ此のばさばさした髪で、切れた儘に打遣つて置いた古琴の絃でもつながうかと思ふ。何事をするにも懶い、琴も長く掉かず、髪も久しく梳らぬ、すてばちな感じが好く出て居る。

　家の南わか芽さしたる枳殼の高籬けぶり鶯の啼く

鶯を歌つても作者の見附け處は古人の眞似で無い。日當りのよい我家の南面に枳殼の高籬がある。其が日光の中に若芽を吹き出して青く烟つて居る、即ち霞んで居る。其中で鶯が啼いて居るのは、新しい好い感じがする。斯ふ云ふ叙景にも作者の勝氣が見える。

　石に見よ花咲くげにも身は病めど世に限なし我が思ふこと

句切の多い格が先づ感じを新しくして人に迫る。冷き石の上にすら花が咲くのを見よ、げにも況して我は人なるもの、病みて痩せ衰へ乍らも、世に對する愛着の念に引かれて、かにかくと思ひ煩ふ所多く、心は片時も靜かならず、と言ふのである。

　うつくしき蛾よあはれにもまよひきぬにほひ少く殘る灯かげに

隱喩を用ゐた歌てある。表面の意味は蛾の歌てあるが、にほひ少き曉方の燈火は衰へたる自分に喩へ、美しき蛾の寄り來れるをあはれなりと見るのは、自分を慕ふ男に喩へたのてある。女史には一面また斯う言ふ優美な作もあるのが面白い。此の蛾の譬喩も新しい。

比叡愛宕うすむら
さきの額見せて霞
める京に朝しづく
する

西の都の春の曙を咏じ



て、霞の上に薄紫に額丈を見せた山々も美くしく、その霞の中から小雨とまで名の附かぬ程な朝の雫の落ちるのも柔かい溫かな感じを與へる。

御救ひの御船のぞ
みて海に落つ汗し
づくして目ざめけ
るかな

救ひの船を喚び掛け乍ら其の船に救はれもせずに却つて海に落ちた夢を見て目覺めた。斯う言ふ惡夢を叙して、光明の無い自己の心境を仄めかしたのてあ

る。

　行くべきや蟒蛇は暗き谷間より戀しき母の聲してぞ喚ぶ

又比喩體の歌である。第一句に行かうか行くまいかと躊躇するさまが見える、暗き行手の谷間より我を喚ぶものは戀しき母の如くでもあり、又怖しき大蛇が其の母の聲を摸ねて喚ぶやうでもある。暗き谷間は我が前途に横はる定かならぬ運命、其の喚ぶ聲は我が身に迫る或る事柄、其れが母に行くが如く幸福なやうでもあり、又蛇に奪らるる如き悲しき事のやうでもある。其れに從ふべきか否かと思ひ惑ふ感情を、斯く痛切に歌つたのは巧妙である。

　變化來てわが髮みだりいと重き鉛の冠置くと苦しき

女史が病中の苦痛を敍した實感の作の一つ。髮も亂れて我が頭の重く苦しきさまを、魔の如きものが來て我髮を解き亂し、その上に鉛の冠を載せたのであると感ずるのである。魔に咀はれて居るのだと言ふ烈しい感想は女史の特色である。

　花あやめ葵の葉どもとりわがね病める皐月の枕にはする

同じ病中の作でも是は前と異つて至極優美である。あやめの花や葵の葉の束を枕にするのは病も直り相に清々しい感を與へる。

　わが涙ゆふべの山の雨となり鶯に降る散る花に降る

春の暮れ方山に降る小雨を我が涙と見るのは女らしい優しい歌である。

　綱とらむ鞭あて給へ逸樂の駒はいばえぬ蜜のしづくに

戀歌だ、戀の誘惑の面白さを歌つたものだ。戀しき人に與へて、我は君が乘り給ふ逸樂（即ち戀）の駒の綱を取りて案内せむ、君は躊躇はずに鞭を加へ給へ、（戀には何の躊躇ぞ）あまき蜜のしづくの降る中に、駒は勇み返つて嘶いて居る、と誘かすのである。

　君きます婚の波をかいくぐり眞白き百合を浮木に

はして

戀人の熱情と純潔とを讃美した戀歌。盛なる畑の浪は熱情に喩へ、百合の花は純潔なる愛の象徴である。火の海を百合に縋つて泳いで來る光景に、又女史のはげしい戀愛觀が窺はれる。

初心の人が歌を詠むにに先づ叙景から初めるが順序だと思ふ。山川女史の歌は是位で措いて、次には少し晶子の叙景の歌を擧げよう。

　清らにも横笛ふきし唇のくれなゐに似る椿を拾ふ

椿の紅い花の落散つて居るのを、若い笛吹が清らかに横笛を吹いた時の紅い唇のやうな氣がして拾ふのである。紅い椿を唇と見たのが好い。

　行く春の雨の後なり朝露の蜘蛛の巣がきに似たる

　春の夜　㊃

全體が日記でも認める散文の調子で出來て居る。暮春の雨後の星空を朝露の置きわたした蜘蛛の絲のさまだと見たのは面白い。斯う云ふのは作者が自分に見附け出した感想であるから新しくて且つ人を動かす力がある。

　麥の穗の上なる岡の一つ家くまなく戸あけ傘つく

　り居ぬ

麥の黄ばんだ畑中の岡に、戸を明け放して傘を張つて居る一軒家がある。作者が澁谷に住んで居た時實際に目撃した光景である。傘も黄ばみ、麥も黄ばみ、戸を明放した家のさまと共に初夏らしい感じが如何にも好い。

　皆うつくし白の圓石靑の石君が袂をまろび出づる

時

海邊又は川邊の遊びから歸つて來た人の袂から轉び出づる石は皆美しい。初の句に『皆うつくし』と字餘りの重い句を置くのは讀者の注意を喚起するに効がある

　紫と黄いろと白と土橋を胡蝶ならびてわたりこし

かな

單純な叙景であるが、叙し方に無理が無いから、繪のやうな感じを與へる。

　紫の帷如來の柱繪の古りぬる中に鶯を聽く

紫の帷を垂れて、柱には極彩色の佛の繪が古りて居る。其の中に居て庭の木立に啼く鶯を聽く人の、榮華な、品の好い、濃厚な趣が、春の歌として一風變つて居る。斯う云ふ歌は下手に作れば厭味に成るが、是は成功して居る。

富士裾野

小島烏水

醉茗君足下。

僕は今、停車場前の△△△館の二階で、足を延ばしてゐる、こゝは素と宿屋であつたのだが、今は料理屋を兼ねてゐる、或は宿屋の方が兼業かも知れない、併し僕はそんなことを知らずに、疲勞した身體を、無理遣りに運びこんだのである、先刻ふと湯殿へ行つて、裸にならうとすると、僕の脱いだ上草履を、うしろから「借して頂戴な」と穿かうとする女がゐる、見ると小豆色の紋つき羽織を著た、若い藝妓である、僕を湯殿まで案內した少女は『それはお客さまのよ』と注意する、『アラさう、失禮』と、捨臺詞で往つてしまふ、どうも宿屋にしては、變だなと、迂濶な僕も思はないわけにはゆかなかつた。

僕の室は――番頭が六番にお通し申せとか言つたッけ――衣桁もあれば、鏡臺もある、床の間には春信と署名した、元祿女が寢そべつたり、立膝をしたりして、草艸紙を讀んでゐる浮世繪が、一幅懸つてゐる、その色調や、人物の拙さ加減は、お咄にならない、何派の何年頃の浮世繪か知らないが、鈴木春信でないことだけは確かである。

少女の御給仕で、夕飯を詰め込む、椀盛りを粗忽で引ッ覆りかへして、お代りをねだるなどと、僕のことだから、大分振つてゐる、併し刺身といひ、香の物といひ、富士山の麓で喰べられるものとしては、少々贅澤過ぎる、全體僕のやうな山男が、かういふ宿屋で、こんな艷めかしい匂ひのする室の中で、繼ぎ剝ぎの衣

袴を扱帯代りに、衣桁にブラ垂げて、飯を喫するのは、不調和の感がしてならない、しかしそれよりも、不調和なのは、僕がこの通信文を認めるときに、机を貸してくれろといつたら、せめて一閑張ても持つてくるとか、木製の頗る厚い、疵が頑固に突出したやつを擔ぎ上げられたには駭いたよ、マルて講釈師の何々齋とでも名乗る男が、張扇でパチ／＼叩かうといふ釈臺そつくりだ、考へてみると、三味線は入用があつても、机を呼ぶお客さまなどは、先づ無いのかも知れぬ。

酔茗君、僕はけふツク／＼と簡易生活といふことを



感じた、僕が須走から、疲れた足を引き摺つて、水土野から仁杉といふ村へ出たころは、もう夕に迫つた、喉が乾いたから、駄菓子屋へ立寄つて、味柑の露を吸つてゐたと思ひたまへ、そこへ孩兒をおぶッた、二十四五の色の黒い、働きざかりの女が、蒟蒻を借りに來た、その蒟蒻といふのが、硯ほどの大きさである、店先の押桶に手を突ッ込み、量目のありさうなのを選り出して、傍に落ちてあつた繩の切れッぱちて、十文字に結び、無造作に垂げて往つてしまつた、かみさんと話をしてゐるところを聞くと、何ても亭主が山稼ぎに行つてゐるので、そこへ

あれを鹽辛く煮て、辨當の菜にするのださうである「二度分はあらす」とか何とか、さも嬉しさうであつた、それで大蒟蒻の代價は三錢！

この菓子屋の前に、御殿場——須走間の馬車會社の軌道が布いてある、登り馬車が今しがた一臺見えたッ切りて、下りは未だ來ない、田舍の乘合馬車を見る度に、僕は去年信州飯田へ行つたときの、馬車を思ひ出す、恰度諏訪から岡谷へ著いて、飯田まで日馬車を驅けさせやうといふのであるが、途中で三度も馬車を取り換へて乘り繼ぐことになる、おそくなつて先の馬車に出られてしまふと、間の寒驛て、泊まらなければならない、だから氣の急くことは夥しい。

さて馬車が或町を外れやうとするとき、饅頭屋の前て、同車の田舍爺さんが、馭者を呼んて車を停めさせた、下りるのかと思つたら、さうては無い、饅頭を買ふのださうだ、それもよい、馬車の窓から禿げた赤銅色の頭を出して、人の居ない店先を、奥まて覗き込むやうな眼つきて、悠長に喚び出す、三四度喚ぶと、障子を明けて、亭主らしい男が、粉だらけの前垂れて、手を拭きながら、のつそり出て來て、心もち踞んで、何かあげますかと聞く、それから饅頭の値段て問答が始まる、僕は氣が氣てないぢやないか、舌打をしたり、肩を搖すつたりして、遠廻はしに催促するが、一向に感じさうにもない、やがて一錢に四個といふ麥粉饅頭を、若干か買つて、竹の皮に包ませたやつを、亭主が馬車の窓際へ來て渡す、受取つて、懷中から垢の著いた、巻財布を出したものだ、それを展べて手を突つ込んて、小錢の勘定をチャラ〳〵始める、これが指先の觸感て、五十錢銀貨なり、二錢銅貨なりを辨別しやうといふのだから、選り拔きたいと思ふ錢が、指先にブッからない限りは、取り換へ引き換へして、掻き廻すので、時間がかゝる。

僕ばかりてはない。乘客一同も、かうなると、いかに蝦蟇の血が通つてゐる田舍の人達ても、さすがに時間馬車を利用する程の考へがあるのだから、默つてもゐられなかつたらしい「お早く願ひますよ」と、馭者

中腰になつて、振り返へりざま、車の中を覗き込む、洋燈を入れた、輝が入つてゐる硝子函のところへ、その口が宛たると唇が裂けて見える、やがてアタフタと白銅一枚を選り出して手渡しをする、亭主は取つてかへして、店の錢函を傾けて、小銅貨を選り分けて、何がしかの釣錢を持つて來て、返へす。

乘客一同、忌々しさうに老爺の横顏を見ないものはない、僕も睨みつけてやつた、老人「濟みませむ」と一言、言ふことか、平氣で、のそりと腰を卸した、さうして誰に言ふともなく「これて土産が出來た」とニッコリ笑つた。

自分で食べやうといふのては無かつたのだね、家にはこの爺さんの、かへりを、首を延ばして待つてゐる孫の一人や、二人はあるのだらう、乾度今ごろは、お爺さんの歸るまて、辛抱おしなね、位のことを、母親に言はれてゐるところかも知れない、僕は同乘の友人と、思はず顏を見合せた、さうして僕は、もう餡の黑い、皮の白い麥粉饅頭ては、承知をしなくなつた都會の子供と、長財布の代りに鰐皮の蟇口を懷中する親父とに思ひ到つた、さうして生活の悲慘、虛榮、と繋かつて、大蒟蒻と鐵道馬車から連想して、思はずSimple Lifeの講釋をしたが、併し僕はチャーレス、ワグチルの徒弟に取り立てられたのてもないから、これはこの通信中の、一挿話として置くだけのことだ。

醉茗君、僕が是非君に讀んでもらひたいのは、是から先てある。

僕は昨日、正月元日といふのに、富士山麓、山中湖畔の、中屋といふ木賃宿には少し增し位なところに一泊した今日は山中湖を一周して、三國峠にも登つた、さうして籠ノ阪峠から當地(御殿場)まで飛ばすつもりて、峠の絕頂の立場茶屋まで、辿り着いたが、生憎馬車は、今出たばかりのところだといふ、茶屋はコケラ葺きの屋根で、雪を防ぐための庇は、升還に長く出てゐる、それが雨、雪に黑く腐り、しかも連日の晴天つゞきに、乾き切つて、水氣もなく、シパ／＼してゐる、中へ入ると、柱や天椽は、圍爐裏の煤て燻すぶつ

てゐる、板壁は反り返つて、強い風て弓形にふくらんだやうだ、昨日馬車て須走から來る途中、水土野の一軒茶屋て買つて、洋服の隠袋に藏つて置いた、うて卵子を取り出して食べる、圍爐裏には、荒くれ男が四五人、茶碗酒を仰つてゐる、旦那あ、未だ一時間の餘も、馬車にやあ間がありやすぜ、歩いた方が、早いがなアと言ふ、髭の生えた男に座り込まれると、監視でもされてゐるやうて、少し煙ッたいと見える。

それてなくとも、僕は一時間を徒らに、兀然と俟つてゐるわけにはゆかない、草鞋を右と左と穿き換へて——痛いときはかうすると少しは紛れる——峠から須走まで、一里許を一ト息に下り切つた、足袋の指股に、草鞋の緒の當るところが、擦り切れてゐるので、先刻から跛足を引くやうな始末だ。

それても我慢して下りた、須走の停留場へ來たが、又失望した、今日は正月二日——初荷だ、軌道は客を乘せる馬車よりも、御殿場からの初荷、炭、米、鹽、乾魚、反物などの輸送に忙がしい、切符賣場前の詰所

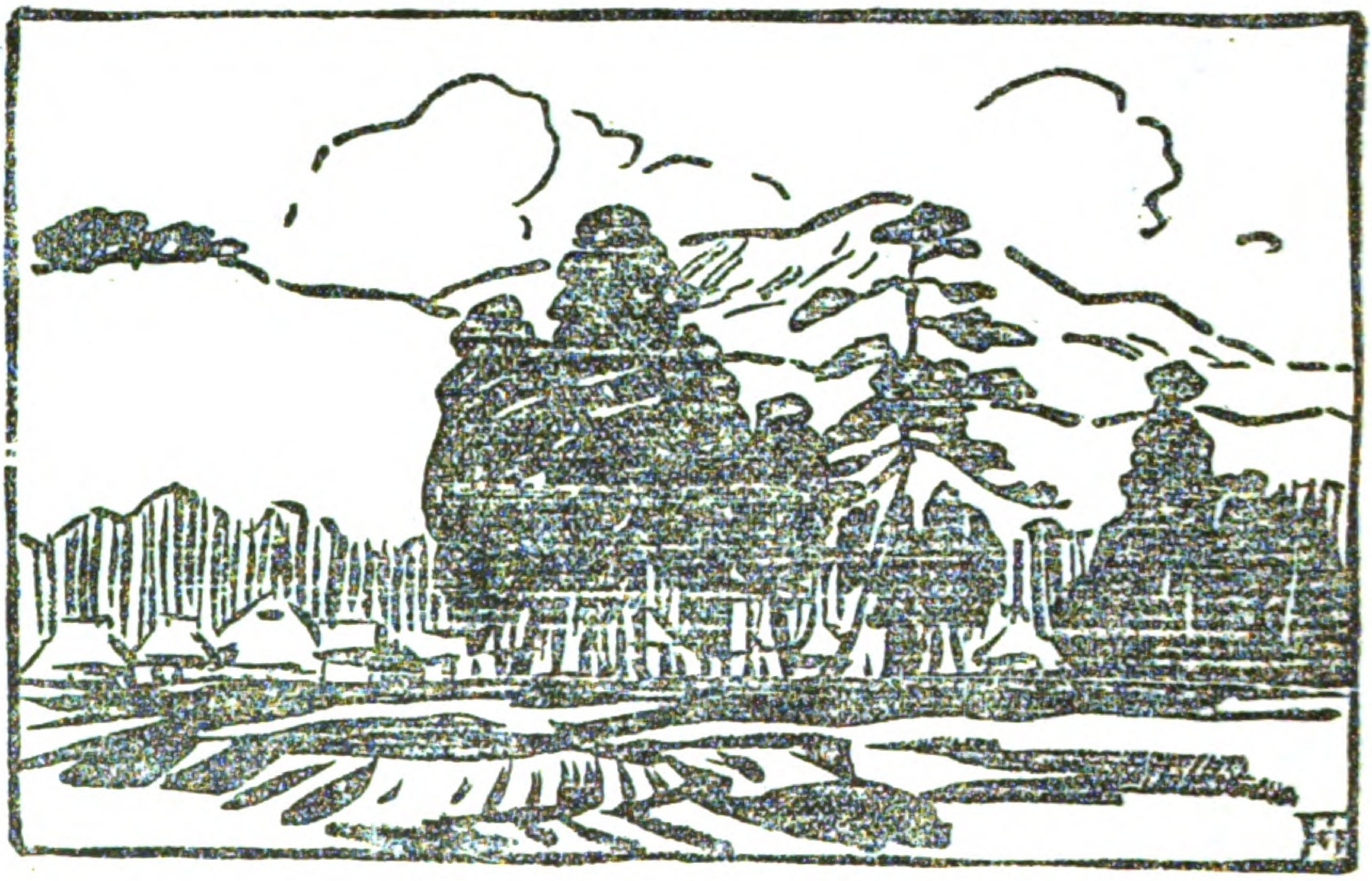
ては、荷車に添いて來た、印絆天の若い連中が亂醉して、踊るやら、手拍子を叩くやらて、笊の中の鰌のやうに、ぬらりくらりと、上になり下になつて、跳ねてゐる、こゝて又二時間も待たされるよりはと思つて、杖を曳き出したが、馬車に身を托するつもりのが、二回まで外れて、ブッ通しに歩くとなると、落膽するだけに、兩の足は急に、重い錘を下げられたやうに擡げにくゝなつて、それても二里半も下つた、僕が看板も碌に見ずに、この宿屋へ飛び込んだのも、無理とは君も思ふまい。

須走——水土野……仁杉(前にお話した蒟蒻の茶屋)から、始終軌道に沿つて、爪先下りになる、高段の畑は皆刈り盡くされてゐる、葉の縮れ返へつた楢林も、一目に見通される、何といふ村か知らぬが、杉並樹の上に、半鐘梯子が高く肩を拔いて立つてゐる、左右の山は、ほうけ切つて穗も散らされた芒が、舐めつけられたやうに地に俛いてゐる、そこから細々と立つ晩烟が、末廣ごりに空に泌みて、吸ひ取られたやうに消え

る。

御殿場町の入口へと出た。

この御殿場町は、軒並み古臭い匂ひがして、屋根庇には青苔でも生えて、その重味で傾きもしやうと思はれたのが、この夕は不思議に新らしい、それは何もお正月で、門松や輪飾があるやらではない、巷の商家は、初荷を積んで、負けずに景氣をつけ合つてゐる、紙の旗には赤インキで、初荷と、誰の目にもつくやうに大書し、青い字でその上に、何店行と、二行に割書がしてある、その下に又赤で出荷人の名がある、御殿場には何故か知らぬが、勝又といふ姓が非常に多い、山案内の剛力にも、この姓が多いと知つたが、出荷人にも



同姓を見受ける、大きなに、店となると、俵や、反物を、山のやうに、店頭に堆かく積んでゐる、かういふ店には紙旗も三四本は立つてゐるから、正月を祝ふ軒の日の丸旗と、初荷を祝ふ紙旗とで、兩側には、白い、赤い、又は青い三色の疎らな林が出來る、街はさながらに復活した、夏以外に只一度の復活である。

したが、街の甦つたやうに新らしいのは、門松や輪飾のためで無い如くに、決して日章旗や紙旗のためでもない。

町を縦に眺めて、奥行が深いところへ、遥か向ふに愛鷹山が、蝙蝠の羽を両肩上りにひろげて、紫を含むだ藍色に冴え返つてゐる

——僕は山のために、特に夕紫といふ色を調べたい、富士山と箱根山の裾合谷に眠りかけてゐるこの街は、今にもあの羽て、ふわりと包まれて、口も鼻も呼吸を止められてしまひさうだ、晩烟がシツトリと乳色をして、地平線に澱む、空氣は酒のやうに濃やかて、しかも濃くて澄むてゐる、山と人と家との隔たりは、空間が延びて來たやうだ。

　僕は町の入口に突つ立つて、富士を泌み々々仰いだ、西日の側燃を受けて、あまりに鮮やかに光に照らされたゝめに、今まて白かつた一角の雪は、頓にその光澤を吸ひ消されて、バサ／＼した灰色になつて、見褪めがしてしまふ、夕日はプツリと切れた線のやうに、富士と愛鷹の間の向ふへと落ちる、八百屋の店頭にある蜜柑や、柿が、紅玉のやうに、透き通る、旅の日章にも反射して、焔がてゝまて飛びついて、燃え抜けるかと思はれる、そのうちに寡の色は、潮のやうに一セコンド毎にひたして來る、富士から緩やかに引き落した裾と、愛鷹山から㴱く裾とが、一緒に結びついた間の高原は、富士山周圍四十里の茫々たる裾野の中て、最も雄大をきはめたところてある。

　僕はこの間の穹窿に、或は夏雲の轉がるのを見たこともあり、又は夕立のすさまじい勢ひて通過する瞬間を、呆れて見たこともあるが、今夕そこへ臙脂を流し、火を點し、金を飛ばした、あの色は！

　すると、街を狹しと少女の一群が、輪を作つて羽根を突いてゐるてはないか、羽根は白いのが普通のやうてあるが、こゝらては、黄色のや、青や赤のを交ぜてゐる、それが多勢て、わやになつて突いてゐる、空に入るものと地に落ちるものと、互ひ違ひになつて、羽蟲ても飛んてゐるやうだ、僕はこの愛らしい黑髮と、長袖の娘子軍の包圍に陷つたのを、迂ツカリ知らずにゐた、羽子板が一兩枚、頭の邊て叩なり聲を聞かせる、髭男も小さくなつて、恐縮せざるを得ない、金剛杖を擔いて、肩を窄めながら、辛と通過した。

　一二町て振り返へる、もう手許も、うす暗いてあらうのに、止めやうともしない、

一人來な
二人來な
と涼しい聲がする、追ひ冠せるやうに
みて來な
よつて來な
と盛に突いてゐる、夢中になつて謡つてゐる、身の輕いのは、地を掠める飛燕のやうである、僕はもう富士山も愛鷹山も、眼中にない、この復活の夕に、荒驛に佇んだ、邪氣ない少女の一群の輪が、大きくひろがつたり、小さく萎んだりするのを見詰めたときには、紫裾濃の晴衣裳で、何がし夜會のダンスに、夢中になつて、踊つて、踊つて、踊り拔く何がし姫、それがし令夫人も、到底この突羽根の少女の、心からの浮かれやうにはない。

僕は、若い血が、手袋の中の冷たい指先まで、俄に突つかけて來るのを覺えた、君試に思へ、創世の昔から、今に至るまでの幾萬年を、永へに若く麗はしい富士の山！その裾野原の一角を劃つた、古ぼけた壊敗の町！町は老いさらばいて、歯が抜けたやうな氣のするところであるけれど、一滴の春をポツリと垂らした幾多の「點」！たぶらかすやうな夕暮の底に、蠢めくとき、この細長い古驛が、何だか槓杆で動かされたやうに、ぐるりと回轉して、生氣で滿ちてゐる。

丁度そこへ、喇叭を烈しく吹き立てゝ「にひはし行」といふ、木札を泥障の前に懸けた馬車が、一臺、走つて來たので、振りかへると、少女の一群も散つたやうであつた。

明日は箱根外輪山の一角、長尾峠を踰えて、都へ歸るつもりである。

女の心持

田山花袋

女子に就いての談話は何も爲る事が無い、一體女といふものは男子から見て到底疑問である、尤も半分斗りは分らぬても無いが、其眞相に至てはどうしたつて

知る事は出來ない。故獨歩は女子禽獸説など云つたが、男子と女子とは生殖の途を外にして到底沒交渉なのでは無いのか知らと思はれる。

女が男とどう違つてるかと云へば、男子は必ずしも現實の支配を受けないもの、他の言葉で言ふと現實を客觀し得るものである、が、女子は此點を闕如して居るらしく見える、女は到底實際を離れて存在する事の出來ないものだ、爾う云ふ齟齬つた點があるから相互の心機が相通じない、て、私は從來男子が書いたもので眞の女性を描寫したものはあるまいと思ふ、作家の描ける女子は畢竟女に對して憤慨した時か戀慕した時か、悔恨に沈んだ時の情が表はれて居るのに過ぎない、ツルゲーネフが女性を寫すに巧みだと云はれたものだが、あれなぞは男が女に屈從し阿諛して撫て廻して居る一態が見える丈けだ、イブセンの「ノラ」だつてイブセンの理想に過ぎないのだらう。

それで眞の女の心持をあらはしたものは女で無ければ書けない事になるので、さう云ふ作家の出るのを希望するの他は無いが、そこが前云ふ通り現實を客觀して自ら感じ自ら行動すると云つた第一人者としての自己を出す事が出來るものだらうか、

韻文の方では晶子女史の如きがあつて、女子ならてはと思はるゝ感情の聲を度々聞いたが、それが散文となるとさうは行かない、同じ作者であつてそれが小説に向ふと矢張り嘘の女子が出て居る。

文章世界の増刊號新春壇に水野仙子の「徒勞」と云ふ小説が出て居るが、あれなぞは全く男に氣付かない女の心持が眞に出て居るやうだ、全く女ぢや無ければ書けない事だらうが、一部の感じて男子と交渉を有する現實生活が描寫し得るかどうか。一體婦人に自覺とか自意識とかゝあつて行動するものであるのかどうか、私は頗りに疑問を存して居るのです。（談話）

文學に據りて救はれたる一處女の身の上話

わか草

生れた家は京橋……兄の感化……寂しい境遇……先生の教化……昔風の嚴格なる家庭……土藏へ入つて草艸紙を讀む……暗黒の方面に向ひかけて……文學に據りて得たる一道の光明……主として小說……刺戟の强いもの……家の用事の傍ら……若し文學に救はれなかつたら……幸ひに……文學は慈愛ある母……世間がひろくなる……

私に文學と自分との關係を話せと仰有るので御座いますか。まあどうも大變なお尋ねて、私なんぞ別に申上るやうな事は無いのですから困ります。何んでも是非にて厶いますつて……どうも困りましたと、じやお折角の御尋ねてす故、何故私がこんな文學好きになつたか、全然始めから話する事に致しませう。

私が文學好きと云ふ事に就いて、別段これが動機と云ふものもございませんが、私は幼少い時分は京橋に居りました。眞實の生れた家と云ふものは京橋に厶いまして、現今は兄が相續して居りますが、至つて固い昔風の商家なので私なども割合に質素に育てられました。

一體私は幼少い時分から物を讀む事は好きだつたと見へます。其頃奉公して居た女中などが來て「よく新聞なんか讀んで下さいましたが中途で居眠りを初めて、聞いてるの、と仰有ると、ハイ伺つて居りますつて云ひ乍ら又眠つて了つたりした、なんて今でも申しますのですが、新聞など人よりずつと早くからよんで居りましたやうです。

何しろ家が厳しいので少しも戸外へ遊びに出すなんて事は御座いませんでした。一度默つて近所のお友達の所へ遊びに行つて夫れは酷く叱られた事があるのを今でも覺えて居ります位、平民的でなく、何だか恁う云つては變て厶いますが、つまり家の内計りを廣いものとして育てられ人樣のやうに誰某さん遊びませうれつて誘ひにいつて容易く遊ぶなんて事は一度も出來なかつたので御座いますから、どうしてもお友達も出來ませんし、自然と家の外の者には懐かれないやうな具合で、從つて物を讀んで一人りて樂しむと云ふ方が多くなつたのでございます。

夫れて九つの歳に父が只今の病氣になり家を離れて病院の方へは入つて了ひ、母も亦其年の秋失ひましたので、否死亡つたのでは御座いません、事情あつて家を去りましたのです。未だに何故母が去つて了つたのかは存じません。

其時分の事はもう能く記憶して居りませんけれど、兩親が居なくなつ

て了つてからは、兄と妹と私と、三人で京橋の家に淋しい日を送つて居ました。何しろ商家ですから店にも人は多く居ましたし可なり大形な家内でしたけれど、眞實に親しむ者といつては兄と妹ばかりで、おまけに妹は階下で乳母と始終一緒に居り、私は兄と倶に女中が一人りついて二階住居でございましたものですから、どうしても子供のうちから人様のやうな樂しい温かい境遇じや無かつたのでした。

雖然兄とは仲が善うムいました。兄は私と六つ違ひで、父が病氣となりますと直きに家督相續として名も繼り、優しい人なので私などよく愛されました。其時分の私は至つて癇の強い、さうして泣蟲でございましたが、兄には畏れつゝ親しんで居ましたので、喧嘩なんて只の一度もした事なく、よく歴史上の古人の逸話などを聞かされたり何でも兄に教へて貰ひました。

兄も以前は多少文學の方面に趣味を持つて居りましたので、私が今日の文學好きも、其頃の兄から享けた感化が餘程土臺になつて居るのだらうと思ひます。雖然京橋時代はまだから無茶苦茶で、よむものと云つても兄の少年世界や太陽なんか許り、博文館から出た幼年世界だのあゝ云ふ少年物もよく讀みました。

夏蟲干などに黄表紙なんか昔の本が土藏から出ますと、一日其傍をはなれないで見て居ましたのです。また分りもしませんし、讀むものなんても今程雜誌もありませんでしたけれど、京ばし時代は兄のほか頭の抑へ手が無いので讀む自由は却つて充分に與へられて居りまして、お友達のない身にはどの位慰藉になつたのか分りません。

其内十三になりますと、段々もう大きくなるし、誰も傍に居ない事だから、と云ふので祖父母の居る此方へ妹と一緒に引取られたのでございます。

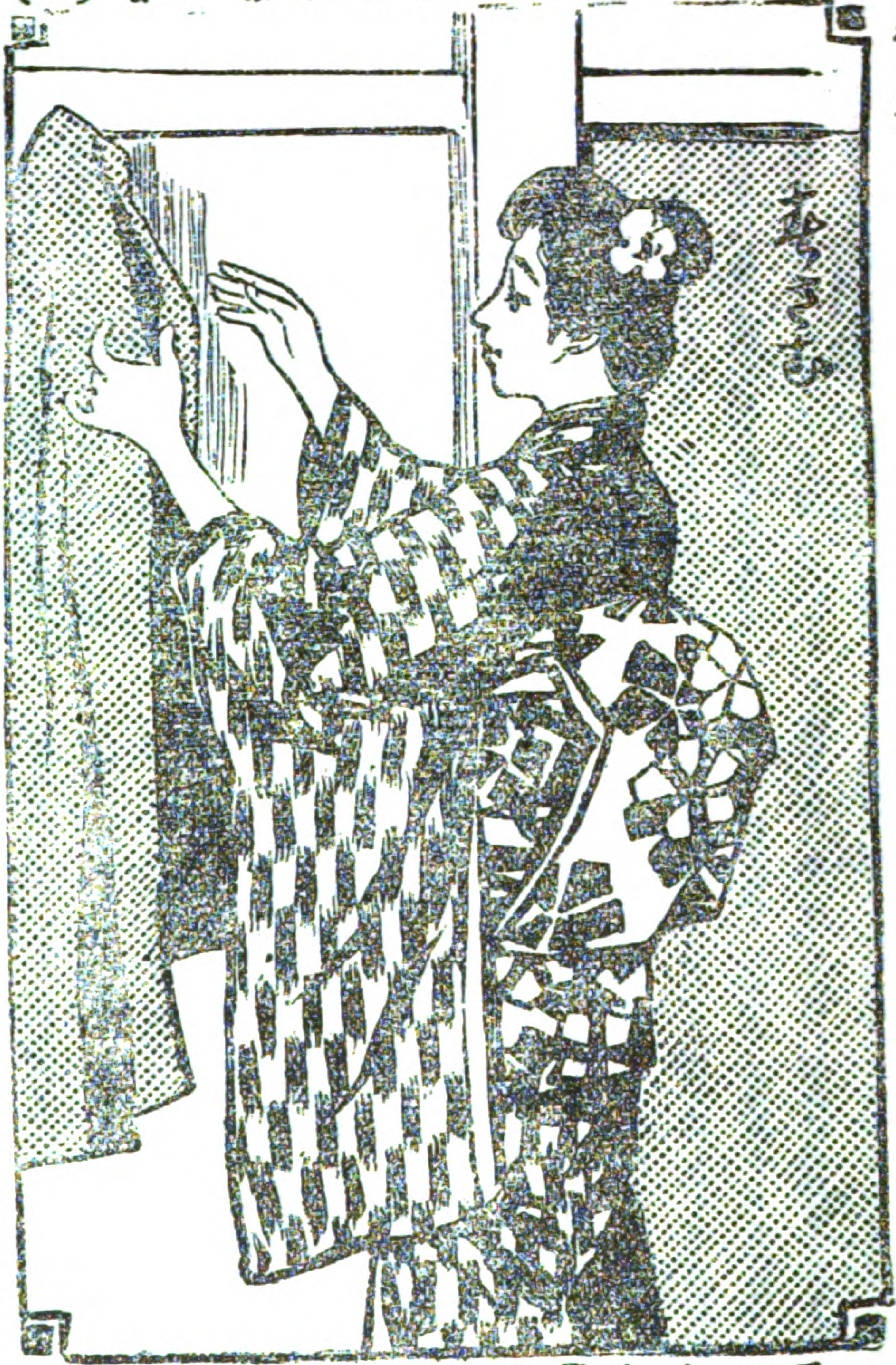
父は其頃もう病院を出て、此方へ來て居りました。京橋の方では煩雜う御座いますし、此所は閑靜なり、祖父母が居りますものですから靜養するには極く都合が好いので、構内に別に家を造つて其れへは入つて居りました。

雖然何分不治の病で、腦の方の事ではムいますし、私達にももう人並の親として子に對する譯にはゆかなくなりました。父さへ病氣にならなければ私達は幸福で居られましたのでせうけれど、今でも父の顔見ると苦しいのです。

夫れで此方へ參りましてからは此所の小學へは入りましたが、丁度高等四年の時の先生が大分文學の方が熱心で、徒然草や土佐日記などの所々を拔いて、教科の課程以外に古文學の香りを生徒に吹込んで下さつたので、潜んで居た種は芽をふきました。私は此頃から眞個の文學の有難味が解つて來るやうになつたのでムいます。ですから學科の中でも算術などは嫌ひで出來ませんでしたが、綴方、讀方はいつも甲でございました。學校から歸つて來るといゝ加減なお伽噺のやうな物を書いてみたり變な和歌を作つたりして一人で喜んで居ましたのです、お友達から雜誌なんか借りると嬉しくつて早足で家へ歸つたものでした、祖母は餘り雜

諸なんか讀むのを好きませんでしたけれど、學校に居ります間は、隨分學校の方の事に誆つけられました。

寂しい境遇は此方へ引取られてからもずつと續きました。妹はあつても私とは丸て性質が違ひますし、戸外へ出る事は京橋時代よりも又一層八釜しくて、お友達なんかも滅多に遊びに來た事がありません、仍且皆幅つたいからてせう。昔風な家族制度の嚴重な家で、お孃さん育ちてムいましたが、何ても頭から抑へつけられる樣にされて居りましたから、私など始終怯ぢて育つた樣な具合で、餘程人間が偏屈になりました。けれども學校に居る內はまだ宜うムいました。小學を十五の春卒業してからは家に計り居りまして、アイ學校はお耻かしい事に小學きりで何處へも參りませんでした、自分は望みてムいましたけれど、矢張女が學問すると生意氣になると云ふ舊思想からなのでムいます。



小學卒業後は祖母の手許て裁縫や家事を習つて居りましたが何となく學科がなくなつてから自分の上に空虛を覺えまして、何だか物足りない心持て仕方がムいませんものですから、益々愉樂を文學の方面に求める樣になりました。

舊家でありますゆゑ昔の草艸紙ものは色々土藏にムいます。藏から本を出してきて見ると云ふ事は嚴しかつたのでムいますけれども、ちよいちよい密と出して來ては庭へいつて見たり物陰へ隱れては讀み／＼致しました。祖母が極めて嚴しい人で、恰度花袋さんの「生」にある老婆、あゝ云つた型の人で、どうも私とは趣味感

性が合はず、何でも昔の町家の娘と云つた風なのが好きて女の癖に本なんか見て居るのは大嫌ひ、藏から出して來た本でも見付け様ものなら、酷く叱られましたのです。雖然叱られゝば尙見度くなつて能く土藏の中の冷い板の間へ坐り込んでは、物語中の人物の忠孝節義に泣かされました。其頃よんだのは八犬傳や弓張月を初めとし田舍源氏、白縫物語、西國奇談等みな夫んな物で中でも馬琴のものが多うムいました。八犬傳には餘程刺戟をうけまして、文章の佳い所なぞ遮歷に出來たらどんなに可いだらうなんて能く思ひ〳〵致しました。叱られゝば叱られる程尙本が見たく、又文學が實際私を精神的に救つた事は實に大きうございましたのですもの。只今でもさうで御座いますが何買ふよりも本を買ふのが一番嬉しいので、衣類や帶や何でも拵らへて吳れますと、こんなもの要らないから本を買つてくれたら、といつも思ひました。

餘り家の内の事は申上げたくムいませんけれど、絕えず壓迫をうけて苦痛に囚えて居りました私を救つたのは實に文學の力なのでした。富有ではありますけれど、何しろ餘程嚴格な家で何分にも堪ふやうになりません、私には親しい伯父伯母と云ふものがありませんし、肉親の祖父母の傍に侍して居ながら何故か私は絕えず、孤獨と云ふ感じを抱いてをりましたのです。

私には親が無い、母がないんだ、と云ふ悲哀は成長くなるに伴れて段々深く意識され、境遇に對する不滿と共に始終胸を苦しめて、夫れに當時身體が弱うムいましたので、遂に一時は非常な厭世家となつて了ひました。一體私は感じ易い、少しの事に動かされる方の性質で涙脆くていけませんでしたが、この母が無いつて事は奈何に心を傷つけましたらう。總ての事にこの悲哀を深く思沁みて、其中でも時々此方へ來る兄の悲しみは何時も忘れませんでしたけれど、隨分人には云へない苦しみも辛さも味はつて、心は暗黑い方へ〳〵と墮ちて行く許りなのでございました。

併し文學の力はよく私の心をつなぎとめて、自暴自棄になる事を辛く免かれました。哀しい辛い事も思ひを筆に遣れば胸も晴れますし、又本をさへ見て居れば全然何事をも忘れて居るのです。祖母によく本氣違ひと云はれましたが、自分でも實際さうだと思つて居ります。

訴へると云ふ夫れが大なる慰藉となるものと見へまして、散々厭世思想を繰返はした末は今度は文學によつて明るい方へ心が向くやうになりました。歡びも樂しみも共に得て文學といふものが眞に面白くなつたのでムいます、文學を與へられるならば何も他に要らない、と思ひました私の執るべき道はこれだ、文學は私の生命だ、とも思ひ込みました。斯うなると冷い光のない、生活も何も少しも意にかゝらなくなりまして、温かい小說や美しい詩や、文學許りが私に限りない慰安を與へて吳れる樣に思はれます。其内に雜誌に投稿する事を覺へまして益々文學に對する慾望が熾んになりましたが、何しろ空虛の頭の事とて、今甚く恥ぢて居りますけれど、始めの内は模倣許り致して居りましたのです。

一時は詩の方へも走りました、夫れは文學が許されて居ないので此方

を捨てゝ公然に慰むものを得度いと思ひましたので、雖然先生がほんのお嬢さん藝としか見て下さらないのに厭氣がさし、又自分の貧才の無いのを識つて面白くなくなり、夫れでも初めのうちは一生懸命遣つて見ましたのですけれども、段々繪筆持つ手が鉛筆持つてると云ふ様になつて何時か已めて了ひました。仍且私には文學の惹きつける力が大きいのでせうと存じます。無論畫も好きではムいますが。

元より家では讀んだり書いたりする事は酷く厭ひまして度々云はれるのですが、云はれゝば其度猶文學に執着が強くなつて、何所迄も遣らうと云ふ氣になります、一つは私が意地つ張りのせいもムいませうが人情つて妙なものでございますのね、

最も本なんかもう讀むまい、筆なんかもう決してとるまい、と家庭から迫害られる苦しさに幾度か思ひ、又行ひましたけれど到底駄目でした書く方はまだしも、何も見ないで居るといふ事は何うしても堪へられません、他に自分の心を叙べるものはなし、周圍は皆自分とは全然異つた人達計りですし、何をしてもつまらないで丸で失神した様にぼんやりして了ふので御座います。

今はもう全く文學によつて慰安を得るやうになつて一時非常に拗れくれ曲つた感情も融和され、餘程暢氣になりました。

左様でムいますれ。好んで讀む文學ものと申しませば重に小説類で、歌も詩も好きでございますが何うしましても小説が一番好きなので御座います。俳句などは嗜好の外のもので餘り心にとまりません。

女學校へも參りませんし、讀む事もさう出來なかつたので、在來の古文學の味が能く解りません所爲か、どうも新興文學の方がすきて、初まりの内は何でも畫派でございましたが急に變つて新らしい方面を見る樣になりましたのです。もう以前の文學では胸へ痛切にこないので、どうも滿足が出來なくなりましたのですもの。

孰ちかと申しますと長篇より短篇ものゝ方がすきて、夫れも讀んで重味のある。刺戟の强いものゝ方を好みます。秋聲さんや白鳥さん等のは別けて好きて、葉舟さんのお作もすき、なくなられた獨歩さんのものは幾度見返しても新らしいものがあるやうな心持て、好きと云ふよりは敎へられるやうな感じがして讀みます、畢竟洒落れて浮世を茶にすると云ふよりは、人生を眞面目に考へると云ふ樣な固い方が私の性質に適つて居りますのでせう。

一葉女史の緊密な筆致は大好きで一葉さんには非常に私淑してゐるのでございます。只今の閨秀作家の方々のは餘り見ませんし、よく存じないからでしやうけれど好きと云ふ作風はまだ有りません、一體に新作家方の作物は喜んで讀みます。雖然さうかと申しますと慾う新らしい方面計りでなく又昔の淨瑠璃本やなんかあんなものも嫌ひじやムいませんし、謡曲なんかにもいゝ文句がムいますでせう、私の文學は延いて音曲の方にも趣味を普及さしたのでございます。

現在の境遇も仍且文學には親しくされないやうな位置なのでムいます精神上の變化は激しうございましたが外形は變らずにずつと今日まで[illegible]

いて參りました、先年祖母が死去りましてからは、家の用は萬事しなければなりませんし、公然と文學に親しむ事は引きつゞいて許されて居りませんのです。昨年の夏など一度烈しく云はれまして讀む事も書く事ももうよして了へとまで云はれました、雖然今文學を私から除つて了つたなら奈何になりますか、今迄隨分と云得ない苦痛をうけ乍ら尙女らしい心を持つて居られますのは、皆文學の賜物だと思つて居りますのですもの。

文學が人に高い趣味を與へ、優しい感情を授ける事は申すまでもござゐませんでせう、女は殊に多少ともこの方面を見る眼があつて欲しう御座います。何も深い極みには入らずとも、全然文學の智識の無いのと有るのとでは大きな違ひがあります。

若し文學に據らなかつたら何う云ふ方面へ行つたかと仰爲るのでございますか。さあ私がもし文學に據らなかつたら何の方面へ向ひましたでせうね。地體私が多年の境遇が苦いので自然性質が陰鬱な方で厶いますですから一時厭世思想に支配されて居ました時なんか彼の儘でいつたなら、夫れこそ自暴自棄の結果大變な世拗れ人になつて、人交はりも出來ない樣な病的な人間にでも必と成りましたでせう。死に赴くとまでは行かないでも過激な性質です故必とさうなりましたでせうと思ひます。

然し幸ひにして文學に救はれました身は、段々廣い世界が見えてまゐりましたやさしい友も得られましたし、心を慰む事は多くなつて、又見るもの總てが文學的に解釋してゆきますと（只優美高潔と云ふ上つらな方面へでなく）たかゞ小さい自分達の悲哀なんて事も、そんなに酷いものでもなくなり、つまり高い方へ心を置いて氣が大きくなつて了つたのでございました。ですから私は自身に對して文學は慈愛ある母だと存じて居りますもう何しても離れる事は出來なくなりましたのです。

現在でも何かにつけて耐え難い自由の束縛を感じて居りますけど、一度文學に救はれた人は、其溫かい懷に抱かれて限りなき幸福を識つたので御座います。何しろ外出させるのが厭ひで家で出しませんから見聞が極く狹う厶いますので、行く方はとても駄目ですけれどせめて讀む方だけでも思ふやうによみ度う御座います。

父はかなり讀書の趣味が豐かであつたらしう御座いますが、何せよ丸で文學に縁の無い中へ一人り怎那文學ずきになつて了つたのですからどうしても周圍からは責められますし、深く研究したくても到底出來は致しません。

しかし今後の文學を發展させる上から云つても、是非家庭に文學を入れる事を許さなくては、私自身の經驗から徵して見ましても、この力が精神的に人を慰藉する事の實に大きいのが判りますもの。

只今は家事につとめ乍ら一方文學に據つて多大な慰安を得つゝ平穩な生活をつゞけて居ります、家の內の事ばかりしか知らぬ私には、許されでは居ない乍らも是に依つて奈何に人生の事を知るか判りません。

鬱屈した私の性質は、この頃よほど異つて參りました。孰ちかと云へば未だ沈靜な方で厶いますけれど、前とは餘程ちがつて多く笑へるやう

になりましたのです。一つは境遇が以前より抑制されないやうな、ずつと樂になつた點もありませうけれど、終始渝らずに導いて與れる文學の力も又大きに與かつて居るのではなからうかと存じて居ります。

芝居好の婦人に

文學士 小山内薫

婦人が劇場へ行くのは劇を見に行くのではありません。俳優を見に行くのです。「今度は誰々が何々をするから行つて見たい。」と云ふ婦人の語は、常に「何々を」より「誰々が」に語勢を置いて聽くべきです。例へば「吉右衛門が高時をするから行つて見たい。」と言ひます。これは決して「吉右衛門が演る高時」が見たいのてはありません、「高時を演る吉右衛門」が見たいのてす。男子は俳優を通して俳優の扮する人物を見ようと致しますのに、婦人は俳優の扮する人物の中に俳優其人を見出そうとするのです。——俳優が部屋着の儘、素顔で舞臺へ出る事、これ芝居好の婦人が無意識に理想とする所だらうと思ひます。

一歩を讓つて、婦人は劇場へ俳優を見に行く者ではないと致します。然すれば婦人は劇場へ刹那の感情を動かしに行く者です。劇の筋などは如何でも好いのです、科白の進行などは如何樣でも搆はないのです。唯離縁をさせた嫁が、生家の父に縋りつくのを見れば、それて可哀さうになつて泣くのです。夫の洋行中、夫の姉に虐められる若い妻を見れば、それて堪らなく悲しくなるのです。理性にも訴へず、智力にも問はず、刹那の感情に貴重な涙を零して、それて滿足してるのです。恰ど理由なしに人に背中を打たれて、それて痛いと云ふ感じを得て、それて滿足してるやうなものてす。世の中には、その當事者が泣いて居る事でも、傍から理智に訴へて解釋して見ると隨分可笑しな事が澤山あります。また、その當事者が笑つて爲てる事でもその人を離れて考へて見ると隨分悲しい事が澤山あります。婦人が劇に對する態度も、願はくはこの態度てあつて欲しいと思ひます。劇は人生其者です、決して

人生の「芝居」てはありません。人生其者に對する態度を以て劇に對する態度としたら、貴重な涙を浪費する憂は自然と無くなるだらうと存じます——私は芝居好の婦人が、子兒を連れて往來傍に座つてる乞食を見て何故泣かないのかと不思議に思つて居ります。劇は婦人の專有物てある限り、決して進歩するものてありません。婦人が一人無しに今日の劇に不滿足になつた時、その時が初めて新しい劇の興る時てす——私は然う云ふ時が來るか如何かを疑ひます。

全體、女優必要論の如きは、男子側より寧ろ婦人側から出なければならない議論なのてす。それが婦人側から一向に出ないのを見ても、婦人が眞に劇を解する者てない事が分ります。今日の婦人は「男の扮した女」の粗雜な表情を見て滿足してるのてす。私共男子はもう今日の女形の如何な上手を見ても「眞の女」とは思へなくなりました。然るに婦人はそれを見て滿足してるやうてす、まだ「眞の女」だと思つてるやうてす。婦人が「男の眞似た女」を「眞の女」だと想つてる限り、好い女優は出て參りません、又女優の出て來る必要もないのてす——女形て充分婦人客が呼べるのてすから。

私は芝居好と稱せられて居る婦人連が、如何にも理智の力に乏しいのを常に驚いて居る者てす——その感情の粗雜なのを常に悲しんて居る者てす。

（二月十日、箱根にて）

丘の上の花（外一篇）

川路柳虹

華やかな
日ぐれにみた
丘の上
紅い撫子の花——

一日、
二日、三日、
忘れてゐたうちに
雨が降つた——

淋しい日
わたしの心ははげしく
その花を
思ひ出した。

丘の上
雨のなかをついて
行つてみた
紅い撫子の花。

も、なかつた、
心も濡れるほど雨がふる、
わたしはひとり
丘を下つた。

たゞひとり濡れて
丘を下つた。

凋落

立ち竦んだ枯木、霜に疼いた痛み、永い戦の疲に



地に落ちた木の葉、風はもの凄く空を呻つて
冬の日は薄く暮れてゆ
く――臨終の日暮の色
に
熱した鳥の聲、白晝の
光りの名殘り。

白い路の上を追んでゆく
落葉――夢は絶えず醒
されて
驅られてゆく落葉――
安住のすみ家は何處に
ある？
なかに、華やかな紅い
葉、それもまた吹かれ
てゆくのだ。

何とも知れず、ある日
の憶ひ出が堰かれるや
うに
胸に迫る、紅い幻――華やかな笑ひが消えて

涙に濡れた二人が浮む。夜、暗、そして醒めた日の
風の匂ひ……
丘の上には日が啜り泣いてゐる、いま、
洞を吹くやうな風のはてに
白い墓の生垣……
鳥がまた鳴き出した。

鳥よ、鳥よ、薄ら寒い冬の日の暮れに、
鳥よ、鳥よ、紅い木の葉の追はれてゆく日暮れに、
風はもの凄く吹いてゆくのをきくか、
熱い胸に歌つた日はも暮れてゆく……
鳥よ、鳥よ、落葉のかげには何か、黒い瞳が
汝をみてゐる――嘆き――夜のさびしさ、その病ひ。

若き女の嬌態

福光東衣

「……御高作を拜誦しまゐらせ候につけても、吾等女のすなる嬌態といふことを、如何なればかくまでに拒け給ふらむ、とあやしう思ひ惑ひ候。媚といひ嬌態と申し候とも、そは吾等若き女の名を聊かも傷ふことなくして、なほ愉快に時を過し得べき娛樂に過ぎずと存じ候に。古りし世より今の時に至るまで、こよなききむの婦人と稱えられ候が中にも嬌態すぐれさせ給ひしが數々之れあり候と覺え候……」

これは亞米利加の一少女から著者に送つて來た手紙の一節であるが、予はかゝる書信に接したことを甚だ遺憾とする。予は總てに於て純潔を愛する、かるが故に自らにして其人に具る氣韻餘情ならばいざ知らず、苟も媚嫣嬌婉の姿態とあるからは、模倣と虛欺とに充ちたものとして唾棄するに躊躇しない。女の愛は、世界が男に與へる最も貴重の賜である。眞の男である以上は、模造の愛をどうして心から受納れようものぞ！　かくて、男を弄ばむと欲するものは、畢竟は自らを弄ぶ事に成功するのみである、手紙の中には、古來の善良なる婦人の中にも妖媚の術に秀れたものが屢々有つたとのことであるが、さは明かに、おのづからなる妍艶さと、わざとらしい媚とを混同したものて、賢良の婦人、女らし飾を意識した婦人は決して嬌態を作るものではない。蒙昧昏鈍の女のみ獨り

之を敢てする、曰く男の戯れる女、曰く男の結婚する女、これが怜利な男の頭の中に分類されて居る女、の二種である、而して、嬌媚の態様を事とする女は、其の孰れに屬するであらう？　答へるまでもないことだとは云へ、かゝる女とても婚嫁の僥倖に浴するとが全く無いでもない。が然し、其相手は？　其夫たる男は？　と問ふと、これも答へるに及ばないほど明白なことである。

吾等男は、時々裝ふが如き馬鹿ではない。女が吾等と戯れんことを欲する場合には、吾等は婦人の赤面を白晝に見るに忍びないが爲めに、拒絶ないで望まれたまゝの愛嬌を蒔きもする。「女に嬉ばれて、しかも自分に大した損を受けない」と思ふのも其理由の一ツである然し、結婚の申込を受納れようか？　否。否。美酒に酔はむことを欲するに當つては、吾等は先づ盃の清らかなるを選ぶ。

女の中には、通りかゝつた男に、誰彼の見界となくじやれ付く者がある。予は屢々旅館に於て、少しも浮いた氣の無い眞面目のボーイを捉まへて、獨りでふざけて居る旅の娘を見る毎に、何とも云へないなさけなさに襲はれる、所詮、嬌媚は病氣だ、狂癖だ。

嬌態は、慈善演藝會の中でも、使用されて差閊の無いものと見える。但し、男を誘き寄せて金を儲けるのだから怖しい。

ポンチ雜誌の語る處に據ると、嘗つて英國交際社會に名ある年若き一淑女が慈善會場の茶店を受け持つて居た所に、一人のハイカラ紳士がやつて來て、一椀の茶を乞ふた。するとその女は、早速茶を入れて、其茶椀を薔薇の唇に一寸當てゝ加減を見て、そのまゝ夫れを豪華子に差出した。飲み終つて、件の紳士、

「代價はお幾何？」

と尋ねると、答に、

「五十錢戴きます」

「えゝ!?　お茶一杯が五十錢ですか？」

「えゝ、妾が一寸口をつけましたものを……ですから五十錢でもまだお安い方ですわ」

この時、紳士、弗然として色を作して曰く、

「あゝさうですか。では、もう五十錢差し上げますから、どうか清潔な茶椀に入れて戴きましやう」

男も男だが女も女ではないか。

（マックスオーレル）

花言葉

水野葉舟選

う

梅の樹　忠實。貞節。

梅—野生の—　獨立。

馬鞭草　妖術で人を迷はす。

羊蹄　虚僞。

茴香　強健。讃美したいやうな……。……。效績。

苜蓿（クロヴアー）　頌德。威厳。

苜蓿—四ツ葉—　幸運。私のものにおなりなさい。（廣い意味に用ふ。）（クロヴアーの葉は三つに分れて居るのが普通であるが、まれに四つに分れて居るのがある。それを四ッ葉と言ふ。）

苜蓿—赤い花の—　勤勉。

苜蓿—白い花の—　私を思つて下さい。

馬の尾。　婦人の生産力。

え

翠菊　多様。追想。流暢な辯説。

翠菊—單辨の—　私もそれに就いて考へませう。

翠菊—復辨の—　何でもあなたの思つておいての通りになりませう。（翠菊は菊科植物だから、單辨、復辨と區別すべきものでは無いが、蕊の周圍に花辨が一列、もしくは二列位に並んで居るものと、房々と蕊が隱れるやうになつて居るのとの二種がある。前者を假に單辨とし、後者を復辨と言ふ事にした。）

翠菊—蕊が高く出て居るもの—　氣がすゝまない。

花言葉

水野葉舟編

翠菊—白— よごれた顔。
翠菊—赤— 欺された。
翠菊—紫— 酒のよつた女。
金雀花 謙遜。巧妙。
はりえにしだ。 謙遜。
豌豆 心の清らかな女。
豌豆のつる。 よりかゝる。
豌豆—香のある花— スヰート、ピーの條を見よ。
豌豆—紫— しつこい。(軽い意味で)
豌豆—白— 私は楽しい夢を見て居ます。
豌豆—實— あなたの親切なお心で私は生〳〵しました。
ヱナスの籃(ヱナススカー) 一所に飛んで行ませう。
ヱナスの鏡(ヱナススルッキンググラス。) 媚。女の妖艶な表情。
ヱナススッラップ むしとりうちはの條を見よ。

おを

オースターチューム 華麗。華美。
和蘭苺 尊敬と愛。
おなもみ 偏屈。不作法。
含羞草 鋭感。柔しき感情。
オチスチイ 正直。迷魂。
おだまき 愚。精神錯亂。
おだまき—紫— 必ず打勝たうと決心した。
おだまき—赤— 心配と戦慄。
おだまき—白— ぼやけた心持。
おだまき—高山の— ふら〳〵した心。
白頭翁 アネモネを見よ。
オスマンダ 空想。
オルカメニヤ あなたが幸福であればいゝ。

raven rode on the horns of a bull in the herd; and as he approached the cottage, cried to the farmes, "Friend, my work for the day is over; You may now take charge of your cattle."

"what was your work. ?" asked the farmes.

,'Why," said the raven, the arduous task of watching these cattle and bringing them home."

" Am I to understand you have been doing all the work for me?" said the farmer.

" Certainly," said the raven and flew away with a laugh Guoth the farmes with surprise, " How many there are that tak e credit for things which tsey have never done!"

Adapot

と，一羽の鴉が牡牛の角に止つて居りましたが，頓て小舍近くになりますと，農夫に申ます事には，

「君，サー之から此牛共を世話する番だ，僕の一日の仕其は，これで終つたからね」。

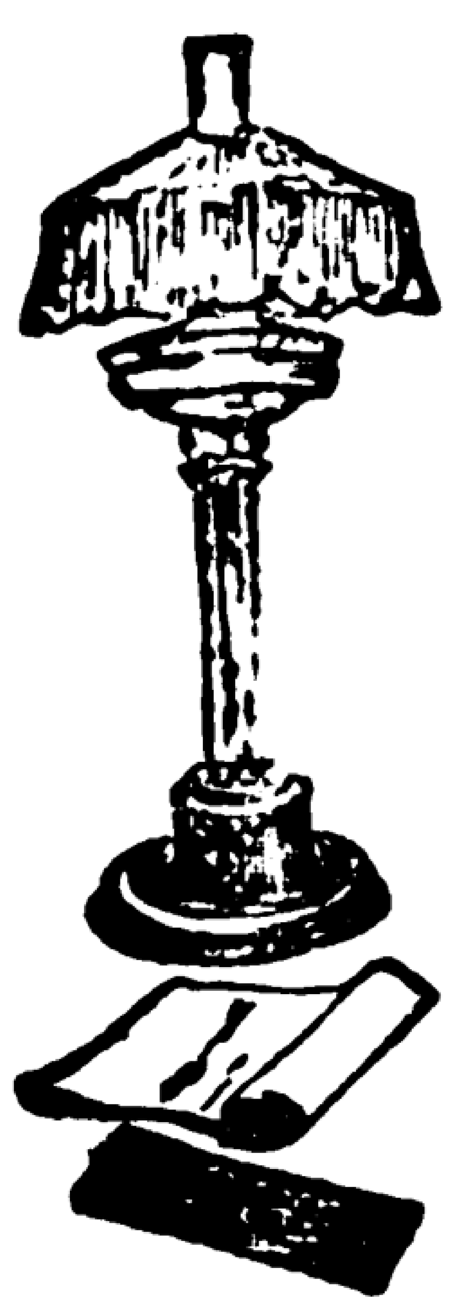
「何が君の仕事だ？」と百姓は問ふ。

「分らん人だね，此大勢の牛を看守するのと，野から，小舍まで伴れて來る面倒な業さ」。

「其では，ミ，鑑の代に悉皆り其仕事をして吳れたと云ふ譯けかね？」と又農夫は云ふ。

「勿論さ」と笑ひながら鴉は飛て行きました。

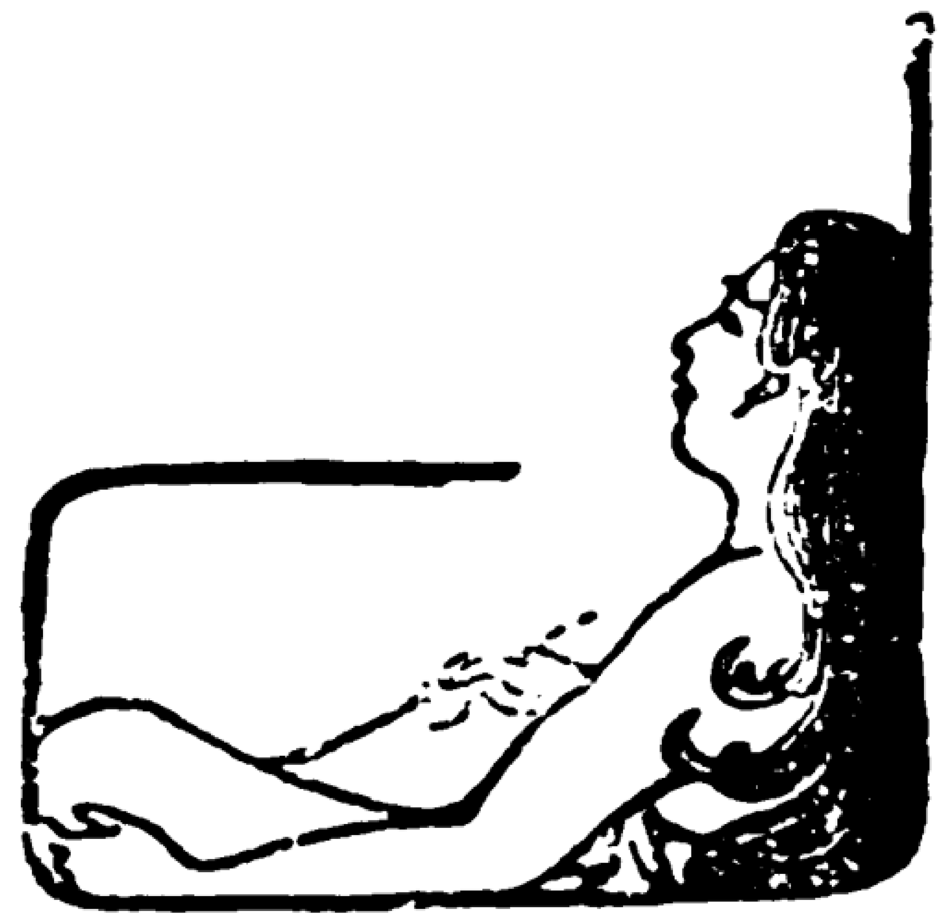
百姓は驚き云ふ事は，「世には自身のしない事を，恰もしたが如き顏をして居る者が甚麽に多數かしら」と。



英　文

(第五年第三回)

女子英學塾講師 河井道子



Children's Evening Prayes

Now I lay me down to sleep,
As the shadows solftly creep,
As each bird with folded wing,
On some tiny bough doth swing,
As the flowers, all wet with dew,
Bow themselves in slumber too,
In the stillness, awful deep,
Now I lay me down to sleep,
Now I lay me down to sleep,
Still, my Sorp, in Safety keep,
Keep my soul till dawning day
Bids the darknees fly away;
Till each flower with glistening cup,
Loward the lofty sun looks up,
Sill his beams upon me peep,
Now I lay me down to sleep.

Amen.

A. D. Walker·

子供の夕の祈

是から臥所に参ります,
段々暗くなりますし,
飛ぶのを止めて皆鳥は
梢に棲止て居りますし
花は悉皆り露に濡れ
睡てうなたれてゐますから,
しんとしたこの夕方に
私も今から休みます。
是から臥所に参ります。
御守下さい　神樣よ,
此靈魂を　明け方の
光が闇を　追出して,
露て燦爛(キラキラ)する花が
昇る旭に　顔を向け,
其日が私に　あたるまて·
今から靜に　休みます。

アーメン.

The Raren and the Cattle.

One evening, as some cattle were wending their way home, a

大鴉と牛

其夕方牧場から牛の群が小屋へ歸るので,野路を歩んてゐます

美文の作法（三）

西村醉夢

三　詞藻の解

詞藻といふのは英語ではフイギユアス、オブスピーチと云つて、詞の姿を整へて文章を飾る事、即はち修辭であります。分り易く云へば、自分の思想を他人に傳ふるに當つて、一段深く通徹せしめる爲めに、巧みに文辭を飾ることを詞藻と云ふのです。『あの人は賢い』と云へば、誰しもその人が賢いと云ふこと丈は分ります。併し深く感じません。若しこれを飾つて『あの人は神の如く賢い。』と云へば、賢こさが強くなつて聽く人も深く感じるとに成る、かやうに詞藻と云ふものは、力のあるものですから、文章を巧く書かうと思ふものは、是非共詞藻とは何であるかと云ふことを知らねばなりません。一口に詞藻と云ふものの、細かく觀察すると、それは幾様にも分れてゐるが、先づこれを二つに分けることが出來ます。

（イ）知力的詞藻と申しますのは、當の事物は一際明瞭に理解せしめやうとするもので、賴みとするのは知力であります。『髪は烏のやうに黒く、顔は雪のやうに白い、顔を雪に比し、髪を烏に比するのは、隨分古い譬喩であつて、新らしい文句と云ふことは出來ぬ』と云ふやうなのは、全く知力的であつて、智識で理解しなければ、その面白味は分りません。それ故、知力的詞藻は、說明、敍事などに用ゐて功力があります、所謂『面白くて分り易い文章』は、知力的詞藻を巧用したものであります。

（ロ）感情的詞藻と云ふのは、當の事物に對する感情を深く且つ切ならしめる詞の姿で、賴むところは感情であります。分る、分らぬは問題外で、動く、動かぬが此の種の詞藻の覘ふ所であります。『しんとろとろりと見惚れる男、油壺から出るやうな男』と云ふ近松の名句は、理窟から、云ふと少し可怪いが、一讀してその男が美くしく、可愛く思はれる。つまり感情的詞藻といふのは、理解せしめやうとするよりは、感動せしめやうとするもので、美文などには前の知力的詞藻よりも、一層必要で、一層有効であります。

かゝる詞藻は何んな功果を持つてゐるかと云ふに、

第一、國語を富ましめ、措辭を自在にし、よく題目に應じて人の思想を完全に表現する事を得しむる力があ

ります。詞藻がなければ言ひ現はすことの出來ないやうな題目でも、是あるが爲めに漂渺の間にそを彷彿せしむることが出來ます。第二、一語に多義を含ましめて、簡潔に無量の意味を表示せしむることが出來ます、素と言語は人の思想の記號で、その思想さながらを言ひ現はすことは困難であるが、詞藻を用ゐると少數の語でそれを表徴することも出來るのです。第三、聯想の方則に基づいて、當の事物以外に或る事物を想ひ浮べしめる力があります、例へば『お父さまの頭髪は白い』と云へば、唯だ頭髪が白いと思ふ丈ですけれども、夫を飾つて『お父さまの頭髪は、雪のやうに白い』と云へば、頭髪以外に雪をも聯想して、一層白いと云ふ觀念が明白に成ます。第四、當用の理解以外、當用の快樂以外に更に讀者を深い理解と強い感動とに導きます。

四　詞藻の種類

以上で詞藻と云ふものゝ性質、効用、範圍は略ぼ分りに成りましたでしやう。で、私は茲で、その種類の大躰について述べやうと思ひます。――ペインと云ふ學者は、人間の理解力の種類に基づいて、詞藻をも三段に分けて居ります。その三段と云ふのは、一。辨異力に基づくもの、二。認同力に基づくもの、三。保存力に基づくもの、

でありますが、これを極めて分り易く詞藻にも當て嵌めて分類すると、第一のものは聯接上の詞藻、第二のものは類似上の詞藻、第三のものは照激上の詞藻と云ふことが出來ます、これは島村抱月さんの分類法です。

（一）聯接上の詞藻といふのは、聯想の力を借りて、當用の事物以外のものを拉し來つて、當用の事物その物を巧みに言現はす方法です、一例せば星の事を、空の花と云ふ樣なものです、この種の詞藻には色々ありますが、先づ提喩、換喩、張喩、引喩の四つを數へませう。

（二）類似上の詞藻といふのは、當用の事物によく似た事物を持つて來て比べるか、或は類似した事物だけて、當用の事物を思ひ泛べしめる修辭法であります、例へば十六の娘といふことを十六島田と云つて、島田髷で娘を聯想せしめたり、顏は花の如しと云つて、美くしい點てよく似てゐる花を持つて來て、顏の美くしさを現はすと云ふ遣り方です。これには直喩、隱喩、活喩、諷喩、聲喩の五つがあります。

（三）照激上の詞藻といふのは、完全に事物と事物とを對照せしめ、或は不完全に事物を對照せしめて、讀者に比較的の聯想を起さしめる方法です。例へば墨田の花は吟ずべく、蓮湖の月は歌ふべし、と云ふが、如

く、墨田と蓮湖と、花と月と、吟と歌と、相關せる事物を照激せしめて、快美感を起さしめるのもあり、又た盲目の瞎のぞきと云ふが如く、反對ことを云つて、その裏面に潛める眞意を汲ましめるのも有ます。これには對偶、漸層、警語、設疑、反語などの種類が有ます。

（四）以上の三種に屬せぬものを、假りに雜種の詞藻と名づけます。此の中には如上の二原則が混合して出來てゐるのもあるし、又全く別のものもありますが要するに、讀者の注意を強めたり、聯想を起さしたり疑問を起さしたりして、一段と強く感動し、一段と深く理解せしめやうと云ふ目的に外なりません、此種の詞藻は漫然と並べ立ると感嘆、頓呼、現寫、問答、反復、句拍子、疊句、掛詞、枕詞、類語などであります。これ等の修辭法に就ては一々悉しく後に述ることに致しましやう。

五　提喩の事

●●提喩といふのは、英語のシネクドキイのことて、一名これを本枝互換法とも申します。即はち本と枝との關係によつて、彼と此の間に聯接を保たしむる修辭法て、譬喩の一種てあります。それには、

イ、本を以て枝に代へるもの、　ロ、枝を以て本に代へるもの、

の二色御座います。本枝とは詳しく申しますれば、普遍的、般稱的、抽象的などは本て、特殊的、個稱的、具象的などは枝てあります。一例しますれば、日本武尊の御歌の『新墾、筑波をすぎて、幾夜か寐つる』といふのは、一種の提喩て御座います、一日といふことを完全に云ひ現はすには、夜寐ること、晝起きてることゝを計へ上げねばならぬのに、これは單に夜の事だけ云つてゐます。これは即ち枝を以て本に代へたのてあります。また『あの女は、第二の楊貴妃てある』とか、『彼はナポレオンの再生てある』とか云ふのは矢張枝を以て本に代つたものてすが、楊貴妃のことは敍して『麗人は遂に城を傾けた』と云ひ、那翁の事を『一世の英雄は、セントヘレナの孤島にその生を終つた』と書いたならば、これは本を以て枝に代へたものと云つて可い。何れにしても、その提喩たることは一つてありますが、提喩と換喩とは非常によく似た點があつて紛らひ易いから、換喩の説明を見て截然たる區別をする必要があります、提喩の功用は色々ありますが、第一、露骨に陷る弊を防ぎ、第二、理解を確實にし、第三、感動を強くし、第四、聯想を擴くしますが、その最も顯著な點は、第五、重複と單調とを避けて、文章に變化あらしめる事てす。

短篇小説

小栗風葉選



○規定　題材凡て自由なり一人一篇を限り半紙又は罫紙に振假名をつけて明瞭なる楷書にて認むべし長さは二十四字詰八十行以内とす賞は甲種に據りて送呈す▲本欄以下本誌の投稿は凡て女子に限るものとす

○昔の友（実寫）

播磨　内藤松園

「本當に能う來て下すつた事ねー」其の聲は沈んで居た。私は默つて友と並んで歩いた、洋館の立ち並んだ柳の蔭を二人は默して海岸の方へと行くのである。五十日も照りつめた夏の日が漸々曇つて、然かも未だ降り相もない、土ほこりの交つた空氣が、厭やに喉をからかす、頭の重い妙な天候で有る、

居留地に來た、黒烟の中に靜かに横つて居る軍艦、汽船、數多き和船など神戸港は一望の中に見える。

二人は多くの人前を通つて、東の方に唯だ一つあいて居たベンチに腰を下した。

「おつかれなすつたでせう。」「いゝえ」

二人は又沈默つて了つた、右手を後へ廻して兩足を出來る丈、前へ延ばして瞳を爪先に落して居た私は、一寸友の方を見た、沖の方を見て居た友は「何？」と云つて私を見かへした。其の眼には、何故か涙が光つて居た、私は又瞳を下した。昔懐しい悲しい樣な、恨めしい樣な種々の思が雲の樣に湧いて來る。

仲が好かつた、人は親友以上だと羨むだ、空想も語つた理想も話し合つた、遠い未來の前途迄も共に夢みた、夕陽の落ちた運動場を二人は手を取つて散歩した、美しい雲樣々の立たずまいを、唯感嘆の辭も出でず、眺め入りては同じ希望を語つて泣いた、感谷まつた凡べての情はいつも、美しい涙と成つて現はれて居た、あの時分は樂しかつた、それが何故……………私は又思つた、忘れ難い一事である。

本校の鐘がチン／＼／＼と鳴つた、あはたゞしい足音がして「速水樣。小司樣が一寸あなたにお目にかゝりたいつて……すみませんが病室迄來て下さいませな

私は本つゝみをかゝへて入口に立つた儘、其れを聞いた、反抗心がむら〳〵と起きて來る、何故か此の間迄廊下で出逢つてもプンと横を向いて取り合はなかつた友是れ見よがしに他の人と笑ひ興じて我れに當て付けた友、一昨日は見舞に行つても逢つても呉れなかつた友、誰がつ……と思ふと口惜し涙が込み上げて來る「最う本校の時間ですから……………」私は其の儘、登校した、後に心を引かされながら、氣味が好い。と冷笑にまぎらして。二時間の後、私は二階の裁場ノ窓から校門の有樣を見た、痩せた蒼白い友が車上から僅かに目禮した私は悔々した、今日歸る。其れ程迄に惡いとは知らなかつ



た、今朝のは?、どんな用だつたらうと色々惑ひ乍ら、お晝に歸つて見ると机の上に封筒がおいて有つた、懷しい友の筆跡、悲しい言葉の數々、わび事やら辨解やら、私は其の時何んなに思つたらう、今朝の冷遇を如何に悔いたらう私は直ぐ長い〳〵返書を送つた、其の後二人は又元の樣に激しい手紙の取りやりをした人のねたみを受けてお互の仲を裂かれて居たのに氣の付いた二人は、共に悟つて昔に歸へらうと急せつたからてある。

けれど二人の仲は其れから妙に隔りが出來た。手紙の上、言葉の上には何の蟠りも無いが、一度受けた心の傷は何日迄もいえぬ、相見て、相語

る毎に昔隔り無かりし頃を思つて悲しくなる、戀しくなる、從つて沈默する。卒業の年だつた、何うかして此の隔りを取り去らうとお互に思つたからで有らう、昔樂しかつた花摘みを、昔の場所で繰り反したが矢張駄目だつた、妙にお互の心中を讀む樣な心地がして。けれど隔りが有るとか、蟠りが有るとか、其んな事は一言も口外しなかつた、忌むべき其の頃の事を思ひ起さん事を恐れたからで有る、然かも二人の胸にはいつも其の頃の印象が强く／＼燒付けられて取れなかつた、今の物足りない友情を昔に返さう／＼と急せつて居る樣は二人の行の上に現はれる、私は友から直接にそんな事を訊いた事はないが、其行の上から判斷して、友も矢張私と同じ樣に歸らぬ昔を懷しむで居ると信ずるので有る。

卒業してから早三年になる、月日は流れ／＼て我等をも共に遷した、相見ての今日、友も變つた、私も老けた、互の胸に通ふものは昔の面影である、

「餅々、餅よろし。」二人の餅屋が前に立ち止まつた、二人は無言つて取り合はなかつた、餅屋は仕方なさ相に次の一團へと去つた。

「もう歸りませうか」私は先づ立つた、友は無言て立つた、二人は云ひ合した樣に涙の目を見合した、友は堪へ難い樣に私の手を固く握つた、そして其の手が漸つとゆるむだ時「お互に昔は子供でしたわねえ」と沈むだ聲でいつた、私は「其の子供の時分が懷しい」と云つた、二人は又無言になつて歩き出した。

（評）達者で、而も調つた筆だ、言はんと欲する所言盡さゞる無しと云ふ氣味がある。一度び傷けられた友情を、互ひに恢復せんと焦慮しつゝ、而も容易に恢復されない、其間の微細な心理が略ぼ遺憾無く現はされてゐる。

○波瀾（寫實）

伯耆國西伯郡大國村大字原　竹本春江

お父樣は今夜も御酒を召し上つてゐる。何か氣にそまぬ腹の立つことがあるとか、金錢の事で胸のおさまりのつかぬ時にかならず、自暴にお酒を召し上るのだ、から家の内が面白くない。

さつきからお婆樣はお小言をしきりに仰る。それがたんの藥にもなりはせぬけれど、親といふ權を笠に着てお父樣への意見で同じことを何度も／＼うるさいまで、はてはお母樣へ當りなさる。

もう仕方がないのだから、と云つた樣な、力のない、ぼんやりした顏をして、お母樣は戸棚の前でお汁をも

つていらつしやる。

それても今夜は御機嫌の佳い方て、お父樣はニコ〳〵笑ひながら中村の小父樣（お母樣の甥で近頃ずつと逗留してる人）を相手にしきりに熱を吐いてゐるてなさる。

「いや俺は偉いだらう、男だからな、瘦せて見えても渡庄太郎は立派な男じやからなハヽヽヽとし一杯つげ」盃になみ〳〵とうけて、其のまゝ下に置いて、「飛ぶ鳥は後を濁さず、立派にやつて見せるがなハ…」泣くのかと思ふ程なさけない聲で高らかに御笑ひなさる。

今夜はこのまゝてすめば佳いが、お婆樣のお言葉がお氣にさわつてはならぬもう大概て、とわたしは身がかたくなる樣な氣がして、癇德利を膝においたまゝ、まじまじとお父樣のお白髮を見つめたり、お母樣とお婆樣のお顏を見くらべたりはら〳〵してゐる。と、

「お酌は僕てもするからとうさんは外のお手傳でもしたら」と小父樣が氣の毒に思つたのかかう云つて、德利を取らうとすると、「ナアニ佳い」と忩がはしく手ておとめなさつて、「逃げるんじやないぞなア敏、夫の酒の相手の出來ぬ樣な女が何になる、夫がどんな苦しい思をしても酒に醉つても、同情もせぬ、頓着もせぬといふお前のお母樣の樣な女が何になる、役に立つか、ハヽヽヽ女とはいはれないだらう、なアそうじやないか策さん（小父）」と押へつける樣に云つて、ふつと橫に目をおむけなさつた。

お婆樣がお小言仰つた末に、「俺さへ居なくなつたら佳い、二人連れて俺を面到に思つて庄だつて酒を呑むんだから、もう俺は出てしまふから勝手にしてくれ」と仰つた、其の聲があんまり高かつたからてある。

「おつ母さんは何といふ事を仰るんて御座いませう、面到などゝは私夢にも思つてはをりませんに」、氣のよわいお母樣はもう聲をうるませてゐらつしやる。

お父樣は心持顏をしかめて、また大樣に「ハヽヽと笑つて、「はじめたか……俺が機嫌をよくしちよればお前達がはじめてくれる。よほど家は喧嘩神のお宿だナア……さく（お母樣）大概て默つてしまへ」と頓着せずにまたお酒を召しあがる。

お婆樣は裏座敷へ行つておしまひなさる、お母樣は部屋に這入つておしまいなさる、あゝこんなつまらぬ家が何處にあるのだらう。と思ふともう淚がとめどもなくあふれて、私は兩手て顏を蔽ふてハラ〳〵泣いた。

「困つたものだ」とお父様はしんみり小父様に仰つて、「馬鹿の寄合たこんなものだ、君にしてもこんな家庭てどうして暮らせる、主人の役目は中々骨の折れるものじや、きくもう大概てしまへ、いくら理屈がよくてもつまる處はお前の負けだ阿母さんはナ、俺の十口よりお前の一口が腹が立つそれがわからぬならお前も馬鹿」「馬鹿なだけ一層なさけなう御座いまして」、お母様は泣いてゐらしつた。慾目か知らぬけれど、今夜だつて決してお母様は悪るくはないと思ふ、お人の佳いお母様は佳い年をしてやはり若い嫁の様に肩をすくめて、そしてなんぞといへばいつでも滅亡を取つてしまひなさる。こんなことを思つたり、家の將來を思つたりするともう胸が一杯になる。



（天賞）スケッチ　牛込[illegible]野眞子

「だがな策さん、俺は昔からこんな自暴な酒呑男じやなかつた、俺の心を察してくれる人間は君の様な苦勞人でなくちやつまらぬ、俺はナ、若い折に、親爺が酒を呑んで歸つてな、必らず阿母を擲突く、傍で見てゐると親爺の心があわれてならなかつたナ君にや俺が心がわかるかい、、、可あいさうな人間だらう。」

ホロ／＼落涙して急に横を向いて、「よし俺は男だ情けない事は云はん、直（下男）酒をのめ、呑んで働らいてくれ、俺は何も知つちよる、かう見えても鬼じやないからな」なみ／＼と自分がついてやつて、「一息に呑んでしまへ、そして十一本買つて來い呑むんだ、ナア呑みあかすん

だ、愉快じやないか」

もじ〳〵しながら直は一升德利を持つて出て行つた、また今夜も安らかな思は出來ないだらう。明日一日歩るき廻つてお歸へると、お婆樣がくど〳〵お小言を仰る、お父樣がむつとして、ぶつ、ける、物をこわす、こんな悲劇が月に幾回となく繰り返へされる。かうした家に私は十五年の間育てゝ來られた、私は人並な女らしい須直な女といへるだらうか、と思ふとなんだか心からおそろしい氣がしてならぬ、只つた一人の兄樣は身をもちくづして、お父樣の勘當をうけて、この四五年の間何の音沙汰もない。

あゝ誰れの罪……誰れの罪に歸するてあらう?、私はかう考へるともう頭が眞暗になつてしまつて、何がなし涙がこぼれてならぬ。併し今夜私は心から　しみ〳〵お父樣の心がお氣の毒てならなかつた。

（評）家庭の不和から自暴酒を飲む父、それをどうする事も出來ぬ氣の弱い母、而して口喧しい祖母、さういふ間に育つた一少女の悲しい感想、主義は平凡だが、少女の目から見て描いた所に、人を動かす力がある。

○春の一日（入　賞）

山形縣　くしは子

母樣が町へ買物に行つた後で、自分は部屋に入つて、縫かけの長襦袢を縫ひ始めた、が、顔が熱つて詮樣がない、今日のやうな天氣には何時もかうだと、立つて桂窓の障子を明けたら、春先の冷々した風が、顔を撫てゝスーット入つて來た、ほんとに好い心地、自分は窓に凭れながら、不圖、部屋の中を見まはした、昨日出來て來た許りの提灯が三張り巴の紋鮮明に、古いのと一列に長押の釘に掛かつてるのが眼についた、といつか夢路を辿る心地て思ひに耽つた、

嫁、妻、何だか少しも自分には分らない、自分は此れて嫁に、妻になられるのかしら、嬉しいんだか、何だか譯が分りやしない、あゝもう、今日から八日目には、此家の人てないと思ふと、妙に悲しいやうでもある、でも、修藏は近郷切つての人物だからと、父樣がほめたのも覺えて居る、修樣は一人息子だから小姑も居ないしと、母樣がいつたのも、耳に殘つて居る、何だか幸福なやうだ、そうだ、それに、自分が女學校に居た時、修樣は中學だつた、どうかして道てても邂逅ふと妙に耻かしかつた、然し嬉しかつた、道を歩く時よくもし修樣に會つたら……、ても耻かしいと獨り莞爾したものだ、それから去年の秋、一年志願兵を終へて

歸國したときいた時自分は何故だか知らないがゆつくりしたやうな氣がした、いつかなんぞ自分が炬燵で雜誌を見てると兄樣に遊びに來た修樣は何を讀んでるつてそこえ來て炬燵に入つたので、周章て丶足を引込ました、今思ふとほんとにおかしい、そして修樣が床の間に積んであつた雜誌を、あつち見こつち見して散らしたまゝ出て行つた後で、自分はそれを一々丁寧に元の通りに片付けたてたが其時自分の胸には無限の歡樂が漲ぎつて居た、其後自分が出京を父樣に願つたのを修樣はききつけて、出京はさせぬ方がよからうつていつたとか、それも覺りは……、修樣は確かに自分を愛してる、自分は、自分も……あゝ自分は幸福なんだ。

ふと、姉樣つて呼ぶ聲が耳に入つた、振り返つて見たら、隣りの孝ちやんだ、向ふの繩代の畔に立つて、石油鑵を斬て敲いて雀を追つてたのだ、あのガンガンする音が聞えなかつたのかしらと不思議がつて見て、思ひ返して笑んだ、孝ちやんは畔をピヨコ／＼飛ぶやうに早足に傳つて來る、見るともなくをちこち見渡すと繩代には芽が生へて緑の瑠璃面のやう、明るい暖かさうな日光は廣い田畑一面を照らして居て其中に働いてる野良の歌や飛び狂ふ鳥の音は、如何にも長閑にきこえて來る、自分は心から滿足した、孝ちやんは柔かさうな新芽をふいた生垣の隙間を潛り手の土を拂ひながら窓際へ來て、姉樣、小川先生が今度東京へ行くことになつたから、遊びに來いつていへつたよと、平氣でいつてる、自分は驚いた、東京？、て問ひ返すと、ウム、何でも女の大學校へ入るんだと、と云ひ終つて孝ちやんはサツサと行つてしまつた、

あゝ口惜しい、あゝ如何しやうと思うと冷たい涙がいつか溢れてた、女學校に居た時は小川樣に等負けなかつたのに今からはもう乘越されるんだ、女子大學!!!、自分も一二度は親にも願つたが果さなかつた、あゝそれに今はもう動く事出來ぬ身だ、此小さな田舍村で一生を終へねばならぬのか、思へば一度は小川樣に自分も羨まれた身だ、否嫉まれたのだ、嫉まれて修樣の母樣に迄つまらぬ惡口をきかされた、修樣が歸國してからは遊びに來いつても一度も來ないし、自分をも來いなんて半口も云はなかつたのに今度出京するからつてわざ／＼いふてよこすとは隨分ひどい、暑中休暇等には如何に得意がつて踊るだらう、あゝ自分も一思ひに今夜あたり飛び出さうかしら、東京へさへ行けば苦學ても何でも出來る、そして成功する――と下坂を馳る

やうに思ひはそれからそれと移つてゐたがツト何かに突き當りでもしたかのやうに頭の工合が違つた、成功成功と繰り返して見た、頭は少し透き透きしたやうだが此の成功の語は甚だ曖昧で茫として居る、唯東京と云ふ事だけが心底に搖めいて居る、最後に自分は、小川樣が、墮落して呉れゝばいゝと、つぶやいてホツト氣づいて四圍を見まはした。

何となく頭が變ていけないから、大豆を一摑み前掛へ入て家の前へ出た、そしてそれを鳩にやりながら、考へるともなく考へ込でると、何處からか馬蹄の音が微かに夢のやうに耳に入つて來る、……と暫らくしてからそこに現れた馬上の人は修樣である、修樣はヒラリと馬から下りた、と思ふと、自分の傍へ來て、俊さん、何故そんなに沈んで居るてす、と、聲は低いが曾て覺えぬつよい響を胸に與へた、自分はやつとのことと何てもないと答へた、そして修樣が玄關へ入るのを待つて後から急いて部屋に歸り、思ふ存分泣いた、そしてどんな事が起つても修樣にゆかうと决心した。

（評）愛する男と結婚する其喜びと、友なる女が更に東都に出て高等の學を修めると云ふのに對する羨望心と、如何にも女學校卒業後間も無き娘には有りさうな事だ。友なる女が東京へ出て墮落すれば可いと思ふのも、女性には有りさうな感情だ。

【秀逸】

○茅屋

三河　病葉子

此の頃の天氣は朝雨、晝曇り、夕方ぼろ〳〵と降りて夜は滿天の星。何時なれば疾くにカラ〳〵になつて落ち初めるべき桑の葉が、雨の多い故、何所も彼所も誠い綠の芽を吹いて思ひの儘にのびた。桑が安價な上に怎うせ落ちる葉だと云ふので、日頃は腹の小さい百姓が、蠶を張込む事は實に案外な位だ。是れて調子がうまく行けば言ふ所は無いのだが、濕氣の爲めに馴れぬ飼手達が頻々として失敗る。手馴れた飼手でも枚數を多く扱ふものは左樣は手が行屆かぬから、餘り好成績は得ぬ樣子だ。

おいわの家は今年始めて蠶を飼つた。春蠶の調子がよかつたので、其れからすつかり氣乗りがして、風穴も是れて二回目である。六疊と八疊の二間を通して棚を組んで、母とおいわと妹のおぎんと三人で飼つてゐたのだが、四日ばかり前から母が流行の下痢に罹つて寐てゐるので、二人は目の廻る樣な忙しさである。加之蠶が三度目の眠を起きる頃から死蠶が澤山出來るので、二人は首を鳩めては怎うしたらよからうと殆途方に暮

れてゐる。
今日は朝から雨が降り續く。風が吹き添はつて、井戸端の大きなよく茂つた柿の木がざわ〳〵と鳴つて、それへ雨が畑の樣に頻吹く。西裏の庇際には白芙蓉が美事に咲いて、苔の生えた滑な地面へ、花瓣が思ひ出した樣に落ちる。三畝ばかりの屋敷畑の葱は太く濃い緑色に膨んでゐるが、是れも母の病氣の爲めに手附ずに其儘になつてゐる。



（地賞）しるこ　三重　加藤つたへ

一昨年の、父が熱病で死んでから、母は病氣と云へば直ぐ熱病を聯想した。而して病氣よりは寧ろ氣を病む樣になつた。這麼風だから醫師に診察して貰ふ事は出來得る限り避けた。傳染病と名をつけられて、避病院へ這入るのが恐いのだ。
　母の寐てゐるのは臺所の隣りの常に寐室にあてゝゐる六疊の間で、古い蒲莚を敷いて、ぼろ布團を幾枚も重ね、枕を高くして、顏を半埋めて寐てゐる。枕元に

は賣藥の飲みがらが散亂つて、煎茶々碗と土瓶とが其のわきに置かれ、背戸裏の窓格子から頻吹き込む雨の爲めに其の邊が一躰に黴びてどけ臭い。

母は今ね夫の看病をして避病院にゐた頃の事を思ひ出した。洋燈の火に照らされて、布團を撥ね除けたやつれた夫の寐姿が目に浮ぶ。突然囈語を言ひ出す。賺せども〳〵又言ふ。其のうちにすや〳〵と眠る。窓を開くと星月夜の薄暗が、遠く〳〵果てしない。蟀が寒さうにほろ〳〵と鳴く。夜が段々更けてお宮の森で狐の叫ぶ聲が聞える。悽い。淋しい。自分が避病院へ還入つたら怎うしようと思つた。おいわが看病に來れば百姓をするのはおぎん一人だ。畑は荒れる。秋が來ても稻を苅る人は無い。屋敷畑の葱も賣らねばならぬ。蠶もだん〳〵大きくなる。

急に氣がいら〳〵しだして、頭を擧げたが、足が拔けさうに疲れてゐるので、がつかりして、

「おいわ、おいわ。」と力無い聲でよんだ。目には淚がにじんでゐる。

「えゝ。」と返事をして隔の障子を開けておいわが入つて來た。

「足が怠惰くて〳〵仕方が無いに、おしや鳥渡さすつて呉れよう。」

おいわは母の後へ廻り横から布團の中へ手を入れて擦つてゐる。

「おいわやい、俺熱病じやないらかなあ。」

「お母はそんな事ばつかり思つてゐるもんだい――それもお前一人きり悪いならだけど、流行病て、新屋のお父も十日も前から病くて未だ全癒せんと云ふだし

「俺夫れてもお父の樣になつたら怎うせえと思つてな

「お母は病むと直きお父の事を言ひ出しちや氣を病んて居るもんだい癒りが遲い。勢を出して藥を飮んで早く治らんて怎うせえ。勇樣でも賴んて採んて貰つてみるかへ。」

「晝間ても居るらかなあ。」

「居らにや晩にても來て貰ふ樣に吟さあに賴みにやらせえ。」と云つて、「お吟やい、ぎんさあやい。」と大聲で呼ぶ。おぎんは軒端で蠶糞を片づけてゐたが、「えゝ」と返事をする。

「お前なあ、北側の勇樣の所へ行つて、閑は無からあかてつて聞いて來て呉れよう。」

それからおぎんは井手端で釣竿をバタ〳〵言はせて手を洗つて、下駄を高いのに穿き變へると、いそ〳〵

と出て行つた。が間も無く歸つて來て、「今は暇が無いが三時頃になれば手が空くから行つてやると言つてをつた。」と言つた。

　四時頃、勇樣がてく〳〵やつて來た。勇樣は今年七十だ。耳が極く遠いので、おいわが通辯をやつてゐる揉み乍ら、

「是れやいかん。身躰がどだい疲れてゐる。」

「何所が惡いずらのん。」と病人が云ふとおいわが、「何處が病いづらのん。」と大聲てきく。



（人試）桃の節句　神田　白井洋奈子

「何所も彼も惡い。良所は一所も無い。もう幾日か惡いのかへ。」

「五日ばか前からだがのん。」

「足はしびれやあせんか。」

「しびれやせんけど、怠氣て〳〵て仕方が無い。病付く二日ばか前から怠惰くて〳〵仕方が無いのを、無理をして草を取つたので、那れが障つたかとも思へるだがのん。」「それだて不可。そんな事をしたて不可。」

「下痢るて躰が弱るじやないらか。」
「下痢？下痢る？」
「下痢のを止める事あ出來んらかのん。」
「止めちや不可。未だ腹の中にあるて出して了はにや不可。」と言ひ放つてぐツ〳〵揉んでゐる、病人は痛さうな顔をしてゐる。
「食物は怎うづらのん。食べても佳いらか。」
「食べちや不可。癒るまで食べちやいかん。」
それから何所の娘は肺病だが、駄目だ。怎うかして治してやらあと思つたが長持はせぬなんか云つて、終に「是れて今夜は怎うて樂になる。」と云つて立ちかけたので、おいわは慌てゝ呼び止めて、
「御氣毒だが明日朝もう一度來てお呉れませんか。」と耳へ口をよせて言ふ。
「よし、よし。」と言つて出て行つた。
「あゝ樂になつた。」と病人は言つてゐる。
勇様の歸つた後て、お吟は紐の長い籠を肩にかけ桑摘に出て行つた。雨は疾くに晴つて珍らしく西日がさしてゐる。おいわは表口の障子を開けて、
「おや晴れるのださうな。」と言つたが、病人が
「此頃の天氣は當にならんて、鳥渡ても晴間があつたら摘めるだけ摘んで置かんと不可ぞ。」と云つたので、
「それぢや俺も行つて來う。」と大きな籠を背負つて出て行つた。
外へ出ると、野は何所も彼所も桑を摘む人ばかりだ。

（評）老母の病んで身動きならぬ躰てゐながら、養蠶やら家計やらてヤキモキしてゐる苛々した心持が能く出てゐる。家の中の暗い死の影に對照して、桑の青々と伸びまさる自然の活々しさとが妙に心を動かす。或ひは男の筆ならんか。

○長屋（上）

大阪　西戸政江子

日傭の仙吉と云ふ人の女房ださうな、頭にブツ〳〵と吹出物を一ぱい出來かした二歳ばかりのワア〳〵と八釜しく泣く子を抱いて賺かして居たがフト向ふの方を見て吃驚したやうに家の內へ這入つた。家と云ふても僅か六疊一と間狹い土間ては何を炊いて居るのか臭い醬油の焦げつく匂が鼻をつく。
誰れが來たのだらうと見ると差配の主婦さんだ、お歲暮ても持つて行たのか一寸した着物を着て居る、あはてゝ這入つたお女房さんの家の前をフヽンと嘲笑ふやうに行き過ぎて共同井戸の前の自分の家へ這入りかけたが一寸後戻りして釣瓶の輪の切れたのを見て、まあ誰れがこんなに切つたんだらう、先日新調へた

ばかりじやないか」と大きな聲で怒鳴つた、するとその聲を聞きつけて飛んで出て來たのはいつもよく、主婦さんと口の合ふおさくと云ふ後家さんだ、總髪あみをやつて居る、一日に七十錢位ひは樂に儲けると云ふてはいつも自慢して居る女だ、

パケツ持つて來たが、

「おや〳〵まあちやんと切れてますわね、今朝妾の汲んだときはどうもなつてなかつたのに、妾しや今日水汲むのは之れて二編目だわ」勿躰さうに兩手て釣瓶を持つて仔細らしう、

「まあ誰れが切つたんてせう」

「ほんとに、こう切られちや、差配だつて堪りませんや」これ御覽、まだ新らしいのてすがな」

と未だ誰れか出て來ないかとあたりを見まはしたがあたり五軒――長屋――からは誰れ一人出て來ないつい井戸の前の家て今までピーピーと珠數引きながら呑氣さうに新内語つておつたのもいつの間にか止んてコトとの音もしない、

「そうてすともなんぼ大家さんだつて堪りませんわね自分のものを使ふ心てやつたら可いのてすけれどねやつぱり人様のものだと思ふとつい手荒ふ使ふんてすよ」と合槌を打つ、

「五月蠅い〳〵ほんとに五十錢や一圓位の家賃なんか一度清潔法てもやつたら直き、飛んて去つて仕まいます、何が五月蠅いつて大家程うるさいものつてありませんよ」と大きな聲てあたりに聞えよがしに言つていたが忽ち邊りに米のこぼれて居るのを見ると、

「まあ〳〵勿躰ない、おさくさん御覽、こんなにお米をこぼしてさ、こんな仕末だからいつまでもお金が出來ないんだよ、勿躰ない」と捨臺詞て家へ這入つて去たが暫くすると着物を着更へて、笊を持つて來て一粒殘らず拾ふた、鳥にやるのだと獨言して居た。

(下)

隣の家!、それはやつぱり五軒長屋のうちの一軒てある、仲仕の頭して居る者だとか、腕白盛りの子供が二人まてある、母親と云ふのは三十五だと云ふが子宮が惡いとかてろく〳〵門口へも出ない、全く長屋のうちても顏を見合すのは五日に一度位てださうな、それて子供には大變甘いのだからどんなに烈う戯ふが小言も言はない、今日もそれだ、近所の腕白共が集まつて來て滊車の遊びらしい、東京行き――それは急行だなど、ドタンバタンと八釜しく戯ぐ、とき〳〵障子て

も折れたかと思ふやうな音をさす、床板も拔けさうだ「また〳〵」とお神さんは隣りとの境界の壁を白眼んだが「ね貴方一度そう言いなさいよ、疊もなにもかも臺なしさ、之れやて子供のある人は止しなさいつて云つたんですよ」かみつくやうに言ふ。

差配の主人と云ふのは脊の低い頭のツルリとはげた人の好い老爺さんて近所では佛の太藏さんと云ふて居る、

「再たか、そんなに怒らなくてもいゝじやないか」となだめるやうに「そりや貸しておく家だもの一寸位は我慢せなお前」と眼鏡越しに一寸お神さんを見やつたゞけそのまゝ小說に眼をうつす、

お主婦さんは暫く呆れたやうにお爺さんの顏を眺めておつたが、

「貴方がそんな事云ふて默つて居るからあんなに增長するんですよ、貴方は一寸もそこら歩かんのでわかりませんけれどあの表の障子かつて棧は二三本折つてあるし疊のへりと云ふたら滿足なのは一枚もありませんし一昨日は一昨日て溝板を打ち破るし、眞とに子供のある人は五十錢位家賃が高ふても有難う御座いませんよ」呑みさしの茶を自暴にザブリと庭に放ながら、

「それも、みんな貴方が音無しいからですよ、妾一人が八釜しく云つて憎まれて居るんですよ、馬鹿〳〵しいつて自分の家を貸しておいて遠慮して居るなんてこんなつまらんことがありますか」と膝を進めてつめよつたが、老爺さんが相變らず默つて小說を讀んで居るので拍子拔けしたやうに未だ口の中でくど〳〵云ひながら茶器を片付けて居た、いつの間にか汽車ごつこも止んだ、今度は裏へ出て一ひ二ふと繩飛びが始まつた

ツカ〳〵と立つたお神さんはガラリ障子を開けて、

「その花畑へ這入つたら不可ませんよ、もつとそつちの廣い處て遊て」と叫ぶ、お爺さんは一寸見かへつたゞけ亦小說を讀みつゞける、

* * * *

「まあ裏から出まして御免下さい、」後家のおさくさんがやつて來た、すしをこしらへたからと小鉢に盛つて來たのだ。

(評)裏長屋の小さな差配夫婦の生活、それを寫したと云ふまでゝ、小說として取扱ふには如何かと思はれる。

〇友の問

石川　むらさき女

（上）

私の今、友の卷山樣と二人て學校內の柔かい草を踏

んで、遊動圓木のぼう／＼と地の下にゐる惡魔の唸りの樣な響を聞きつゝ色々と語つた。巻山樣は快活な、調子のよい、お話の仕方の方で、今年十八で私とは一つ上なのである。裏の淋しい方へ廻ると、やはり同級生の秋田樣が獨りで草をつんだりなんかして、いらつしやる。何とはなしに私と巻山樣とは、顏を見合した秋田樣は、私と同じ年で細面の口のきりつと、締つた髮の眞黑い方で、級一番の縹緻よしなのです。けれども、何時も晴々しい快發な動作はなく、いつも憂へに沈んでゐる樣である。或級の惡口家は「海棠の雨に惱める風情ありと云ふ樣に、見せる爲よ。」と云つたが、そんな事ではなく、實際これは原因がある。私は平生から氣の毒に思つてゐるので、傍を通る時に「秋田樣何してゐらつしやるの。」と聲をかけると、につこり笑つて「草とつてゐますのよ。」と下目を使つて云ふ。私は又云はふとしたら巻山樣が袂を引張るので、默まつて此方へきて「どうして？。」と問ふと「級のだれか見て居ると不可じやありませんか。秋田樣はお可愛想だけど、私から云へばあんなに煩悶計りしてゐたつて仕方がないわ。自分でよく考へて見なくちやね。貴方はさうは思はないこと？。」「でもあの境遇が私ならやつぱし煩悶も懊惱もすることよ。」「まあ…私ならそんなつまらない事しないわ。あんなに苦しい思をしてゐてやつぱし活てゐたいかしら。私なら…一思ひに自殺するわ。…幾分か親へのあてつけに…。」私は「まあ。」と驚くと平氣で「ホ…吃驚して？私ほんとに秋田樣が齒痒くてならないことよ。」といふ。私は巻山樣は年こそいつとれまだ小兒の樣だ。それよりも深閨に育つた秋田樣の方が、余程世の中を知つてると思つた。私は此四月程前に、此學校へ轉じてきたのだが其當時は皆遊んでくれたけど、暫らく立つとあまり遊んで吳れなかつたが、其時隣の机が秋田樣であつた。何でもよく親切に教へて下さるので一月程は此方と遊んで居た。すると外の御友達は妙に口元と目の邊とに嘲りの色を浮べて笑つて行く。私は失敬な方だと思つて秋田樣を見たら、ほつと息をして下を向いてゐらつしやる。それから日を經るに從つて、ます／＼不思議は增るばかりであつた。其後今の巻山樣と親しくなつたが。巻山樣は其時、秋田樣の事を皆話して下すつたので私の不思議はすつかりとけた。そして「あまりあの方と遊んでる所を級の人に見つけられると不可から可成表向て遊ばない樣にね。あの方には氣の毒だけど

ど。」と注意されたから、お可愛想だつたが學校內ではあまり言葉も交さず併し家へはちよい〳〵行つてゐる。其譯とはかうなのである。秋田樣の家は當市きつての物持てあるが其お母樣と云ふのは、元下町の古金買の娘てあつたのが、緻量がよい爲まだ年若い頃秋田家へ後妻にきたのてある。それから八月目に女の子を產んだ。これが秋田樣てある。所が皆他の人の種だと云つた。それが傳へ〳〵て十七になつた此年まで云つて居つて學校內でも知らぬ人がない位だと云ふ事なのてあるそれて秋田樣に誰れも交つて、呉れる人がなく、自身は又いつも心は苦痛ばかりを受てるのだときいた。

（下）

私は此間から酷く感冒を病つたので、殆一月余り缺席した。醫師はもう出てもよいと云ふので、今日學校へ出てきて先驚いた事は、卷山樣の變つたことてある。今までの快活の風はどこへやら私が「卷山樣お早う。此間はわざ〳〵お見舞下すつてありがたう。」といつたらいつもなら飛ついてきて「まあお治りなすつたの。おめてたう。あのね貴女のいらつしやらない中にね。こんな事があつてよ。」といろ〳〵話して下さるのに今日は「まアよくおなりになりましたの。結構てすこと。」と妙に沈んだ力のない聲で仰しやる。拍子拔したが氣がついて「貴方どうかして。」と覗き込むと「いゝえ。」と答へられたが、眼には早涙が見えたので、吃驚して「エ……エどうして。」と隅の方へつれてつて云ふと、とう〳〵しやくり泣出したが「すみ子樣。堪忍して頂戴ね。わ……私自殺しようと思つても……どうしても出來ないことよ。」と云つて又咽ばれるので、私もおど〳〵になつて「卷山樣！そりや何云ふの。エ……自殺しようと思ふなんて何云ふの。エ……。」「……いつかも私、秋田樣を齒痒いといつたが今しや私がはがゆくて仕方がないけど……あゝ……もう聞いて下さるなね。」私は略わかりました。そして色々慰めたがそれきりお互の交りは、いつとなく絕えてしまつた。

＊　＊　＊　＊　＊

此頃學校でも何處でも卷山樣と、秋田樣とは大層仲よく、いつても二人て遊んでゐらつしやるが、其と同時に卷山樣のおかしな噂は校內に擴がり今は、秋田樣と同じく誰れも知らないものがない樣になつた。きけば卷山樣の家は藝者屋とやら……

（評）卷山なる女生が身親ら藝者屋の子でありながら、生れを人が知らぬからと云つて、最初薄命なる秋田を疎外するが如き態度あるは如何。寧ろ最初より秋田に同情すべきならずや。

新體詩

横瀬夜雨選



○規定　題意も材料も律格も凡て自由なり要するに眞情を歌へば可なり三十行を越ゆるべからず一行には一句以上を書くべからず凡て振假名をつけること字體は明瞭を要す乙種の賞を送呈す

○大つごもり（天賞）

信濃　太田喜志子

夢につゝまむ一年を今長々し尾に曳きて、
不安、かなしび、色にして
うつむき歩む人みなを
わづかに光らす暮の日よ。
かなたにははる〲と
みそらに高き枯木林
そを透ける白き秀嶺。
白壁多き人里に燈火はつけど
一またゝきもをやみなき
力にゆるゝ下つ界の
雲にかくるゝ新月に
とけ入らむ吾が心。
ゆきつまりたる現今
かへり見る憂きいく日よ、
（春の清水はいたづらに、あらぬ野
の面をゆきめぐり、苦き花咲く根
を浸し、根を浸してはかわきしか、
のこれる溜水は覺醒てふ、氷とこ
そはなりにけれ。）
また眞暗なるも人みなの
「明日を待つ」といふその「明日も」
かはりはなけむくれし一日と
……？……。
なまじひ人の血を享つ故、
若きをほこる執着よ、
あゝ今、
くれ逝く年のいたゞきに居て
凍みたる大地にひざまづき、
目まひくるへるわが姿。
せめては——せめては——すがらん
かな、
萬代不朽ぬ生命なる、
崇嚴き天の秀つ嶺に。

「夢につゝまむ一年を長き尾に曳きてわづかに照らす暮れの日よ」落想例によりて抜群なり。漏刻の水は盡くればまた盛るべしタイムの流れは回らすべからず、わがよはひはまた一回の春をかされて二十の月の眉はふくれど、笄を加ふべき日は近づき來る君が涙の何ぞけうとき。

○路（地賞）

名古屋　八代やへ子

吾路の行きがゝり
かゝげ持ちたる白臘の
光の命の極み
強く映ゆるたまゆらに
ふと反省る春の路

闇に葬れる過去の象
近き足址は鮮やかなれど
平穩やかなる趾にあらず
躓かんとしたる礫は
灯火に避けて來ぬ
岐道に反れんとしたる
塊の惑ひ、其時
正道を明るく照しけり
消ゆるか――白光の命運の終り
暗き闇路を行く故に
細流の嘲笑み
森の囁き
星は輝きて在りて知れど
仰ぎ視むに心臆して
此の路ゆけと人の敎へたる
其路はいづ地に到着くべき
塊はめさめて頻りに疑ふ
ゆく手はいづれ――此道は
星のみちびき、暗き運命や

山田邦子の詩に蠟燭の火かゝげて階段を上りゆくといふがありき、君一步おくれたらずや。されど、暗に葬れる足あとのあざやかなる、星を仰がんとして心おくるといふあたりの銳きさすがによろこぶべし。

冬の沼（入賞）

鶴町　秋はぎ

我胸は　冬の涸れ沼
氷こそ　草を捕りつれ
初秋の　おとづれに
おどろきて　昨日にも似ぬ。
散り易き　春の花
束の間の　浮夢覺まされて
寂寥に　泣く少女あらば
その無邪氣心　なつかし。
冬の湖とこしへに　靜寂なれ
氷溶かす　日光のさしてまば
またしても　浪やたつらむ
さゞなみの　よせては返す
波動さへ　堪へかねるもの
胸の湖　湧き煮るまで――
――かくて身をやきつくすならねば
凍りてとこしへに　しづかなれかし

おもふ、わが心は冬の涸れ沼――涙こほり情冷えてまた人の棹さすなゆるさず、わが身は靜かなる沼のうすらひ――ふたゝび春の日に溶けて光と共に消えんもつらし。されどわが世はあまりに寂しくわが血はあまりに紅なり情に奔りて情に慰められず、理に求めて理に安んぜず、かぎりなき哀しみをいだいてひとりをこの天地間に守るのみああ破れたる心よ君も亦。

【秀逸】

○朝寢髮

R

ともすれば、夢なる人の影を追ひ、暗きに沈み泣くわれを、可憐と胸にかき抱き、亂れもつれし黑髮に、友は薔薇の簪を、かざして美しとすかせども。

北の野に、巣を遺れ來し雁の、聲先づ落つる鳥海潟、貝がら放る磯風は、朝明の鬢を吹きちらし、涙に濡れしわが頰をも、白く、冷く冷し去る。

趾みな、前に對へる濱千鳥、千鳥ちがひに跡つけて、浪に追はれては飛び立てど、十二月九日失ひし、心靈を大海に求むれば
秋は潮の淼漫と
いとせめて夢に落
としゝべにうばら
かざしの花の香は
すとも、雪解の水
に梳く髪を、結ば
て長く背に垂らし
誇らむものを君が
秘め妻

「評、M君にたのむ」とあつて外に一言もない、厄介な選者だが、それだけて評にもならぬから一言を附加へる、覺めんとする人の嘆きの聲て、懐さと、つやゝかさとが交つてゐる、激してゐても黒髮の姿を惜しむ處女の風情は流石に 詩を知る人だと想はしめる、何にしても藝術を愛する者は何處か、別天地を持つてゐなければならぬ、醉茗記

○冬の日

丹波　坂根　竹野

あゝ、此小さい丹波の平原に
私は終るんだ。と思ひながら窓をあ
けた。
夕方、日は斜に赤黒い土の上へ
弱い光りを投げてゐる。
人が通る。うす赤い冬の日を浴びて
とぼ〳〵と、別に
好い着物を着るて
もなし、
霸氣のない、まづ
い顔して行く。
何處へ行くのか、
彼等は他人だ。關
係のない人だ。
他の人は妾が死ん
だ後でも、
あゝして入り變つ
て歩いてるんだ。



バラの香　常陸　増尾せい子

冬の山里、平和の山里、
白い雲が南へ行く。
むつちりと厚みのある雲が、
一團、また一團、後から〳〵と、

追つかけあひする樣に、たのしげに、
飛んで行く。

此所いらには風はない。それに、
雲は動く。やつぱり何處かに、
野分が吹いてるだらうか。

「やつぱり何處かに野分が吹いてるだらうか」これを試みに文章體になほさうとすれば「風はいつこを渡るらむ」ては間に合はないし、「空をのみ風は行くらむ」てもどこか拔けてゐる。これはどうしても口語體の領分だ。たゞし此作者の口つきは領分には無い。

○かけ巣

茨城　若杉とり子

「山にサの字の帆をあげて……」
深き夜のしゞまを破る淫聲は
米積んで通る舟子ならし
「お江戸下りの女郎衆さよ」
雪が降るらむ櫓の音の
川にひゞいてころりからり
渡良瀬の川杙の

新體詩

うつろに鳥の巣を見つけし
十三の秋の末より
戀ひそめしわが君も
二年目には聲低う
ざれうたを口にしたまひし
唄はるゝ戀は醜し
わが戀は永劫に
聲も無く影もなし。

まくらかの古河の姫桃ふふめるをいまだ見ねどもわれ戀ひにけり。渡良瀬川の堤を行き行きて杙の上にふと見つけけん鳥の巣は、かはせみか鴫か名は知らず、鳥の子はやがて巣をはなれて空を行けど、かなしいかなわれ等は行くにところなし。

○里

大坂　木村春江子

光とやそれはたまゆらの
おもひに殘る何の影――
華とやそれはまぼろしの
誰がかざしける戀し花――
白山おろし伴ふ雁の
あとを追ひ來し燕
西へ東へ流れゆく
雲の白さも隱るまで
煤のむらがる大坂や
東横堀舟は通へど
浮世の海
みどりは水の色にして
母の手離れし十六より
のりて來し舟路はわれにつらかりき
古りにし夢を浪に問へども
はなやぎぶりのおもひでもなう
やつれにけり病みてより
秋の木の葉とぬばたまの
毛もまれ〳〵に落つるまで
好める詩集を手にしつゝ
南の窓によりそへば
大和はたたなはる青垣山
母在す空は――

病んでは父無く兄なく。夫なし惝然として南の窓に佇みて母すむ大和の空にながめする、あはれむべき新人なるかな。

○野の光

神田　田中　英子

華やげる彩雲は――東に、――靈峰遊ぶ夜をくぎりて、白き光は、――母なき子らの父の如、愛情從る丶目をあげて、去年のまゝなる野を射りぬ。病葉や醜花や、水々くしのぞみに生きぬ。あゝ萬象漸に活に入る、――そが中を、――目映ゆげに日を避けて、――つし誰が手に摘まるらん――紅の毒草は

たよ／＼と憂れはしげ頂低れてひとり世にそむきて立てる仇姿を白き日はほゝ笑みてのぞき居ぬ。

毒草と斷つたのが惜い。「紅の一本花は」とように首ひさしててもおくと、つよく人の目をひいて、長い記憶をのこしたらうもの

○霜の朝

熊本　近野　春子

空は濃き藍色にして
雲も無き冬の
一朝
ふとたどる村
の細道――爪
先上り
道沿の草伏し
て居ぬ、
昨日見し泥濘
の
霜寒う氷て殘
る土深き轍の
跡や
はた痛ましう
破れつる鞋
しどろなる駒
の蹄跡も
たゞ白く氷てこそ見ゆれ、



花實　　小樽　　鈴木とみ子

散れる藁索屑縄切れ
眞白にぞ細かく置ける——霜の華、
太陽は今し丘に上りて
顧る下手の艸屋根
雀五羽ふくらみて見ゆ
燦らかに銀砂の野邊や
薄紫の靄ぞ漂ふ。

氷といふ言葉を「氷て」とはたらかすほどの才ありながら、かな遣のめ茶なのはどうしたものか。氷てを氷りてと一しよくたにしたのなら論外だ。

○暗の花

島根　鈴木さなへ

悲鳴よあはれ、何處より
木枯の音を運ぶらむ。
如何に小鳥の聲の色。
玉の生命の夢や絶つ。
細白絲の一條ぞ
切れむといまか、打ち震ひ。
はた我れは泣く、神經の
暗き知覺の刄の上に——
良藥かあふ、悔の夢
夢と味ふ、いと苦き
生命の果に、死の前に、
我が想こそ消ゆ可しや。
ほのかに鳥の、聲止みて
雲の碧に開きしは、闇の華なり。

まじめなる人とおぼし、主はつれに君と共にあり、觸るる勿れ。

○冬木立

土佐　むら　さき

「秘」を包む天使の霧の
ことにふれて怒し夜より
魔神を呼びぬ——榮枝のそのゝき。
其夜より——
平和の光り翠に出てし
木の葉〳〵を
息荒く、欽む音しぬ。
焰にふれしは、赤く焦げぬ。
もれし葉は、冷さ
太息にちぎれて飛びぬ。
榮えし太枝はた小枝
怒に狂ふ鉄にふれて——
さあらぬは焰にふれて——
ホキ〳〵と。
かくて——又「秘」を包めとて
み使の——降り來る白雪。

「秘」とは何ぞや。

○雪に放ちし鼠

徳島　おふく子

金網にかゝりし盗賊の
命を乞ひて雪の朝
靜けき道に放ちけり
もてる運命の哀れさよ
再び人の住む家に
鼠よかまへて宿るなと
見やるに雪を渡りつゝ
彼方の家に入りにけり

空に地にも幸おほき
鳥さへ雪の積る日は
餌に苦しまん過てり
屋根裏、溝に巣をくめる
悲しや汝は獸子なり、
花の衣の美はしき
鳥は快樂にあくものを
醜き生れ夜半に出て
食物をあさると飢ゑがちに
危きわざも活きんため
鳥とけもの丶差をば
吾しばらくは問はざらん
人と人との其間に
とけぬ別ちを思ひては
門に塊れて嘆くかな

「文庫」にあつたやうに思ふ、創作なら傑れたものだが、おふく子といふもばかな名だ。

○からびた心

福島　村井　野の花

胸のそこの底に
暖かい或物をいだいて
それに向つて行かうとしたが——
とてもだめだつた、
現實と云ふ暗い幕があつたのだもの
押しのけても〳〵、——
又すつと寄つてくる、
どうしても出られないと思ふと
髪ても、どこても
かきむしりたい程狂はしくなる、
ふと、幕の中てうよ〳〵と
笑つて騷いて居る人達を見ると、
あてどなくねめつけられ
冷たい微笑が脣に浮んでくる。

幕の中にうようよしてる人を、どうしてあなたは見たらう、その矢へ「あてどなく」とおつしやつたぢやないか。

○生のうづき

土佐　大和田しづ子

あな寂しこは闇の底
ゆきかよふ蟲物の
跫音か聲かいとかすか
傳ひくる怪の響
森々と夜は更けて
耳なりのそよぞしう
現なの魂の
夢はみる胸の洞
影としもなき物の影
いや淋し目に浮くは
過去と現在の經ぐみに
悔恨と恐怖のひのはしり
織りなせる
こや凹凸の布のあや
想は走するくらがりの
生は獸せり
ほくそ笑みあな歷然に
誘惑や冥府の醜女等
死の扉のこや近う——
あゝ絶間なき胸の波
眞洞の闇にねむられず
恐怖の夜着にくるまつて
生のうづきに身ぞ顫ふ

自分のいつも取扱に苦しむのはこの種の人の詩である、上手かと思ふと十も二十も字が違つてゐる上に「天ざゝ雲」のようなべら棒な文句も使つてある。

○物のかげ

福岡　宮永朗子

冬の日の靜かな
萬象は死んだのだかと
思はれる、其の晩方
妾は窓によつて
淋しい冷たい外面を見て居る。
恐ろしい物の影が
庭にうろ〱たゞずんで
居るかのやう。
室内はほのぐらくて
冷たい靜寂ないやな氣がみちて居る
恐ろしい物の影は
我が身をおそつてくるかのやう
ぞつとする、
ひし〱と眼にうつる死の影情の火
驚いて窓ひきよせて、
机の上のマッチをとつて
パッと洋燈に火をつけた
光りに恐ろしい物の影はきえた。

「ゐるかのよう」「くるかのよう」下手な小説をよまされたようで氣もちが悪い。

○曙の海

福島　鈴木須枝子

冬もなかば。
低く漲める雲破り
東の海はいま曙。
紫にはた紅に
薄るゝ雲のおの〱
流れながれてまた澱みては
風もなき渚も響ゆるぶるに
ひとり汀うちさまよふ。
われこそはかの朝日の如よ
蔽へる雲を砕きてし
燃え〱て上る朝日よ
しかすがに砕きし雲の
またやつどひて——
行手あやぶむ。
濃藍の海の面は　忽ちに
紅散らし金蛇ぞ走る。
胸内に小舟浮べて
東の國に向はなむ
東の國は幸の國。

しがしの國に向はなん、しがしの國は幸の國、鈴木末造といふ師範校の生徒が鈴木須枝子となのるだけては振つてゐる。

○白百合

神奈川　小林英子

怒濤逆まく鷲が淵に
臨み聳ゆる大巌の
上に匂へる一輪や
清く妙なる白百合の
花に憬れ香にあひて
われはのぼりぬ岩をよぢ
苔にすがりつ草の根を
引きてのぼりて其花に
わが手かゝりし瞬間に
足はすべりぬ岩崩れ
すがる苔の根また切れて
迸ばしる血に染む花と
われは沈みぬ。千尋の海に

○春の日

加藤　爲子

快樂のみち〱し春なれば目の色のかゞやきて
ともすれば頰に出づほゝ笑みの
若き血は天地の胸に湧く嬉き日や。
今こそと世に出てし若き木は其の丈も延びたり
な幼くてかくれたる嫩葉は——

さみどりに萌え出てゝ、希望てふ紅　の花咲きに
けり。

日の照りぬうら／＼と風吹かやなまぬ　ろう風■
をさゆらぎてそと響くもの
ゝ音を
笑みもせておづ／＼とうな
だるゝ春の日の恥ぢ姿。

華やかの春の日よ榮多きう
まし香にゆめ心地
えしらずの誇りをぞ覺えぬ
る――
わが頬のほゝ笑みやこの僅
に若き日の長かれな。

○夜の恐

下谷　細谷鏡子

髙欲は寂しらに夜の扉鎖さ
しぬ、
その刹那、
うるほへる病寃の瞳
ひた／＼と身に迫る、
あこがれの清夢のごと、
やみし身の苦しさも忘れ、
ふら／＼とよろめきて暗黒
の中に、
焦らだてば希望の光
そを追はゞ、
あゝされどかなしき運命の我ぞ、
つかれ果てし魂は時針刻む音の如
刻々と離れ行く暗の國へ、
我十八、若き血潮の燃ゆるなる、
しかゞがに、――惜しき命数



[illegible]日背　森久眞子

○惑はしの扉

鳥取　桑本ささ子

少女てふ望き室、
誰なしも入るをゆるさぬ、
（あゝされど）固く鎖させる扉の外、
コツ／＼と忍びよる靴の音、
開けてよ、と、せがみいる美し聲、
（好奇らしさ、はた酔はされ
心地）
忽ちに開けんとしたる一刹
那、
嘗、經驗なき新なる
恐怖の影はせまりきぬ、
よろ／＼、と、後退りする耳
下に、
又美し聲、開けてよ、と、

○島守り

淡路　加藤菊子

夕陽にひたる瀬戸海の
波こそ寄すれ淡路島
繪巻に似たる影浮きて
今ぞ揺蕩ふ潮の香
胸に思ひはあらねども
通ふ千鳥に言よせて
暮れ行く遠き眞砂地の
波打ぎはをひた／＼と
人の世運命拙くも
限りなき望は遠く
青海原を渡るかな

狭霧にうすく包まれて

○日の神

常陸　今泉磯千鳥

いさましき
鷗の讃美に

日のみ神　眼を覺しけん、
夜の扉張　うすう薄れて。
曽さす　東の宮殿
彩雲の　たか薫ゆ園を、
うるはしき　粧ひなして――
日の神は　歩み出てにき。
春彌生　靜けきわした。
終日を　紺青の野に
花と咲き　藍と薫りて、
笑まひつゝ　逍遙び來てし
日の神は　黄昏ころに
四方の　殿に着かれて、
「疲勞」とや　いぶきたりけん
花の野も　島の林も
うすれたり　夕霞して――。

日は山の端にたゞ赤し
寂莚院の夕っ鐘
幽韻に雲も打震ふ
白木なる、ちさき樞ぞ
汝が永久に、い住ふ宮殿
安からむ、神の性やどる
常綠なる、松の大樹を
彌とする、玉樓なれば――
小高く築し靈の塚
紅梅塚よ幸あれな
汝が彩．吾が秘密
いろ變ることあらじ

○夜の色

磐城　森ふみ

おぼろ、春の月、花の樹、靜かに休ふ、董の路夢むるけはひ、
かすか、蛙の音、天地、夢路に入れる、樂かりし、一日を忍び、
ほのか、薄暗に、二の影、淡くな立てる、更くる四を、祈りの形、
流、夜を散して、夜の星、愛の瞬、丹のきらめき、守護や響るゝ、

○梅の枢

福岡　圭枝

春まだ若き如月の
霜に得たへずこぼれたる
梅よ蕾よ紅は
半ふふみて見えしもの
四の校並暮れそめて

○いそとめ

越後　横山文枝

柑子をば火にあたゝめて　掌にのせたまはりし
おないどしの兄におくれて
　二十年を世にすれ行けば
ははけたる黒髮見ても　泣かるると母はいへども
森の奥木立のかげに　影をのみうれしむわれの
沈める心は紫の　きぬの色にやたとへまし
おおある時は涙ながれて
　とこしへの光をしたふわれはい少女。

○雪の國

東京　狭霧女

降る雪に門は鎖しぬ――わが里は
岐阜の縣の東の
御岳につゞく山々の
眞洞の里に友戀ひて
仄に送る日の監を。

水かれて寛の氷柱寒き日や
羽根よ手毬よ歌留多よと
春の遊びの一日すら
淋しや友の影見えず。
しかすがに――
賤が伏家の軒の端も
身丈にこして降り積る
あゝ妾里は――雪の國

○風

靜岡　清子

我が窓近く、音信るる風、
ヒュ－と吹いて來、ヒュ－と去ってしまふ、
戸が、がたことといったのが、――やむと、
松の梢て寂寥の譜をかなてる――やがて
奥へ奥へと、音がかすかになる、
と。
また飄然。窓を音信れ――松を通ぎ――山を越え――
飄然と立ち去ってしまふ
過ぎ行く人生の聲――風――ああ、

○悲しき春

和泉　金田香雲子

窓下のすみれの花に
今も來し二羽の蝶が
樂しげに止まりつ飛びつ
遂には我が黒髮のリボンの上に
舞ひ來りて又他の花に飛び去りぬ、
斯の蝶は汝ありし日の
我と汝の如ならん
我の汝を失せし如
蝶ら一羽が死しなば
殘る一羽は我の如くに
悲しみて明くも暮るゝも



○友情（天賞）

阿波　長曾我部菊子

――此の！此の！切なる情熱は姉様通ひませうか!!お胸へ――吁戀人といはふか母と言はふか――我愛する人――菊様。ああああなたが彼の輝かな太陽に向つて痛く思をはせてゐやうとも、そは！そは！到底房がこの情には及びませぬ。え!!及びませぬ。姉様。死ても屹度死ても二人は離れることぢやあない。えい！もう二人は。――。

可憐し！遠き北海の地にさすらひの我乙。ポーと張もない汽笛がなる、棧橋をばたく渡る人の足音はする。けれども皆あの人達は内地をみすてたといふ哀愁をひたと胸にきざみつけてゐる。さう思ふと性なく私は泣けてくる、淋しいのですもの、月はきらくと紬肩に光り落つるけれども偏に靜にくづをれ泣いた最後に、この書は半夢の心地で書いたんですの。とことわりを言てある。まきかへし亦くりかへす故郷戀しの心の苛れ。――さうもあらう。さもあらうと痛ましさに涙浮べて、讀みに讀んでゐるとバラリと膝にちりかかる物があつた。

何？思はず潤める眼をぱッと見張つた。カードである。方三寸許の新らしいもの、玻璃色の小花可愛う青葉によつて咲いてゐる繪がきれいてある。私見るすぐに（おお！忘れな草だわね―）涙がこぼれて。――いつとも知らず吾唇の柔なるにおしあてて。――。

おお忘れな草、いはれまじき千萬の意料を、可惜し！花をして語らしめんの願よ房乃は。ああ、忘れな草。昔昔、獨逸の國の美しい少女がこの花故に凜々しき男を失ひし話はあはれのきはみ。さても女子の友情が、ともすると淺々しうなることを人は數へてゐる。世を見渡せば事實だもの。愧べき事と思ふにつけても我等こそ美はしき交りせんと固く思ひながら。――。

○規定　抒情、叙事、叙景等凡て他欄になき文章一切を含む字體は明瞭に認め必ず句讀を切るべし一人一章に限り半紙又は罫紙に認むること匿名を要する者は本名を別記せよ二十四字詰三十行限甲種の賞を送呈す

カードを取つて机屛風に立てかけてあかず眺め、書をまさかへして手箱にをさめた。十分ほど考へておもむろに筆をしめした。ひたすら書いておしまいの一節に。

——忘れな草は眞ぞ、眞ぞ私の涙をよけいこぼれさせた。あなたの御心ざしには感動する。房さんや、なぜにあなたをおろそかには思ひませうぞ、あ長久よ——

此君、詩も作り、文も作る、文の作り初め筆が澁つた、今は伸びて來た、本誌の美文家は今同じ樣な道を歩いてくる事になつてゐる、少しは違ふ道を歩いて下さい、泣言と愚痴の多いのに閉口するからそれも禁物、あなたの涙は眞に熱さうに思ふから、餘り泣かずに眞に悲しい時に悲んで下さい、ふだんはふだんの通りて書いて下さい、（評）

○野（地賞）

青森　しめじ

妾は野を歩いてる—當もなく—

灰色の雲が勞れた樣に漂ふて居る。向ふを見渡すと、葉の落ち盡した林がある。野の所々にも裸の木が、シヨンボリ立つてゐる。妾は立ち止つた、そして最う枯れ盡し荒れ果てた野を見廻した。—只だ靜もなく悲しくなる

妾は又歩き出した、枯れて黃色くなつた草が足に觸つて、サワ〳〵する、其も妾には何かの囁きの樣に聞える。強く歩るく、囁きもあゝ強くなる。赤しやくれた土が現れてゐる。妾は下駄で踏んで見た。埃がバット立つ、何だか嬉しい樣な氣がする。

赤い土が埃を立てる、何が嬉しい、妾に問ふて下さいますな、自分にも何か分りません。風がスーと吹いて葉の樣になつた草が、縺れ〳〵て飛て來る、埃がバッと立つて草の葉は又、向ふへ飛んで行つた。

側に葉もない、枝もないのが一本—何の木か知らぬ—立つて居る。觸つて見ると、冷々してる。赤い皮—、冷い皮—、自分は何だか、此の木の樣に、其の煩雜いもなく、只一人なら宜いと、思ふ。ても風がスーと吹くとユラ〳〵して梢が囁く。夫が草の囁と又違い、何だか強い響に聞える。

そうだ、野はすつかり枯れ切つて、只だ靜に囁き合つて居るんだ。妾は何の氣なしに斯う思ふた。そして邊りをヂッと見た。枯れ切つた灰色の野を見てゐる内に、妾の眼は勞れて來た。一寸閉づる、眶と眶と合ふ、と冷々する。ても段々暖になり、末にはボーッと熱して來る、パッと開いた。其瞬間、妾の眼に此の灰白い野を、ズッと橫切つた、ガタ馬車が見えた。

邊りを見廻した、そんなものは見えぬ。確に見えたが——矢張り氣の故だらうか。

土を踏むと埃の立つのは嬉しい、裸の一本木になりたいと思つて見たのも好い、強いささやきも好い、ガタ馬車の幻も好い、奥のはてにも詩情の人は居る、（評）

○なつかしい香（入賞）

越後 佐藤浪子

こまかい雪がチラ〳〵降る、ガラリと明けたくゞり戸「被「ゴい、お寒い事て」と番臺のおかみさんに愛想よく迎へられる、大鏡がキラ〳〵して、つぶし島田の藝者らしい婦人が、細い指先て手際よく白粉をぬつて居る、其右手の指輪の寶石が紫に光る紅が見えるパッとまた白く光る、棚にはクラブ洗粉の瓶が幾つもある、スル〳〵と着物をぬいて湯槽の前に立つた時、言ひ知れぬ好い香が私の鼻をついた、其香！、懐しいと云ふより外私は何にも思はなかつた、透明な湯からはもや〳〵と縈う湯氣が立つ、妾は乳房も肩もみんな浸つた、電燈はパッとついた、また好い香が匂ふ、云ひ知らぬ懐しさが浮む、つく〳〵と考へ考へた末ふと思ひ出した、それは私が七八つの頃いつもお湯屋でかぐ石鹸の香であつた、幼心に其香りを彼の優美な桔梗の花と思つて居た、敢て其花の香とは思はないのだけれど其好い香りを好きな桔梗の花の如に思ひ込めたのであつた、思ひ當つて漸く胸が落ついた、と同時に想はそれからく〳〵と昔をたどる、頬が上氣して髪がシットリする、フワ〳〵と例の香が幻の如に浮いて來る、妾の胸は幼い春に立ち返つた。



お番臺

茨城 栗よし子

桔梗の花の香りにして了つてゐた幼な心の追懐は實に美くしい、殊に殊のやうな湯槽の中で、人の世の衣をつけずに、幼心に立ち歸つたのは何と云ふ好い感じであらう（評）

【秀逸】

○雪

麻布　あい子

「母さま、一寸開けて見せて下さいませんか。」と雪が積つてると聞いた時に妾は申しました。「病氣に觸るるとよくないよ。」と母は靜かに障子を開けて下さいました。雪が狹い庭一パイに積つて居ります。妾は床の中からそれを見てゐると何んといふ事なしに悲しくなつて來ました。「母さま締めて下さい。」妾は何故か恁う言はずにゐられませんでした。

妾は思ひ出しました。故郷の野山一面に覆うてゐる雪――東京の人が行くとよくその反射で眼を惡くして歸つて來る北國の雪を。妾の頭はいつも斷片的です。

妾は明けて十八になりました。故郷の野の雪を見てゐた頃は、未だ十四でしたが、もう四年といふものは經過して、今、現在東京で此の狹い庭の雪を眺めてゐる時は十八なのです。妾はこれが淋しく感じられてならないのです。此の謎みたやうな意味が淋しいやうな感じがしてならないのです。

妾は年を取りました。之も一種の謎なのです。妾が十四の時は人にお轉婆と言はれるやうな健康體でした。雪ぶつけだの雪だるまだの、男の子のするやうな事をして飛びまはつてをりました。そしてその時には今の此の衰弱した體にならうとは、想像もいたしませんでした。これが謎で無くて何んなのでしやう？‥‥妾は今過去の樂しかつた有樣を思ひ出して居ります。過去になつて過去を思ひ出す事が出來て、過去の時に未來を思ふ事が出來なかつたのです。妾は何んですか解らなくなつて來ます。考へれば考へる程謎のやうな氣がしてならないのです。（妾は自分の思つてる事の半分も言ひ表はせないのを悲しく思ひます。）妾の胸が既に謎だと思ひます。

あゝ謎か、謎か、謎には相違ないが此謎は段々解けてゆく筈だ（評）

○仙臺市にて

羽後　菊池りう子

電燈華やかな廓町を走り過ぎた、醜骸を美しき衣もて被ひ包んだ數多の薄倖な女が辻占を買つてた。私の頬には冷い〳〵涙がはら〳〵と流れた。世の薄ら寂しさを感じてショールの襟をかき合せると、

戀しゆかしは昔の事よ、とは云ひ乍ら春毎に梅や櫻の盛りより桃といふ迄ながらへて月雪花の‥‥樂しみを、三筋の絃のなが〳〵と‥‥。

艶な唄聲が三絃につれて襲ふ樣に後から聞えた、私は眼を閉ぢた。沈まりかへつた北の首都の冬夜である。

と胸にしみ入る樣な音……。眼を閉ぢた私は我胸の響であると疑はなかつた。悲痛の響はやまぬ。私は眼を開いた。日光に影の如く立つた二人。薄い肩掛にくるまつた夫婦、かどづけ。冷えて眞白い女の手と、赤く硬ばつた男の手と……震へて悲しき調をつたへる。月影に二人の肩はすれ〳〵に。貴き名と美しき位とを頂いて、とらはれしきづなを脱し得ぬ身。名もなく富もなく、凡てを葬つて只戀の生命にのみ生くる彼等―何れが幸か不幸か……それを思ふ隙がない。唯我若き胸の琴線と彼の絃の震とが相あつて……云ふ樣なく亂れ亂れた。我車は走る、彼等はゆきすぎた。けれど一度つたはつた絃聲は胸に深き〳〵きざみをあたへた。ほろて月は見えぬ、たゞ青い光が周圍に滿ちて。半手袋のミットがきらりと輝いた。涙がとめどなく落るので奴の手て抑へると、あやしきたき物の香が鼻をついた。町は春の夜の如、けぶつてはるかの彼方に燈火が二つちら――ちら――とまたゝいて居る。

門づけのあはれは、少し情の脆いものだと直ちに感じる、別してや多情多恨の青春の女子に於てをや、旅情溢れて、筆却つてしぶる、此文章に其憾みがある(評)

○北斗星

小樽　ゆかり

言ひ知らぬ寂しい、悲しい、想がひし〳〵と身にしみて來る、時計のカチカチと刻む響のみ、高く低く聞えて、折々は外面に吹く風の音、それがやむと、寂として、さやの音さへ無い、燈明臺にくだける浪の音が、かすかに聞ゆる。冷たい、冷たい、針のような風が、窓の戸もれて机の上の、洋燈が、折々目ばたきして居る。何かしらこう、ちり〳〵と、引込れて行くような晩だ。噫、今日は大變昨日より胸が苦るしい、こうしてまた、今日より明日と日一日私の病魔は、思ふまゝに大手をひろげて苦るしめて居るのだ、そして、つひにはと、ある事に思ひ致ると、言ひ知れぬ一種の、恐怖が苦しい胸にひしと迫つた。噫、自分ながら今更何が其樣に、怖ろしいのだと、强く思ふても見た。そして何の意味もなく、つと机の前をはなれて窓の戸少し開けて、空の色を見ると、凄い凄い、眞黑な雪雲が、西に、東に南に、矢の樣に流れて、見る見る星影まばらなりし空一面、暗黑となつてしまつた。只此時まて、まだ北の一角に曉の星の如く、美しく輝いて居つた、北斗七星も、今最後の光、ぱつと靑く白く輝いたと、見る間に、惡魔の如き雲に包まれて、もう見る事が出來なかつた。噫。私もあの七つ星のように、今私を、葬るべき死の神が、刻刻と、迫つて來てるのだ。そしてあの最後の、光の美るはしく輝た時の如く、此身の心にも身にも、少しの煩悶も、苦るしみもなく、振分がみの幼き時のような、罪なき我れよと、自覺せし其

時には、もうすでに、すでに、冷たく石の如き、骸となつて、居るのだらうと、また此樣な、想にかられて居つた、私は一しきり吹き荒む木枯に、我れ知らず、(おゝ寒む、)とばかり窓の戸はたと、閉じた、其時高い高い浪が、ぱつと燈明臺にくだけたと見えて、白い白い、潮の光が、暗にもそれと、ほの見えた。

涙は碎くる北海の潮見臺、病む女の身に心細きは至當だが、若い女が此んなに死を語るのは好くあるまいと思ふ(評)

○河畔のおもひ

明石　落葉子

ザアー〱といふ、冷たい水の音が、胸に流れ込む樣な氣がする。今迄、前に載せた大きな柳行李に、もたれる樣にして、腕をくんで、凝乎と、目を瞑つて居た私は、靜かに目を明けた。すると、今にも消えさうな、車夫の影法師が、地に落ちて居る。頭をもたげると、淺野の松並木は直ぐそこに來て居る。「今笠原山の裾を廻つたんだな」、と私は悲しくなる。また、此所から、私の村迄は二里あるのだもの――。

肩掛を、頰にすりつける樣にして、又目をとじる。淋しい水の音、冷々した松の聲とが、一種いひ得ぬ寂寞を胸の底につたへる。病める小さい私の胸底に――。

「あゝ淋しい事」、私は目をひらいた。もう日は、いつか落ちて、灰色の夕雲が、ちぎれ〱になつて飛んでゐる。

鹿の子斑の、雪後の山々は、淋しさうに、私の行く道を立ちふさいでゐる。今通つて居る道も、この川も、あすこでつきて仕舞ふのではあるまいか。否、私の家はあの山の後だ。あの山もなつかしい。この山もこひしい。然し〱、うれしくはない。決して重い病を癒さん爲に歸つて行く身だもの。病を抱いて見るのだもの。どうしてたのしからう。去年の春、與入が紺の風呂敷包と、行李とを、棒で擔つて、私を送つてくれた時には、天晴れ成功して、見せると、誓つたあの山、やこの川に、今こんな身となつて逢ふとは――。あゝ死の神に手をとられて、故鄕の道を辿らふとは――。胸が又痛くなつた。兩手で強くおさへる。あゝまた、家迄は遠い。早く家に着いたらば。けれど〱、一人の祖母樣は、どんなに驚きなさるかも知れない。今頃は夕餉を濟せて、お燈明をあげて、炬燵で暖つて居らつしやるだらうに――。あゝ私は、どんなにいつて門をくゞらう?。

「私は何故病氣になつたのだらう。あゝ何故?。」はげしく痛む胸をおさへると、涙は思ふまゝ、目をとぢても、頰をつとふのである。あゝ水の音も、風のひゞきも、何處まで、病む子の胸を冷やすのだらう。

一寸、河畔の景色が能く表はれてゐる、病氣は美文のつきものゝやうになつて了つたが困つたものだ(評)

○愛情

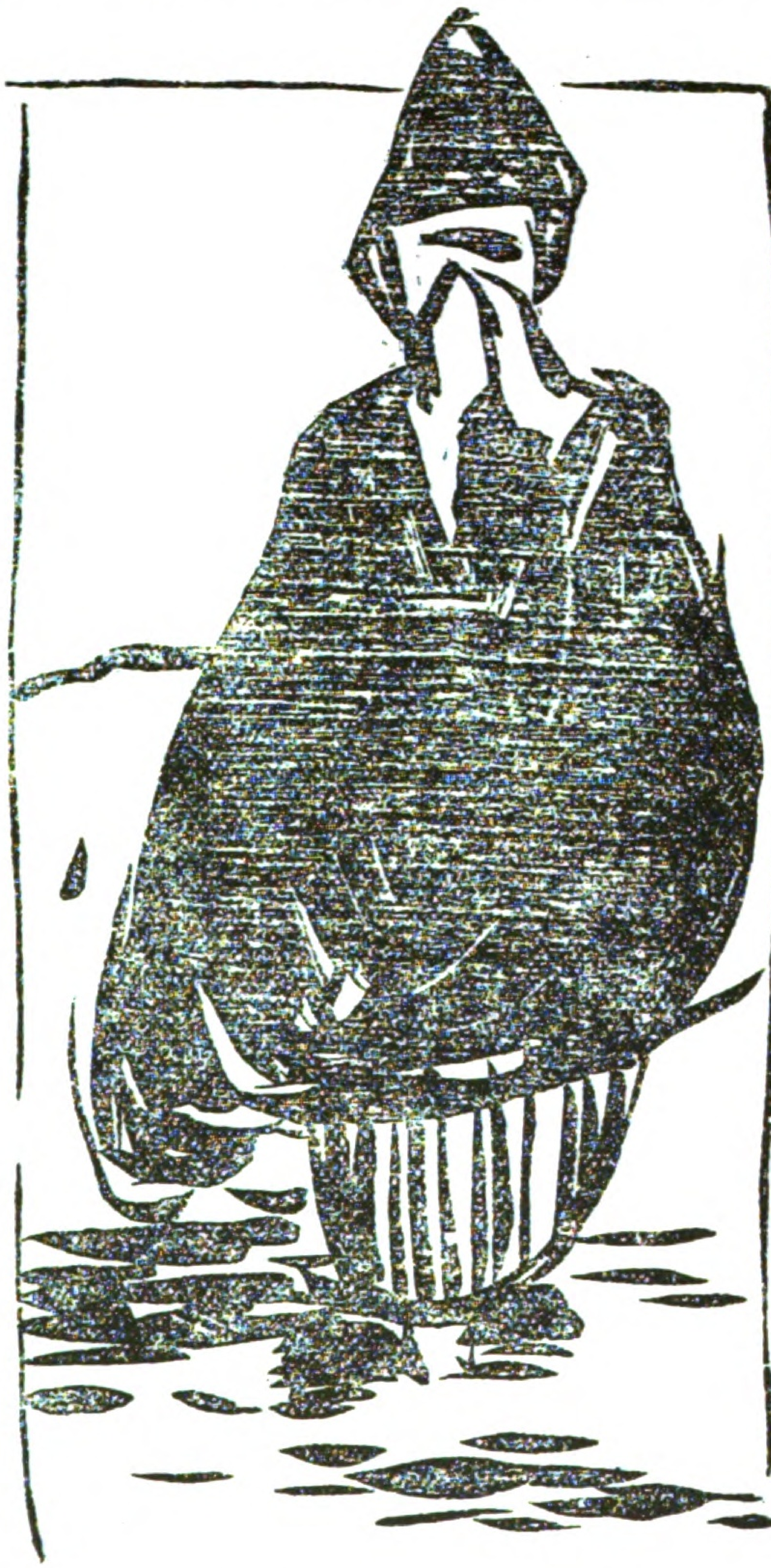
徳島　ふく子

もとより田舎をとめの容姿美しとにはあらねど、木綿ながらも、母が心づくしの晴衣新しく、顔には白き粉など塗りて飾りたてたるが、齢は十三ばかり、いかなる嬉しさの胸に宿れるにや、喜色面にあらはれて、ちよこ〳〵走りに道をいそぎ行く後より、六十路の坂を越えたりとは、頭の霜にもそれと知らるゝ老爺一人幾たびか水に入りけむ糊ごはき袷の尻はし折り、草履も穿かで徒跣のまゝ、弱〳〵しき身に、泥ながらの葱一荷擔ひて、これも嬉しげなるさまにて從ひ行けり。二人は町の入口に、御休處と障子にしるされたる茶店の前まで來かゝりし時、家の内より親しげなる聲にて、

『お花ちやん、奇麗に飾りたてゝ何處へ行きなさる。やア、祖父さまも御一緒にか、まアちよつと寄つて行かんせ』と呼びかくるに、老父は擔ぎし荷を地におろして、腰にはさみし手拭にて、額の汗をぬぐひつつ『けふは、この町の稲荷さまの祭といふので、お花にも是非遊びに來るやう、學校のお友だちからわざ〳〵の御案内、それで、わしが送つて行くところぢや』

茶店の媼は澁茶を汲みながら

『それはまア、お花ちやん嬉しかろ、ゆつくりと遊ん



筆　本所　安藤ゑい子

てこんせ。さうして、其葱は何處へ持つて行かつしやる」

老爺は獨りうち笑みて「これか、はゝ、これはの、片荷はお花がお友だちの家へお土産のしるしに、片荷はまた、わしが懇意な八百屋へ持つて行つて、お花が小使錢をこさへてやらうと思うて」媼もともにうち笑みつつ。

「やつぱり、孫は可愛いものと見えるてのう」

風俗の醇樸、視る如し（評）

○木偶

下谷　夕潮

秋も末だ！。冷べたい風が吹いて、まばらになつたコスモスが弱くたよ〳〵とゆらいで居る。「夜」が靜かな溜息をつき〳〵、愁はしげな姿をして地を掩ひにかゝると、人の胸の中も愁はしげな思のみがをし寄せて來る。そうなると、蠢閙起して居た劇しい不安や、いら〳〵した心持や、强い反抗心等は皆、只何となき暗愁何となき淋しさ、何となき悲さに變つてしまつて氣はがつくりと折れ只もう涙ぐんでばかりゐる。今日も私は、暮迫る二階の薄暗い一間で燈火もつけずに、さつきからもう一時間餘を机に頬杖をして、目を伏せて止度ない默想にふけつてゐた。

私の家は淋しい家だ。－－－明けても暮れても女三人、かりにも新時代の事なんか喚いても見ないといふ祖母と、むごい夫に慘々な目に逢せられ、廿八で獨身者になつた蒼白い顔のひ弱な母と私ぎり。珍らしい話に興をわかせて騷ぐ事や、華々しい笑聲なんぞは一年中たつたつて聞かれない。何かと云へば、「女といふ者は親の嫁けといふ處へ默つて嫁つて、丸髷に結つて裁縫してゐるもの」と眼鏡越に祖母には説かれ、「男といふ者は恐ろしい者、ま違つても近づくなよ」と二言目には母にくど〳〵云はれるので何時も私は、「まるでお墓場だ!!」と薄暗い氣の重く立込めてゐる家中を眺めて然思ふ。

――父母を捨て、故郷を後にし戀人に走つた女、人形ではない自分は自分と、夫を去り家を捨てた女、かりそめにも其樣な物語に若い血潮を湧き立たせる私が、何んとして木偶あつかひ、死人あつかひに滿足が出來やう!!。と云つて今の處、いくらあがいてももがいても、遠い〳〵昔からたゝき上げられてる所謂「道徳」といふ物にしつかりと囚へられてゐた女――殊に娘－－と云ふ者は、豎一歩でも自由に飛び歩けない。矢張私は何時迄も、肩を垂れ、首を下げてこの「お墓場」にすつ込んで居なければならないのか。――

あー、と推し出す樣な溜息をついて机に突伏た時、階下から切れ〳〵な、しやがれ聲が聞へた。私は思はず兩手でしかと耳を掩つて、劇く頭をふつた。

善き日の寂寞、哀愁と云ふやうなことが此頃諸嬢によりて繰返され、大抵は同じタイプにはまつたものだが、此文思ひ切つて言ひ得た處がある（評）

○久しぶり　下谷　細谷鍈子

電車を西町で降りてすぐ右にまがつて半町ばかり行くと、金物屋の隣りて森と云ふ家てすと、去年あつた時仰被つたつけ、ふと此事を思出して突然お尋ねして見たら、君枝さんの變つた事、學校時代にはクラス中のハイカラだつた方が、意氣な齒に結て衿の掛つたお召しを着て居被るのてす物……、てもどつか昔の俤のないても有りませんてした、たしか君枝さんの理想は軍人の奥樣てしたのに、其れがまあ奈何して此んな酒屋なんかへ居被つたのだらうと、内々私は不思儀てなりませんてした

君枝さんは相馬の茶碗にお茶をつぎながら「ほんとに貴女なんかまだ學校へ通て居被るんだから御氣樂だわネエ……もう私みたいになつちあ往生だわ」と、元に變らないはつきりしたお言葉て仰被る、私は何てお答して宜いかわからなかつたのて、たゞ「そう」と云ひながらつゐて下さつたお茶を飲て、「ネエ君枝さん貴女の理想は軍人だつたわネエ……、それ何して學校までやめて此所へ居被つたの」と、思いきつてお尋ねすると、「ホヽヽ不思儀てしやう、私自分ながら不思儀てす物やつぱりネエ人情だの義理だのつて云ふ物に迫られるからし方がないのよ……」と、一寸言葉を切て「其れを思ふと貴女なんか極樂とんぼだわネエ」と氣のせいかやけ氣味にかんざしの足て頭をかきながら目をそらしておしまいなさる、是て二人の話は一時とぎれたのて、何氣なくつと向の柱を見ますと、大帳と記した細長い帳面が掛て有て、其はじの方に三河屋と小さく書て有ました、私は何故か無暗と君枝さんの事情がくわしく訊て見たくて、幾度か口を開きかけたのてしたが、とう〳〵何も訊ずに黄昏時いとまをつげて三河屋と白く染出れた紺のれんを出ました、そして道々學校時代の君枝さんの御姿と、衿の掛つた御召て帳場に座つて居被たお姿とを胸に浮べてやはり不思儀てなりませんてした。

不思議ても何てもない不思議（評）

○北海の月　岩手　四戸波江

いまゝてゴー〳〵として居た濱の嵐も、漸くあとなく沈んて、物足りない程靜かになつた。

濱に立つてるのは、唯私一人。他には一人も居らぬのて淋しい北海の海邊が、いとゞ寂びしくなつてきた。だん〳〵西の空の紅みも薄すくなつて、遠くから氷の山を越え〳〵異樣な鳴き聲をしてきた一と群の渡鳥が不意に下へ下りた。何時もの樣に魚を見つけたのだら

き。

全く西の紅みは消えた、そして追々淺黄の空色となり黒みが増して紺となり、遂には黒くなつた。西ばかりではない四面が暗らくなつた。と見る間に今度は東のみ空が明るくなつてきた。東がはじめ白くなつて、だん〳〵紅くなり、忽ち現はれたは冷たい冬の月である。大きい〳〵月、冷たい月、淋しい月である。そして戀て、私は故郷の月なら冷たくない、暖かいと思ふ。實際そうだ。

月が昇つて氷山が銀色や、金色に輝く。美しいやうでも、矢張り寂しい北海の月だ。光る氷と氷との間を、水夫らしいのが二人日の光を浴びながら、重い魚を積んで漕いできた。日は高く昇れば昇るほど、冷たさを増す、寂しさを增す。

活畫(評)

○何故女に生れた？

信濃　赤津賓江子

雪の野を吹く寒い風が障子の破れ孔を漏れて刃に身を削られる樣な室の中、見廻す四邊には誰も居ない。小さい豆ランプの灯がポーッとして暗く何だか物淋しい樣な夜——私は考へるとはなしに自分の過去を考へた。

——私は生れるから一人の女だ、いや女て生れたのだ、そして二十幾年の夢を見て來たのだ、何故私はこんな女になんぞ生れたらう

＊　＊　＊　＊　＊

今も尙朧ろに覺えて居る、私がまだ五ッ六ッのお下げの頃、或女の人が嫁入するのを見た事があつた。美しい着物を着て美しい簪をさして居つた、私はそれを見て大變美しいので欲しくてしやうなかつた、母に泣き付くと、お前が大きくなつてお嫁さんに行く樣になると買つて上げます、と云はれた、私は譯もなく早くお嫁に行きたいと泣き付いてはお母さんを困らせた。

何うして私はあんな事を云つたらう、それが不思議でたまらないと共に可笑しくてならぬ。

十五六の頃だつたらう。或人が私に手紙を送つた、それがまだ私には十分讀めなかつた、譯が分らないので洟をかんで捨てたこともあつた。

私は何故女になんぞ生れたらう、

あゝ、私はもう樂しい處女時代を過してしまつた。小學校を卒業してから女學校へも行かれず、夢、現と六七年間をムダに過した此頃——私の思は戀しくて戀しくてならぬ、未來の事はさて何うなるやら？

昨日も私が道を歩いて居ると何の事だか知らないがオールドミスと人に口をきかれた。

着想は矢張型に箝つたものだけれど、見かたに新しい處がある（評）

○御用はじめ

王子　辰子

今日を晴れと着飾て來た事務員の初姿、馬子も何とかとはよく言ふたもの、常におしやべりの某さんもつゝましやかに、控へてゐる、先づ取締に主任に古參の人に新年の辭をのべる百人が百人に、きまつた樣に「御めで度う御座います」、こう言つて口の中でむにや〱何かいゝ加減な事をいつて「又相變りませず」とはつきりあいさつするやうだ、是がすむと係り〱にストーブを圍んで居る一かたまりへ同じ樣にあいさつしてしかし極ぞんざいにあゝやつと一役すんだといはぬばかりの顏をして、常人なら仲のいゝ友だちのそばへすりよつて人の批評、「杉田さんの羽織見て」「えゝいゝわね！」、「お納戸ね」「御らんなさいよあんな大きな事をいつたつて松島さんの去年と同じなりだわね！」！「松下さんの古見たいよ、紋がよごれてるのよ」！「大金さんね、貫代さんは、リボンから草履からハンカチまでおそろいよ」「あの人あ別よ、ホヽヽ何しに來てるんだかわかりやしないんですもの」、「大金さんね今年の賞與三圓ですつて！」「一寸松本主任ねあのちんちくりんがシルクハットをかぶつて來たのよしやつぽがあるいてる樣なのホ……！」、「九時から十二時まてと言ふものは、こんな話してつぶしてしまつて、早く歸りたい〱とはよく言へたもの、まるで批評の言初見たい、それでもやつぱり一人前の日給よ。そう云ふ人も其の一人ですけれど、女が三人よると姦ましいと言ひますが全くて御座いましやう。



新聞　水月　北川うめ子

○日曜の買物

上田光子

今日は思ひきつて、出てこようと家を出た、用むきは積り積つた種々の買物である、家におると風が少しあるやうに思つて居つたが、外を歩いて見ると、寒さが一層つよい、歩く度に寒さが泌む思はず、「あゝ寒む」と幾度言つたか知れない、と言つて引返すわけにも行かん。

兩側の物賣店を、見やりながら、一軒二軒と這入て買物した、牛町餘り行つた時、ホロリと顔に冷たいものがかゝつた、霰はら〳〵と降つて來た、あゝ今朝から寒い〳〵と思つたのも、むりはない、冷たいものが降るのだもの。空は次第にモヤ〳〵曇つて、霙になつた。こりやたまらない、と走りだして、何所かの軒に入らうとしたが、店際は皆軒が淺くて這入れない、ある料理屋の軒が少し深かゝつたので、其所へ飛び込んで、肩掛はづして振う、着物はコートでぬれていない、其所で須叟休んで居る内に、霰ばかりとなつて來た、近所の子供等は嬉しそうな顔をして、前掛にうけて、道の眞中に立つて居る、頭りに霰の積つて居るのも受らしく、急いで走る傘屋の後にほえて、走つて行く犬も、をかしくある今の小降の間にと、下駄で飛び〳〵、橋ぎはの石段を下りて、やつと巡航路の乘り場に這入た、下りてみると川風がたえず、吹いて來るので又寒い、折よく上り巡航船が來た、乘ろうと思つたら滿員で乘れない、船員は、滿員ですから後のにしてくれと言ふ、待つて居ると、後へ來たのも亦滿員、上つたのは只二人ばかり、或一人が今日は日曜で人出が多いのに、其所へ僅かの降りでなー、と話をされた、私は、あゝ今日は日曜であつたか、日曜であつたなら來るのじやなかつたに、三度目來た船もやつぱり滿員であつた。

○遲い歸り

茨城　岡田うめ子

お父さんと妹のお清とは今日隣り村の親族の結婚式に招かれて行つて、私一人でお留守番を云ひ付けられたのです、夕方歸ると云つて行つたのに未歸らないとは私は心配で〳〵て堪りません、お父さんはお酒を飲まないのだから、酔つて居るはずはありませんが、もし友だちにでも進められて飲んで居るのではありませんかなどゝつまらない心配をして居る内に日はとつぷり暮れてしまつのです、私は幾度か門迄出て今歸つてくるか今歸つてくるかと待ちもうけたか知りません、而し何時たつたつて歸らない父はしかたがないから遂に恐ろしい淋しい眞暗な我家へ這入つて夕飯も食べず、ランプをつけて机に凭り掛つて、見るともなくなくランプの火を見て居るとヂー――と石油を吸ふ音と時計の分秒を、きざむ音のみ時々鼠のガタ〳〵する、其度毎に私の胸は押し縮めらるゝ樣でありました。

私は何時も斯樣な淋しい夜には必ず考へ出すのですもの――あの三年前死んだお母さんの事、お母さんは三十七歳を一期として此世を去られたのです、あの慕しきお母さんがせめて今頃迄お丈夫で居れば私しは斯樣な淋しい思はしないのに――

何故死んでしまつたのか私しは思はずホロリと涙を落した。

先日であつた、學校で修身の時間に先生が云はれた『皆樣の内でお母さんや、お父さんのないお方は手を揚げて見なさい』其時手を揚げたのは私一人――

私しは非常に悲しくなつて其時もお友人の居る前で、眼に涙を宿しました、私しは斯樣な悲い淋しい身、世には私の樣な者もあれば、又兩親を持つて、樂しく日を送すものもありますし、これ――これが浮世のならはせか、と、思ふと私はわつと泣きたくなりますまたお父さんは歸らない、何處でか犬の吠聲がかすかに聞える、淋しい夜です。

○文學

長野　西條うめ子

自分はどう考へても文學者になりたい。此れから獨立て文學を以て母を養ひ、人との交際も、あたりまへにして遣つて行けるかしら、と思ふと又なんだか心の中に不安の念が湧いて來る。

それにしても此れから、東京の學校へでも入學して、學ばなければ、到底駄目だ、それには金がいる。

母や兄はそれに賛成して與れるかしら、ともかく兄は放蕩して、サンザ金を遣つたから面目としてどんな、やりくりでもして、出して與れるだ

らうけれども、

母はきツと聞いて呉れないに異いない。此の間もそれとなくそんな事を云つた。

父は死ぬし、兄は金を遣ひ込んだ其上に、お前は、東京へ出して學問させるなんて事は、どうしても出來ない、お前も兄弟二人故家の手助けでもして別に家でも立てる様にしなさいと。

なる程考へて　見れば、年老いた母を此上苦勞させるのも子として出來ない道理だけれども、そうかと云ふて、家にばかり居ても役に立たないし、家に居て勉强すれば出來ない事はないけれども、ご飯を食べて本にばかり向つて居ても、兄嫁に對して、なんだか意苦地なしの様に見へる……其中には又よい婿でも迎へろとか云ふに異いない、アヽ嫌だ。いつそ小學の敎員でもして其の傍ら文學でも研究しようかしら、家に居こならば月給が十圓でも五圓でも自分のものとして、兄の手をかりないで衣服は出來る。

そう仕様かしら、然し向ふの鶴代さんにこんな事が都へても知れたら、此の暑中には殊更自分を馬鹿にするに、異いない、エヽ口惜しい。女學校卒業した位ではなんにも出來ないし、あゝ、どうすれば、自分の意志通りに行くのかしら、我ながらわからなくなつて來た。此れがやつぱり煩悶かしら。

○ポチ

本郷　千代子

窓の下にクン／＼と音がする、あゝまたポチが來たと思ひ乍ら障子を開けると、妾の顔を見るが否や、いきなり飛びつく様に前足を窓の格子へかけてなつかしそうに尾を振つて居る「ポチ！また來たね」と其頭を撫でゝやると、それでもう安心したと見えてお勝手の方へ急いで飛んで行つたが、間もなくスゴ／＼として歸つて來た、あゝ可哀想に昨日から下女にも暇を出した家には、お勝手へ行つたつてポチに御飯をやる者もなくなつたのだと思ふと、何とはなしに情なくなつて來[illegible]えず涙が眼に浮んで來る。

思へば今から恰度四年前の妾が十三の時であつた、學校の歸りにいつもの桑畑の前を通ると、生れた計りの可愛い小犬が籠に入れて棄てられであつた、乳が欲しくて親を探すと見え、哀れな聲で啼いて居た、妾は餘りのいたはしさに其儘見棄てゝ行くに忍びず、籠諸共抱いて歸り物置の傍へ小屋をこしらへて其處へ入れ、朝晩一度づゝ飲む妾の牛乳を半分を分けて育てゝ居た、だん／＼大きくなるにつれて妾の顔も見覺え朝に晩に此窓の下へ來ては尾を打つけて妾を呼ぶ、學校へ行く時も十五町も遠い道を妾の後について必ず來る、歸つて來る時も門の外に足音が聞えると何處に居ても飛んで來る、此様にして四年の間妾の傍を一時も離れた事のない可愛いポチを、今度妾の手から離されればならない様な事になつた、それはお父様が一身を賭して盡力してゐらしつた或事業が不幸にも皆失敗に終つた爲、財産は勿論の事永い間住み馴れた此家も日ならず人手に渡さればならない事となつてしまつた、移つて行先も遠い處だし其上もう犬など養つておく餘裕はなくなつたのだから可哀想だが外へやる事にするとのお父様の仰せ、只三日の間でさへ家へ養つたものは可愛いといふに、これは增して四年の永い間自分の食物の半分を割いて迄育てゝやつたものを、どうして心よく手離す事が出來様、そうかと云つてお父様の仰る通りも犬一疋養つておく事も出來ない様な身分になつてしまつたのだもの、何と云つたとて仕様がない、泣いて行かうと覺悟はしたものゝ、今更かうして妾を慕ふて居る此無邪氣な顔を見ると妾はもう兄弟にても別れる様に情ない思がする。

明後日の今頃はもう妾は此家には居なくなつてしまふのだ、それも知らずにまた此窓の下へ來て妾を呼ぶ事だらう、けれ共誰一人ポチと云つてやさしい言葉をかけてやる者なく、悲しい聲を出し乍ら戶の締つて居る家の廻りを淋しそうにうろついて歩く哀れな姿が、今から眼の前に見える様な氣がして、只譯もなしに淚がホロ／＼と落ちる。

○二階から

京極　花子

私の家の前は、つたやと云ふ小間物やだ。おかみさんは、日本橋の大きな商人のお妾で、愛嬌のある御世辞のよいきれいな人だ。店はいつても、富どんと、梅さんとが店番をして居る。私はいつでも、用のない時は二階に上つて窓に倚りかゝつて、外を見て居るのだ。

今必度二時だ。例の通り窓から見て居ると、はじめ、十二位なおさげの女の子がはいつた。富どんが出て來て、何か見せて居たが、じきに女の子は行つしまつた。リボンを買つていつた様だつた。

あとで富どんは梅さんと二人で、話をしながら、例の通りに、硝子障子を拭いて居る。

二十二三ないきな人がきた、櫛を見て居て、白粉を、買つて行た。

梅どんが外え出た。使にいつたのだらう

富どんが、火鉢にあたりながら、居眠りをはじめた。自動車が前を通つた。其の音に驚いて富どんは、目を覚し、また硝子を拭きはじめた。

其の時に柱時計が二時半を打つた。

階下でお母さんが私を呼んでゐる。

○女

鳥取　安木春子

買取りに行つて歸途、森の傍道を通ると、奥深い地藏堂の後に、さゝやく若い男女を見た、男は二十四五で新大島の揃ひに瓦斯絣の袴をはいて角帽子を被つた町の糸屋の次男、女は仝級だつた坂田さん、思ひ切りハイカラな束髪に結つて、藤色がゝつたお召しに、矢張藤色縮緬の被布を着て、心持顔を赤くしてうつむいた、横顔、まお彼れが坂田様かと見違へる程美しい「ホヽ」と咽びやうな女の笑聲をきいた時、私は何とも云へぬ淋しさをおぼへてハラハラと冷たい涙がこぼれた、かつては私も紫矢羽模の胸をそらして、小さい格好のいい草履の先で、海老茶袴を蹴て女學校の花と歌はれ「三橋屋の嬢さんの美しいつたら三年先が思はれるだ」と大工の内儀をつく〳〵感心させた事もあるものを、お父様さへ相場などへ手をお出しなさらねば、いゝえ財産等は如何でもいゝ、せめて生きて居て下さたら、女學校位どうやこうか卒業して、母様にも今少し楽をさせて上げやうものを、世が世なら今頃はもう、先日大尉にお成り遊ばした忠夫様の夫人に成て……アヽ新婚旅行には是非京都へと云つていらしたが誰と何處へいらつしやるか知ら、私等はもう見返つて呉れるものもないし赤茶氣た髪を先のぬけた玉簪で束ねて一張羅のかすりの此の羽織さへもうはげて汚れて人中へは出て出られやしない。ゴホン〳〵と苦しそうな咳の聲に氣がつくと何時か家の前に來て居た「此様な氣の弱い事でどうなる」、自分で自分を笑つて、ふとふと田の畔を手を曳き合つて此方へ來る男女を見ると、又しても冷たい涙が頬を傳ふ

○初島田の記

京城　ゆかり

いやだ〳〵と思ひながらも似合なかつたらすぐほどいても宜いと云ふ約束で、むりに進められて結てもらつた初島田、時色なと仰しやるのを、これ丈けは、あくまつて剛情ばて、白の絹打紐をきり〳〵まいて、その残りで上を、から結びにむすんで頂いた、鏡にうで見ると好な様なきて嫌な様な、夢の様な心地がした。「ちよいとあちら向いてごらん」と母様、後ろむきになつて手てちよと、まげをさはつて見ると「さはちやいけないよ束髪とはちがうから、ほんとふによく出來た束髪よりも何よりも一番よく似合うよ、れゝお初さん、いつになつたら島田に結ふやうになつたので、此の子の氣象では、とても島田は結はないだらうと思つてしたがよく結ふ氣になつたと思ふんですよ」つて母様一人でほめて入らしやる。嬉れし様な嬉しくない様な、又私は鏡を見た、結はなければよかつた何だかやつぱり束はつの方がいゝ様な氣がする「嬢様よくお似合なさいますよ」と云ひながら

母様のおぐしを上げ初めた。「早くお湯に行つておいてよ」と母様、何だか外え出たくない急にかた身がせまくなつた様で泣きたくなつた、「早く行つて來ないとおそくなるよ」何だか、かほがほてつてきた洗ひ粉を取りに行かうとすると「そくはつのつもりでは裏口て頭を打つよ」頭が おもたい、「行つてまいりますお初さん御ゆ つくり」と云つて、しぶしぶお湯に行つた、湯屋番がヂロ〱私の頭を見て居る、成る丈け人の顔を見ない様にして、急いで湯の中に入つた、お湯はしづかだまだ朝だからだらふ。近處の人かしら顔はちよい〱見るけれども口をきいたことのない、若い美しい丸髷の奥さんとハイカラの娘さんとてぶく〱太つた四十位のお神さん風の人とこれ丈てある、皆はだまつてポカ〱とたつゆげの中に安らかに暖たまつて居る、若い美しい丸髷のおくさんが私の髷を見て入らしたが「奇麗におぐしがあがりましたことねえ」と云つて、くびを傾けて見て居らつしやる、私は默つて居た、「おぐしがすなほで入らつしやるから」と云ひながら湯槽の中から出ておしまいなさつた、妙にかほがほてつて湯槽の中は夢のように明るい、私に若い誇をおぼへた

○夢

常陸　琴女

——やつぱり夢だつたのねー、それでもなんだか岡様に會て來た様な氣がしてうれしいわ夢はほんとに面白いものだと思ふ、夢なんかとおつしやる方があるけれど人の半生は夢見

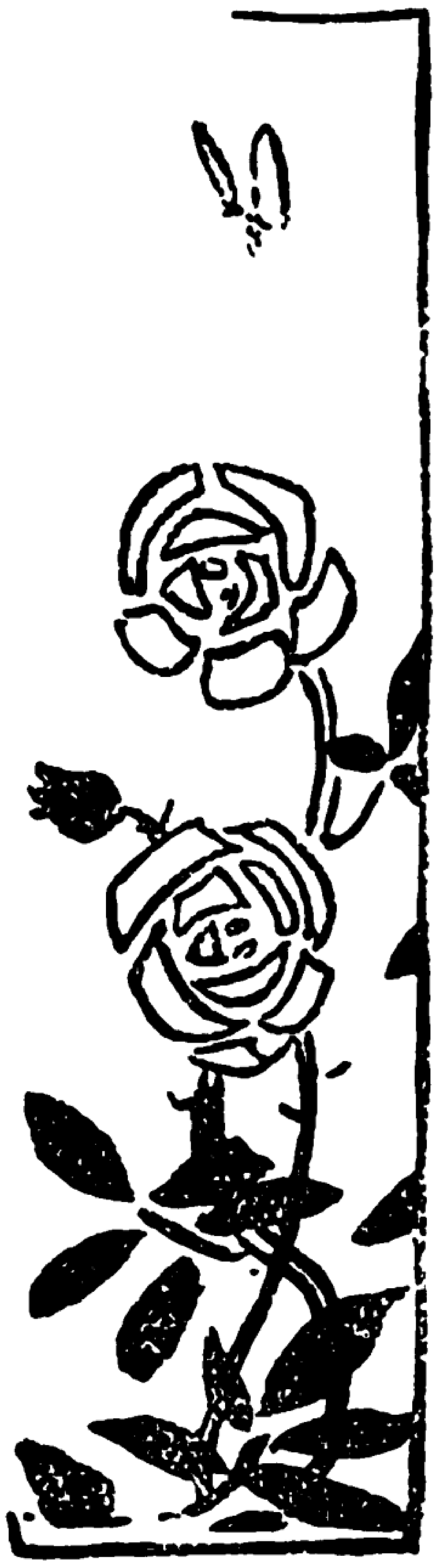


エンヤラヤー　紀伊　稗田美津子

てくらすのですもの、夢でもやはり實際になりますわ。若し此世が夢だつたら夢に泣き夢に喜ぶのはあたりまいぢやありませんか、それに人様は私を笑ふのですよ。若し此世が或ろ意味あるものであつたら其意味の爲に悲んだり喜んだりするのは當りまへぢやありませんか、それに人様は御笑になるの。何故てしやう私にはちつともわからない。

そんな人々と話しするより一人で居る方が餘程よいわ。私は淋しい所が大好きよ、今時分こんな海岸の宿屋にたつた一人居るのですもの、陰鬱だとか悲觀的だ等と人様は仰つしやるけれど私程樂觀なものは無いと自分で思つて居る、獨り居それでも始終樂しいのですの之程樂天の事はありやしないわ、疊つた鏡に寫したら何んだつて皆汚れて見えるわだからそんな人と話したくないの。それでも何時迄も此に居たくない此度は何處へ行きましやう。そう東京を出てから筑波へ來てそれから此へ來た之から鹿島、香取へ行きたい、それから伊勢の大廟へ御まいりして橿原神社へ參拜したい、そう日本の國はそれだけの神様を經て遣られたのですわ、だから私やはりそれだけの神様の御敎を受けたら心に或る光を得られるだらうと思ふ、日本の國の様に尊い、それから山口縣へ行き度いわ、どうしても岡様の御國へ行つて見たい、あんなに美しい性格を養つた山や川はどんなに美しいでしやう、若し其美くしい山川を見て美しい聯想に耽つたらやはり私の心も岡様の様に美しくなれる様に思はれる。こんな事を云ふと人様多く御幣かつぎだなんて仰つしやるのですよ、いゝぢやありませんか御幣擔いでも。私の様にね四百四病を身に負つてるものはね精神で治すより外に仕方がないのですもの。あらころ〱とこほれたのは何、木の實かしらん、ほんとに靜かな日だ。まだ千鳥が鳴いてるよ朝から鳴き續けなの誰を呼んでるのでしやう。あら時雨が降て來た、霰まじりの様だ。何んだか歌でも出來そうね——

家庭日記



○規定　家庭を主として書いた日記文を云ふ實際的の日日の出來ごと又は心得となるべき事若き奥様の新しい經驗談も宜し二十四字詰三十行限り半紙又は罫紙に認めること乙種の賞を送呈す

○切干と澤庵（地賞）

常陸　木村桂月子

十二月廿一日空晴れ。今日の寒さは冬になつてから初めて、寒暖計は卅七度、朝の食事がすむと姉と二人で大根の切干し切りを母から命ぜられた、南向きの日當りのいゝ椽へ薄べりを敷いて、間菜板を二つならべて姉と向き合ひに座る、さあ競爭ですよ、と云ふので、一二三のかけ聲諸共ザク〳〵〳〵と切り初める、私がまごつくので姉がクッ〳〵笑ひ出す、口惜しいので焦れる、焦れゝば焦れる程まごつく、お晝のご飯に立つ時勘定して見たら姉が卅八本、それて小用に二度、新宅の叔父樣が居らしつた時、お茶入れに一度立つた、私が卅二本小用に一度しか立たない、それても六本負け午後三時頃より空模樣が惡くなつたので、降らない内にと、お風呂へ水を汲み込む、姉が手桶へ汲むと私は運ぶ、其れが終はると今度は澤庵漬にするのに干してある大根へ、コモをかぶせる、と間もなく雪が降り初めた。

夜に入ると寒さが一層烈しい、裁縫を出して見たが手がカヂケて針が持てなくなる、衿を付けて裾を合せてよしにして終ふ、十時までおコタツへ入いつて女子文壇を見る、母から、おやすみ、と云ふ聲を五六度も聞いてから、やつと憚りへ立つ、雨戸をあけて見ると、あたりは一面銀世界となつて居た。

要領を得てゐる（評）

○十六寐ると十七（人賞）

神田　荒木さだ子

十二月十六日月曜晴れ、雨戸をあけると未だ暗い、庭のまん中に妹の赤い緒の下駄が、霜で眞白でした、裏の井戸に水を汲む、釣瓶繩が凍りて泣きたい樣、其の

箸、柱に掛けた華氏が三十七度を指して居ました、漸くたきつけた薪を、いぢり乍ら、芳やを思ひ出す、今頃病氣はどうしたらう可いか知ら？お味噌汁を、と思つて、ホヽ擂鉢を起したらばまあ、ワサ〳〵動く物、私驚ろいて母樣つて走つた、あとで見ればあはれ冬枯の、こほろぎ一つ。祖母樣が「鰹節の固いのは火にあぶると容易にかけるよ」と敎はつて早速火鉢に倚つて溫めますと見た道子が「姉ちやん、寒いからおかゝもあつたするの」つて聞きますの、私が道ちやん、お正月嬉しいの？「えゝお正月大好き、姉ちやんも……私ち六つネ」小さな手を出します、可愛のねえ道ちやんと堪ずなつて抱きしめました、五ツて居て頂戴、いつまでもいつ迄も。

學校から歸ると、繪端書がお机の上に、見れば忠子さんからきた「……それは妙てすよ、蕃荷（ショーガ）の葉を煮出して其の汁に手を浸して……」終に序に書いてある、忠子さんの御親切いつも有難う、だが何だか、不平な心地、ことし霜燒といつてそんなに出來ないものを、と思つたので、母樣にワッフルを頂く、根岸の叔母樣が芳の戻るまで當分お手傳下さるとか、まあうれしい事お土産はいりませんその替りどうぞ早く被在つて下さいナ日頃のお約束祖母樣はつゞらの蓋をとつて小切れを下さる、私何よりうれしい（澤山按摩をして上ますよ今夜ね……）ひとり想つて覺えず莞爾した、がたちまち不安が電光のようにひらめく、胸に胸に。嗚呼、最う十六ねるとア私は十七にならねばならぬ。

年齡相應の事が言へろ（評）

【秀逸】

○凍る朝

北海道　翠子

二月十四日、氣笛が鳴つた六時てあらう。如何しても起きなけりや成らぬ時間だ、冷たい着物を着換へる、足袋もはいた、躰はもうシッカリした。おゝ寒い！障子を明けると、硝子窓はすつかり凍つて外の方は、少しも見えない。……あゝ美くしい硝子……熱帶植物の樣な、凍り方して居るのもある、影色の宜い冬枯れの……何だか繪て見た事のある樣なのもまがきに菊をあしらつた樣なのや、峰つゞきや川の流れ、たなびいた雲の樣な者等、數へて見れば何種類となくあゝ美くしい、併し不思儀だ如何なる故て此なに奇麗に凍るんだらう、此こそ眞に、自然が畫た繪と云ふのであらうと前掛の紐を結び乍ら、ストーブに火を、焚きつけた。何時もの雀が二羽落葉松にとまつて、煙の行方を見送つて居る、「姉さん燃たかい」弟のサムガ

りてある、「お掃除してから起て入らつしやい」と掃木手にして立上つた。

二月十五日、六時起床、今日は姉さんの所へオルガン習ひに行く日であるが、ひどく寒いから行たく無いと思つたけど、約束した事もあるし折角待つて居る、のに行なけりや、氣の短い姉さんだから若し。怒つてもう教へて與れないと困ると考へたからお高祖にショール一つて外に出た、太陽が強い光をなげて、雪まで光つて居るまぶしくつて目が明けられない樣だ、あたりの立木は寒氣が烈しいので皆寒さうに六花の衣を着けて居る道路も、カラ／＼に凍つて歩く度にキュッ／＼と音がする辷りさうで堪らなかつた後から鈴の音勇ましく馬橇が何臺も／＼來たから、道の無い所へ蹈み入つてよけて居ると馬は燕麥俵を十五俵積んで顔は、息で眞白に凍らせ乍ら苦しさうに、歩て行く冷たい思て、退けて居るのに馬子は、知らん顔して俵の上に登つて馬のお臀をピシリ／＼手綱で、たゝいて行つて仕舞つた。憎らしい奴だきつと蹈切の坂で困るに違ひない、と思乍ら辷り／＼雪を拂つて馳け出した。：：ずつと先の方に馬が止つて居る今私を追越したそれだ、馬子は、頭から煙を立てゝ太い棒でピシャリ／＼やつて居るが、馬は坂が辷つて上られず、徒に足許りもがいて居る宜いザマだと、鼻先に笑を浮べて、馬子をにらみながら私は、先に馳け拔けた、まだ馬は動かない、大きな聲で罵る馬子の聲が聞える。

北海の風物があらはれて面白い（評）

○ありのまゝ

明石　伊藤ゑい

一月六日朝六時起床、今朝は御飯たく日である、お米は宵の内から仕掛て置た、すぐにかまどの下をたきつけておいて、本家の方は丁稚があける、私は郵便局をあけに行た、ちらばつた紙屑や、ほこりをはいて、日附印、硯箱、朱肉など、机の上にならべ、椅子も出して置て、又流しへきて、かまどの下を見て、おかずの拵をする間に、皆々おきてお出になる、御飯が出來た、今日は、ほとけ樣の命日故、一寸御膳をして供へて置く、朝飯がすむ、後片附をして、火鉢で手をあぶらうと思ふ處、小供がおきる、ひる衣ときかへさせてやり、ちよづを使にやつて、其間に床上をする、朝は小供は、牛乳故、世話なしである、座敷をはいたりふいたりすると、九時頃になる、店へ行て新聞を見たり、小供に相手になつて居ると、早やひるの拵へをするやうになる、何をおかずにしようと思て居ると、今日は寒の入故、水菜をたけとの仰せ、水菜をゆでゝ居ると、岡山の醫學校へ入學して居る弟が遊びにきた、皆さんお話して居られるが、私は用事しながらきいてゐた、おひるの御飯は、弟も一所、にぎやかに頂いた、私が弟に母樣は御壯健かと尋ると、又例のむねいたで、臥て居

られるとの事、あゝ又さぞつらひ事てあらう、直にも行て尋たいが、御許のないのに、行のも如何と思てん て居ると、弟が突然、姉さんあなたに御相談があると云ふ聲に驚て、何をてすと云ふた私の聲が、大きかつたと云て、皆に笑れた、すると弟は、私を他家から貰ひにきて居るのですが、どうしやうと云ふ、私はまだ娘の時分のやうに思て居のに、早や弟のゑんだんの相談に、加はる様になつたかと、二度びつくりちとこれからは氣を附て姉さんと云はれても耻しくないやうにしやう、弟には又、よき折におひまを頂いて里へ行て、両親の前て、相談しやうと云ふて後は雑談て日がくれた。



寒き日　青森　立花とも子

初心らしいがありのまゝが書いてあつて、却つて其日の様子が能く分る、字の使ひ方なもう少し稽古なさい(評)

○雨もよひ

金澤　ひらさき

よべ晩くまで物の本など見てありしかば、疲れやしぬらん夢さへ覚えず。外の何となう騒がしきにふと眼さめてあなやと計り驚きたり。そは早朝日の障子に赤くも映りゐたればなり。やゝとばかり刎起きて床たゝみ母上の勝手に物しゐます所にゆき、何とて早く起し給はらざりしと恨みまつれ

ば、あまりにうまゐしてありたれば惜しうてと、笑ひ給ふ。こも親の御情をかりそめにも恨みまつりし事、あはれ如何計り口惜しうはしたなき業よと、心に悔ひつゝ顔洗ひ、鷄小屋の掃除に行き終りて家に入れば、皆取片附られたり。漸く二才になりし姉上の子義坊、起出て母上の物したまふをつき纏ひ。危げなる足もて家中を限なくかけありく。あまりの事に炬燵臺を倒になして其中に入れしに、困りたる顔して傳ひまはりし事のいかに可笑しかりしよ。朝飯の後義坊を守しつゝ長谷様へ編物を習ひに行きしにお留守なりければ、かへりぬ。道の邊低き垣めぐらしたる家に彼岸櫻の愛らしくも咲けるいとめでたしや。晝飯のすみし時髪結の來てければ母上、姉上とうるはしく結ひ給ふに、我も何となう結ひたくて、頭に手あげゐしを察し給ひしか母上の、御身も結ひてはいかにと勸められしかば嬉しくて結ひて貰ひぬ。よく出來たりと賞め給ふに一目見たしと思へど、後に目なければ甲斐もなし。常の束髪よりも根ゆるければ、首すえるも心からにて可笑し。外にいづるに人の見返るはこよなう恥かし。家を掃き夕食をはりしに義坊のいねもせず愛らしきわざなすを母上もろとも堪へられぬ迄笑ひたり。時計の九時うちたれば御先にとて床に入りぬ。朝より曇りし空はしみ〳〵と春雨ふり出しぬ。（四月一日）

和文體の日記とは珍らしい、もう凡てが口語體になつてゐるのに、斯う云ふ文章を綴る人もある、長所もあり、短所もあり、其修養を賞す（評）

○初春日記　下野　みつ葉

二日

日向ぼつこして、花ちやんのお髪を結つてあげた。

不意に『あら姊さん』と動いたので、折角、結めかけた元結が拔けて了つた。

『動ちやいけないよ』と叱ると、

『だつて鷄がお松様へ進げたおめんこを飛びついて食るんだもの』と、可愛い顔をふくらして、又、色絲を指の先へぐる〳〵からみ始めた。

角兵衛獅子の太鼓の音がだん〳〵幽になつて、ひろめやの手風琴の音が近づいて來る。と、花ちやんは、凝と耳を澄して聞いて居る。

ぽか〳〵と暖かで、何となく眠氣を催して來る、上手てはないが、春の野の曲である。と、思ふたとき。

『來れや友よ打ち連れて——』と花ちやんは徐ろに首を振り出した。今度は默て手をやめて様子を見て居るのも知らずに、お調子に乘つて大聲して謡ひ出した、あまりに可笑いので、遂に笑ふと『何？』と、私を見上げて『堪忍よ』と氣付いたのか、ちやんと座つて、又結

をかがり始めた。罪のない子である。（日記の一節）

文章がうまい（評）

○お汁粉と生花

淺草　みどり

一月四日。けふはおひる前に小豆をうでゝ、おひるから餡をこしらへる、つぶし餡を半分こしらへてあと漉し餡も一度はこしらへて見ないと、よそへいつてから困るからと母上の仰せで半分づゝこしらへました、尤も家では今まで餡は皆さらし餡を使つてゐたので私は餡をこしらへるのはけふが初めてなのです、うでた小豆をよくすつて半分はその儘つぶして使ふので殘りの半分を水でとかし味噌漉でこして出た水を今度は奇麗なきれで固く漉して出た水をすてゝきれに殘つたのをとつて置くのだとくれ〴〵も仰しやいました、餘程前の話ですが或る知人の家で反對にきれに殘つたよいのをすてたといふ事をきいて失策のないやうにとの事です、こしらへた餡でお汁粉をこしらへて居ますと丁度從姉の八重子さんがいらしつたのでお汁粉を御馳走しました、よるは大勢で賑やかに夜の更けるのも知らずにかるたをとつて遊びました。

一月五日。おひるから生け花を買ひに行く、乙女椿を買つてきました、活けやうと思ひましたけれ共まがなくてよしました、夕方庭で父上が雀の子をとつてきましたので生き物の好きな弟はすぐとんできて籠に入れてやつたりお米粒をやつたり大騷ぎ。

一月六日。座敷の掃除をして居ますと弟は起きてきて第一番にきのふの鳥籠を見ますと、哀れや雀は死んでゐましたので水を飲ませたり何かしましたけれ共もうだめでした、おひるからきのふの椿をいける、木が固くて一時間の餘もかゝつてやう〳〵活け終る、いらない花があつたら下さいと弟が云ふので二三本やりましたら庭の方へもつていつたので、何をするのかと思つてそつと見てゐますと、弟はそれを四阿のほとりに、けさ雀を埋めたのでその前へ花をさして居るのでした。

所謂趣味と實益を兼れた日記（評）

○待人おそし

大阪　上田光子

一月六日、初掃除だといつて、二階から下座敷へとふき掃除をした、始めはお湯を戴いたので、なんとも感じなかつたが、終ひに水でした時は、あゝ寒の水はつめたいなー、と思つた、ぞーきんの汚れが、湯とちがつて、水は早くおちない、一つは手がつめたい勢であらう、暮れてから、お地藏樣へお詣りした、そこで一錢だして御くじをあげた、歸つて見たら、始めに、「待ち人をそし」あゝいやな御くじ、外は寂しく靜かな

中に、何所かを通つて居る、お僧の寒業の鐘うつ音がいやに寂く聽える、

一月七日、まだ片附ない内に、呉服屋が初廻りと言つて、通ひと物さしとを持つて、是非一度見てくれと云ふ、しかたなく見て、硫球を一つと思つて、ならべた最中、門口をくゞつて、這入てこられた女客、今日は七日正月の御禮にと、呉服屋の方は二三反をいて歸つていつた、御禮の女客を、お愛相ずるので、又忙しくやつと、お客が踊られたら、過ぐ電燈がついて居つた、

私は後片附もせず、朝の琉球を、火の光に輝して、これにしやうか、あれにしやうか、と寝る時迄も、きまらず、まよつて居つた、

一月八日、朝飯をすまして新聞を讀んで居ると、突然母樣が、なんだか今日絹さんが來なさるやうな氣がするは、私は來なさらん、と云つた、いや來なさる、來なさらん、と云ふ、午後二時を報じたので、買物に出かけやうと、奥て羽織を着替へて居つたら、門口の開く音がした、誰かと見に出ると、今朝母樣と言ひ合つてた絹さんてあつた、それは京都の從姉て、春早々來るとは、冬の便りにあつた、けれど一昨日の御くじが、「待ち人おそし」とあつたのてつい、夜になつてその話をして大笑ひした、私と絹さんとは、二階の四疊半て寝床を取つた、床に入つてから、ボシャ／＼話して眠られない、十一時がなつても、十二時がなつても、一時も二時も、結果、三時がなつたのも、うす／＼聽ひて居つた、



○田舍の元日

因州　浪子

一日雪は昨日のまゝ少し凍つてそして家根には細い氷柱が下つて居る、疊障りに足の裏が痛い、母上は四時から起きられたとて美味そふな萩餅はもう出來て居た、神樣や佛樣へのお供へが濟むと皆お膳に付く、兄上のお膳も据へて、今年からは新暦の正月を祝へと布令たのだか突然だつたのてお飾丈けて了はれた、誰家もそうだと千代樣仰つて居た、九時配達の郵便に五枚端書が來る、二十七日出した小包と翌日送つた爲替の受取、昨日から頻りと待つてるのだが皆他人の賀狀許り、京城の山本樣からのも有る、兄樣は冬休日歸郷爲るとても云つて遣られたと見へる、靜雄樣は自分の姿を端書に採影して下に雛が今卵を破つて出て來た許りの濕つた樣な軀を縮めて立つて居る處、一寸愛矯があつて可愛かつた、晝前から風が荒んで吹雪と成る、私も賀狀を書いて良一樣に投函を頼む、今日年嗣にお出の方は山脇の兄樣と小學校の先生。

和歌

与謝野晶子選



○（天賞）　常陸　秋山欣子

葦鴨の飛べる古沼の枯葭と我おとろへといづれ淋しき

○（地賞）　長野　東篠周子

魔の来り耳ひきわれにさゝやけば黒髪の皆みだれとぞすれ

○（人賞）　兵庫　辻井浪子

友禅の襦袢の袖を目にあて、泣けば歌舞伎もさびしかりけり

【秀逸】

○　能登　旦田暁星子

罪をかすしらはの刃もつ奴戀になやめるわか胸をさせ

○　豊前　赤田綿水

くれなゐの梅の林の絶えまより釋伽の御像のほのみゆるかな

○　信濃　安坂富美子

ゆく春や獣もわれも今日といふその一すぢをゆるやかにすぐ

○　大分　本田一枝子

うら庭に小鳥のなきてさびしみら春のあさげに君を見るかな

○規定　別に新派舊派の名稱にかゝはらずと雖も成るべく清新の作を迎ふ一人一首限りにて必ず半紙又は罫紙に認むること一人にて二首以上ある時は没書とす丙種の賞を送呈す

○　大阪　板倉小雪

浅みどり我葉の中に御塔と櫻もしるき京の山かな

○　芝　長谷川静枝

ふる里の葦屋の軒のつるし柿赤きが眼にうかびぬれ

○　大阪　木村花子

雨ののち春風吹きぬ七色の衣をかつげる虹の少女を

○　兵庫　杉山春翠

君戀ふとつげしゆめには似もやらぬよはき心をわれみさけりぬ

○　大阪　今西春江子

春雨や名しらぬ紅の花あまた堤めぐりぬ廣澤の池

○　小石川　近藤愛江

春の瀬櫻貝ふむ七人の素足ぬらしぬ相摸の海に

○　大阪　山内溪子

千人の僧らあつまり御經誦す様にも似たり月の杉原

○　山形　くしは子

玄雲の大谷とさすをちかたを見る心地しぬ去にし日おもへば

のろ／＼と黄昏の街あゆみけるほろびし國の人の如くに
○　下谷　細谷鏡子

ほとゝぎすわずかにきゝぬ山梨の花ちる樣に星きゆる空
○　千葉　小倉とら子

かぎりある絶ゆる萬象を思ひてはなく童子に似たり
○　岩手　四戸波江

土窟の奥のくらやみ辿る如と母なき家に一年すみぬ
○　四谷　笹原芳江

何となきひとみに我のさそはれて御膝により涙ながしぬ
○　豐前　赤田すみれ

たとへなば星か眞珠か白百合を讃むる君が二つのおん目
○　大阪　四戸欧江子

紅さして小窓に倚れる人若し紅梅薫る春の夕ぐれ
○　京橋　細川榮子

君影にそれとは見えれしら梅のにほひぞほのに袖にしむかな
○　千葉　岩田よし子

白き花夢のごとくも群れ咲きて小雨はれたる野に月さしぬ
○　大阪　筒井花子

はる／＼と出て立つ君のみちすからつゝがなかれと祈りけるかな
○　備中　林靖子

亂れ髪百々千の蛇のうごめくと思ひはすれどうとまれぬ君
○　土佐　大和田しづ子

遙かなる白帆の上に夕日てり入江の港今暮れんとす
○　遠江　佐原春子

○　土佐　井上いち子

誰を思ひ誰をしたふにあらざれど春雨ふれば戀もこそすれ
○　熊本　佐々木道子

木の葉散る秋すぎ雪の冬もすぎ花咲く春を迎へけるかな
○　紀伊　谷田峰子

いかにせむ手折りて送る人もなし籬に咲ける紅梅の花
○　下總　戸倉ふか子

逝く秋のこはなきがらか小雨ふるゆふべ見つけぬこてふのむくろ
○　紀伊　文子

美き人もみにくき人もみなけふ春風にふかれてあるや
○　福島　野の花

この歌を君にいはれず獨居の百合が根もとに埋めておきぬ
○　信濃　駒澤ひろ子

春風はわが戀ふるなる少女子の長き袂をかろやかに吹く
○　陸中　北條ふみ子

悉く結び合はせし姿髪の丈より長きわが思ひかな
○　茨城　田村波津子

何故に君諫めますやうき事を我も七とせはなれえぬ子に
○　本郷　渡邊秀子

亡き母と語りし夜半の夢さめて筧に寒き水の音きく
○　牛込　平塚白百合

妹は雪の兎に南天實の赤き目入れてよろこべるさま
○　南豐　[illegible]子

文見れば消くゆかしき筆の跡春を聞へしこころするかな
○　豐後　安啟子

たゞ一人病みます母の枕邊に物をおもへる君を見しかな
○　會津　宮原天聲子

山路を靜か／＼や旅僧のまとへる衣に春風ぞ吹く
○　熊本　高橋ちか

初春のかすみの中の梅が枝にけふ鶯のはつねきくかな
○　山城　小森[illegible]

遠寺ら鐘の音おはく身にしみて又も取り出すみかたみの文

○　上総　高須春枝
ここちに靄なきぬ靜なあさな山のをとめはうれしかりけれ
○　播磨　内藤以圖
草笛の音近かずきて花もてる少女ぞきつる春の夕ぐれ
○　栃木　杉田直子
新たまる御代は海面も靜かにて沖の釣舟ゆらぐともせじ
○　千葉　宇井花月
七少女素肌いとよし月の夜に野邊に舞ひつゝ罌粟の實を蒔く
○　福井　北　利子
菅の子かつおつおもひ今更につめたき涙かはくひまなし
○　和歌山　北畑直子
嵐より幻に入る夢路にて君を見しこそはかなかりけれ
○　紀伊　室谷忠子
ふとうつるすがたながめてをのゝきぬ少女の日には似ぬ瞳ゆゑ
○　丹波　坂根竹野
何を幸何を戀とか君はいふ一日も心落ちゐぬ人に
○　四谷　味方こう子
三年越し煩悶し胸を開くべく鍵をたまひぬいざかたらはむ
○　千葉　石井きぬ子
谷川の水音幽いてなづかしき君を思ひぬ靜かなる夜に
○　紀伊　三栖つるゑ
長閑けさよ心はとべる胡蝶にもかはりあるまじ春の園ゆく
○　岩代　丸山美代壽
紅椿は寒念佛の鐘の音に淋しく散れり京の山里
○　牛込　佐藤房子
胸の心の海に今日もまた小舟うかべてただよふここち
○　淡路　加藤菊子
我耶のすべてを冤りし心痛してふたゝび引きぬおほ前の鈴
○　兵庫　米　江
あたゝかき御胸にすがりて泣かむわれ木枯しするび雨ふる夕
○　相模　渡邊入重子

君をよび小窓によれば夕づく日美くてり榮へさくらちるかな
○　美濃　松本きみ
亡き兄の御墓の前にぬかつけば哀れに響く尼寺の鐘
○　上総　北田信子
さくら咲き暮れて明るき春の夜はいつしらみしかさかひもしらず
○　千葉　長谷川文江子
草青み花ゑまひたる其野邊に君と二人の樂しかりし日
○　安房　阿部けん子
なづかしき友の便りを見るにつけそゞろに思ふ我幸なさを
○　丹波　阪井峰子
晩秋のたそがれ小道歌ひゆく歌につゞきぬ入相の鐘
○　京都　祝前春枝
夕づく日白雲ちぎれ迷ひ行く遠方山の頂きに照る
○　横須賀　今村秋子
ざはざはと流く流るゝさゝ川に影して春の夕月いでぬ
○　長崎　一瀬みとり
海神の手してさゝぐる日輪は出でゝ春日の波しづかなり
○　廣島　賀川みづ繪
わが戀はみな涙なりなげきなり涙のなかに君も住みける
○　和歌山　木澤てる子
風吹かば散りゆく身とも白露の淡紫の花に宿れる
○　秋　秋荻
ゆきそれて枯野にひとりたたずみぬ托鉢僧のきつれに似たる
○　笠岡　田村かれ子
京ちかきひなの里には春の來て家毎にかへる燕のなく
○　千葉　吉井光子
降積る雪に埋もれ咲く花のくれなゐに似しおん顔の色よ
○　北米　るり花
幾度か人にふまれし戀草の花はあとなくなりにけるかな
○　長門　田中華子
胸の野に乾ける石は吐息して幽かに訪ひぬなみだの水な

○甲斐　網野やす子
山寺の杉の水立なふく風の音ものすごき神無月かな

○群馬　木暮やつ子
うす霞む林の中に樵人の家ほの見えて春の風ふく

○廣島　唐樋澤子
風荒む枯野が原の枯藪雉を呼ぶらん小手を翳して

○上毛　岩田せき子
病みぬれば西に南に神おはし死の黒糸をたぐると見しよ

○上毛　須藤淺子
限りある尊き命食まるゝと知るや知らずや時計の音に

○駿河　天野ふじ子
拜殿に紅梅衣の童たち舞まふ日なり二月のゆき

○横須賀　渡邊登喜子
亡き人がある日手植し思ひ草すすきのもとにいでにけり

○三河　永田舞鶴子
春の風そよ／＼吹きてわが許え雲雀のうたを送りこしかな

○阿波　西野花葵
長き袖かゝげて磯に貝ひろふ少女なりけるあけがたの夢

○茨城　初澤さく子
家にきて若き血汐は燃えにけり野に草刈らばいと安かるを

○淺草　捷能綱子
朝ごとにかずそふ梅の枝にきて何をよろこびなくや鶯

○大阪　順子
花簪や黄ざし桜ざし白銀の色ことさらに美くしき夜

○福岡　角銅ゆき子
誰か來て胸の扉を打ち開て悩み取り去れ我れぞ悶ゆる

○信濃　山本操
庭や見ん菊や愛でんと我園に人集ひ來る秋のはれし日

○磐城　近藤壽子
雲の領をば洗ふ門川に白梅ちらし春の風ふく

○牛込　塚原けん子
たそがれの海靜かなる磯の邊に君と語りぬうす靄の中

○伊豫　ぎよう子
紫の山のあなたに沈む日を立ちつくし見て涙しおちぬ

○靜岡　冨永聰子女
われたどる野路たそがれてひんがしに月あらはれてそよ風ぞふく

○大阪　鹿島殻子
欄に凭れる少女の細縫う蝶ずとばかり春の風吹く

○群馬　飯島花紫子
天地をかざる五彩の虹消えて雨せまりくる湖添のむら

○松江　鈴木さなへ
湖より少しすぐれて廣かりき山の上にて我が見し湖は

○下總　三森ゆき
生酔えのまろ寢の君のやさ眉に春の灯照りて美しき哉

○若狭　山田小濱
秋姫のまさぐる銀鈴さながらに醒うく池の寛したゝる

○上毛　直子
わが心ふりつむ雪のそれの如といとこまやかに君をおもひぬ

○若狭　速水あい
悪魔と云ふ悪魔四尺の身をせめて弱き心を食まんとすなる

○上毛　納尾子
青春の血燃ゆる香ぞと思へどもやまひのごとしこのごろのわれ

○廣島　田坂芳溪子
静ならで誰か知るべき我胸の金の戸あくる白銀の鍵

○備中　島鶴島子
君よべと招けどなそし足なえて死の島の見え雪の霧ふる

○下總　小澤まゆみ
うつろなる我胸のうちみたさんと疾風の如く幻來る

○北海道　河合萬子
蓮の原見渡すかぎり露光る秋の夕に笛ふくわれは

○三河　鈴木まゆみ
怨み得ぬ光りと知れど暗やみに立つ吾なればひたに祈りする

○ 四谷　來方こう子
吐く息の紅焔ともなれ胸に燃く飢みのほむら君を灼くべく
○ 下総　楓山芳枝子
雲に痩せし我が影みつめ我はたゞ寂しみぼゆ春の灯の前
○ 札幌　杉　葉　女
しら雲の漂ふあたりわが君の里にあらぬかなど思ひ見ぬ
○ 茨城　中山けい子
山のかひ明くるも待たず梅の香にさそはれて啼く鶯の聲
○ 香川　野木百嘉
雨の日に君とかたりし其かみをつくづくけふはおもひいでつつ
○ 京橋　近山紫子
罪なき身一人なげきて胸悶え白きさうびを地になげにけり
○ 陸前　岩淵たまき
あゝ酔ようき夢かさむ我が胸にやすらひの時を暫時與へよ
○ 廣島　すゝき
まくらべに蘭の香にほふわかれやや殘の月のほのにさすかな
○ 静岡　清　子
小女子の清き雨に似たるかな月すむ夜半の松をとふ風
○ 茨城　白鶴子
青白き尾ながら曳いて星ひとつたつみにとびぬこがらしの風
○ 岡山　三船花子
まぶしくも春日をうけて眞帆片帆島よりいでゝわが岸にくる
○ 筑紫　梧桐知登子
ふとみては嬉しさ滿ちぬ白雲のむらおりとべる春の日のそら
○ 信濃　岩波むら子
御公主のみ車緩く廊通り前に後に人美しき
○ 千葉　椎名津留子
天地のはてしは遠く知らざれどそれにも似よと戀ないのりぬ
○ 若狭　蝶夢子
臙脂の紅き灯の影さゆらぎて窓緣の隙に桃の花散る
○ 岐阜　日野秋子
火の消えし寒さをおぼえ目ひらけば有明つぐる寺でらの鐘
○ 鳥取　桑木さゝ子
春風は戀しき人のやは息か胸を躍らせほゝゑませつゝ
○ 美濃　をとめ
君ゆへに行くべき方もこし方も忘れてし子を憐れと見ませ
○ 日本橋　松岡千代子
梅に鳴く春つげ鳥のさへつりをわが弟はまれびてぞ云ふ
○ 弘前　長尾きよ子
さくらの香すると小窓を見かへれば白あやなして春の風ふく
○ 沼津　飛奈久枝
青柳の風にみだれて我が門は春も淋しき月のかげかな
○ 下総　白百合女史
あたゝかき潮のながれにうかびきてくるしくもさく疑のはな
○ 伊豆　木村緑霞
山寺に紅梅にほふ春の宵吾手により母逝きましぬ
○ 常陸　夢　女
夢に泣き夢に喜ぶわが胸をなどて笑ふや夢の世の人
○ 三河　天野清子
月ならば十六夜とせん花ならば紅こきばらよ二八の少女
○ 丹後　久斎田桃代
かよわなるつばさ與へて涯知らぬ大空行けど冤は我み負む
○ 熊本　原田澤子
汐風に髪のほつれ毛ふかせつつ冴ゆる行く月に物思ふ哉
○ 福岡　圭　枝
白蝶の數萬一時に舞ひ舞ふて深山櫻の群して散り來
○ 伊豆　細井りゑ子
君來しとふと振り向けば棕梠の葉の風にわなゝく小さき音なり
○ 宮城　沼倉綱
佐保姫が笑みて立つらむ香する千花咲てる春の野中に
○ 兵庫　玉　子
野に見て朝忘るゝかりそめの夢にも似たる戀をわれせじ

○　京都　綿引古都子
よわ／＼と冬の日影は傾きて水枯さむくたそがれにけり
○　大阪　喜代子
ふといてて暮れゆく空を眺むれば涙ぞおつる人おもふわれ
○　岐阜　中村さわ子
白鷺の昇ると見へぬ年古りし庭の雄松に雪積みし今朝
○　信濃　小林美喜代
白梅はほの／＼明けし我が窓の遠なる富士におなじ色する
○　信濃　山越三千代子
富士の山霞ぞ引きぬ黒髮の烟にいく筋かみだれし様に
○　静岡　壽衛子
あら海や雄々しき君の手にすがり白波いづる月を見しかな
○　岐阜　鎌田とみ子
時の神うらめしき哉ふく息をすふまもあらず我を押し行く
○　埼玉　岩田不在子
うれしさは君もろ共に八千草の園をさまよふ夢よ幻よ
○　牛込　小林こと子
冬枯の寒き今宵を文よみてながき一夜を忘れつるかな
○　喜惠女
我が望み敗れたる時草も木もひとつに枯れよ我が世とともに
○　豐後　阿南りは子
たのしげに吾々對する七人のよき姫ありぬ初春の宵
○　若狹　津田沙女
よひてなほ夢をむさぼりかにかくと歌へるわれはおろかなるかな
○　伊賀　山村龍子
君すてし弱き心はこのわれを悔いの獄屋に殘して去にぬ
○　大阪　寺部君子
この君の得ならず匂ふ黒髮を花かとゝめて來しか胡蝶は
○　備後　月枝
美貌女に似たりと告げし其の日より鏡の中に母を見ぬ我れ
○　神戸　山下伊佐美子
濃く淡くもや紫に棚引きて湖風薫る湖添の村
○　下野　澁澤秀子
宵の星おんつむりみないと宵し黒衣まとひて夜の御堂にある
○　京都　向井光子
あたゝかき太陽を背にうけつ若き姿猫と仲よく衣縫ひにける
○　北海道　石川喜世子
風寒く世のものは皆こぼれどもなほ暖き人こふる胸
○　德島　吉田紫花
山ざくら花咲く春にまたも逢ひぬ小てふに似たる心もたばや
○　熊本　近野春子
吾遂にたゝずと知りて涙しぬ霜夜のかれに胸いたむとき
○　福井　山里
あたゝかきみ手にとられて病身の血しほは沸きぬ苦るしうなりぬ
○　福島　鈴木須枝子
れてさめてもつるゝ胸にうき人の面浮べて怨じける我
○　和泉　金田芳子
美しき蝶よ來て舞へ我が胸に花は開きぬほの紫に
○　奈良　中富よしみ
あゝ處女の戀にやぶれて泣くが如枯野にそゝぐ夕暮の雨
○　京都　岩淵園子
さゝ紅や振袖匂ふ春の宵もの云はぬ子のなつかしきかな
○　千葉　峯島區華子
たそがれて暗きに沈む西の空野百合の如き星の花さく
○　名古屋　渡邊みつ
はる雨に櫻の蕾開く宵小窓によりて涙する人
○　伯耆　新田文野
冬枯れの野にもたとへん我胸もおん心ゆゑ春を覺えぬ
○　備前　大釜梅香
いさゝ川おぼろにうつる月影にむれの秘めごとさゝやきてみし
○　周防　としこ
あはれこの冷き冬の夜の月を涙しつつもおほき見るかな

み棺より小蝶生れ御墓より紅のさうびの咲かむとし思ふ
○　大阪　若宮やゑ子

夜の夢に君の姿をほの見しは霞の中のにじ見しこゝち
○　三重　小宮禾子

ほの見しは水美しきさゝ川に米をとぐ君のくろ髪のはし
○　山城　廣江正枝

日は沈む悲しげになく鴉の聲きく時ぞ我もまた泣く
○　廣島　末丸いつ子

移りかはる雨にもにたる小女子の文よと君はまどひ給はむ
○　茨城　荒木利喜子

我が胸を二つに隔つ冷熱は君をも戀ふる君をうとんず
○　長野　藤本久枝

我が胸に海あり船を浮べたり船に歌ありきゝにこよ君
○　青森　竹野秋子

何といふ思ひもなくて立ち出でぬ春の風ふく水のなぎさへ
○　山口　深山雲

入瀬の里いでゝ三里を京に入る菖桑實の頬に春の風吹く
○　大阪　植村あき子

月落ちぬ島の松原わけ入れば朝の霧してうしほ浪鳴る
○　羽前　白露子

廣き海見つるが如き十八日のわが思ひいつうせにけむ
○　本郷　千とせ

二ツ三ツ門の白梅さきいでぬ暮れてこよや君と鶯
○　横濱　石井芳子

雲の山より湧きて菜の花の中ながれゆく春の水かな
○　本郷　船越桂子

ふるさとの南のどての路の花かつては君が髪にはさみし
○　磐城　森ふみ

里人の行きゝの袖もおもしろき小松が原の今朝の霧かな
○　能登　旦田曉風子

心なくて引かるゝ人を戀しみぬ星ふるな君神ある世なり
○　四谷　霊子

おもひてやあゝまだひとつ我胸にそよぐ木の葉ののこりたるかな
○　越後　佐藤涙子

月あかく照らす夜われは果もなくすゝきつゞける野をおもひけり
○　上野　もと子

目ひらけばその野はあらず君もなし夢の殘りの涙のおちぬ
○　岩代　吉田きせ子

吾妹子が米磨ぐ川の葦の上に春の月こそのぼりたりけり
○　若狭　津田汐汀

君こしと覺えて月の戸を押せばそことしもなく梅薫りきぬ
○　大阪　山内溪子

別れの日御酒をめせよと君にいふ若酔を得ず涙のわしる
○　山形　大瀧くしは

十八の少女といへど山がひの庭に生ひたる苔花に似ぬ
○　愛知　服部翠女

夏姫の琴の調べに憧憬れて窓によりそふ夏の夕ぐれ
○　廣島　岡信操子

山の沼山をうつせる寂寞のたそがれ時を啼くほとゝぎす
○　豊後　菅原芳子

鈴に似し聲ほがらかにもれてきぬ水にそひたる夏の夜の家
○　山梨　井上銀波

我もわれ生を欲りするたわけ者縄のやうなるこの姿えすがた
○　下野　夢の舎なみ子

霜芒に輝く露や逝く秋の月影青しむさし野の原
○　信濃　山越三千代子

白露のあまたくづれてちりし如波にくだけぬ夏の夜の月
○　筑前　田中とよ子

夢おもひそゞろに庭をさまよへば花皆君となりて迎ふる
○　みきよ子

夕風に笹みだれて散る道を妹とゆく歌唄つゝ

安藝　笑岡萩村

○生ひ茂る森のあなたの古茶屋の色麗はしき紅葉かな　信濃　こてふ

○きさらぎの天つみ空に月わりてさむき夜半にも笛ふきてきぬ　大阪　片山千波

○淋しさに雁のゆくへをながむればむかしの夢の思はるるかな　三浦ふみえ

○よりそひて立ては鸚鵡に名を呼ばれ頬を赤らめし頃忘られず　茨城　逸村竹子

○君見ればなほ頬ぞもゆる若き血は君こひしよりうしなりつれど　芝區　中根登志子

○さびしさに魂のをのゝく夕かな虫の音しげき廣原にして　豐後　江口芙蓉子

○春の風わが頬をふきて海わたり夕日華やぐ君住む島へ　茨城　村野白洋子

○その刹那星のみ神の胸にふれて我が罪なくか山子規　大阪　[illegible]子

○春の水渡す舟こそ美くしや入つの日傘に紅の帯　下野　栗原くに子

○霧あけや神をいさめの鈴の音もいとものさびし山の御社　備中　菅森紫水子

○病みぬれば心つたなしふと又も君をうたがひ怨じつゝ居ぬ　群馬　須藤あさ子

○[illegible]ものの[illegible]れ[illegible]打ちのせて池に浮びぬ初秋の風　[illegible]

○砂白き濱のあなたに家見へて松の間漏るゝ夕月のかげ　伊賀　櫻花女

○夕ぐれや二十五絃の音きよく青のすだれもれて聞ゆる　大阪　山内しま子

○君とわれ月に寂しき森ぬけて東の園のあらゝぎを見し　千葉　菅口富子

○去年まではほたるほたると遊びし妹もなし誰にあたへむ　仙臺　三好まさる

○宮城野に月霧淡く所へ渡り鳴みどころなき虫のこゑかな　長門　田中華子

○面なば黒き布もてつゝむ人たえずすぎゆくわが胸のまへ　牛込　小田露野

○秋の蝶夕風吹けばさびしくも野末の花に枕するらむ　伊賀　岡花子

○行き逢ひし人見返へれば其人も我見てありぬ春風の路　相模　鍋田美代子

○戀ひそめし君が御名書き我名書き共に流しぬ七夕の紙　信濃　山越悦子

○胸にしも吹鞴の如きものありて戀のほのほを吹くとおもひぬ　伊賀　荒木ちよ子

○掬みますなあゝ我胸の黒き野を流れゆくなる濁れる水を　水戸　桃子

○月の夜を小琴の音にしたひゆけば吹く風かをる木犀の宿　信濃　唐澤さえ子

○しらしらと薄淋しき夕野路をおん僧一人ゆき給ふかな　尾張　成田いし子

○若き人罪によれりとわれは見ぬそわあくがれとやがてうなづく　下野　栗原くに子

○木犀のかほりほのかに夜は明けてねざめうれしきわが心地哉　茨城　久保田春江子

○なつかしき君を送りて歸によれば音もなくして雨細うふる　大阪　山内溪子

○野の原の君が御家と秋草をぬらして降りぬ夕ぐれの雨　岐阜　日野歌子

○目さむれば淋しき三四の虫の聲雨戸によれば雨ふりてあり　岐阜　日野歌子

○神無月紅葉は散りぬ美濃の國淋しき空は灰色に染む



○規定　論文と云へどむづかしきことにあらず諸嬢が考へしこと思ひしこと文學上又は一般女子に就いての平易なる論談を歡迎す二十四字詰三十行以內一人一章に限る乙種の賞を送呈す

○身體と靈魂（地賞）

岐阜　滿佐子

人と云ふ者は躰と靈との二つがよつて成立つて居りますが此の二つの者は丁度客と主人の如き者て、即ち躰は客てあつて靈は其の主人て有ます、故に凡そ身躰に屬して居る者は皆主人なる靈の命令に從つて働くのです、親に分れて悲むのも女子文壇の盛になつたのを見て喜ぶのも、朋友を愛するのも皆な是れ靈のする事て躰の働きては御座いません、實を申せば靈こそ眞の人間て躰は其道具たるに過ぎないと私は思ひます。かの楠正成を忠義の士てあると世間の人が賞めますのも彼の躰を讃めるのてなく其の內に宿つて、君を敬ひ民を愛した忠義の靈を云ふので有りませう、又彼れは善人てあるとか惡人てあるとか云ふのも顏の美醜を見て申すのてはなく、たゞ其心の善惡によつて定めるのては有りませんか、斯樣に靈が一身の主人て躰は其道具たるに過ぎないとしたならば靈の躰より大切て尊い事は客の主人が其客より大切てあると同じてせう、然るに世の中には往々此の理を間違へて躰を自分と思ふ者から中に靈のあつて是れが主たる事を全く忘れて居る人が有ります其れ故に躰の爲には何を喰べ何を飮まんと日夜思ひ煩ふと云へども自分の靈の饑ゑ死ぬるを顧みず髮の飾や衣服の爲には多くの金を費やして惜まざるも靈には一錢の飾も附けず、顏を洗ひ磨く爲めには糠や石鹼を携へて每日湯屋に通へども我心の汚れを洗ひ落して靈を淸むる事に力を用ふ人が何人ありませう、恐らくないと申ても差支ないてせう、誠に悲しい事ては御座いませんか。然れば早く世の中の人が迷ひの夢を醒まして自分の正氣に立かへり躰を美くしくするよりも靈を淸らかにする事に心掛てほしいものです。

此作者滿十三才と云ふ事ですが、こんな大問題を捉へ稚氣多き筆を眞面目に運んで亂れなかつたのは手際てした、論旨は大人仲間ては疾くの昔から云ひ觸るされて居るから彼是申し樣もありませぬ（評）

○女子と理科學（入賞）

大阪　井上すま子

世の開けゆく基となりますものは理科學であります、理科學は思考力を起さしめまして、其もの丶状態を講究する學課であります。世の多くの人は女子に理科を學ばしむる必要はない只讀書と裁縫とが秀て居りましたならそれで世の中に出してもさしつかへはないと思つてをりますけれど、これは大きなあやまりであります。その目的は第一に家政を執り又子女を養育いたしますにつきましてまことに大切な關係をもつてをります。先づ衣食住から云ふてみますと土地氣候によりまして衣服の地合を異にする理や住居の撰び方や飲食物の調理などは皆理科の智識を必要とするのであります。女子は行末人の妻となり母となつて其子を養育する大切な務があります。稚い小兒の內には何事もうたがひを起し質問をするものでありますから其時には母となつたものが理科學の智識を以て其理由をくはしく說きあかし尙進んで後世の開明をはかる事を誘導せねばなりません現今世の中を見ますに種々の機械の發明せられまして千里の道もわづかのまに行交ふ事ができ又居ながら遠き友と話す事をも得る文明の進歩はじつに大きなものではありませんか。これらの機械は皆理科學を應用して作つたものでありまして、それを考へた人は皆外國人であります。故に私どもは今から理科學の智識を有しまして成長の後には子女を養育しますにかの西洋の大家にもまさる者と致さねばなりません。

是れも論旨は陳套ですが、此作者に取て新らしき思想の權威を尊重します（評）

【秀逸】

○妾の要求

大阪　植村あき子

敎化は進歩を生じ進歩は一面に於て舊態の破壞を意味してゐる以上、敎育されました妾ども女子が、其程度に應じまして相等に、各自獨立の天地を有すことを知り、女子が人格にも亦獨立なる精神丈けは、什うしても生命と共に愛さねばなりませんと自覺致しましたからには、今更其不可を論ぜられ、自覺の悲哀を說かれましたとて、そは妾どもに詮も無き業で有ります、妾どもは、天動說の昔に地動說を稱えました爲に受けました攻撃に「地球が回はるから仕樣が無い」と答へました人の立場と同じで有ります。

しかく現はれました時代の思潮想流におくればせなる是非の論評が何の權威を妾共に持ちませうか、まして

や女學校の沿革史が、女子教育の樣な文字の數千が並べられましたとて、夫が果して既に自覺の曙光に觸れ初めました妾どもの爲に、婦人問題を解決すべき鍵となる事が出來ませうか。

およそ男子方が、女子の自覺に就いて、今日も尙其可否を論ぜられ、又は社會の勢で有るとか申す樣な說をお立てになりますのは、餘りに婦人問題に疎いと申上げねばなりません。

奔流の勢で進んで居ります此女子の自覺てふ思潮が、是非の說に依りまして、其高潮の漲りを止めます程に力の無いものとお考えになるのでしやうか、されば女より立ち勝れりとの自覺と名譽とを擔ひます男子方は、西洋には既に前世紀から繰りかへされました紛々の論よりも、多少は新らしい御議論を願ひ度いものと存じます。

妾共が誠に望ましく聞かまほしいのは、新渡戸先生が新年號にて仰せられました「つまり婦人を何所迄も開放して獨立せしむると同時に、社會も夫れ〲道を拓かねばならぬ」との此數語が具體的に述べられます事にて、斯くて女子の自覺てふ問題が解決の途につくので有ると信じます。

鋭い筆致ですが何だか態と理屈を無闇に捏ね廻した樣な嫌ひが見えます、かくては徒らの閑葛藤となつてしまうのです如何でせうか（評）



待合室　　名古屋　江宗よし子

○我が見たる初期の女學生

播磨　內藤　松圃

かつて雜誌の口繪に見、先生のお話にも聞き爾うして空想に描いて居た女學校の生徒と言ふものに成つて、初めて女の靴と言ふものをはきセルの袴を胸高に着けて、聞きなれぬ鐘の音に分り惡い幾廻りかの廊下を通つて、生れて初めて一人一脚の机に向つた時、其の人の心中には必ずや、我れは

女學校の生徒で有ると言ふ自覺の念が浮んだ事で有りませう。此の時に當つて其の人は又、必ず自分といふものを認められませう。そして小學校卒業後僅々十日餘りの間に自分が大變偉らくなつた樣に思へて、小學校とは遙かに〳〵かけ離れた高い處に止まつて居る樣に思つて居られるでありませう。初期の女學生はよく故郷の友人に手紙を寄來される、中には生かぢりの英語も交つて居る、故鄉の友懷しの美しい情も無論有りませうが、中には自己の得意をおさへ切れなくての筆のすさびもありませう。夏休みが來る、歸省早々行李の始末もつけないで、自分が世話になつて居た小學校へ飛むで行かれる、先生への挨拶も有らう、友達見たいの情も有らう、けれど其の心中を細く解剖して見たら、恐らく其の內の五分は己が女學生姿を衆人の前に誇る事で有りませう。大抵の人が必ず、頭から繻絆の袖から、袴、靴に至る迄常よりより以上のハイカラ姿で行かれる、言葉は無論江戸ッ子である。校門を這入る、衆人の目が一齊に自分の一身に集まる、其の人は必ず得意に違ひない、そして第一にテニスをやる、思ひ切つてきつい球をやる、審判官は獨りで持ち切るといふ勢、其の元氣の旺盛なる事昨の先生もおし込め兼ねないと言ふ有樣、彼れ等の虛榮心は此の時滿足の絕頂に達して居るのでは有りますまいか、傍から此の樣を見ると其の淺薄なることむしろ哀れむべく、見て居る者の方が却つて顏が赤くなる、けれど未熟な女の虛榮心はかくも有り相な事で又大抵の人が踏むべき經路で有りませう。

これも青春の戯りですから少しは愛嬌で宜ろしいでしよう（評）

○思ひのまゝ

明石　田中落葉子

「下手な事程、つとめなければいけない。下手といふのは、骨折らないから、下手になるのだ。」と、先生が仰る度每に、私は胸の底に一種いひ得ぬ淋しい響を傳へられます。

成程、先生の御言葉も、御尤とは存じますが、然し、然し、これからは、自己を明かにしなければならぬとき、それに、自分の長所は捨て置いて短所を計り自覺して居たらば、如何でせう。「あゝ自分はつまらない者だ」、といふ感念は盛大となつて、忽ち心身はこれが支配を受けるでせう。さうなると、自暴自棄とでも申しませうか。心が冷たくなつて砂漠の眞中に、一人捨てられたよりも、心細さを覺えるでせう。

一度數學の試驗に失敗しても、「何故私はこんなに出來ないんだらう」。と御飯が、咽喉を越さなかつた事さへあります。これは幼い私の經驗ですけれど……斯

の樣に、只一つの失敗から知つた短所にすら、こんな思をするものが、漠然としてはてもない、世の大海原に放たれて、永久に力を試めされる折には、數へもきれぬ、澤山の失敗に對して、一々自己の短所を見出したならば、どんなてせうか。「この世に自分ほど、缺點の多いものはない。廣い世の中で自分の自由になるものは、一つもない。」といふ感は切々として手弱い身を襲ふてせう。結局は悲哀と寂寞との中に終らなければならないてせう。

私は思ひます誰とても、短のないものはない。短をおぎなふは、尤の理てすけれど、それよりも比較的自己に於て、長じた點は、これを自覺して、是をたのみ、又充分糧を與へて、自分といふものを重んずる方が、遙かに勝れて居ると思ひます。小さい、幼い、自分の經驗とても申しませうか。それに對する感じを書いたもの故、筋の通つて居ないのは勿論と存じます。皆樣の中でも、夜の反省の時、こんな事を、お考へなさる方が、ないてもございますまい。

一部分の短所と其人の全人格とは、一所に云ふべきものではありません、人は短所なり缺點なりがあるから漸次に修整が出來るので其短所缺點を以て直ちに「もう駄目だ」と跌蹰するのは一部分の失ては無く其全人格が病むて居るのです、長所を自覺してます〳〵發展せしむる必要もありますお品性の修養は寧ろ短所を認めて常に努力を重れて勵まする所にあります（評）

○誠心

甲斐　網野やす子

誠心の無い人との交際程趣味もなく又頼りにならぬものはございますまい。

嘗て私の友達に糸子樣と元子樣といふ二人がありました。糸子樣は私に大層よくして下さいます。そして誰樣は貴女の事を何と云ひましたよ、彼と云ひましたよつて告げ口をもよくして呉れました。そして又お對にリボンを掛けませうとか、半襟をお揃ひにとか仰有つては美くしいリボンや、半襟などを、時々下さいます。そして私に對しては、一度もいやなお顏をなさつた事もありませんし、又いやらしい事を仰有つた事も無く何でも私の氣を取らう〳〵として被居つた樣でした。けれど、どういふものか私は此方には心の奥底を打ち明けて御話する事が出來ませんてした。それてすから話は何時も、通り一片のほんとに趣味の無い事計り、それて物を戴くと、返禮をしない中は氣懸りて堪らない。……斯ふいふ風てしたから面白味といふものは些少とも無い、只表面計の交際て何だか物足りなかつた……。

けれど、元子樣の方は極お口少なて決して媚らひがましい事等一寸もなさらず初めてお交際申した時は何だか面白味の無いほんとに滿らぬ人の樣てしたが、交際へば交際ふ程慕はしい樣な頼もしい樣な氣がして、いつか親しく成つてお互の身の上話等仕合つて共に泣いたり、又行末の事等を話し合つては後て、マア飛んだ事迄お話して仕舞つたわね、けれどいゝわ二人の仲て

すものといふては又話し續けた事も幾度あつたか知れませんてした……。それてもうお二人共お別れ申して三年……糸子樣からは其後只一度お便があつたきりそれもほんとに義理一片の。けれど元子樣とは今も尙昔乍この交際を續けて居ます。

私はつくぐそう思ひました、人ても人には誠心が無くつては駄目だ。決して媚らひ等は必要ない。何事に對しても此誠心の二字さへ以つてすれば夫れて宜しいと確く信じて居ります。

論旨は其通りてすが、もつと引締めて書く事が出來たらうと思ひます（評）

○雇人の取扱ひに就て

福島　香野やい

妾は昨年の春他家に嫁してより雇人に就ては、餘程注意を拂つて居りますが、よく考へてみますと、實に、かはひさうなものてす。ある時、雇人に向つて阿方は、兩親兄弟がありますか、と問へば母はありますけれども、父は私が五つの時に死にましたので、今は母と一人の兄さんと、妹とあるだけてす。其兄さんは、日露戰役に、出征して敵彈の爲めに片足思ふままならず、只今の不自由は、どんなてあるか、私の口ては云ふてとが出來ません、と涙を催しました。一般とはいはれませんが、雇人ともなる程の人は、大抵こんな境遇にあるだらうと思はれます。されば、雇人だからといつて、過度の使役は、餘程、考ふべきことてあります。如何に、雇人とはいへ、感情のある同じ人間てあります。人の力には、限りがあり、其仕事は、殆んど無限です、かく限りある力て、限のない仕事をするのてすから、雇人その者は、餘程ゆるやかにされませんと、身體のつゞかぬことは當然てす。ところが、世の中は、左樣に許りはゆきませんもので、隨分と、痛み入つたことをする主人もあるのてす。それは、それは、妾の筆には、及びません、如何に給料を拂つて、雇つてあるとはいひ乍ら、其人の現在の境遇を察したなら、隨分憐むべきだらうと、思はれます。懷かしき、故郷をあとにし、自分の親、兄弟に別れて他家に雇はれて來る、其人の心中をよく察してごらんなさい。ほんに淋しくたよりなく思はれるてせう。

雇はれて來る其人も自覺して居るものと見えまして、叮嚀にいたはれば、なかぐ熱心に働いてくれます。私は其後姿を見る度に、他人てはあるが、何だか自分の兄弟てもあるかの樣に、慕はしく思はれます。

雇人も妾を慕つて居るのてせう。

雇人の働くと否とは取扱の如何に依るものてす。

「傭ひ人には不便をかけ」と云ふ丈けて傭人を見る思想は今日いさゝか陳びて來てゐるかも知れませんが議論は別として憐みある者は又憐みを得る者てあります、要は根本の犠牲に訴へ人間そのものを重んじる事に依て解決せられませう。（評）

○半面のたより　美濃　千代子

今世の中に流行して居る、一新熟語として語尾に『から』を有するのがあります、來年から一生懸命に勉强するなど丶云ふのです、時にはもう一二年たつてからとか、お嫁入りしてからとか云ふ方もあります、

妾のお友達にはからと云ふ語を使つた人は大方成功して居ません、

畢竟からと云ふのは薄志弱行とでもいふ方の逃げ口だと思ひます、

昔から思ひ立つたが吉日と云ひます成さねばならぬと決心したことは乾度やらねばなりません、勉めて出來ぬことは世の中にありません、若し勉めて出來ないならば其れは何事も到底する見込のない者です我々は若き間に心して勉めねばなりません。

今の世には往々男性的女子になれと云ふ方がありますが妾は斷じて女子は女子的女子でなくてはならぬと思ひます、男性とか女性とか云ふのは已に偏性を示して居るではありませんか、妾は徒に女子は弱者であるとか强者であるとか云ふよりも『女子はどこまでも弱い者である』と云ふことを信じて居ることが大切だと思ひます、强と弱とが共に存して居る以上男子が强者で女子は弱者だと思ひます、

要するに女子は愛し愛せられ、男子は愛の外に憐と云ふ情があつて共に生存を全うすることが出來ると思ひます、若い方の世の中からお轉婆とか自然主義者とか出齒龜式だとか云はれなさるも妾は只弱い女でありながら無理に强く見せやうとお思ひになるからだと思ひます若き方々心してゆめ忘れ給はぬ事を願ひます。

○使つた後　京都　向井光子

至つて勿躰ながる、と共に又非常にほしがるのが私の癖です、今假りに若干の金子が手に入つたと致します、すると急に常々望んでゐるものが買ひたくなるて、すぐ小間物屋へ走つて化粧水レートやクラブ洗粉なんか求めて歸つてくるともうそのお金はなくなつてゐます、その時は望みの物を買ひ得た心の滿足に快樂を覺えてお金の事は何とも思ひませんが、さてそれをも使ひ果してしまふとフト前に費つたのが惜しくて／＼しかたがない勿論化粧水の及ぼした効果、それはごく少し使用した丈ですからちつともあらはれてゐません、さあそうなるともう／＼惜しい事をしたと思ふ心が火のように燃えてきます、費つた丈のおあしがあれば面白いあの小說も買へるあの雜誌も何ヶ月かとる事が出來る書物にさへしておけば何時までも殘るしいつでも樂しめるあゝそうだつたのに……と思へばもう／＼こらへきれなくなつて自分の顏を無暗と叩くのです、その恨は只それだけに止まらず、はてはあんな化粧品店などがあるからだと、とんでもないその店までを恨

むやうになりますのです、て今まてこんな事を幾度も〳〵したからもう今後はその二の舞を演じぬ先に手早く預金にしてしまはふと決めました。

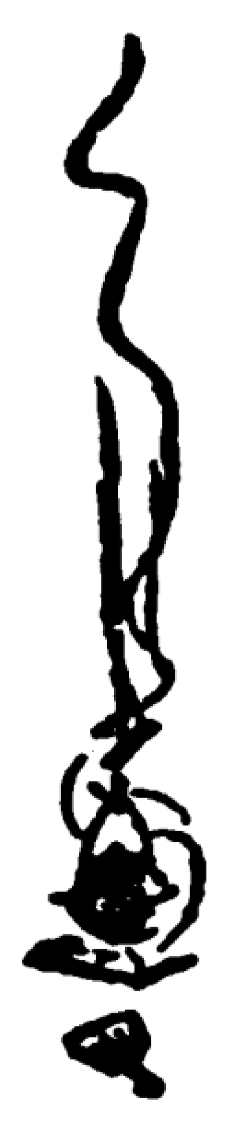
○趣味に就て　大津市　内田八千代

妾の家へ、毎年田舎から、大根を持つて來る百姓があります。今日も丁度參りました、用事が終りまして腰をかけて、暫く話をして居ましたが、其内に、今朝舟て、あまりの景色に一句出來たとて、一句の俳句をものします、如何にもよく云つてあります、妾は心に驚きまして、身は賤しい風をして居ますが、其趣味の高尚なのに感じまして、急に、賤しい百姓とは思はれない様になり、初めて、趣味と云ふ事に氣が付きました。人は、如何な時又は所ても、誠直と云ふ事を、缺いてはなりませぬ、又、富も必要てありませう、が而しそれだけては、此世の中に面白みと云ふものは、少しもありませぬ。之をたとへて見ますと、正直即ち道德と云ふことは、人々の目的を示すもので、富即ち經濟と云ふ事は、此目的に達する有益な、方便てあります此目的と方便とを、連絡させて、其目的に達せしめるものは、即ち趣味てあります。趣味があれば、何事も面白くなります、美しい物を見て、同じく美しいと考へるにしても、趣味ある人は、その美しいと云ふ考の外に、更に、それ以上に心の中に、現はし直して樂む事が出來るものであります、貧しい身でも、これも世の中の、一つの境遇であると、考へた時は、其身は貧てはありませぬ。

さて、その趣味を代表するものは、美術文學でありませう、さうですから、畫や、進んでは音樂や、文學（詩）などの、高尚で健全な趣味を、解する様に勉めねばなりませぬ、これは又、心を靜め、わが身の品位を高める一法ではありませんか。

○容貌論　富山　富美子

殿方ほど譯のわからぬものはありませんわ。女を批評するのに第一容貌をいふんですもの、やれ眼が大きいの鼻が低いのつて。眼の大きなものも居ませうし、鼻の低いものも居ませう、併しそれが其女の人格とどれほどの關係がありませう。人の尊ぶべきものは人格でありませんか、人格こそ其人が後天的に得たもので其人の心掛の善いと惡しいとて善き人格も惡しき人格も得らるゝのでありませう。其人格に關係の無い容貌が美であらうが醜であらうが、何て其人を批評する材料になりませう。ほんに世の中の人ほど譯のわからぬものはありませんわ。



散文詩



○規定　詩歌的情緒を口語を以て綴るべし形式は問はず凡て自由なり所謂口語詩の類にても可なり二十五行以内にて凡て振假名を要す賞は乙種

○水の影（天賞）

神田　田中　英子

靜だ、かなりやは如何したのだらう……今の今まで元氣に囀つて私の魂をにぎつて居たのに……あゝ靜か……天井をじつッと見る、うす黒い天井の隅に——さう水の影だ。丸い鏡のやうな光りが映つて、その中に暗い影がはげしく動いて居る……休まずに……ひつきりなしに……見て居るとかなりやの聲より面白い、しばられたやうに身動きも出來ない私——けれどきつと魂は、きつとあんなに動いてるんだ、あゝ水の影は面白い、何時までも映て居れば宜いが！！あゝ私が安らかに眠つてしまうまて——

大いに好し、頗る好し、天井に映る水の影魂の動揺、何と云ふ好い處に眼を着けたものでせう、私は全く感心して了ひました（評）

散文詩欄を置いて僅に三回、而かも本月分の如きは一躍して、優に特色ある文字が集りました、作に勝れたものがある許りでなく、寄稿の數が大變にふえました、ふえましたけれど、多くはまだ散文詩らしくない只の文章を行をかへて書いたものが多い、今一奮發して詩的の感想を自由な文字で書いてごらんなさい（選者）

○濱の女（地賞）

名古屋　八代　やゑ

濱の女は又掘つた。砂掻きわけて、頻りに貝を探して居る。自分の年が時の道をずん〳〵歩いて行きつゝあるのも忘れてる風に——。

濱の女の魂は節くれた黒い手に宿つて、黄金を採らうと思ふ外に何もない。

背中にゆはひ付けられた子供の魂は其手に絡まらう、絡まらうとして居る。

情も愛もない母親をも神樣のやうに慕つて居る子供の魂を。寶や金以て購ふことの出來ない美しい信愛をさも煩ささうに、拂ひ退け乍ら——黄金を——黄金を——と渇望して居る。

子供は可懷しさうに母の横顔を覗いた。

何と評して好いか分りませんが、一種不思議な感じを與へる作です、詩人でなければ感得できない思想です、驚きました（評）

○黄ばら（人賞）

丹後舞鶴町字津口　中澤いし子

お寺へ供物を持つてゆく。相變らずしなびたやうな黄ばらが、二つ三

つうなだれて居た。
お寺の花！妙に憐れげな顏がする。何か深い約束で咲き出たものとしか思はれぬ、まして此の黃ばらは印象の深い花だ。
八月頃にお寺へゆく、萎れた黃な花は、烈日にたへ得ぬとやうにうなだれて居る、十月末にゆく、夏からの花ではあるまいが、矢張二つ三つ逝く秋はさびしいとやうにふら／＼招いて居る、年暮にゆく、黃な花はまだ雪を頂いて咲いて居る。何て執着の強い花だらうと忌はしくなる、あの井字井戸の底深い蒼い水を、上からおつかぶせるやうに枝が撓んで居る。傍を通るととげがからまる。それでも和尙樣も雛僧も平氣なものだ私はもう怖氣がついた、お寺はいやだ。
石階をかけおりて下町の角からふりかへつて見たら、黃昏の中に黃な花が、うすぼんやりと此方を向いて居た。

黃薔薇と云ひ、寺と云ひ、花の執着と云ひ凡てに一致した感じがあつて、感銘印象の深い作だと思はれます（評）

【秀逸】

○顏のほてり　　淡路　狭霧女

針は少しも運ばない――。
お友達は
斑雲の空を、お月樣が走る如く
すう／＼と針を走らせて居る。
妾は少しも針が運ばぬ
糸の半分にこぶが出來る‥‥
また糸が切れる
胸の動悸は高くなる
頻りに顏はほてり出した。
氣の故か意地惡の君ちやん嘲る樣に
笑つて居る
もう一縞二縞か分らぬ
頭は鉛の如く重たくなつた。

女性でなければ言へない處です、斯う云ふのが先づ散文詩開拓の第一步でせう（評）

○陽炎　　芝　長谷川靜枝

浪の音を聞きながら私の根に腰を下して眼を放つた。砂山の向ふの草の上から陽炎がしきりに上つて居る、私はふと（焰のない火）だと思つた。同時に血の氣のない人間と云ふやうな事を考へた。そうして思はず慄然とした。
頭の上で雲雀が鳴き出した‥‥
私はつひウト／＼となつて終つた。

あなたは散文詩が上手になりさうです、此作は好いと思ひませんけれど（評）

○三日目　　岐阜　篠田とみ子

年が改まつて三日目、郵便脚夫は度〻來た、私の爲めに、繪のあるの無いのとりまぜて七八本、けれど何だか今日はおかしな日が照りもせずふりもせず、たどじみ／＼と、私の心を何物かむしり引つかき廻すやう、

或國の或人に或事を夢のやう、思ひ散らして、或方を向つて或る國は非常に遠い!!と思つた時、何とは知らずほろ〱涙が……ふわ〱飛んで行鳥を追うも思ふ勇氣が無い誰も遊びには來てくれぬ、じつと座つてると次第に外が黒くなつて來た、まだ朝の樣な氣がしてるのに、遠くの方に火がみえる、あゝ今日の日もこれで暮れるのかしら。

聯想がまとまらない(評)

○雪降る街

府下　照井みとり

雪の降る夕暮一人ふら〱と外へ出た、雪は益々降りつのる、下を見つめたまゝ何か思ひながらとぼ〱とあるいた、初めに行ちがつたのは音樂學校の歸りだらふ、バヰオリンを持つた女生徒、振り返つて私を見た、私は猶ほとぼ〱とあるいた、次に逢つたのは煙草工場の歸りらしい女工二人、何かさゝやきながら私を見ていつた、三度目に行逢つたのは五つ許の男の子の手を引いた女房、脇も見ずにすた〱といつてしまつた私ははつと思つて、立ちとまつた、一體まあどこ迄行くのだらふ、家には母樣が待つてゐらつしやる。

見込があります(評)

○空

後志　鈴木梅子

屏に倚つてザーッと空をあふいだ
蒼青空には綿の樣な白雲が、
彼方此方に散らばつて浮標のやうだ。
ふと頭上を見ると有る、やはり有る
而も大きな翼を擴げた、ズーッと足を延ばした
雲の形だ、
頭は北向に立つて居る自分と同じ方向で、下を見をろして居る、
小さな自分をあなや一抱となさんず氣配おゝいやな雲いやな雲と思はず見慄ひした。

○最う見えない

四谷　銀波

知らぬ間に出てしまつた。土手に。
最う暮れるのかしら。
鐘が五つなつた。ひゞく寒く。
御濠の水にまで傳はつて。
木の葉が落ちた。小波にたゞよつて居る
何處に行つたゞらう。
見えない。最うちつとも見えない
どつちに行つたかしら。右か左か。
似て居た。まつたく。そつくりそのまゝ。
もつと行かうか。どうしやう。

○冬の野

根津　寺部君子

枯尾花が、幽靈の手の樣に見ゆる、冬の日て有つた。
私しは一人淋しく歩いて居ると。何處から來たのか、五つ六つ位の女の子が二人、手を引き合うて、人戀しげに私の顏を見る。
私が急げば、急いてチョコ〱と蹤いて來る。
果は其處此處寄せ來ぜの唱歌を口早に歌ひ乍ら手拍子取てついて來る。

○響

長門　田中華子

胸の野に、終日、終夜、ぶつ〱音たててるものがある。
てうど、自分の若かつた時のいろいろの樂しいうれしい、夢のやうな追憶を葬る、呪文の聲かまたは日毎日毎に腐れてゆく落葉のつぶやきをきくやう。
寂しい、淋しいその響は、いつまでいつまでも止みさうにない。
自分の息の音を引き取るまでは、かうしてつゞくのであらう。

散文詩

○夕べ

熊本　峡よし子

自分は今暮れてゆく野に立つて居る、
白い光を帯びた涙がふはりふはりと東の方へと
んで行く、老婆の白髪がそゝりたつた樣な枯草
の中に蟋蟀はホロ〳〵と臨終の曲を歌つてる、
淋しい夕べだ、
自分の暗い魂は何處を迷うて居るのだらう、
慰もない詩もない、
晩秋のうら寒い風が頻た吹く、
あゝ悲しい——泣きたい——。
露子さん！露子さん！
もしもこのやうな夕べに————
床に病める友の身を思ふて寂しい胸は 又亂れた
寂しい——悲しい——。

○「春の夕」

大津　岡田八千代

夕暮になると、妹は
いつも椽へ出て、「春の夕」と嘯いて居る、
そうして淋しさうに空を眺める。
「春の夕」。少女の胸にひどく
「春の夕。」愛しは深い深い
意味のありげに思はれた。
暮れてゆく、此春の夕べ、
あゝ、愛らしい妹の姿は、
可憐いゝ妹は、逝つてしまつた。
生温い風が、そつとなでる
愛しの頬には、止まずに涙が傳はる、
李の花が、はらはらと散つた。
あゝ、優しい妹は、花散る夕に、
愛しの胸に、深く深く刻まれた、
「春の夕」と化してしまつた。
見上げると、何か愛しに、
咽いて居る樣だ、春も
もう、ゆくのであらう。

○もだえて

下谷　細谷鋭子

幾千の蛇がピク〳〵とほのほの樣な舌を吐て。
私が動くと、
四方から一度に追つける、
向ふに奇麗な花園があつて、
そして其中に私の大好な人が手招して居る、
あゝ行きたいと一足ふみだすと、
又其蛇が邪魔するのだもの、
あゝ奈何しやう、
煩悶にもだえて果ては、
熱いあつい血の樣な涙がほろり〳〵落ちる、
恰度私の心はこんな樣だ、
そして終に涙の泉がかれる時、
やつぱり私の魂もきえるのだらう、

○曇り日

福島　野の花

氣がもしや〳〵する——と
微かな哀愁が胸をついている
何故だらう〳〵と思つても
なんでもないような、
何か、小さい炎をひき起す或物が、
ひよい〳〵心の中をかけめぐつて居る樣だ、
なんだか心の隅から
私は今、今の境遇に不滿足して居るのではない
かと、ひゞいてくる
否と何物かゞ答へたが——だめ、
ちやうど水の樣に、じめ〳〵と
心一帯にしみて行く。

○私は苦い

信濃　野菊

生温い頭を上から抑へられる樣な—氣はいつも
私の室にこもつて居る。
そこにあの——聲——苦の——・（罪のわだかま
り）はいつも私をいぢめる。
のがれ樣と（あせればあせる程駄目だ）
頭がいやに重く氣が滅入りそうでも 無意識に本
を讀む矢張（生）があるのかしら
あれ——あの聲——強い苦り——（罪のかたま
り）あの聲。
耳の奥の底の方で——すごくかすかにあれ——…
地の底へでも連れられて行く樣な 私は如何しよ
う。
父か母にすがらうか
頭が重い——非常に。

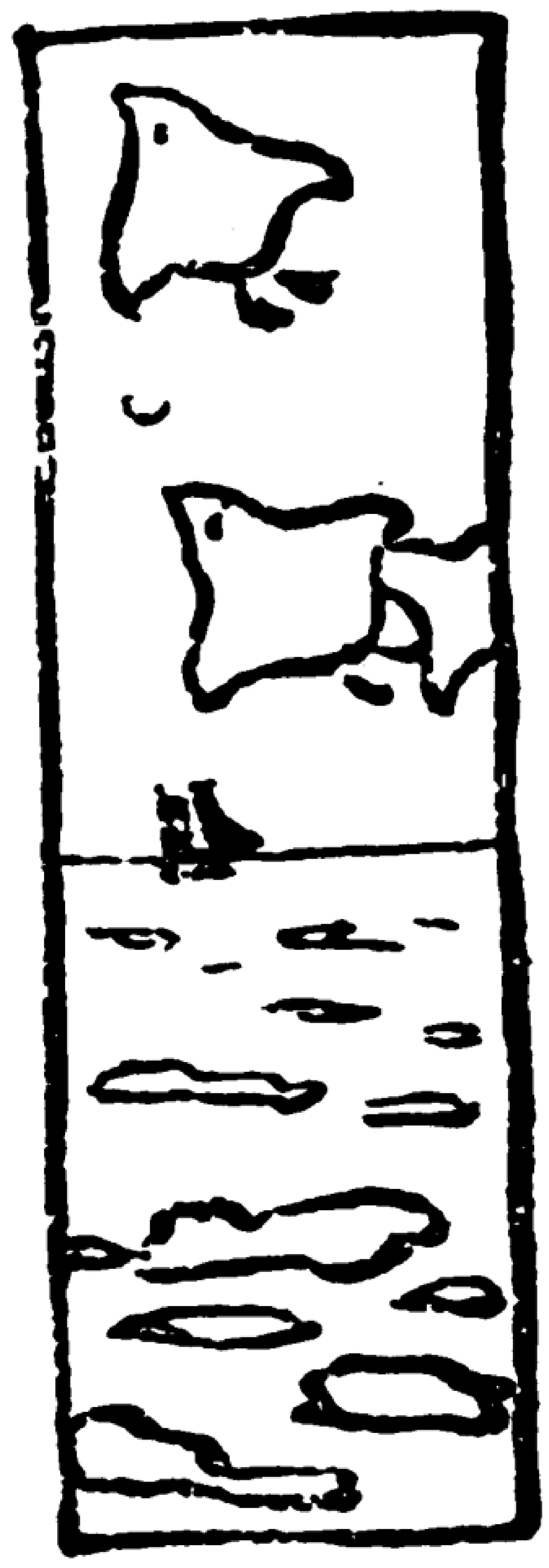
○靜寂

豆州　木村綾野女

雲は動かない——
夜の装した山は唯深い〳〵天地の眞
なさぐつてる樣——
そして鳥もとばない——
月は唯々清い〳〵光を地上になげう
つて——

短文

中村文學士選



○規定　短くして氣の利いた文章を募る十六字詰七行以内凡て振假名つきハガキは許さず一人一章に限ること賞は丙種を選呈す

○橋（天賞）

安藝　手島まさ子

「姉さん出てごらんなさい、女神樣の御嫁入よ」と妹が云ふから、そつと障子を開けて見ると、伊豫の方面から白山のあたりへかけて、七色の美しい虹橋が掛つて居る、女神樣はあれを通つて嫁つしやるのだとか。

壯嚴、神秘。

○鎚の響（地賞）

名古屋市中區白川町五丁目　渡邊みつ

春の夜の靜けさを破つて鎚の音が響いて來ます。煤けた顔を眞紅な火に照して、セッセと働いてる叔爺の面影が瞑目すると、映々と浮びます。カチーンと響く。「確かり遣れッ」と罵る樣で御座います。私はこの一種言はれぬ響に勵されては勉强してゐます。

好個の刺激、

○水溜（人賞）

陸中紫波郡古館村　橫澤淸子

雨後の道を行く時、小さい水溜を、凝と見て居ると、自分が、深い〳〵海の底へ沈んで行くやうに思はれてびつくりして、靜かに足を入れて見ます。すると、下駄もしづまないので、安心してまた歩き始める。

私もこんなに默つた事がありました。

【秀逸】

○春の日

紀伊　勢以子

畜は牛を繫ぎ捨てたまゝ、ゴロリと草の上に横になつたが、いつかウト〳〵と睡て了つた、そのうち牛は草にも厭いたか、鈍い目を擧げて、思ひ出したやうに、一聲モオーと啼いた、が頓て、別に何も爲る事が無いと云つた風に、又草を食ひ初めた。

春日遲々の趣。

○霜の朝

飯島　野萱

日の光が、川向の廣い畑一ぱい射して、子守が畑中の家の壁に日向ぼつこをして居る、隣の鍛冶屋にはチンカンカンと、傘屋ではせつせと小傘に油を塗つて居る、宅では母と姉とが裁縫、最う何の家でも仕事盛りです。

野趣汪溢、

○かるた會

大阪　木村はな子

源平に分けられた札が劃然と並んだ、華かな電燈の傍に立つて芳さんが天の原……と讀初めると、もふ弟は三笠の山を抑へて澄して居る、藤代さんが、月も出ないに早いわと、艶に弟を睨んで居る、皆様の指輪がきら／＼と輝いて火花が散りそふ……。

巧、

○朝　　澁谷　青柳

今朝は熱も餘程低くなつたので幾日ぶりで縁へ顔洗ひに出る、あら、金盥に寫つた顔、頬がこけて眼がくぼんで亡き母様生寫し、はつと思つて見つめてゐると、側の梅の蕾がほろりと顔の上へこぼれて水に輪をゑがきました。

結末、妙、

○麗　　土佐　むらさき

向の山の峠の酒旗が蝶の様に見える其間の原には牛が獨で歩いて居る、お留主にした隣の廐からは、馬が首を出して木爪の落花を浴びて居る、桃の下には鶏が蹴合つて居る。麗な日である。

遂にうと／＼と眠つた。

○其時　　本郷　小穂菊江

手束の瑠髪を高島田に、今宵晴れと裝へる我姿を姿見に寫し、ホロリと一雫此お室にも今二三時間限明日からは戀しい兄様のお傍に、悲いやら、嬉しいやら一度に來た思ひする一刹那、門前に幾輪かの車の音、夫と察した時、聞なれた乳母やの足音。

と、氣が遠くなつた。

○小春日　　廣島　本田露子

雨垂がぽつち／＼。妾は障子を明けて出ました。日は斜に照つて日向の雪は大分解け初めた、向から木を伐る音と歌聲とがかすかに／＼流れて來る――炭燒だ――紫の煙が水平に雑木林を縫うて東へ／＼棚引いてゐる。

「炭烟」が如何にもいゝ、

○古街　　長門　田中華子

冬の日は煤けた黑瓦の屋根や、黑い道路の上をしづかに照らして居る。どぶ溝のいやな匂ひがすうと、透明な空氣の中を漂つて、惡感をおぼえしめる。道路には人一人通らない。ひつそりした淋しい街を、冬の風がたえず吹き廻つてゐる。

佳作、

○裾模様　　府下　照井みどり

雪の降る夕暮部屋の障子を明けたら、庭の隅の竹村……少し赤味のある葉には、美しく雪のつもつた風情、實に何とも譬へ樣が有りませんでした、此頃思ひわづらつてゐて紋付の裾模様、あゝ之れだ／＼と私はしば

らく見とれてゐました。

よき思付き、

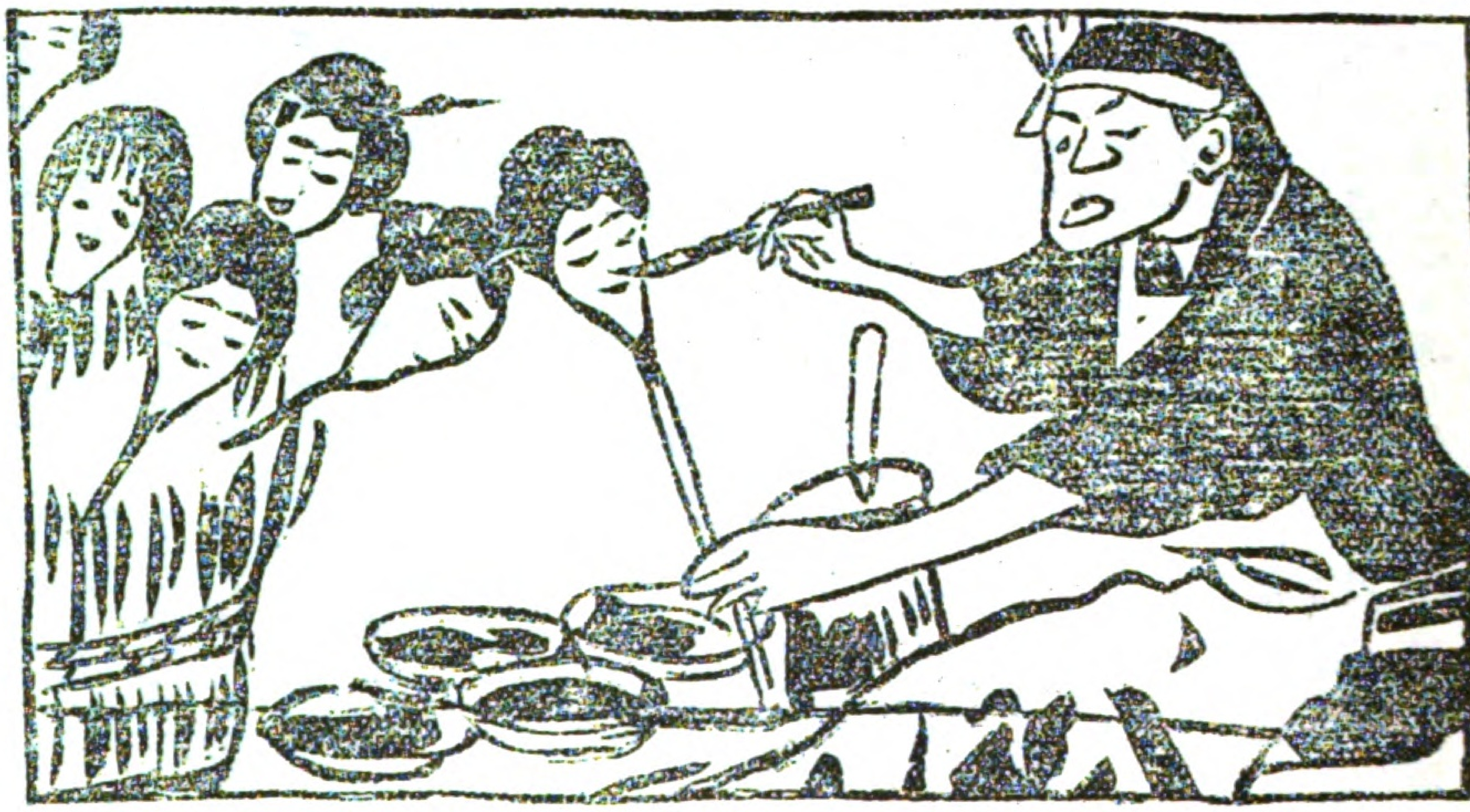
○兄と姉　本郷　千とせ

私は兄も無い姉も無い、幼い時友達が兄様姉様と仰在るのを餘り羨むので、母が親しく家へ出入りする方は皆兄様姉様と呼ぶやうに仕て呉れました、て今では兄様が六人姉様が十人、然し私の名を呼び捨にして下さる方が一人も無いのが殘念です。

味ふべき哉、

○従弟の見合　下谷　小川友子

丸顔で目のぱつちりとした、口元に愛嬌あり、せいのすらりとした、姿の好い、癖はないが髪は赤い、其れを文金の高島田に結つて右の薬指にはダイヤ入左の中指には平金の指輪をはめて奥の御座敷にすわつて下を向いて居る、其れても信保様の氣に入らぬのですつて。



人形屋　丹後　朝風

はて何故でせう。

○春風　小石川　愛江子

染屋の赤暖簾がヒラ〱軒に翻がへつて川端の柳の枝が何やら水に文字を書く。さッと流れにさらす友禪の花模様にキラ〱輝やく日射しが眩しい。と若い女の息吹のやうな微風がナヨ〱と柳の糸に吹き渡つて綻び初めた岸の櫻がホンノリ紅く水に微笑む。

土には陽炎、

○私の懐　越後　佐藤浪子

幼い時、父様がお懐へ半紙を四つ折にしてお入れ遊ばすのが羨ましくつて時々まねてみましたが、這入ませんてした、が其少い懐へ今は女子文壇も時々お宿借り致しますし、お菓子もかくれますの、ほんとに不思議ですこと。

おつつけ赤さんもはいるでせう。

○天火　大連　林正子

柄杓を探りあてゝ握らうとした、刹那、恐しい響がして、指のルビーがピカリと光り、花形の手水鉢、物干竿の浴衣、紫陽花に眠る黄な蝶迄が、パッと、齊白う見えて、四斗樽程の天火が、尾を引いて琵琶湖の方へ落ちた。

讀花式の句、

○信仰　盛岡　米澤白桃

祖母が非常に佛敎信者なので或る時私は佛法信じて如何しますの？と問へば「人はどんな人でも佛に限らず何か一つのものを堅く信仰して居なければ常に安心して其什事について居る事が出來ないのです」と、私は大なる敎訓を得ました。

一本やられましたね、

○日曜の朝　甲斐　網野やす子

日曜の朝、母樣今日は頭が少し重うございますから今少し寐させておいて下さい、といふて朝日がきら〳〵と枕もとに射す時分、うと〳〵と雀のさへづる聲を聞き乍ら、一睡する程心地のよい事はございません。

至極同感、

○草取り　愛知　永田舞鶴子

ぬく〳〵した暖い日、姉さんと二人で麥の草を取つて居ますると、蛙が一匹飛び出して來て、姉さんの手の甲え登りました。姉さんは其の儘ジッとして居なさると、蛙は二三度目をパチ〳〵させて、甲の上に小便をして行きました。けれど姉さんは莞爾して居なすつた。

大度可欣、

○雛祭り　東京　近藤愛江

花瓶にさした紅白の桃の花に雪洞の火がほんのり赤く匂つてゐる。雛壇には白酒があげられて、後ろの金屛風に雛の影法師がいくつもうつる。花模様の蒲團に枕を並べた姉と妹の寢顔を覗くと、何を夢見てゐるのかうす桃色の兩頰に莞爾り、姉が笑むと又妹が……何を見てゐるのだらう。

いづれか麗？

○眠り　肥後　佐々木秋江

ふと目をさますと、時計が靜かに音を立てゝゐるのみで何の音もない。と昨夜お母樣に叱られて泣き乍ら床に就いた事を思ひ出す。少しも悲しくない、かへつて笑止やうな感がする。しばらくでも眠ると憂きも辛きも忘れる、噫人生もこんなものだらうか。

そんなものかもしれませむ、

○冬の夕　備中　馬越昌子

日は西に舂いて綿のやうな雲がふはり〳〵と流る北の空は、呪咀の如き

雲の峰が動かない、身を切るやうなから風が水田を走ると、羽音微に水鳥が立つ、會社の汽笛が悲しげに鳴る、ちらちらと雪花が散る、隣の爺やが亦雪てがあすの‥‥‥と戸を締める。

と箱根の松風が‥‥‥

○寒夜　静岡　柿沼きよみ

松風の音がしきりにまどの折戸をたたいてゐる。これに交つて遠洲灘の波の音もきこえる。とランプの油がつきるのかジンジン云つて更け行く夜の寒さが骨身にしむやう、

そして、何んだか泣きたくなつた、

○倒影　播磨　内藤松園

私は何でも倒影が好きだ、蘆の湖の富士の倒影、拭きぬいた長廊に幾十の窓や柱の倒影、殊に永年親しむだ池畔の倒影に至つては賞賛の辭もない、柴霞棚曳く紫の山、茜の雲、細い畑、堤のすゝき、其の間を荷車が通る、追分け節が空に消える、其れを私は水中に見る、氣が遠くなつて我れを忘れる。

又一觀察、

○私の心　伊豫　ゆき子

從妹の光さんが、此度技師にお嫁入すると聞いては胸がハッとする、又仲よしの友初子さんが、東京の音樂學校へ入學なさると聽いては、私もとやきもきする。本統に私のこの頃の心はどうしてよいやら自分ながらわからない。

今に運が向きませう。

○土橋　青森　しめし

妾は土橋へ立つた。と紅い椿の花がユラ〳〵と流れて來て、緑な葉と縺れ縺れて、流れて行く、一體あれは何處まで流れて行くんだらう。只だ水に流され果しもなく、遂には朽ちて仕舞ふのだらうか、妾は何だか自分に似てゐはしまいかと思ふた。

意味深き水の流や、

○さむきもの　四谷　櫻子

風冷やかき北庭の築山かげに、白く氷りついて殘る雪と、雲もない空高く澄みきつた月の光りと、哀れなほど霜にしをれた八手の葉、これをみるともう寒さが身にしみ通る樣な心地がして、つく〲冬がいやになります。

待たるゝは春。

○我町の浴場　大阪　榎浪春枝

私の町は千戸足らずの町ですが湯屋が八ヶ所もあつて此頃は皆競爭し合うて入浴料が何處も五厘計りです、又中には、お茶や茶菓子を出して居るところもあります。

御茶や御菓子とはわざ〳〵ゆかつて見たい哉、東京は三錢。

○田園生活

宮城　沼倉ふく子

初秋の事です。私は多くの雇人と共に黄昏頃山畑を出ました、細い〳〵山路をうねり曲り北上川の見える處に來たら、眼下には町家の夕餉の煙髣髴し、川の向ふの山岸の家からは早や燈火の影が見えたのですァ、樂み多き田園生活!。

永くその樂みに御醉ひなさい、

○椽先の日なた

下野　春枝子

猫はまぶしさうに目を細く明けました。私は暖く日光にふくれた座布團の上にねそべつて、鉛筆で紙切れに大日本大日本と書き散して見ました。うつとりする樣な日です。今度はつやつやした猫の脊をなでますと猫は煩さいと云つた樣な風をして、のびをしたまゝ障子の中に入りました。障子には長閑に梅の枝が寫つて居ります。

そして折々風につれていゝ香が。

○或る夕

大阪　北島み代

短い冬の日が、今しがた、西山に落たかと見る間に傍り一面薄黑い靄が立罩た。突如鈴の音、歌の聲、「行つたら見て來い大阪の城は前は淀川舟が着く……」歌は竭だ、鈴の響も次第に遠く……、何時か日も暮れて雲間淋しく星二ツ、

人は如何、

○床しさ

山口　さくら子

窓の下で勅語を奉讀して居りますと門の所で「ハタ」と足がとまりました。惡いとは知りつゝも、そつと障子の破れから、のぞいて見ますと、いつもくる郵便配達が、頭をたれて謹んで聞いて居ました、其時私はいひしらぬ床しさをかんじました。

そしてこの次來た時ニツコリと、

○母が好い

麻布　花子

未だ來たばかりの姉の許へ神戸に留守を守てゐる伯母からきた手紙の一節に親が好い子が好いと云ふけれども事にあたつて眞實の打あけ話は夫より外にするものはないと歎てよこしましたがまつたくてしようか私はどうしても母がよい。

そのうちに答つてきます、

○隱し藝

常陸　木村那賀子

歌留多會の時でした、負けた者は各自に隱し藝をする事にきまつて、二人つゝ組むと私は常から嫌いな從兄の勇樣となので、いや〳〵ながら取ると、最初から負け、て勇樣は詩を吟じた、私は許して下さいて云ふと皆が勇君は兎も角貴女は許せない、と云ふので私は泣きだしたら意地の惡い勇樣つと立て、ミツス那賀子の隱し藝は之でござい。

秀句、

○早起

岡山　三船いその

何時になく早起する、戸外を見れば未だ暗い、暫時すると彼方此方に雨戸を繰る音が聞える、隣の車井戸の軋音が手にとる様、御向ふの嫁さん寝衣姿を耻ぢてか、奥に匿れる、若い男の牧場へ牛を曳く、妾は早起して心地のよいと云ふ事を心から悟りました、

季があらはれて居ません、

○御飯時

信濃　吉澤辰美

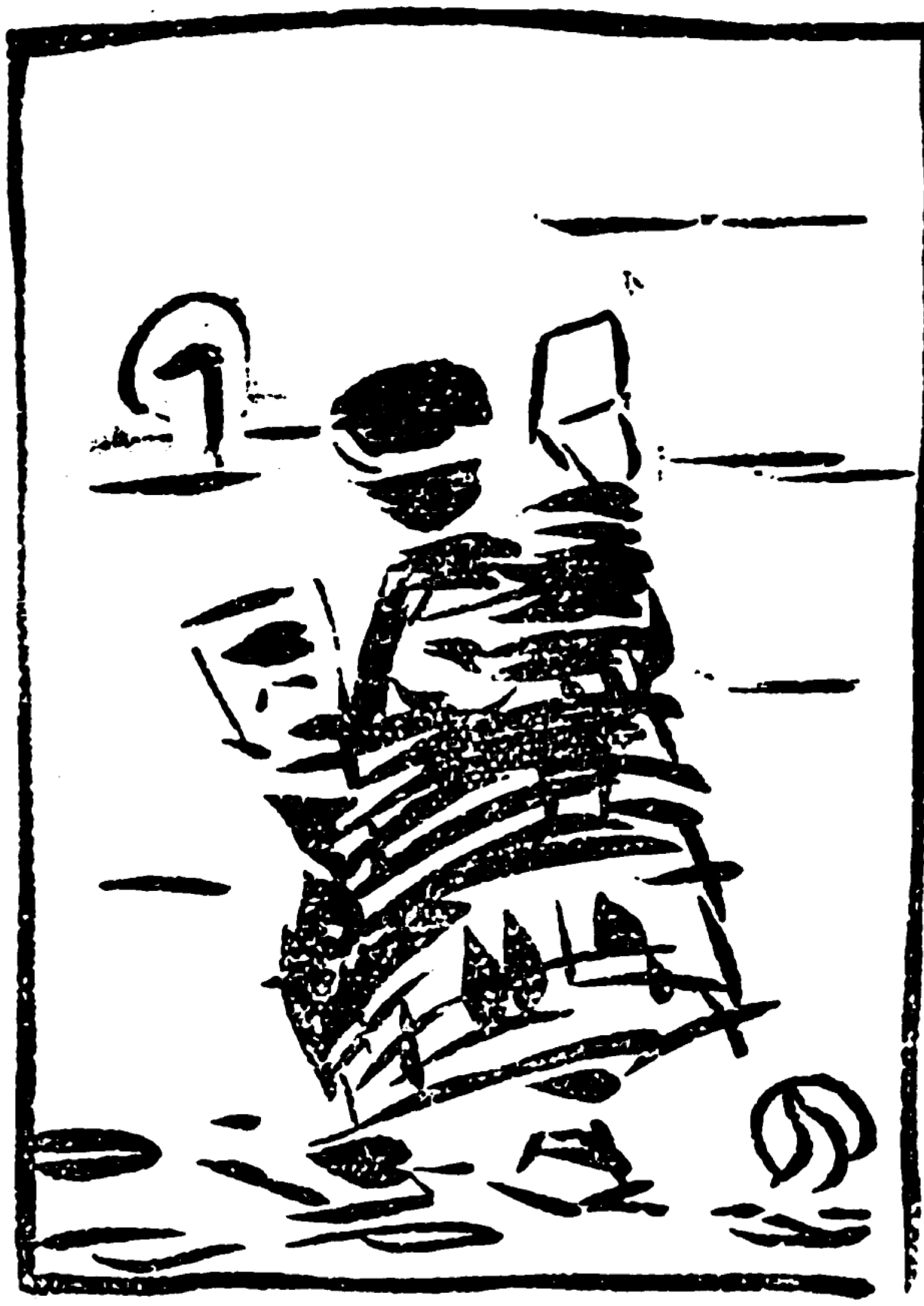
御日様が、東山から半分御顔を、御出しなすた時が朝飯、家様の畓わどしの所まで御上りの時が昼御飯、全く西山へ、御かくれ遊ばして、正林寺の晩鐘が、ゴーンと、ひゞく其時が夕飯です。

○犬

若狭　津田汐女

お寺の門の石段に、白いきたない犬がうづくまつて、にぶい秋の日に漂泊の身をぬくめてる。

赤い帯をした若い女が下を通ると、犬は、深い〳〵哀愁をふくんだ眼で見下ろして、ノコ〳〵下りて来た、女は知らぬ顔してサッサと行く、犬は悲しそうに立ち止つて見送つてる。



左官　茨城　柴よし子

○一月三日の夜

静岡　清子

父母も客も床についた。一人自分は、葉もない木の下に彳んだ、ねむそうなあはい月の光り、静かな、いひようなく静かな、世の中が、うつとりしたよう、物音一つしない、所に、あらぬ方を見つめて、じつとして居る。と身は、ちりちりーつと、底知れぬ深い谷へ沈んで行くよう、ぱつと目を開くと、静けさを、やぶつて覚の水音細くチョロ〳〵と……

○我が生活

奈良　中富よしみ

吹雪のはげしい狐のしきりにほへる夜ひとり榾火にあたゝまり乍ら思ひました、「萬を以て数へる多くの誌友の中でもこんな深い山奥に住んで居る者は私の外にあるまい、其代り私程詩的な生活をして居る者も亦外にあるまい」と

○雨後

茨城　大高はる子

今しがたまでポツリ〳〵の雨だれもやみました、しゆろの葉の尖に黄金の水玉がぴか〳〵と輝いてゐる、はるか向ふのかしの木の葉は風と共にゆら〳〵とゆれると思ふときらきらと光る、雛が雨降て運動もならなかつたのをお天氣になつたので悦んであてもなく歩きだした。

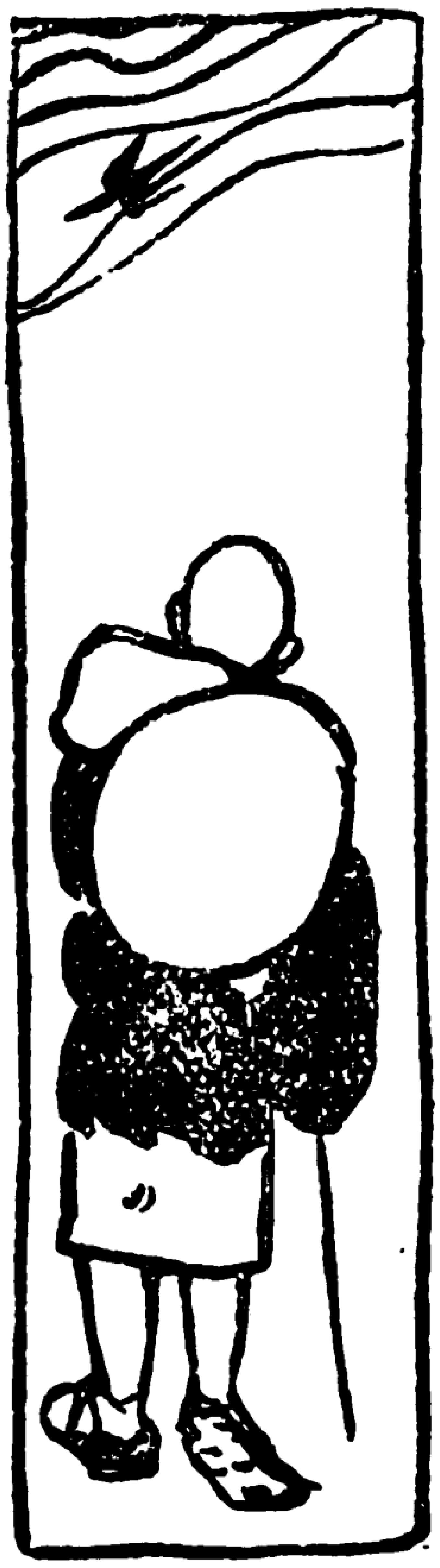
○夕の光

宮城　松村靜枝子

美しく名残の光を留めて居た秋の日は、今し西山に沈んだ。ぼんやり眺めて居た私は、半ば無意識に歩き出す。夜の女神は徐に彼方の丘の上に舞ひ下る。東の山の端は益に明るくなる。雲は忽ち黄金色に変る。と、見る間に、真丸い月は静に鎮守の森を離れた。

俳句

内藤鳴雪選



○規定　同じ材料で二度以上使へば陳腐になるとか剽窃になるとか言ふ人もあるが餘計な心配である前の人と異つて他に轉換して活用して居れば幾度同じ材料を使ても差支ない（鳴雪）一人一句限賞丙種

○（天賞）
静さに堪へて鶴鳴く深雪哉　群馬　せき子

○（地賞）
春いまだ寒き舍人の袴かな　大阪　木村花子

○（人賞）
春の水妹か門々流れけり　若狭　汐汀春人

【秀逸】

春の水寮の小路ひたしけり　土佐　大和田しづ子
鳴り出す狂ひ時計の日長かな　美濃　をとめ
なつかしき香や春日の青畳　常陸　中内泉子
散る花に鼓を假の枕かな　土佐　むらさき
春の月静かに山をはなれけり　長野　東條周子
きさらぎの氷柱に月の信濃かな　信濃　赤津ふみ子
北風の落葉吹き上ぐ二階哉　信濃　きみ子
初夢や井出の流に杖して　越後　藤原虎子

空低うして風の月夜かな　上総　北田信子
門口で打振傘や春の雪　甲斐　綱野やす子
四東どこも藁家や梅の花　下総　白百合女史
森かげに鶯なくや霧催ひ　豊前　赤田すみ子
畦が家はつらゝ二尺の暁かな　麹町　牧野銀杏庵
五月雨の晴れて間近し向島　相模　山本文枝
烏帽子發しさすらへ人や村時雨　安房　中富よしみ
朝ぼらけ松十丈や雪氷柱　山雲　清子
獨りゐの軒端に來たり寒雀　越後　志賀美代子
春惜む女のやうな男かな　大阪　今西春江
春風や小さき稲荷の幟吹く　東濃　さぎり女
鶯や勾欄の上をありき啼く　芝　長谷川静枝
京はよき汽車の停め場や春の月　備前　大釜桜香
古柳人の魂飛ぶ暁かな　三重　小宮糸子
此瀬の深く澄みきる若葉かな　神戸　しづ子
大堰川櫻月夜を流れけり　山城　廣江正枝
月寒うショールに埋む美人哉　京都　段谷渓子
枯柳に女顔よき野茶屋哉　廣島　末丸いつ子
紅梅に文拾ひけり庭の月　青森　月館いつ子
樂しむ人悲しむ人や秋の月　山口　深山霊
小春日の窓に小鉦の影淡し　羽前　白露子
大佛は夢見顔なる櫻哉　羽後　三浦ふみ丈
すぎし日の京なつかしや春の雨　信濃　安坂富美子

春散るや雪に貼り行く千社札　石川霊女
爆竹の煙ふ上を飛ぶ胡蝶　本郷　船越桂子
庭桜それたボールに散りにけり　岡山　秋吟女
谷底や寒梅くゞる水清し　美作　兵延豊子
映し見ん先づ姿見へ初花粧　門司　辻本愛
待つ人の有るやうて無し春の夕　大阪　寄部君子
山守や月影寒き石畳み　富よし
初ゆめを語らて笑ふ若きつま　留萌　山本すゞ子
霜や深しけさ黒髪の真の如し　徳島　芳野
野遊の顔にも匂へ桃の春　本郷　小様菊江
出陣の駒嘶いて月高し　神戸　山下いさみ子
よき春を迎へ佳と書く夜鐘　北海道　石川喜世子
揃へば聞さゝめく歌留多かな　熊本　近野春子
短冊をつる手に桜散りにけり　福井　山里
金瓶に梅乱れさす一間哉　武蔵　込谷紫霄女
借り住みて春待つ宿や根深汁　長崎　天ヶ瀬良子
朝寒や白き息吹く人と馬　明石　嘉代子
住み古るす山荘の庭の梅の花　秋田　小松眞子
少女子の化粧の窓や初つばめ　板橋　高桑辰子
嫁が君落ちたり梅の床柱　後志　北浜涼子
萬歳のうたひて渡る門の川　若狭　吉井鏡子
衣更一鞍あてん二歳駒　常陸　秋山欣子
木枯しや夕日うすづく山の窓　静岡　中村園枝
雛の節変となる日を閉られし　紀伊　勢以子
春の海美しく月登りけり　長野　山越悦子
閑村の中を流れて春の川　信濃　駒澤ひろ子
親猿の子猿を中に秋の月　岡山　三船穂の
ひとり起きて啼く鶴の寒さ哉　京都　くちなし
食つみの殘り少なやよめが君　山城　八田文子
かゞり得し手まりに春のうれしくて　埼玉　林路花
七草をわさるに指のよごれかな　埼玉　野巻若菜

あくび一つして静かなり春の雨　大阪　四戸政江子
わが姉の嫁ぐ日や桃の花　上総　寶川柳枝
菜の花や釜ほす家の垣つゞき　青森　久良子
まつすぐに炊の煙や霜の朝　常陸　季女
うき人の別れや庭の雪二尺　雪子
工場の梅に鶯来啼きにけり　秋田　佐藤はなえ
春寒や妹が小袖の紅絹の裏　島根　長崎春子
小説や年賀返りの梅の花　若狭　速水里風
春の雪温泉の町の人恋し　横須賀　齋藤松代子
八重桜院の甍なひうきけり　岩代　五十嵐久良子
蓮の露こぼれんとしてやゝ久し　飯島千代子
雪ふるや窓に小鳥の影二つ　佐倉　保花子
さげ髪に胡蝶と見ゆるリボンかな　豊後　節子
燈明に鶯の来て春の雪　名古屋　江原よし子
雪達磨ころがりもせて庭の隅　相模　大竹はる子
詩に耽る顔を吹きけり春の風　若狭　蝶夢子
山茶花に犬の吠ゆるを聞く夜哉　千葉　椎名津留子
順禮の袂に散るや門の梅　信濃　岩波むら子
若草に蹈るゝ人の愁かな　古河　長谷川みどり
砂武より速船として春の風　西多摩　森田ゆは子
百畳に美人の會や朧月　備中　篠原しげ子
三郎も次郎もありて太郎月　信濃　小林よし子
うつゝなき手毬つく子に小猫哉　兵庫　祖父江咲香枝
枯尾花一つ家の灯も見ゆる哉　茨城　多賀子
欄干に夜の梅見る紙燭かな　市ヶ谷　笹原芳江
春の灯や何か笑ひて姉妹　東京　吉田愛子
我が思ひ木枯吹きて忘れけり　兵庫　眞砂
山茶花のはなもまじりて落葉哉　紀伊　岸みどり
一と堤落葉の上の轍かな　近江　辻芳子
乾鮭のそり返りたる日向かな　大阪　井上静か子
蝶飛てはのゆるぎする黄菊哉　佐原　山田正子

教への庭



○規定　此欄の投稿は女教師の方に限る十六字詰十行賞は丙賞

○失敗（天賞）

京都市島原前吾妻渦隣復村方　春日朱鷺

休憩時間に運動場へ出て見ますと、生徒が激しふ搖れる、遊動圓木に乘つて、さも輕々と兩手を振り乍ら渡るのです。掃除當番の生徒が歸つて了つてから、そつと行つて緩ふ搖ると、さあ足が震ふて身體が左右にふらつき、到底渡れさうもありませんが、子供でさへ彼樣に渡つたに、出來ぬ筈は無いと、思ひ切つて前へ進みましたら、前後に動く圓木に氣晩がして、眼が眩み、中央迄行かぬ中に足をすかされて倒れました。生徒が居つたら如何に笑はれて、赤恥を搔いたかわかりません、顔が赫ッと逆上せて、紫の袴の塵埃を拂ふて立ち上りました。

○初めの日（地賞）

府下　照井みどり

去年の秋、初めてさる女學校へ用器畫の教師となつて參りました。何しろ先生といはれるのは生れて初めてですから、まるで斷頭臺にでも引かれる樣な心地で出たのです、初の一時間はうやむやに過し、二時間目には小し落つき、三時間目からは餘程先生らしい態度が出來ました、夫が今ではもう小言の一つ二つもいふ樣になつたのです。

○慰籍（人賞）

香椎　田中野菊子

私は毎日午前八時の汽車に乘つて學校に通ひますが雨が降つても風が吹いても驛に汽車の着きます頃は小さな一二年の女子が三五人屹度迎へに來てゐます寒いので赤くなつてゐる小さい手を出して辨當、包みと爭つて私が持つてゐるのを取ります然し嬉しそうに後に付て來ます歸りも同じ樣に驛迄送つて來ます汽車の發車します迄は昨日今日習つた九々の乘法を一樣に、申してゐます發車しますと皆伸上つて先生「オサヨーナラ」と小さな腰をかがめます。

○放課後の仕事

新潟　丸山規子

私は小學校の、敎員で、御座いますけれども、内は、農家で、ありますから、放課後、直に、歸宅してお父さんや、お母さんに、手傳ひ、大根や、菁蕪などを、洗つたり、夜に、なればお針や、或は、俵あみ繩ない等して樂しく暮して、居ります。幸ひ、生徒は、農家の子供許りでしたから、此事を話しましたら、近頃は、皆餘暇に、眞似をして、俵、一つ、繩一把につき、五厘とか、一錢づゝ、父母から頂きて、切手貯金を、する樣になりましたから、私は、大いに喜んで居ります。

○御辨當

東京　鶴見美那子

だん〳〵寒く。なりますと、御辨當が冷えまして敎室で頂きますと、御腹が、凍りさうで御座います。それで、私の學校では、今度各級に、備へてある、火鉢の上に、四方板張の、助炭を掛けて、中段に在ります金網の、上に、兒童の辨當を、列べ上に、板の蓋を致しまして、暖める事になりました。それ故たま〳〵、時間中に御馳走の香が爲初めます事も御座いますので、大笑ひを致しますが、兒童等のよろこびは一通りでは御座いません。

○山奥の學校

本郷　千代子

一番近くて十町、遠い處となると二里近くもあ

る山坂のひどい道を、生徒は暗い内から起きて毎日通つて來る、服裝はぼろが下つて居ないといふ丈で、履物も麻裏などは見度くてもない、皆手作りの、藁草履、浮世の風に染まない彼等は實に質朴で妾の云ふ事なら何でも聞く、白粉もポンも棄てゝ只子供逹の爲にと一心に盡して居た妾は家の事情で下らればならぬ事になつた、學校中の生徒は皆妾に縋りついて泣いた、其時の情なかつた事、今でも涙が出る。

◯生徒の作文　甲斐　網野やす子

私は尋常二年を受持つて居ります。或綴方の時間、受持の先生、といふ題で綴らせました。すると正といふ子の書いたのに、「先生は時々短氣を起して私逹を大そう叱るからいやであります。奇麗な花等を上げると大そうよろこんで褒めて下さいます。」とありました。

◯まづしき學校　福井縣　北利子

妾の奉職學校は教員も兒童も相當にありますが、小使がないのです、それですから、妾はいま朝早く登校しまして、火鉢に火を入れたり、湯をわかしたり窓を開けたり、それはそれはいそがしいのです、又時時便所のそうじもあります、されど無邪氣な兒童をあいてになすのが、最もたのしく一命終るまで、この小使ない學校でお勤めたいと思ひます。

◯正直　愛知　八島はる子

私が、奉職してから、三日目の日でした、私は、一年生を受持つ事になりました、修身の時間に『朝、人に會つた時には、御早樣と言つて、朝のあいさつをするものです。」と言つて、聞かせました、すると、其翌日私が教室に入つて行きますと、一人、一人皆、私の前に來て、御早樣言ひますから、あまり、正直なのに、獨り、おかしくつて、笑はずには居られませんでした。

◯過去　下野　幾久江

運動場のすみに在る櫻の木の下で、可愛い子供に取りまかれて、彼らの小さい、そして清い理想を、ローズの樣な唇から、もらすのを聞いて、ああ、自分もこうした時があつたのだ、と淋しい笑をもらした、て幾年の其昔戀ひしゆうおもひの糸くり初むると、始業のベルが、常よりもけたたましく、耳に響いた。

◯わが教へ子　石見　小松原篠子

私の奉職してゐる學校は山間ですので從つて交通等は餘程不便です、生徒通學の最遠距離は三十五丁もあります、生徒は都會の兒童より少し不活潑で稍々卑屈ですけれど忍耐力があります、それは小さい子供でも家庭で少しも遊ばさずに年に應じて夫代事を手傳はしますからだと、思ひます、性質は柔順で親切で物が丁寧なことです。

◯出席優等　靜岡縣　冬野滋子

去十一月から出席歩合の一番よかつた級へ出席優等といふふだを掛ける事になりました。當校は七學級ありますが其の中で十月に一番出席のよかつたのは高等二年でしたそれですから十一月は高等二年に初めての優等ふだが掛りました十一月の出席歩合は私の受持尋常二年でした、今まではあまり好い方でありませんでしたから實に意外にうれしう御座いました、只今は十二月出席優等のふだが私の級の入口に掛けてあります。お正月も掛けておきたいと思ひますが――早く月末がと待ち兼ねられます。

◯晩秋の一日　羽前　白浪

ひどい雨風が眞西から突いて來る七町の學校路走り出したら止まる事も出來ないのです、頭からづぶ濡れになつて、妾が足駄の足下危ふく力こめて走つて行きますと、彼方の前方に此風に惱んで歩み得ず、道の中央に蹲まつてる生徒等を見付けた時、妾は何もかも忘れて飛んで行て小さい子を袖に擁ふて、小さい子を手を引いてまづ學校まで連れて行き更に引返して後から來る子を迎へに行くと一年生などは、はだしになつて、泣きながら來るのです可憐らしくて〳〵自分も涙が溢れそう斯うして三度、やつと校舍の中に入ると、廊下は硝子の破片で足のつけ場もない位でした。

◯苦心する教科　函館　ゆき子

諸學科教授の内私は一番算術科が、困難と思ひますいつも無味乾燥な千篇一律の形式にのみ流れる樣で興味薄く從て注意を集注する事難く如何にすれば算術教授をして愉快ならしむる事が出來るでしようと私は思ひます、教育に携はり給ふ、諸姉樣の御經驗承りたうございます。



餘興



○規定　毎號課題を出して諸孃の餘興に供す十六字詰十行迄一人一章に限丙種の賞を送呈すべし新題は卷末にあり見落す勿れ

汽車（課題）

○アイヌ（天賞）

北海道　翠子

一昨年の八月中旬、妹と弟と三人て錢函の、海水浴に行く途中の事てした。私等の前に髯のムシャ〳〵生えたアイヌが恐ろしく光つた。大きな眼で私の方ばかり睨んで乘つて居ます恐ろしくて堪らないのてした。あれ海が見えて來てよと妹が申ますから窓から首を出さうとする時、「此瀛車何處さ行くたや」と叫びました愕然として小樽の方よと申ますと、「何だッ糞ッ！今小樽から來て、岩見澤て乘換たんだゾー飛び下りつかなあ」猛然と立上つた。「まあ待給へ此次で取計つて上る……」隣の書生さんが、アッシ織の裾を捕へた、ナニッと、眼が光つた、あゝ彼樣にして熊に對するので、あらうと思つて今更の樣に、首をちゞめました。

活題

○不安（地賞）

下谷　細谷鏡子

去年の夏輕井澤から歸る時てした、二時何分かの列車にのつて碓井峠に差掛り、たしか十二目の「トンネル」てした、暗い暗い中で突然汽車が止つてしまつたのです、薄暗いランプの光りは車内をてらして、人々の顔は不安の色にみたされて居ました、其内ボーと瀛笛の音がしてそろ〳〵と動き出し、やがてパッと窓から日が差込みました、あゝ此時私はほつと胸をなで下しました。

詩人蘇る

○關の秋風（人賞）

土佐　むらさき

馬關の冬構を名殘に、乘り進けて新橋へ下車しました、馬關はまだ秋景色てしたのに、此處は早全くの冬景色です、さて秋冬の境ひ景色は、何處てしたらふか。

明治の能因

【秀逸】

○あの山越えて

常陸　秋山欣子

妹が母樣に抱かれてお乳を吸つてるのをみると、いきなり「私の乳母どこへ行つた、妾の乳母よんてお呉れ」つてあばれるのです、すると皆が、

「乳母はの丶樣へ參詣にいつたのぉーに乘つて」といふ「そう、ちや私迎に行くーつちや時厭はず停車場へ詰かけ、柵へよつて首を伸して居る、汽車が着いて乳母が見えぬといつちや泣き、其都度驛長にお菓子を戴いて歸るのが例でした。其時のお河童は島田に結はれて、驛長樣は二度變つたけふも、汽笛の響にそゝのかされる我魂は、必ず胸の扉を離れて行きます。

〇落ちないやうに　門司　辻本愛子

私が初めて汽車で一人旅をしたのは一昨年の夏、十五の時でした、家の事情で遠く叔母樣のところへ行く事になつたので戀しい母樣、好な先生、友達にも故郷にも別れなければならない不幸な出來事なのでした、前の晩母樣の仰言つた言を小さい胸に秘めて天晴志を成す迄はと勇んでプラットホームに出た時、「汽車から落ちない樣にね」と母樣の一言、さすがに胸の糸はゆるみました。



一休み　神戸　伊佐美子

〇霧がくれ　陸中　横澤濟子

晩秋のある朝、私は、鐵道線路に近い田の畔道に立つて居ました。其時霧深く立ちこめて、人影一つ見えない中に、急に烈しい音がしますので汽車が通るのだらうと、目をみはりましたけれども、影は少しも見えず霧ばかりが、冷たく迫るのを覺えました。靜かに窓に凭つて、外の景色を眺めて居る人があるように思はれて私は、霧の中に消え行く音を、ジッと見送りました。

〇戸棚の中　兵庫　祥子

私の祖母が、初めて汽車に乘る時に、父が早く〱と、急いだものですから、どんな格好のものだか、箱が幾つも、つないであると云ふことも見る間がなく、すぐに乘つたものですから、戸棚の中へ、はいつた樣な、心地がしたつて、後で話しました。

〇小さな汽車　丹後　中澤いし子

店の板の間で七つの會社員の子と、十才の綿屋の子と、六つ位な日傭取の子とが汽車ごとを始めました。十才の子は「さあ、神戸、神戸、上海綿廿本送り状をつけて、」となる。次の子は「ピー、がた〳〵新舞鶴行きが今出まあす、」といふ。最も下の子は「海岸へいつて鰯を積んで來やうや、」といひはります、とう〳〵列車は分裂致しました。

○五人の癖　　下谷　小川友子

妾の親友の汽車中の癖を申ますと、先づ龍野様は、つんとすまして、話しをしてもろくに、返答しない、玉江様は、直ぐ歴史談を、初める、千代子様は、ハイカラ氣どつて、英文の本を出す、鈴枝様は、大きな聲て、唱歌を歌ふ、そうして妾の、癖は始終窓へ、頭を出す、停車場へ着くと顔が眞黒だと云はれて笑はれます。

○汽車が怖い　　金澤　のぶ子

私の十二歳の時かと思ひます。春風長閑に吹き渡る頃、生れ故郷の新野に初めて、汽車がかゝると云ふので大騷ぎ、母につれられて見に行きました、機關車からは黑い烟を吐くやら、蒸氣を吐き出すやらするのでもうびつくりしてしまひました、出町まで往復ハヘて乗せるからと云ふので母も乗つてみやうといひましたがこわくてにげて歸りました。

○隧道數學　　沼津　八四六

一昨年の夏東京から歸る時只一人だつたので雜誌を相手に乗つて居ましたがトンネルへ入つた時、私は話し相手のないのを幸に一ツ二ツと胸で數を取つておりました處、一番長いのが百六十四、次が百四十七で其次が百二十八、次が百二つに七十八、九十六、四十三、二十九と、こう云ふ數になつてた事が今だに其時持つてゐた手帖の隅に記してあり升。

○迷ひ子　　本郷　千とせ

私が初めて獨旅をした時、途中の停車場で厠へ行つてる内に烈しくベルが鳴り始めた、あわてゝ駈けて來たらサア自分の室が解らない、今にもヒーッと一聲で發車する計てす、もう私は泣き度く成つてうろ〳〵して居ると「此處だ〳〵」と窓から新聞を振つて居る人が有り升ので先づ嬉しやと地獄で佛の想ひ、腰を下ろすとたんに動き出しました、其時の驚きと嬉しさと親切な方のお顔とは、一生忘れる事は出來まいと思ひます。

○ころげ落ち　　兵庫　大田縫子

上阪の道すがら、伯母上様の土產にと、僅に柿な四十餘り入れたのと、四季袋とをつなぎ合せて、網棚の上にあげてゐたのですが、つい立つて何氣なく袋だけひつぱると、つながつてゐたものですから、續いて籠も落ちんとして、私の胸にドントあたつて、其反動で窓の外に落ちました。アツト思ふとまた唯かろく持つてゐた袋も共に外へ落て了ひました。のり合せた皆は同情をよせて下さるしほんとになきたい様でした。

○線路傍　　札幌　杉葉女

妾しの未だ故郷に居つたときの話であります、線路の丁度傍に妾の宅の田や畑があるので、豆蒔きや、田草とり、桑こき、稲刈りなどにそこへ行つて居るのだから、汽車の往復するなどが少しも珍らしくありませんでしたが、汽車が今來るとか往くとかのときは、どんな忙しい仕事をなして居つても知らぬうちに、手を放して立つて見送つて居るのが常でありました。

○乗車中の編物　　岡山　小夜子

私は昨年の四月女學校に、入學してより五ヶ月の間、汽車通學いたして居りました、て乗車中の時間が、凡そ五十分程ありましたので、この時間を利用して、編物のテーブル掛及び、寫眞掛に、しをりの、色々なのを、七ついたしました、これらの品々は、皆我が學び屋の姉妹會に寄附いたしました。

○三都の停車場　　播磨　内藤松圃

大阪驛に着くと凡べての人がにつけて居る、乗客が澤山居る、何つちを向ひても商賣人が居る。

京都驛に着くと見べての人がゆつたりして居て優美である、男の子迄が袂の長い着物を着て居る、何と無く故郷と云ふ樣な思ひがする。新橋に着くと大變だ、目先ががらりと變つて見べての人が活々して居る、顏にしまりが有る、そして急がし相だ京や大阪の樣にソロ／＼とは歩いて居ない、大抵の人が足よりも頭の方が前へ出て居て急がない私等迄が急々となる。

○心配　伊豆　土屋いそ子

去年の夏の初めてでした。横濱に少し用事が有つて東京迄船に乘り、東京から横濱迄叔父さんと汽車に乘りました。幾度となく繪の汽車は見ましたが、實物に乘つたのは此れが初めて！何となくそは／＼して自分の傍に腰掛けて居るお方を見ても、家を出る時母さんから注意された、スリではないかしらと荷物をちやんと膝の下に乘せて、しつかり押えて、わきみもふらずに：：：今考えますと可笑しくつて一人で吹き出します。

○聲　長野　西條宇女子

上野の停車場へ行くと、日暮里、田端、王子、赤羽、奥州線は出まーす。ガランー、ガラーンが耳に一番先にはいる、熊ケ谷、石貫寶ーと疲ぼけ聲、磯部、せんべい、薄つぺらの聲、高崎、前にべんとう、輕井澤、ソーパーと長く引つぱる長野、咽喉をつめてギニーニユー此等が騷々で一番耳に入ります。

○待つて　深川　佐々木京子

去年の八月私は松戸へ行く目的で上野から赤切符で三等のへ乘りました、すると車內に田舎者の少女が初めて乘つた者と見えめづらしげに外の景色を見て居りましたが自分の持つて居たはんけちがとんだのでびつくりして大聲に「待つてゝくんれい、とめてくんれい」とさけんだので車內の人々はあんまりおかしいので皆笑ひ出しました。

○大笑ひ　淡路　鍋島てつ子

私が或る汽車に乘つた時、すぐ側に初めて乘たやうな田舎者の夫婦が居りましたがトンネルや珍らしい所などに參りますと大聲であら／＼とよそ目もはづかしい程でした、男の方が一寸小便に下りた後早や汽車は出て仕まいましたさ一妻の方は狂氣の如くなつてさわぎ立てまして下車する時になりましたけれども其の女は一向下りずにあの男が來る迄はいやと申ましたのを強て下しましたから皆々どつと大笑でした。

○乘る時の心　京城　ゆかり

十三四までは汽車に乘る時いつも、こんなにありました。切符を買つてしまふと先一安心、向ふから汽笛が聞えて機關車がたん／＼大きく見えて來るとさあ胸がどき／＼して此汽車にのるのだと思ふと體がぴり／＼ふるふ、驛夫に切符を切つてもらふ間はもう夢中で、足がかたくて重くて、あまり輕と過ぎる樣な妙な氣がして足が地について居るのか何か分らない。やつと列車にのり込んでホツと息をつきますが、まだ動悸はなかならない、車掌が合圖の笛を鳴すと又新しい動悸が打て列車が進行を始めると、やつと我に返るのがつれてでした。

○田舎の汽車　奈良　しらぎく

客も少なければ貨物も少なく、いつも汽車をがうん／＼引つ張つて行く、車室內の汚い事たらお話になりませぬ、天井は低いしおまけに動搖が烈しいと來てゐますから、たまつたものじやありませぬ。そして驛員のすべてが呑氣である、從つて時間も呑氣で、規定の時間に頓着しないのです。

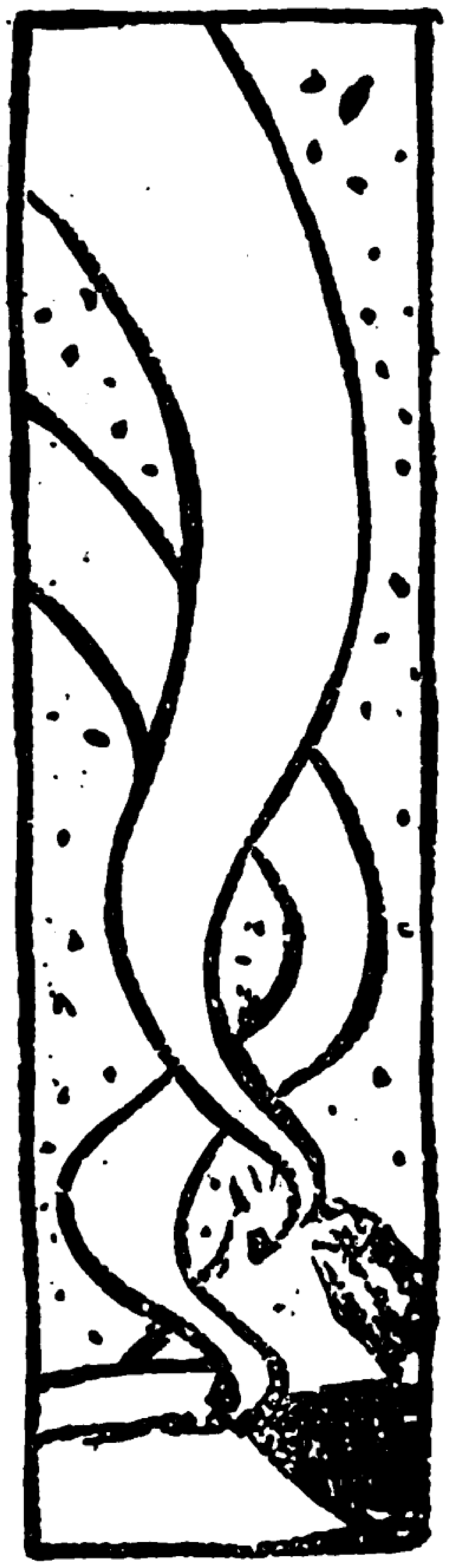
○明暗　紀伊　勢以子

和歌山から大阪へ參ります道に、長いトンネルがあります、私はそこを通る每に、何分かゝるか時間を計つてゐますが、まだ確かな事が知れません、て今日こそとメツと手首から時計を見ながら、トンネルへ入つて暗くなる瞬間を待つてゐましたが、何時迄待つても暗くなりません、それも其筈其時は夜で、ランプが點つてゐるのでした、何といふ迂濶なとでせう。

○こゝは郵便　岐阜　篠田とみ子

大阪の博覽會を觀て堺へ行き奈良から伊勢へ向ふとき、龜山驛からの混雜つたら仲々で、汽車の箱に人が詰め切れませぬのでとう／＼私等の一行は桝形の棚がついた郵便車へ入れられました。驛々で人がは入らうと致しますから、こゝは郵便ですよつて、私が云ひましたら、郵便では仕方が無いつて誰も來ません、其中に汽笛がなる、動き出す、やれ／＼てな風で心宿み數いて寢たり起きたりして居ました。

新歌謡



○規定　古來の俗謡の形式を取りて專ら優美高尚なる作を歡迎す野卑猥雑なるものは斷る一人一章限りにして半紙又は罫紙に認むること丙種の賞を送呈すべし

○（地賞）　　大阪　西戸政江子

星になつたと乳母やは云ふが亡母に似た星見へはせぬ

哀感なる詩想を活かしたるもの

○（人賞）　　伊賀　山村龍子

春が來ました今年は又も誰がお嫁に行くのやら

俳句の趣味あり

選者曰、近來新歌謡欄か振はざるの氣味あり、諸君は只、文學の上の細工にのみ汲々として實景、實情を歌ふことを念とせざる故に、此の如き病氣を生ず、願はくば鳥の木に歌ひ、蝶の花に舞ふが如く、何の巧もなく、物に觸れ事に感ずる處自然の端に乗じて歌ひたまへ

【秀逸】

○　　伊豫　井上いち子

花よ咲くなら春咲く花に人に見られる花に咲け

○　　甲斐　網野やす子

春のお雨で墨すり流し書いたおうたに花が咲く

○　　福山　きよう子

私の心は紅ひなげしよ月の光で封じましよ

○　　長野　東條周子

船頭可愛や千曲の川の氷わり〲船を行る

○　　土佐　むらさき

冬はよい處大島小島波に浮いたり沈んだり

○　　岐阜　中村澤子

桃が散つてよ妾の窓へ糸にさしましよ絹糸に

○　　信濃　安坂富美子

お伽噺の花咲か爺に撞かせたいのは春の鐘

○　　德島　西野花菱

霞む海原乙姫樣のお使見たよに艫がうく

○　　上毛　須藤淺子

寒は入れども我が家のホーム何時も春風吹く樣に

○　天鹽　山田一穗子

雪は降る〳〵軒迄積る丸木柱の草屋根の

○　牛込　平塚白百合

霧をそだてゝ番むつましく海の旅するつばくらめ

○　福井　北利子

雪が降ります向ふの山にちようど白蝶かとぶようよ

○　盛岡　なみえ

今は如月わたしの里は雪はつもつて一丈餘

○　熊本　高橋ちか

島のうたひに蝶々がまへばかぜがそばからつずみ打つ

○　山城　小森幸

私しや十六貮さん二十歳人は二人に目をつける

○　秋田　瀧本光子

たにま〳〵の笑はし花をとつて差したい束髮に

○　栃木　杉田直子

姉は白ばら妹は緋ばらるしたつむりはマガレット

○　常陸　須崎綾子

汽車の窓から浪波をみれば峯は眞白に雲かゝる

○　長門　吉富光榮

姿や十三姉さん十五母に對座でお針する

○　信濃　駒澤ひろ子

妾しや二十の花嫁盛り早くなりたや花嫁に

○　南品川　落穗

ぬけ毛まるめて窓から捨てりや木の葉もろともかけまわる

○　白楡女

盆片手に可愛や坊はお乳くはへて夢の人

○　越後　志賀榮代子

故鄉へ歸る其足早にや何んな若衆にも負けやせぬ

○　茨城　山下靜子

梅の小村へ春駒勇む脊なの荷物は花嫁御

○　土佐　高橋綾子

お日が入ります鎮守の森へやがて私しは野良歸り

○　京橋　細川榮子

戀し母樣淡路の島よ浪路遙かに雲幾重

○　明石　落葉子

フワリ〳〵と私の魂も迷ひ出さうな花月夜

○　長野　下枝よし子

姿の住居めぐるりは山だ花の都へ出て見たい

○　大津　内田八千代

緋桃散り込む小川の末の内の水車は花車

○　廣島　賀川みつ繪

花が散ります散ります花が涙の目にもはら〳〵と

○　姫路　飛那子

妹は友禪わたしは小紋ふたり寫した晴すがた

○　靜岡　池田芳子

嫁に行くのは嬉れしいけれど先の舅姑が氣に懸る

○　兵庫　祥子

うちの姉さん白梅が好き私すみれとばらが好き

○　小石川　近藤愛江

村の小町が嫁入る宵を惜くや春雨しよぼ〳〵と

○　古河　長谷川みどり

春は行く〳〵蕾をのせて蝶のやうなる私もつれて

○　若狹　蝶夢子

春の女神が手織の綾の帷り垂れたか野の霞

○　岐阜　日野歌子

都はなれし一月二日汽車の窓から雪見する

○　美濃　をとめ

君は御屋よわたしは蓋共に泣くべく生れしか

○　美濃　防島小枝子

梅はさけども朝ふく風は師走なかばの心地する

○　若狹　山田小濱

さつと野ばらの香りを送る風が詩集をひら〳〵と

書簡文

○規定　手紙又はハガキの通常の音信文を云ふ候文口語體何れにても隨意なり成るべく意味の透徹したる作を採る二十四字詰二十行以内とす一人一章に限る卷紙を用ゆべからず乙種の賞を送呈す

○舊友の消息（天賞）

麹町　胡枝子

こちらは近年に無い御寒さ、今も窓外はやみまなく雪が降つて居ります、よく先の時分は雪をうれしがりましたつけ、テニスコートの雪投盛だつたあの時代がつい思ひ出されて、戀しくつて、火燵のはたで追想の記とか何とか書きつけて居りますの、全くからなつてはだめでございますね、それよりもつまらないと云へば此頃の御友達のつきあひ、つく／＼いやになつてしまひますわ、二三日前同級會が御座いまして久し振られしさうな皆様の御笑顔に接しるのを樂しんで出掛けましたら、如何でございませう、三十人のうちの二十一人は缺席なのですもの、神田さんや竹村さん市橋さんなんかは大變御忙がしくてそれに御姑様も御やかましい揃ださうですからむしろ當然とは思ひますが本郷座通ひの菅田さんも三越きちがひの天野さんも誰さんも誰さんもしら／＼しい御斷狀それでも九人の出席者はみんな愉快に御話して久し振に集つた母校の作法室に半日を送りました、龍居さんも嫁らつしやいましたつてね、小坂の鑛山とか、御手紙あげても御返事もこないつて任校中は御みき德利だつた新島さんがこぼしてらつしやいましたよ濟岡さんも御かたづきになつて朝鮮の領事館にいらつしやいましたつて、やつぱり御親友のあのみき子さんが暮に東明館で御逢ひになつたら、大變な御さどり方ですつて、奧樣になるとあゝもすまさなければならないものかつて笑つてらつしやいましてよ、御忙がしいでございませうね、つてみき子さんが仰しやつたら、ハア恐れ入ります、つてふしつけて仰しやるのですつて、そしてね「押しつまりましてからの旅行で多忙しいものでございますから何度買物に參りましてもとり落しましてね」ですつて、とり落しましてねが可笑しいつて大笑でした一躰に水臭いものになつてしまひましたよ、御いそがしいかゝか存じ

ませんけれど心をこめて書いた手紙に御返じがあつてやれうれしやと胸轟かしてよんでみれば鷲堂流か、岡田流か、御自慢らしい筆のあと、謹みて新年をことほぎまつると許りにはがつかりしないでは居られませんわ、君子さんむかしは面白うございました事ね、もうすつかり揚おとり遊ばして？私ただ澤山あるの、ございますの、寫真おうつしになつたらきつと頂かして下さいましな左様なら。

殆んど間然するところの無い措敍、彼から是れと移つて行く送迎眩

様にやつと姿があらはれて來ます（評）



赤毛布　伊ん　ちどり

○名つけ親（嶋賞）

大阪　今西春江

御嫁ぎ遊ばされてより此處に三とせ、可愛ゆき赤さまお生れあそばされ候由、誠に御目出度く存候。それに就て私を名付け親と成しやらんとの御仰せ、いつもながら情厚きお姉上様のお計らひ、知らず〳〵熱き涙の頬を憐ふを覺え候、然しながらどちら様ともお打ち明け下さらず、たゞ二つの名を書きて寄越せよとのお仰せはちと怨めしく存じ候も、慈う胸

の内をそゝくらるゝやうな心地が致し、かへつて面白しと存じ候。

御夕飯後右の事家内の者に話し候處、母上始め弟や女中等の眞面目に考へ呉れ候に反し、口惡の阿兄は急ぐ傍より口を添え、（男とならば「宿内」。女ならば「しい」とせよ）と申候。其何ゆゑなるやを聞き候へば、（お名前が「礒川」だから、「忙がわしい」「忙がわしく無い」と語呂が合つて宜いぢやないか）。などと、またしても一同を笑はせ候。

さて私のお願ひは、女ならば「ゑん」とお付け下され度く候。「艶」とは御承知ならんも、我亡妹の名に有之り候。死にし者の名を其儘取るは緣起わるしとならば其れ迄に候へども。私はたゞ何と無う亡き妹のなつかしくて、お姉上樣の御兒樣の御成人あそばせし後、「ゑんさまよ」とてたゞ一と言にても呼びて見たく思ふものに候。

お男兒樣ならば只今の處宜い名は浮び申さず、いづれ後より友人達にも圖りし上、御報知申し上ぐべく候。されど其れ迄にお姉上樣の方にて、宜きお名もこれあらば、自由にお付け下され度く、少しもお慽みこれ無く候かしこ。

折角の趣向に一奇を出さゞりしは遺憾ながら、落着いた書きぶりが宜ろしい。（評）

○父の三七日に友の許へ（人賞）

東條桂子

今朝手飼の兎に飼料やるとて霜柱深い道を裏の畑へと出ました。頰を打つ冷たい風に思はずつと身を引きしめながら遙に見渡すと朝霧に包まれて立てる夢の樣に淡い山々あゝあのやうな山いくつ越えた其處が懷かしい貴女の住んでゐらつしやるお國かと凝と見つめて居るうちいつか知ら冷たい涙が頰に流れ出ました。今日は亡き父が三七日なのです。一日一日と云ふにいはれない心の淋しさを覺える今日此頃たゞ貴女許りがお慕はしくてお逢ひ申たらあゝも云て慰めて下さらうかこうも云てはげまして下さらうかとそんな事許り想ては夕暮の力無い日ざしが土藏の白壁に映るのをはかない思にかられながら眺めて居ります。人は依賴心を持て居るやうては立派な人間にはなれぬお前達も決して依賴心を起すなとは父が平常口癖のやうに私達姉弟に云ひ聞かせて居た言葉でした。あゝ其も今は悲しい思出の種となつて折毎に涙を湧かせる其も是非ない浮世の運命てせうか。次の間に聞える鉦の音母が佛前へ供へ物でもして居るのでせう。外は初冬の日影暖かに裏の林て鳴く閑古鳥の聲が折からに一しほ寂しさを誘て靜かさがうら若い身にも滋々と感じられます。久美樣お

便りを下さい。私は淋しくてなりませんもの。

父亡き家の春待つ月の哀しみがよく表はれてゐます。(評)

【秀逸】

○伊豆山より

靜岡　根岸良子

伊豆山とは、熱海の町から三町ばかりの急な坂を下りた處です。片方は崖端になつて、朝は房總半島の淡い霧の中から美しい日光が拜まれ、夕日が天城の彼方に沈む時はきつと、三浦岬の一角が黑ずんでゐます。相模灘の荒ら波が朝な夕なに岸を嚙んでゐます。さうして背後には梅の林を境にした小山の麓をめぐつて熱海の町續きになつてゐます。春は淺いですけれ共梅はもう滿開です。鶯の聲は今朝始めて宿の欄干で聞きました。何となく伊豆山はもう春めいて來ました。金色夜叉の貫一と宮さんとの熱海の梅林は未だ開きませんが、伊豆山よりは十日程遲いとの事です。今朝、晩方、冷たき磯邊の眞砂を踏んでそゞろ歩きの途中、美しい曙光と、淡い富士とを拜しました。

静子樣、

次にはどうぞ都の春をお知らせ下さい、待つてゐますからね、かしこ。

短くして整へり。(評)

○京坂旅行より歸りし兄に

靜岡　森衛子

一昨日文源堂に行たら叮嚀に紙に包んだ物を主人がよこしました、歸てすぐ開いて見ると、お金と針と枝折とがありましたので實にうれしく思ひました、お金はあれでは多いのですが遠慮なく戴いておきます、種々の物を戴いて有り難く御禮申ます、お手紙によると梶樣が入學試驗にいらつしやるとのとぜひうまく出來て下さればよいと祈てゐます、ああ忘れたつけ兄さん旅行にいらつしやつても別に御病氣にお障りは御在ませんですか。先達て淺間パークで逢たでせう、あれから歸ると、天長節の祝賀會がはじまり四年生のカクシ藝や其の他いろいろ餘興があつて中々盛でした、兄さんの學校の高村先生も御出になつてお話して下さいました、終つて私の室でかるた會をやつたの、あの滑稽な松平樣讀手で「鯨吠ゆる玄海灘を過ぎ行けばコヒの砂漠に月宿るらん」だの「これや此の行くもかへるも電車にて……」なんて讀んで皆樣でお腹抱へて時の移るを知らなかつたの。

今度廿八日土曜日には秋季運動會があるので、其支度で今では外出もできません、けれども私の室は、月が大變によいのですよ、淸水山の端へ昇る月はいつも兄さんより先に見るの、裏はすぐ下が田ですから、そこで雀等が大さわぎです、今では農夫がよろこんで稻をかつて居ます、又瑞光寺のバカが畔などにきて面白く

てなりません、皆樣はそれを見てお笑草として居ります。今ね下の室の尾上樣「本田樣、三時半になりましたから炊事に出ませう」と申ますから、炊事に出なければなりませんでこれまで運動會入塲劵三枚差し上げます、遠山樣渡來樣おさそひしてお出下さいあらあら。

筆の行き方がすべて自然で無雑に書かれてあります、此上何か特色が出ると宜いのです。(評)

○山田先生ですか

福井　やまさと

左樣です、武生の高等科を退かれますと、すぐ御良人を迎へられまして、樂しい家庭を作られましたが、今では寛さんと云ふ五つになるぼつちやんと、文子さんと云ふ三つになつた孃さんとのお母あさんになられました、御良人樣は某會社の支配人を遊ばすので、百性はなさらず、ほんのお二人の子供衆を、おもちやのやうにしてお育てなさるのがお仕事なのです、昨日も大きい寛さんの方が、姉えさん是をご覽なさつてくださいと、お手紙を持つて來ましたので、何だらうと思つて見ますと、「今日は寛が泣かずに頭を剃らせました、賞めてやつてください」とありましたので「早速仰の通り致しました」と返事を書いて、おや寛さん頭がたいそうきれいですね、まるで引接寺樣のお小僧樣のやうですわ、しかしお泣きなすつたのでせうと申しますと、いゝえちつとも泣かなかつたの、そんなよわみそぢやないよ、今度お母さんが武生へいらつしやつたら洋服と靴を買つて來てもらふのよ……まあ田中先生はこんなにして日を送つて居られます。

氣の利いた書きぶりです、是れも内容がしつかりして居りヤア申分なしです。(評)

○都の姉に

田村かね子

春とは名のみで未だ寒さ烈しう御坐いますが、おなつかしい姉い樣にはお變りありませんか、定めしみけしきうるはしく芙蓉の姿のそれよりも、いや高き桂の枝に、御目をそゝがせられて、たゆまなくお勉めの御事と御察し申し上升、次に私方一同打ち揃つて恙がなく姉、樣のおうはさ致して居るのですよ、ですから内の事等露御心配遊ばさづに、御安心して御勉强なすつて早く御踊り下さい、姉いさま、いつぞやの、肩掛未だお出來にならないのですか、此の春に間に合ふ樣にお編み下さい、いつも勝手の事ばかり申上げてすみませんが、美しいカードと、繪葉書をおついでの節お送り下さいな、お願ひ致し升ほんとうに姉い樣に、差上るお手紙には乾度、おさいそくと、おねだりですね、恰度姉さまがお父樣に上げる手紙と同じですねホホ、、

でも、母あさまが、そうおしやつたのですよ、申上度い事はみ空にきらめく星よりも、多く御坐いますが、今日は之れて、じや姉いさまお待ち申して居りますよ、さよなら

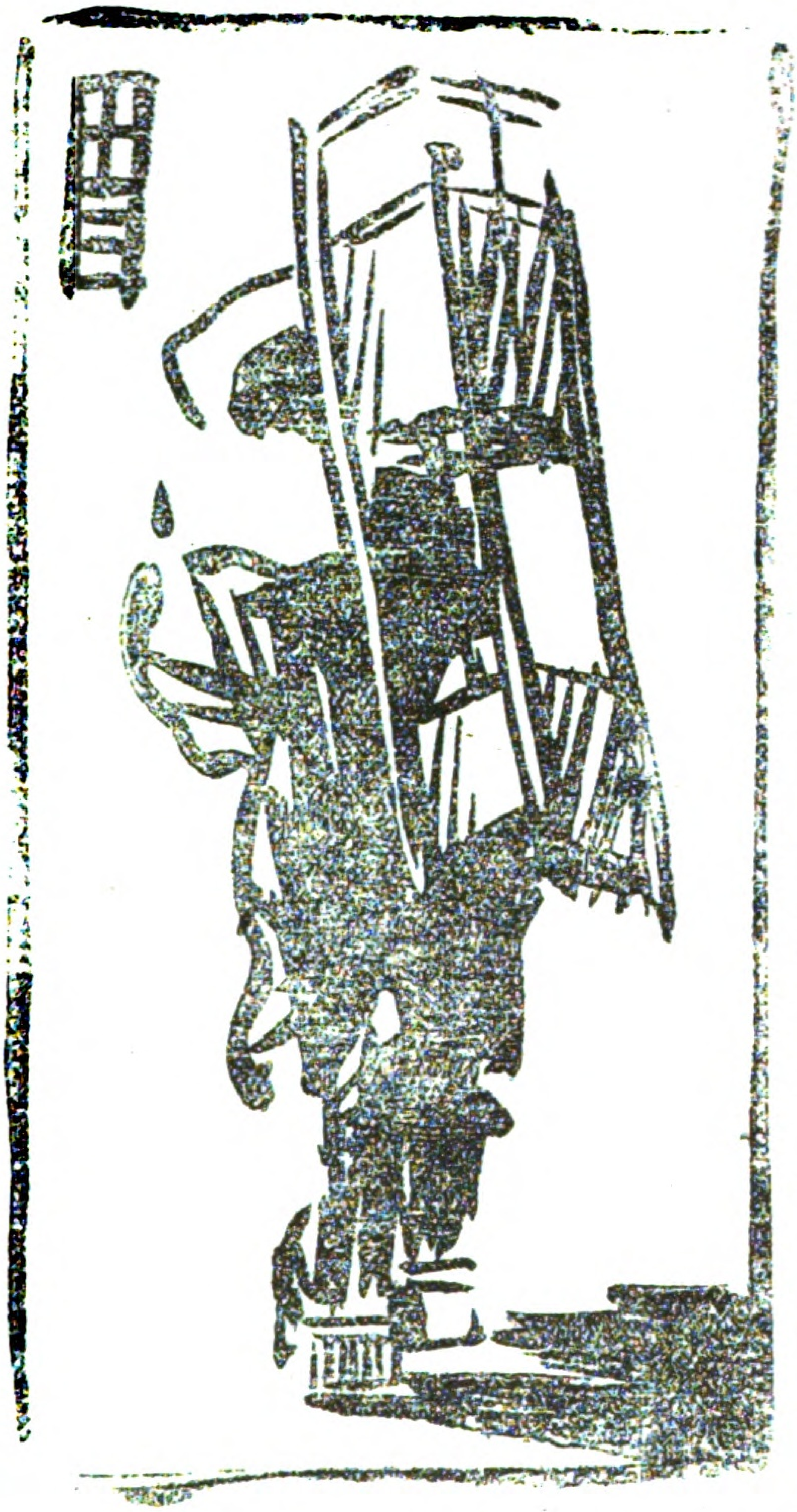
「芙蓉の峯のそれよりも」は月並臭いが「申上度い事み空にきらめく星よりも」は明治の新式てせう、おねだりの文句は御愛嬌。（評）

○覺えてお出なさい

土佐　むらさき

燕の脊に載せてお返ししやうか、蛾に負はしてお返ししやうかと思ひましたが。お使が居らつしやる事だから幸よ、御戯談もよい加減にして頂戴、よい加減にお嬲りなさいよ、今日はとても御在宅ぢやあるまい…なんて、妾だつて、さう〳〵あちらが戀しいと云ふ譯ぢやあるまいし、一度位、島田に結つたつて、不思議な事も無いてしよう、覺えてお出なさい、妾も聞きましたよ…今にたんと冷かして上げましようョ、、、、、ホ、、、。

何の事だか分りませんが筆つきが面白いから



飴や　栃木　栗原とみ子

○産衣について

紀伊　田中文子

姉様、またお正月が來ましたね、お目出たいのかお目出度くないのか、取りたくもない入らない年が又一つふえました、然し姉様は此頃の寒さにもお中りなくて何よりお目出度いのね、二月、三月と早く來れば好いと指折つて待つてます、實はに待遠ほしいわ、お母様も此頃は産衣の事て大さわぎよ、て、染める紋付の模様ね、お母様は村雲に昇り龍が好いつて仰るの、之は姉様御存じてせう、彼の新家の誠ちやんが生れた時、伯母さんのお實家から祝つて來た

産衣、昇り龍だから吉相が好い、それに誠坊も壮健だからつてね、すると兄様は其より孟母断機の圖が好いて主張なさるし、私はまた生れ年の紀念のために勅題に因んだ雪中の松に染めて、駁目の上下には笹の葉をかげひなたに表はして御紋の笹龍膽をきかさうと考へたの、姉様は何が好いと思つて――否姉様より着る當人の赤ちやんが何うでせう、一寸お腹のに聞いて頂戴な、――それから友禪の方が定まりました、それは〳〵佳い柄ですよ何んなつてまあ云ひますまい、云はぬが花つて事がありますから

何うかお腰やお腹を冷さない様に、呉々も御注意なさる様にお願ひ申します。

○東京の兄へ　　秋田　沖口みき子

今朝新聞で見ましたら、御地にも雪が降つた様で御座いますね、兄様のお召し物が薄すくてさぞ〳〵寒さをお感じの事ならんと、思はず涙をこぼしました、母様とお話をして、只今綿入れを仕立てゝ居りますから、二三日お待ち下さい、

「あなたの兄様は、ほんとうにおさかしいのね」皆、さんに云はれてさへ、何んだか胸が一つぱいに成るので御座いますもの、斯くして、夜更けまでお仕事をして居て、學資金にも足らぬお金を懐にして、慣れぬ異郷に學んでお出でなさる、兄様がどんなにお心細からうと思へば、胸が張り裂ける様な感じが致します。

すると夢にばかり見て居る、父様の事を思ひ出して、一人で泪を拂ひ〳〵して居ります、母様も「父が無いばかりでどんなに肩身を狹くして居るだらう」と有仰つてはお泣きなさいます、

然し兄様學資金などは、母様と二人で何んとても致してお送り致しますから、必ず〳〵御心配下さいますな

唯お成績が良い上にも、益々御勉强をして一日も早く母様をお安め遊ばして下さい、

○雪の日友の許へ　　松山　大本花子

富美子様、南の國には珍らしき大雪には候はずや。御宅の築山のほとり、泉水のあたり、さこそは美しう今頃は東の丸窓に繪筆とらるゝ事と推し上げ候

裏の叔母の、話に、雪の水は色を白くするものゝよし富美様も葉の上のを瓶に入れて、いよゝ美しくおなりなさるべく候

去年さし上げし小犬はおとなしく居り候や、私の庭はまだ目も覺めぬ中に、プチのいたづらにて泣きたき程の狼籍さに候へば、まゝよと弟を手傳ひて雪かき集め庭のまん中に怪しげなる雪人形を立たせ申し候、あはれ尚ほ降りしきり候を、晩迄には尺にも積るべくかゝる夜は、昔ならば雪女と云ふものゝ軒に立つとやら、こよなく寂しきものと承り候へば、歌留多にさゞめくこそ好けれと誰やらの云ひ出で候

千代子様共々、日の暮れぬ中におこし下され度く、更けなば三人小枕並べ申さむ、茶の間には、母の物煮る甘き香の高う候を、必ず〳〵老ひたる人に、心おとしをなさせ給ひそ。かしこ

お伽噺

巖谷小波選



○規定　新しきお伽噺を作ること土地の口碑傳說を採用して材料とするは宜しけれど既に在るお伽噺の燒き直しは許さず二十四字入十行以內凡て振假名つき罫紙又は半紙に認めること賞は乙種を送呈す

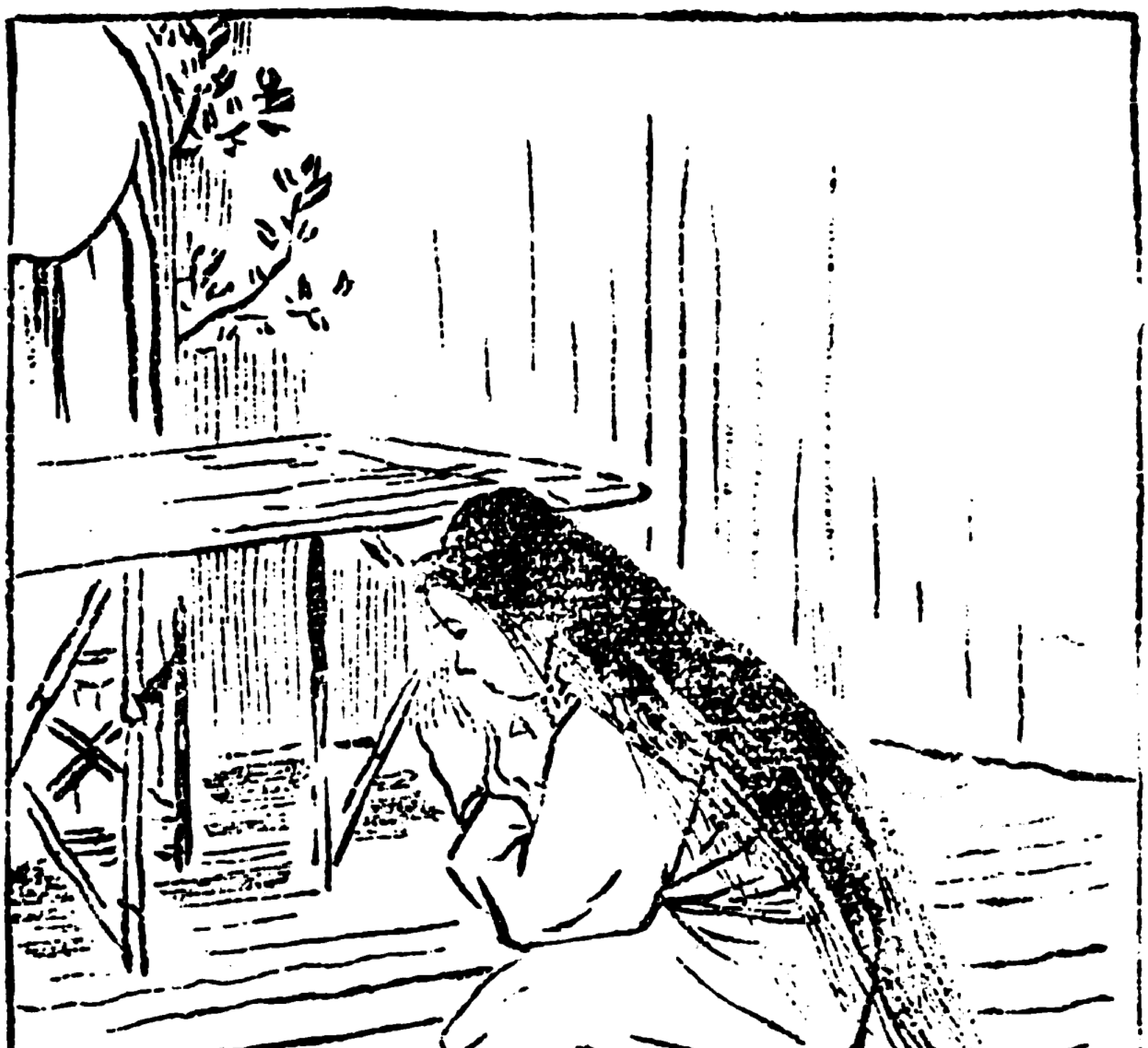
○水の神樣（天賞）

伊豫　福井白百合

伊豫の國に大三島と云ふ周回が七里程の島が有ます、昔し昔しの事で有ります、此島に越智大明神と云ふ鎭守が祠つて有ました、同じ島に太郎槌阿名槌と云ふ極正直な夫婦が居りました、毎日々々野に出ては花を友とし鳥の啼く音を樂しみにして農業に精出して居ましたが、此夫婦には一人も子供が有ません、太郎槌も阿名槌も非常く心配してどうかして子供が一人欲しいものと思ふて居ますけれ共是許りは致方がありません、そこで夫婦が相談して越智大明神樣へお願をかけましてどうか子供が出來ます樣にと七七四十九日が間日參をしました、いよ〳〵四十九日の晩となりまして夫婦は大明神樣の拜殿で祈つて居りますと夢か現か一人の可愛らしい女の子がお父さんお母さんと云つて抱かれると見ると不圖目が覺めました、太郎槌は果て妙な夢を見たと思ふて居りますと、阿名槌があなた私は今夢を見ましたと云ふので二人が話して見ると同じ樣な夢を見て居りました、それから阿名槌はだん〳〵お腹が大きくなりまして月が滿ちて一人の美くしい、それは〳〵繪に書いた樣な女の子を產み落しました、卵に目鼻と申しますが誠に其通りで夫婦の歡びは譬へ樣が有りません、そこで名を越智姬と命名まして蝶よ花よと大事にして育てゝ居ました。

處が越智姬が丁度十三歲の年になりましたが、此年に日本全國が大旱魃で田や畑の作物が一切取れません、實に前代未聞の大饑饉で國中の者は最早食物がなくなつて每日々々饑へ死する者が澤山出來ました、國中の者が非常く心配しまして神樣を念じるやら雨乞をする

やら色々の御祈禱などしますれ共一向驗が有ません、太郎槌夫婦も心配をして居りましたが、或る晩の事阿名槌が夜中頃に不圖目を覺まして見ると越智姫が何處へ行たか姿が見へません、是れは何うした事で有らうかと色々尋ねて見ましたが分りません、兎角する內從明け頃になりますと越智姫はちやんと元の寐間に眠て居ります、又翌晩も何處へか行つて明方になると歸つて寢て居りますので夫婦は不思議に思つて其次の晩眠た振をして越智姫の樣子を窺て居りますと、夜半頃になつて姫はそつと寐間を出て裏戸を



開け、跣足のまゝ馳け出しました、見て居た太郎槌は果て何處へ行くので有らうかと姫に知れぬ樣に跡を跟けて行きますと、其でさへ淋しい樣な越智大明神樣の森へ來まして、其處にある神さんの井戸端で頻りに水を浴びて居りましたが、やがて拜殿へ參詣て一生懸命て祈りをします、越智の大明神樣どうぞ雨を降らして下さい、そうして國中の人民を援けて下さい、其代り私の命はあなたへ差上げます、と一心に念じて居ります、太郎槌はさてさて感心な娘で有るわいと思ひましたが何喰はぬ顏で先へ歸宅つて來ま

した、其夫の晩にどうしたのか越智姫の姿が掻き消す樣に失くなつて仕舞ました、夫婦は心配て心配て耐りません、又も明神樣へ行たのでは有るまいかと鎮守へ尋ねて行きましたが一向影も形も見へません、それから村中が總出て探しましたけれ共とう／＼分りません、夫婦は殆ど氣も狂ふ許りになつて尋ね廻りました、そうして山の奥の奥迄探して行きましてあまり草臥れたので岩に腰かけて休んで居ますと、天の方に當つて何とも言へぬよい音樂が聞へますので仰つて見ますとては如何に、越智姫が立派な裝束で五色の雲に乘つて神樣のお側に居ります、そうして神樣が夫婦に向ひまして言はれますには、越智姫は誠に感心な者じや日本國の者を助けたい爲めに自分の命を犠牲にしてまで雨を祈るなかなか豪い者じや、其心に感じて雨を降らして遣る、其代り越智姫はもう己れの膝元へ引取つて立派に暮させるから決して心配するなと言終つて金の鈴を打振ると、ジヤン／＼と云ふ音がしますのに驚いて目を覺しますと、あら不思議や、戸外は大雨大雷鳴、ザツ／＼と云ふ實に凄然い音がしますので扨は正夢で有つたかと思ひましたが、此雨の爲めに川へも井戸へも田へも畑へも水が充分に出ましたので、米も麥も立派に出來る樣になり國中の者が命を拾ひました、けれ共越智姫は遂々歸つて來ませなんだ、此の日が丁度八月の二十二日であります。

そこで村中の者が越智姫を水の神樣とも瑞の神樣とも崇めて此島に大きな社を建て丶毎年此日に立派なお祭りをする樣になりました。

明治の御代になつて國幣大社の位が出來、大山祇神社となつて今も八月二十二日には立派なお祭りをするので有ります。

（評）これ恐らくは貴地の口碑として殘つて居るのでせう、何となく古代の狀態を見る樣で嬉しく思ひます。

○赤い御顔（地實）

金澤市味噌藏町裏町十ノ一　小柏すま

昔むかし、神樣が鳥や獸を皆な呼び集めて、夫れぞれに、御仕事や役を仰せ付られました、所が此所に一羽のコックと云ふ美しい雛が居ました。

神樣は此のコックを御膝下へ召されて「御前は良い高い聲を持とるから、是れからは毎朝東が白むと直にそれを皆に知らして起して遣れよ」と、命ぜられました。

コックは喜んで御受けいたしました。

コックも初めは面白いものだから、朝になると誰よりも早く起きて「皆な起きなさいよ東天紅コッケコー」と、云ふて、皆を起して居ました。所が、毎日毎日の事ですから、追々に飽きてしまつて、終には朝も遅くなつてから鳴き出したり、或時は亦すつかり忘れてしまつて、鳴かなんだり、爲ますので、皆外のものは大迷惑。

其の樣な事が有ると、其の都度神樣から御注意が有りましたが、コックは相變らず、怠けて居ました、如何に優しい御慈悲深い神樣も、とうとう御怒りなされて大層コックを御叱りになりました、コックも此度は恐れ入つて、眞赤な顔をして御詫びしましたが、中々御許し遊ばされんで、「御前の樣な怠け者は、今後の見懲に今日の其の赤い見苦しい顔がいつ迄も取れず、亦空も翔られん樣にしてやるぞ」と、それはそれは大層な荒々しい御氣色で仰せられました。まあ皆樣怠けた罰は何んと恐ろしいものでは有りませんか、今ではコックの御役は取上げられ、代りに時計を召出されて御用ひになりました。

其後コックはもう他の鳥の樣に翼は有れど、空も自由に翔る事も出來ず、外へ出れば皆から赤い顔赤い顔と云つて罵られ、恥しいやら、悔しいやら、夫は其うでしよ、皆樣だつて、今の樣に可愛らしい御顔で居らつしやるが、急に今眞赤な顔になつてしまつて御覽、そりや恥しいでしよ、然し夫れも是れも考へて見れば皆自分が怠けた罰だ、吁、私が惡かつたと、非常に後悔しました。

せめて、此の罪を少しでも償ふ爲めにと、思つて夫れからは、殊勝にも一生懸命人間の爲めに、我身を棄てて盡して居ました。

神樣もコックがすつかり心を入れ替へてしまつたのを御覽になつて、或日御呼び出しなされて、勘當も許し亦以前の役目を命じ、赤い顔も以前の通りの美しい顔にして遣るぞと、仰せられました、コックは大層喜んで嬉し涙を流し、「誠に難有ふ御座いますが、私は何うぞ今の儘に人間の爲めに盡さして下され、其の代り何うぞ時計は相變らず御用ひ下され、亦此の見苦しい顔は亦以前の怠け心の起らん爲めに何うぞ此の儘に成るつて下さりませ」と申上げました、神樣は是を聞かれて感心遊ばして、「宜くこそ申した、夫れならば其の儘にして置くが宜い、今後とも人の爲めに骨身を惜しまず働けよ」と、仰せられて、非常に御賞めになりました

とさ。めてたし〳〵

（評）鶴の生態をお伽噺化したる手腕敬服々々

○奇麗な鳥（入賞）

和歌山縣伊都郡橋本町大字菖蒲谷　北畑直子

「お祖母さん、今日は日曜だし天氣も善うございますから、お豆を植ゑに往つて參ります、お午時分には終ふてせうがそれ迄どうぞお母さんをお賴み申します」と、縞目も分かぬ身の狹ひ丈の短かい着物を着て、膝の拔けたパッチを穿き左手に蠶豆を入れた種蒔籠を持つて鍬を肩にし出て參りましたのは、末藏と云ふまだ尋常五年生のうら稚い子てあります。末ちやんの家は貧乏てその上お父樣は三年程前に遠いアメリカへ出稼ぎに行つたなり、只の一度もお音信がありません、お母さんは大層御心配なさつた擧句到頭病氣になられました、そこて末ちやんは一人の祖母さんと一人の妹とを相手に、朝は早うから起きて朝餉の支度や室内の掃除をなし、天氣の善い日などは山へ往つて薪を採つたり等色々手傳つてから學校へ行くのですが、まだ一度も遲なつた事はありません。そして末ちやんは學校の成績もよく品行も正しいので、善い模範生だと郡長樣からや、村長さんからご褒美を戴つた事は數限りありません。



飴屋　大阪　榎浜春枝

さて末ちやんはうねうね曲つた草深い道を、小さな聲で唱歌を謠ひ乍ら程遠からぬ畑へ往つて孜々と耕しては蒔き蒔いては耕し午前にはもう蒔いて終ひましたので、畦へ腰を下して四邊の景色に見恍れて居ました。丁度秋の初めの麗かな日てありますから、空は靑く透きとほつて瑠璃玉の樣て、綠や紅葉の入り混つてゐる向うの山には美しい鳥がよい聲て囀

いて居ます、此方の野原でも紫や黄色の花が滿ちみちて、大きな蝶も小さな蝶も花の香を趁うて、さも樂しさうに奇麗な振袖をヒラヒラさせ乍ら、右に左に飛びかうて居ます。すると後の方でバサ〳〵と鳥の羽ばたきらしい音が聞えましたので、振りかへつて見ると金色の光を放つたそれは〳〵奇麗な百舌鳥位な大きさの鳥が、此方へスーッと飛んで來ます、そして畔の柿の木の梢へ止つてじつと末ちやんの方を見てゐましたが、ポイと畑へ飛び下りて末ちやんが今の今蒔いたばつかりの豆を、掻き出して喰ひ始ました。さあ末ちやんは如何しましたでせう……、今喰つてしまはれては今迄骨を折つたのが無駄になつてしまふ、然しあんな美しい可愛らしい鳥を逐つ放つてしまふのも何だか氣がむかない、如何しようかと考へ込んで居りましたが、急にタタッと二三間向うへ走つて行つて、種蒔籠に殘つてゐた豆を持つて來ました「それは今蒔いた丈だから何卒堀らずに置いて呉れ、その替り之を遣るから」と云ひますと、鳥は嬉しさうに羽をバタつかせ乍ら、その豆を拾ひました。末ちやんはじつとそれを見つめて居ます、體中は一面に金色の毛に包まれて、丁度金の鳥の樣で長くは見ても居られぬ位 美しいのであります。末ちやんは其邊に散らばつてゐる枯枝等を束ねて、脊負つて歸らうとしますとさも慕はしさうについて來ますから、末ちやんも喜んで家へつれて歸つて大切に飼つて遣りました、それから末ちやんはこの鳥を第一のお友達として、山へも畑へも一緒に往つて、一所懸命家計を助けお母さんの看護に心身を盡しましたが、家計は依然の儘で病氣も目立つて快いと云ふ事もありませんでした。或る日末ちやんが學校から歸つて鳥籠の傍へ行つて見ますと、悲しいや常も喜んで迎へて呉る可愛い〳〵鳥が居ません、末ちやんは泣かんばかりに落膽しました、が日暮になつたら歸るだらうと待つて居ましても一向影も形も見せません、その晩は心淋しく明かして朝になりましたがまだ歸りません、若しやと思つて前の豆畑へ行つて見ましたがやつぱり居ません、それから後十日程は朝に待夕に待ちまち致しましたが到頭歸りませんでしたが、十一日目の朝まだ仄暗い中に起きて門で四方を眺めて居ますと、向うの山の巓にパッと光つた者が見えたと思ふと、もう庭の梅の枝へ來て居ます、よく視るとそれが待ちに待つてゐた可愛い鳥で何か喞へてゐる樣であります、末ちやんは雀躍りして喜び早速室内へ入れました、處がその鳥

は口の者を見よと云ふ樣に頭を上に下に振りますから、手にとつて見ますと一封の水莖てあります。胸を躍らせて展いて讀むと思ひもよらん戀しい懷しいお父樣の御消息てあります「大分お金も儲かつたから久振りて近い内に故郷へ歸るから」と云ふのて有ました、末ちやんは再び雀躍しましたはては嬉し泣きに泣き伏しました。流石の鳥も十日の間食はず飲まずて飛び續けましたので、その日の午過到頭死んで終ひました、さあ末ちやんの歎きは一通りではありません。併し四五日經つてお父樣はニコ〱し乍ら歸られました、末ちやんもお祖母さんも皆夢かと許り喜んて迎へました、お母さん迄が病を推してお迎へしました。それから後はお母さんの病もすつかり快り、澤山なお金て山や田を買ひ入れ、家も立派に建て替へまして樂しく世を送りましたとさ。めでたし〱

（評）實に可憐、可愛の好物語である。

【秀逸】

○カマキリと蚊　　岡山　小峇

赫々と照りつけて目もくらむばかりの眞ひる中一ぴきの蚊がお友だちのカマキリのうちへきてさも羨しさうに「何んとカマキリ君君は實によいものをお持ちてすねいさと云ふときは其するどい鎌で自分の身を充分守るなど到底外の仲間じやてきぬ事てす」と云ふとカマキリはカラカラと笑ひながら其は僕に限るさ、お前などはまねのまの字もてきぬだらうだが自然の神が僕ばかりにこんなよいものを下すつたのだから有難くつてならぬ其れを思へばお前等の樣にいつも遊んてばかりは居られないよ「いや誠に御尤てございます其れについてお願にまゐりました外てもございませんが私には遊うちわと云ふ大敵にまとに困つて居ますてなる事ならちよいと借して藏きたいと思ひまして」と涙ながらに物語りましたするとカマキリあ氣の毒に思ひ「そりやー君と僕とのことだから貸さないでもないがさーこの鎌が君の力でつかへるかね、まあ兎に角持つて行つて見玉へしかし二つ共かしたら留守に僕にも敵があるからふい打ちをされると大變だから一つだけ貸さうして使ふ時には上の方から引つかけて手前に引きさげる具合にせんと功めがすくないよ「ハア其れは萬々承知して居ます」蚊は其鎌をかりて「遊うちわのやろうきて見やーがれもー千人力だぞとカみかへつてー刻千秋の思ひて日の暮れるのを待つてぶん〱となきながら出かけると神ならぬ身の遊うちわは例の通りにやつてきて追廻し初めたから、今こそ天の與へと喜んでプーンとさけびながら飛びかゝて打つたけども遊うちわは平氣だから氣が氣てない今度こそと金剛力を出して打つ立つた所如何なうちわも悲鳴をあげて倒れるだらうか思ひの外遊うちわの先生益々いかつて追ひ立てますから蚊はついに目がくらんて鎌の先が自分の腹へひつかかつたからアッとさけんて其塲に倒れたそこてうちわはざまあ見ろと云はぬばかりの顔をして何處へか行つてしまつたとさ

（評）之はよくある筋の話だが一寸面白く出來て居ます。

少女文壇



○規定　本欄は十五歳以下の少女に限り投書するを得文章和歌俳句唱歌等を採用す年齢及び住所姓名學校等を明記すること用紙は半紙賞は丙種を呈す

○和歌（地賞）

奈良縣吉野郡白根村弥松　福西しづ子（十三才）

妹等が死んだ胡蝶を葬らんと小さき手に手に土を運べり

下の句よろし（評）

○留守居（人賞）

茨城縣猿島郡岡郷村稻宮　荒木すが子（十三才）

日は暮れましたのに、まだお母さんと姉さんは歸つて來ません。妾しは燈火の用意をして居りますと弟は雨戸を閉めてゐました。閉める戸に力をこめて、そのひときが、いと淋しく身にしみました。大神宮様に燈火をつけ、佛様に行く時は、弟を頼むだのです。弟はぼんやりと立つて傍に居ます。火鉢の前に來て座つた時に、「弟はお母さんと姉さんはいつ歸るだらう」と云つて、あとは淋しくだまつて居りました。まもなく前のおばさんが來ましたので、嬉しかつた。

少し大人らしいけれど（評）

○姉様に

美濃　滿佐子（十三才）

姉様〱お喜び下さい、私此度大試驗に一等賞取つてよ、兄さんは二等賞、武雄さんは三等賞よ、私一番だつたから嬉しかつたわ。お父様から兄さんに寫眞ブック、私に綴葉書ブック、武雄さんは、くついたゞいてよ、お母様からは私に、西洋人形下さいました、昨夜もだつこしてねて兄様に笑われました。姉様も此度一番で御卒業なさるようお母様と待つて居りますわ、さよなら。

○

麴町　たか子（十二才）

○

大ゆきによろこぶポチと弟のこゑに驚く群雀哉

三重　小宮つるへ子（十三才）

○

愛らしや頭を垂れて茶の花は何か頼りに考へてゐる

若狹　津田瀧子（十五才）

○

白雲は鬼の如き形していと足早にうみ越て行く

伊豫　美月（十三才）

○

十三の春をむかへし今年より歌を學ばんいざよみて見ん

大阪　西戸靜子（十二才）

雛に餌をやつて春の日暮しけり

姉さまのリボンなぶるや春の風

肥後　佐々木道子

○兵士

此間私宅に、四十人程の兵士が泊りましたが、明日がお休みでしたので、野菜や蜜柑など大層荒しました。そして、立つ時も皆、立ちながら、おじやましましたとか、有難ふとか云つて家を出ましたが、聯隊長は、父の靈に頭を下げて禮述べて立たれました。



○規定　面白い話なれば何てもよし實際の話ても一口話ても隨意なり賞丙種

○兄のおせじ（地賞）

本郷　千とせ

お客様のお土産のお菓子を、取敢えず出して置きましたら、兄様がよそから歸つて被入つて、「サア如何てす斯麼まづい菓子ても」とお進めなさつたので、私「アラ」と云つたきり後の言葉が出ませんてした。

○はだかて（人賞）

岐阜　篠田とみ子

實際のお話よ、私今年のお正月の二日の朝洗湯へ、は入り初めに參りましたの、そしたらお友達の〇子さんにお逢ひしましたので早速、ご年詞を申しましたら、〇子さんほんとにお目出度う、あら裸かてご免なさいよ、あ私もよてな事てした。

○常ちやんの辨解

長野　伊代子

もう二枚計り張れば終へるといふ時一寸他の用を途して來て見ると金盥の糊がみんなこぼれて側に隣の常ちやんが前掛迄じつくにぬらして立つて居る。「アラ常ちやん？之れこぼしたのは」つて態と優しくきいて見ると厭な顏して一寸上目に私を見て「私じやないもの」と尻上りに、「だつて見て居たよ」と云へば眞赤な顏して「うそ私誰も見ない時したんだもの――。」

○手紙

德島　西野花菱

花「美代さん私れお友だちから下さつた手紙の中て、文の面白いのや文字の美くしいのは皆大切にしまつておくのよ」「アラそう、どうか花江さん私のだけは直ぐやぶつて頂戴よ」「エ、貴女のなんか一つもないわ。」

○あら……

神奈川　石井芳子

批評家孃友人と學校の歸り道新橋を通りながら一寸と御覧遊ばせなあの彼方からくる人れ私あんなにやけ男大きらひよ
花子「私もあゝゆう人すかない事よ
だんく近よつて來ると
花子「あら兄さんてすのよ
オヤほんとう……

○何んても反對

北米　るり花

子供「お母さん亞米利加は何んても日本とはさかさつて云ふのは本當！
母「エ、本當てすとも、
子供「左樣！　ても私は晝寢て夜る學校に行くのはいや

○漢語

後志　鈴木梅子

家へよく仰居る或る人、然り、而して、曰く、なんて漢語ばかりつかふものてすから妹が、あの人は本讀んてるのれ

○私の失策

淡路　加藤菊子

外國の師の君へ宛た手紙に十錢添えて下女に渡しますと、三錢切手貼てつり錢貰つて歸つたから私は先方へ對し失禮だと思ふて不足額の切手を封じて再び出しました、又馬鹿をしたと氣になつて仕方が無かつたが間もなく切手はチヤンと戻つて來て、あなたにも似合ぬてないかと書いてありました

○お菓子の喰べ方

群馬　岩田せき子

母「太郎やなぜそんなに赤ちやんを泣かせるのだい
太郎「赤ちやんにお菓子のたべ方を敎へたら泣くの……―

○眼が飛出る

廣島　秋の人

今年六歳の弟が婆やの魚買ふ所から歸つてきて「母ちやん、だつたら高價もの買へないれえ、
母「なぜ」「なぜつて婆やがれえ、高い事眼が飛び出るわ、」と云つたもの――

衛生問答



第一問　腰が抜ける樣で　私事月經時の度毎に腰が抜ける樣で實に困ります、床に居りましても忍ぶことが出來ませず、聲を出して助を求むるやうな有樣です。何卒好き方法はありませんか。日頃は別にこれといつて變つたこともありません。月經もあまり多くはありません（長門輝子）

答　月經時に當りて腰部若くは下腹部に疼痛を來す事は生殖器に疾病を有する人に起り易いのです然し左程の疾病が無くても輕度の疼痛の來る事は珍しからず、御尋ねの狀態に依りて察すれば貴孃のは餘程劇烈の樣に考へられます、恐らく生殖器に疾病ある事を想像し得るのです、殊に排膿性子宮内膜炎抔が月經痛を甚く發生せしむる疾病である宜しく專門家醫士の詳細なる診察を受くるを可とす、

産科婦人科專門
醫學士　北畠孝夫述

○規定　女子の身體に就て衛生生理疾病等各種の質問に應ず葉書差支なし、毎月一日〆切翌月發表す

第二問　（一）顔が眞赤になる　私は熱き火、日光、又は寒風に當ると顔が眞赤に火の如くなります、皮膚の弱き爲めかとも思ひます、水にて顔をこすりては尚赤くなりますか。（二）逆上する者は逆上する者は其原因如何に關せず、總て食物は減ずる方よろしきか、血液循環惡しき時は月經も不順になりますか。（三）神經衰弱には早朝や晩の空氣は濕氣を含んで居りますか、神經衰弱には濕氣ある空氣は害なきか。（伺女子）

答　（一）寒溫の空氣に觸れて顔面紅潮し易いのは屢々妙齡の女子に見る所です、敢て病的ではありません、之は血管運動神經の定溫に刺擊せらるゝ爲めてあります皮膚の薄弱と云ふ爲めてはありません、冷水を以て顔を洗ふても更に差支へはありません寧ろ皮膚の抵抗力を強くするから宜しいのです、

（二）逆上と申す事は仰せの通り種々の原因に依つて來るのですが原因を顧みずに必ずしも減食する必要はありません。それよりも便通を規則正くする事が肝要です、月經不順は種々の原因によつて起るのですが、生殖器の疾病許りてはありません。他の血行器障害若くは貧血及び其他の全身病に因するも月經不調を來します。

（三）無論晴天の時の御話てせうが、夜中若くは早朝、（日出前）の空氣は寒冷てありますから日中より幾分か溫度は高いのです、然し時期によりて空氣の溫度は差異を生ずるものです、誰れても濕めりたる空氣の内にゐるのは不快なるものてして又不健康ですから、神經衰弱症に罹りたる人抔には殊によくありません。

第三問　フケが多くて　私は今年十七歲になるものですが、常に頭の地赤くフケが多くて困ります、よき療法はありませんか。又眼を過度に使用した時は、水て洗ふが宜しきか、湯て暖めるが宜しきか。（御願生）

答　頭にフケの多きは頭髮を不潔にするが爲めです、フケは頭皮の上皮の剝脫したるものですが之に垢及び塵汚等のもの附着混交して生ずるのです、平常能く頭髮を清洗し屢々梳りおけば從て塵埃、汚垢は少なき故へ頭皮も強靱と

なり、上皮の細屑も少なくなりますからフケも少なくなります、則に薬剤を用ゆる必要はありません、薬剤杯を猥りに塗布して却て頭髪を害し皮膚を損傷すればフケ以上の害を招きます、又眼を過度に使用する事は衛生上有害ですから暗室に仕事を爲し夜遅く迄燈火に對する事を止めになさいませ眼を使ひ過ぎたる時には水又は温湯を以て洗ふには及びません深夜に及ばぬ中に熟睡をせられよ熟睡は眼及び脳の安息です

第四問　黄色に見える　蟲下しを飲むと窓の紙が黄色に見えます、何故でせうか。（加江子）

答　虫下しと申す薬は如何なるものか不明てす之を飲用することは恐らく危險です「サントニン」と申す驅虫剤の中毒に依りて黄色に見ゆる事が有りますから或はその類かも知れません。

第五問　鼻汁が澤山出る　私は幼少の頃から鼻汁が澤山出て、朝起きますと、咽喉と鼻腔との間に痰様の固りが付いて、痰をすると漸く出ます、又記臆力も乏しくて一時間位前のこともわすれて思ひ出せないことがあります。賣藥の點鼻液や噴鼻水は効能がありますか。（四谷、鼻たらし女）

答　慢性の鼻加答兒に罹りて居らるゝか或は他に鼻腔及び咽喉の邊に疾病が有るのであらふ、診察の上でなくば確實の事は申せませぬ、是等の疾病に犯されて居れば鼻汁は絶へません、早く専門家の醫士に治療を受けられよ、記臆力の減退は恐らく鼻部の疾患より來せる脳神經衰弱症の結果である様に考へらる、療法は自家で施行するよりは専門醫士に就く方が宜しい賣藥杯は醫士の立場として御勸めは出來ません。

第六問　夢を見る　私は毎夜のやうに夢を見ます、がこれは私の神經がどうかなつてゐるのでせうか。（茨城愛讀女）

答　夢は半醒半睡の間に起るものです、多く脳の完全なる安息を得て居らぬ爲めです、毎夜夢に惱まされ給ふは恐らく神經衰弱若くは他に身體に異常ある爲めの結果であらうと考へられます醫士の診察を受け適當の治療を御受けなされ。

第七問　如何したら肥えるでせう　私は極めて身細ですが少してもいゝから肥える方法、又は賣藥等はありませんか。（近江、御國一女史）

答　人間に肥瘠のあるはその各人の體質營養の如何に關係するのである、元來健康にして營養良く肥へたる人が何等かの原因に由りて瘠せるならばその原因に就て醫士の診察を受けねばなりません、然し健康にして元來肥滿性ならざる人は格段に肥滿になる必要は無いと考へます、然し御望みならば醫士に診察を受け確實なる療養をなされたる方が宜し。

第八問　胸のやける性　私は生れ付き胸の焼ける性で困りますが、醫師は重炭酸曹達を呑んで居ればよいと申ますが、胃が弱いからでせうか、お教へ下さい（心配女）

答　胸のヤケルと申すは胃に疾患ある爲めである、殊に食物が胃中に在りて完全に消化し去られず醱酵するから起るのです、健全なる胃腑を有する人には異常の醱酵はありません、胃の疾患と申せば數多の種類があります、幸に御親父が醫士でおありなさるなら精密に胃腑に就て調査を御受けなされ、重炭酸曹達は醱酵に由りて生じたる酸類（異常の）を中和する作用はありますから一時呑酸（胸のヤケル）は止みます然し原因たる疾患が存在する以上は到底之丈ケては絶滅しません且つ常に重炭酸曹達を亂用すれば胃の消化液を害し却て消化不良を助長するに至ります早く確實なる診斷を受け適當なる治療を施されよ然らざれば遂に恐る可き疾病に陥るに至ります。

第九問　(一)生と干したのと　魚肉は生のときと干物にしたのと何ちが滋養に富みますか。

(二)廿日以上も延びる　身體は健康なるも月經常に有るべき日より十日又は廿日以上も延び、延ぶれば多量にて困ります、時日の餘り狂はぬ様養生法あらばお敎へ下さい。(廿六歳女)

答　(一)魚類を乾物とすれば魚肉の中に含まれたる水分の蒸發し去ると共に含まれたる滋養分も多く脱却するのです、加之ならず生肉は消化し易く乾物は不消化である

(二)月經の遲れ勝ちなるは敢て病的に非されども二十六年の婦人として餘り多量なるは或は生殖器に故障の有る哉に考へられます、多くの婦人が生殖器に異常有るにも拘はらず全然健全なりと考へて居らるゝのは少なからず、專門醫士に就てその有無を確められよ。

第十問　肺療法　私は五年間肺病に苦んで居ります。入院もし、あらゆる滋養品も充分にして居りますが、少しも身體が回復しません。よき療法があらばどうぞ御示し下さいませ。(肺患少女)

答　肺の疾患は恐る可き疾病である然し程度の如何によつて隨分治療の全然無効で終ると云ふ分けてはありません、貴姉は藥餌につながら勉めて御用いの様ですが唯だ藥餌のみによつて疾患より脱却せんと欲するもそれは困難です之に伴なつて適宜の運動、冷水浴、空氣療法(海邊に沿ふて針葉樹の森林のある所或は海島杯の空氣は清淨である)を兼れ行ない且つ又消化器をも強健にし用ひたる滋養品の良く消化する様に勉めればなりません、然し可成は專門醫士に就て詳く療養法を理解し厳重に之を實行せられよ。

第十一問　喘息　喘息は不治の病てせうか。(弟想女)

答　喘息は適當の治療に依り治癒いたします。

第十二問　頬がほてる　十六歳の女、十三歳の一月より經行あり。こゝ一年は頬ほてりて心地惡しく、少しにても宜しく頬を青くする法を敎へ下さい。(神田まり子)

答　頬部の紅色なるは美の一資料である、然し時として或種類の疾患によつて營養衰へ身體羸痩するにも拘はらず頬部に潮紅する人を見受ける事屢々あります、然し健康にして頬紅なるは願ふても欲する事てはありませんか、古人も紅顔の美少年と詩に迄て歌ふて居ります、態々青くするにも及ばんてす、又そんな方法もありません、貴殿のほてると申すは他の原因から來るのでしよう。

第十三問　眼が細くなる　一週間前から涙がしきりに出て不思議だと思つて居りましたが、今朝鏡で見ましたら瞼がはれ、眼が少し細くなつた様てす、このまゝ置いてもだん〳〵細くならないてせうか。又フケの出來ぬ工夫はありませんか。(牛込、はつ代)

答　他に異常なくして眼瞼の腫脹したのは恐らく眼瞼炎を起したる爲めなる可し、眼科醫に治療を御受けなされ、放擲しておけば續發的に結膜炎等を起す恐れあります、それ等の結果眼瞼裂の瘢痕性縮小を來す事の無いとも申されませぬ、第二問は此號の文壇の第四問に述べてあります、就て御覽なさい。

第十四問　髭が生える　髭が生えて困りますが、別に生えなくなる法はありませんか。(埼玉、愛讀者)

答　別に方法とてないてす。

第十五問　妊娠中の攝生法　私のお友達に目下妊娠してゐる方が御座いますが、いろ〳〵妊娠中の攝生法をお敎へ下さい。(幸光生)

答　妊娠中の攝生法……妊娠したりとする

も敢て平素の生活法を一變する必要はない、進退坐臥共に常の習慣に違ふ勿れ、然れども常の人に衞生法の必要なるが如く又姙婦に姙生法は欠く可らざるものである、詳細に說明すれば短篇之を悉くすを得ざるを以て簡單に摘要して記す可し。

(一)腹部の壓迫を避くるを要す、故に便秘を去り通利を良好ならしめ、必ず緊縛する勿れ、重荷を負ふ勿れ、重荷を手にする勿れ、高所に手を延長するを避けよ、奔跳する勿れ、馬乘を禁ぜよ、飛跳する勿れ、激動する勿れ、腹部を緊縮する勿れ、

(二)消化器を健全にするを要す、故に榮養に富みたる且つ消化容易なる食物を擇び餘り多量を一時に食す可からず、少量づゝ數回に食す可し、又香料を多く用ゆるは不可なり、消化し易き野菜及び果物は消化を助くるを以て少しづゝ食後に用ゆ可し、又食後に良質の葡萄酒を適宜に用ゆるは可なり、胃壁を刺激して胃液の分泌を促進するの作用あり、

(三)適宜の運動は殊に姙婦に必要なり、之に由りて筋肉の働作を促し血行を調節し消化を助長し通利を順調ならしむ、且つ運動の結果として適宜に疲勞を覺へ夜中安眠を爲すを得可し、

(四)交接は可成禁ぜよ、然し全然禁ずるを得ざれば姙娠初半期は勉めて之を避け、後半期に至りて適宜に之を行なふも格段なる害なし、然し臨月に及びては全然之を禁ずるを要す、

(五)精神的平和を要す、故に痛心、怒、悲哀、驚愕の如き事柄は可成避くる樣に注意すべし、稗史、小說の如きは此範圍に於て取捨しつゝ讀むも可なり、

(六)過勞は絕對に愼し、故に長途の旅行の如きは勉めて避く可し舟車の搭乘抔は適宜に行なふ時に於て絕對に有害なりと斷ず可からざるも兎角過度に陷り易く從つて弊害を及ぼすべきを以て各自その度合ひを考へて宜く取捨すべし、然らざれば流產、早產の如き恐るべき結果を來す事往々少なからず、

先づ姙娠中の攝生は大體に於て略ぼ右の如し、尙ほ詳細なる條件に至りては重ねて折を見て述ぶる事とす可し。

第十六問　ヒゞ

私は每年冬になると手にヒゞが切れて大變いたみます、如何すれば癒りますか（華先生）

答　ヒゞ、アカギレは皮膚の乾燥に過ぐるを以て生ずるものである、故に常に皮膚を適宜に滑澤にし濕分を含有しおくべし、之を除去すべき方法としては入湯の際輕石を以て手足の乾燥、粗雜になりたる面を能く摩擦し（少し痛を覺ゆるも辛抱して）荒れたる面を大抵剝脫し去り湯上りの後にリスリンを充分に塗擦せられよ、又少し深く裂けたる所へは絆創膏を適宜に貼布しておけば水を使ひ湯を用ひても差支はありません。

第十七問　リウマチス

私の母はリウマチスで大變困りますが療法をお敎へ下さい。（華先生）

答　リウマチスと申す疾患には筋リウマチス及び關節リウマチスの二種あります、何れにしても素人治療では全治し難し、早く頭腦明かなる醫士に治療を御受けなされ、

第十八問　何うすれば痩せますか

私は廿一才のものですが肥えすぎて困ります。どうすれば程よく痩せることが出來ますか。（深山女）

答　妙齡の婦人は多く肥へ勝ちのものです、然し他日一家を經營し內外に頭腦を働かす時が來れば自然淘汰によりて年齡と共に細身優柔となるは普通です今殊更に痛心せざる可し、然し尙ほ或原因の爲めに過て肥滿し寧ろ肥胖病に陷る恐れあれば宜く醫士の治療を受けられよ、

誌友倶樂部



○規定　本欄は誌友諸孃の機關として隨意に使用あれ各自に誠實を守られたし不確實の投稿は沒書とす住所本名は詳記すると字體の明瞭を要す

交際を望む

○美濃の谷汲　誌友の皆様よ妾はれ故ありて世を棄てゝ尼となり草深き山里に身を避けて居りますあわれ不憫と思召さば御玉章又は繪葉書にて永久御交際被下先着十五名様に西國三拾三番觀世音菩薩の懷中御守を付けて差上ます（美濃國揖斐郡谷汲村谷汲山內雪月庵惠仁）

○小黄紫様に　石狩の小黄紫様と仰有る方有難うございます私は眼にも見るとの出來ぬお方からはるぐ＼との厚きお志私は有難泪にくれました、信濃の山中に賤しく暮して居る到つて不束の者でございます、こんな者でも御かまひなくば御玉章下さいませ二（信濃東筑摩郡廣丘村太田きし子）

○遊學中　妾は遠き西國より當地に遊學に出て居りますが浮世の塵に染まざる清淨無垢の同情慈愛に富める御姉様方と幾千代の後までも睦く御交際を願ひたう存じます若し御交際して下さる御方があれば五名に毎月本雜誌、繪葉書其他いろ＼／＼御望次第吃度御送り致します其代り御姉様の方でも送て下さい早い程が宜しうありますよ（東京下谷區谷中清水町十二番地吉信方青井不津子）

○編物と水彩畫　妾は肉筆水彩葉書と編物とが大好きでございますからお持ちの方は一種にてもかまいませんので何ふぞ御送り下さいませお上手の方十名様へは小説と妾自筆の繪葉書自作のを送り上げますけれど男子の方と認めし時は返禮致しません（佐賀縣小城町横丁田尻美津子）

○春潮のぬき書　大阪毎日新聞に出てありました春潮ぬき書き致して居りましたがその中で「十月二日發端十月六日、同十日、同十二日、同十五日、同十六日、同十七日、同十八日、同二十日十一月九日、同十八日、十二月一日、十二月六日より終りまで」之だけうつせて御ざいませんので半途になつてをります皆様の御手許に此中一枚でもよろしう御ざいますからお有りでしたら送つて下さいましな、御禮は其紙數とお心づくしとによりましてきつと致します（滋賀縣甲賀郡貴生川村林醫院內磨志緒）

○注意！　私が一月五日福島の工藤君子様に吾輩は猫てある三册長野の伊藤よし子さんに月魄二册送りましが先方からは御送本がないので二度ハガキ出しましたが少しも相手になつて下さらないのよ、私欺かれたのが口惜しうてなりませんの！皆さん御注意遊ばせ、それから熊本の埋れ木様先日は肉彈ありがとうございました、あの本の中に御手紙が這入つてあつたのを、局て見つけられて壹圓七拾貳錢の罰金をとられましたわ、これからはこんな事のない様に厲く姉さん方に御注意致します（秋田縣山本郡太頁鑛山梅澤すみれ子）

○皆様私は印播湖畔に住む田舍少女です、どうぞ御交際を願ひます（千葉縣印播郡トハ律村宗吾飯島千代子）○私は昨年の一月より本誌壇友となりましてはづかしながら末席を汚して居りました、けれど悲しい悲しい事故の爲退壇する事になりしたどうぞ皆様右様御承知なし下さいませ御健康の程くれぐれも御祈り申し上ます、さらば（上毛多野郡藤岡町文華堂內飯島清子）○文壇の諸姉上様よ私も今月から愛讀者になりましたからどうぞ妹と思召して永久に御玉章の交換を御願ひ申ます（東京淺草區北清島町七十九番地星野てる子）○親しき誌友の諸孃さま私もおかげて無事にくらしてゐます、私は本年から誌友となりました以後親しく御交際を願ひます、何分女學校を出たばかりの世間知らずですからね？御手紙の交換を願ひます又繪端書寫眞の交換もね、但し神聖なる女の方に限ます、よほどさむいからお身を大切にねー（京都府南桑田郡東別院村字鎌倉中川よしえ）○春たちそめて野は長閑にて候、女子文壇愛讀の諸孃子方、妾は草深き田舍娘にはべれど末長く交際あらん事を、ついてはエハガキ、又は玉章の交換ありま

す樣いくへにも願ひあげます。亦寫眞御めぐみ下さいましな御めぐみ下さつた方には御禮として古雜誌一部つゝおん送り申します。(靜岡縣濱名郡北濱村西美園高永明子) ○親愛なる姉樣諸子樣之柄顏を併て御交際を永遠願ひ升(長野縣上水内郡中郷村西澤玉枝) ○妾は十九歲の處女となりました、再び筆を取り再び月の光に導かれて今日しも女子文壇の花野を訪ふて來たのであります、願はくは姉君方、永く摘草の友として愛し給はむ事を琴女又は琴月女と申します(常陸那珂郡磯崎中川幸世) ○誌友の御姉樣よエハガキ玉章の交換を願ます又寫眞送り下された御方には私の見にくい寫眞送ります私は猿島郡共進會紀念エハガキも持て居りますから御望ならあげます但六人限りです(茨城縣猿島郡古河在香取村水海分校内高梨白鷗) ○妾先月から文壇のお仲間いりーをしましたのよ、妾はまだ取つて十六ですわ、ちつともなれないのよ、何卒よろしく願ひますわ、諏訪湖もやうやくスケートが始まりました、諸姉樣お遊びにいらしつしやいませ、きつとおまち申して居ますわそてし玉章の御交際を願ひます(信濃諏訪郡富士見村四四一小林よし子) ○私も今年から女子文壇の愛讀者となりましたから姉樣方よ何卒御玉章の交換して下さいませ(京橋區釆女町三五遠山繁子)○横濱の誌友諸姉樣私は去年の七月初めて當市へ參りました者ですがまだ一人の親友もないので毎日〳〵淋しく暮らしてゐます もし御同情下さる方がございましたら永久に交際をお願申上ます(横濱市南太田町二〇九〇横山醫院内小田切銘子) ○誌友の諸姉樣妾は淋しき田舎に日を送つて居る不束者でございますどうぞ繪はがきの交際をねがひます男のお方はお伯父さんやお伯母さんにしかられますからおことはりいたします(埼玉縣深谷町フタ方鈴木りえ雅號紫葉子)○妾は病氣の爲め學校を退いて今は田舎に淋しく暮して居ります繪葉書玉章寫眞の交換を願ひます(豐後安岐字大山矢野啟吉内とみ子)○皆樣。私は成田山の麓に住む。淺學の者です。ことに手紙の文はへたでこまります。何卒御自筆の御玉章を御惠み送り下さい。御返事はたしかに自筆で致します。(下總國印旛郡成田町土屋區二橋濱子) ○地方名所繪葉書の交換をお願ひ申します(若狹國遠敷郡今富村伏原澤田彩汀)○古墳繪葉書 誌友の諸姉樣當地で發掘した狐山古墳當時盛なる時の參詣者は一日二三萬を數へられましたこは當時の新聞紙上で明かでありました今尙線香の煙は絶へません紀念スタンプを押捺した繪葉書第一第二の岩穴の實景並發掘品十餘種が悉皆あります御望の方は寫眞又は繪葉書と交換して下さい又玉章の交換を。お穴樣の實況委しく申上げます(神奈川縣橘樹郡旭村駒岡稻葉森三方こう子) ○誌友の諸姉樣よ妾は陶器を以て世に知られたる瀬戸の地に住む者です玉章や繪葉書編物の交換を願ひます又私は小說が大變好きですからどうぞ御交換を願ひます(愛知縣東春日井郡瀬戸町小島はる子)○御姉上樣方よ、私は草深き片田舎に居ります、不束ものですが宜しく、玉章や、繪葉書、又は御寫眞までも、御交換を願ます、(茨城縣筑波郡小野川村字小野崎高野常世方たみえ) ○本誌愛讀の諸姉樣よ私は片田舎に住む淺學の少女です御玉章やエハガキの御交際願ひたく何卒たのみます(大阪府泉南郡佐野村字市場西坂遊道樣方ニテ西阪浪枝) ○親愛なる姉上樣よ繪葉書や御玉章等を下さい必ず御禮は致しますから永久に御交際を望みます而し男子の方々は御斷り申します(茨城縣久慈郡幸久村岡田方房方うめ子) ○親愛なる御姉上樣方どうぞ繪葉書や玉章の交換を願ひますきつと御返事いたします(大阪府泉南郡佐野村字市場西阪方大引文子) ○なほ相變らず皆さん御交際の程を御願ひ申上ます(群馬縣勢多郡粕川村大字膳村須藤淺子) ○滿天下の姉樣方私は信濃國善光寺平川中島に住む一少女ですが何卒今後は御見捨なく御教導の程一偏に願升、それて記者先生團欒の投書は之れて宜てしよか(長野縣植科郡寺尾村小池いち子) ○皆さん今後繪はがきや玉章の交換して下さいな尙私しも是れから拙い玉章でも出して紙上をここす積りだわ次に交際してよ(横須市逸見町三百十四祇園方今村秋子) ○親愛なる諸姉よ温かき御交際の屢幾度にも御願ひいたます(名古屋市堅立戒町熊谷方辻村愛子)○本誌愛讀の諸姉樣御交際下さいね(下野國上都賀郡板荷村福田谷子) ○誌友の皆樣私は片山里に淋しい月日を經過して居る少女ですからあはれと思召す方あらば御慰め下さい(常州笠間町局内稻田百卅二田村かね子) ○諸姉樣よ妾は田舎の深い林にて煩悶苦痛に惱む不束者です若しや同じ心持のお方がムいますなら長に御玉章にて御交り下さいそしてお寫眞の御持合せがムいますなら御惠み下さい是非とも御禮致しますからね。(廣島縣比婆郡田森村小學校にて本田露子女) ○誌友の姉樣玉章や寫眞有難く存じま

す以後も栞繪葉書を惠ぐんで致ませよ私れ地方名所繪葉書高祖りボンに和歌を書いたので御禮します(肥後玉來町岩木甲斐香子)○皆樣私しわ俳句が大好きですの一月號に發表下さいましたら諸姉様方から御望み下さいましたその數計六十七通ありましたどなたても美しき短册と俳句の雜誌となおをくり致します(近江國伊香郡片岡村東野田川ゆう子)○親愛なる皆々樣私は靜岡在の淋敷片田舍にすむ者てすが何卒宜敷御見捨無く永久の御交際を願升(靜岡縣高田花枝)○讀者の皆樣御玉章の交換を願ひます(門司市畑田公園下志木琴子)○親愛なるミステレー相變らせなう御勉學なされて居られますか去年十二月に横須賀に參りましたばかりてすの永く御交はり頂戴な東京近くの姉樣はなほの嬉れ左樣なら(神奈川縣横須賀市逸見町三五七東畑方向井貞)○御なつかしの姉君よ妾修學の爲佐山の地に日を過し居りし若當四月より懸しき父母の膝下に朝夕を送る身となりし以後は我心のまゝに山にゆき野に遊びていよ〳〵文學をきわめんつもり片田舍にはあれど汽車の便りもよろしければ何時なりと御越し給ひてよよろこびて御むかへ申さん御玉章は下記へ(滋賀縣甲賀郡貴生川材林醫院内醫志賭)○本誌愛讀者の姉樣どうが不束な妹と思ひなすつて御交際や御敎導を御願申ます(備中連島村大焚原藥店内原こみれ)○多智多才なる誌友の御姉こ樣妾は田舍から出たての無智無才の不束者なのよ今度から本誌讀者の一人に加わりましたからどうぞ末長く御交際を願いますわたし繪葉書や寫眞の交換が大好すきなのよ是非皆樣御惠み下さいね−御返事は屹度差上げてよ(本郷區元町二ノ四八長谷川方北林琴子)○親愛なる誌友の諸兄姉上樣よ妾は米澤西隅鬼面川にとりに住む不束な者永久的に御書面にて御交際して頂戴亦繪葉書雜誌寫眞の御交換も宜敷願ひ中します、(羽前國南置賜郡廣幡村小山田里清井角藏方小菊子)○嬋娟たる諸姉上樣よ若葉の芽やう〳〵伸び出てんとする妾を見捨てなく永久〳〵繪はがきや御玉章の御交換を願升妾は必ず〳〵返事を差上ますよ、隨分誌上にもひどい〳〵御方もありますの、御返事を下さらないのほんとに情ないわ(下谷區西町二番地井上神社大葉靜枝)○誌友の諸孃君よどーぞ繪はがき及び玉章の御交換を番次第どの方にも御返禮致します(千葉縣海上郡飯岡町字井花月)○美しい趣味ある繪葉書に自作の和歌や俳句を認めてお惠み下さい、私も拙き筆にてお返し致しますわ、(秋田縣山本郡藤琴村太良鑛山梅澤寶子)○お寫眞、編物も澤山持つて居ますから御交換遊ばしてよ妾からも舶來繪葉書を添へて三日以内に屹度御送り致しますわ(廣島市新川場町一〇八ノ一喜晉みつ子)○妾は熊野の山奥て諸姉上樣と玉章繪葉書を交換したいと日頃思ふて居るのよなにとぞ交換して頂戴な又御寫眞も御送りください妾も差上ますから。(紀伊田邊町上屋敷町公園通り室谷楠の方山本巽代子)○おなつかしき皆樣私如きものにお玉章ゑはがきおうつしゑ編物等お惠み下され厚く御禮申しますわ、他の姉さん方も哀れの孤兒を一時的てなく永久におん交はり下さいエハガキの交換なら大賛成よ、小說の交換は致しませんわ(秋田縣山本郡藤琴村太良鑛山梅澤ふみよ)○草良き里に友達なく淋しく暮らしてゐます私は本誌愛讀の諸孃樣の懐かしいお玉章な何よりの樂みに暮してゐますどーぞ地方の珍らしい御話しや何やかや御知らせ下さい妾も美くしい水莖の跡を辿つて御返しますからどーぞ永久に御交際して下さい誌友の皆樣どーぞ御身を御大切に(岡山縣兒島郡與除村大字中疇丙川長船嘉子)○諸孃よ妾は草深き山里に淋びしき月日を送つて居りますから何んの樂しみもありませんて何卒玉章や繪ハガキの御交換を願ひます(近江國大津市馬場町東入ル飯田末子)○御なつかしき誌友の諸姉上樣よ常陸の北偶に住む妾は至て不束者ですが何卒末永く名所エハガキや玉章の交換を願ひます男子の御方はいやですよ(常陸久慈郡河内村字町屋根本靜枝)○田舍生れの何も知らない不束な妾を信實哀れと思召す御方何とぞ繪葉書や玉章にて永遠に御交りを願ます御恩は決して忘れやしません私も人情の幾分は知つてますよ(和歌山縣海草郡紀伊村大字北島居邦子)○誌友の皆樣の内て紀念繪葉書名所繪葉書の未使用のもの御持ちの方は四種郵便て御送り下さい私もそれ相當の紀念繪葉書名所繪葉書又は水彩肉筆美術繪葉書て御返へししますから並に文通御交際をも伏して願ひます(三重縣桑名郡七取村村上富)○皆樣本年も相變らずお願申ます又美麗なる繪葉書未使用のを御交換下さい(相模國高座郡大和村下鶴間山本文枝)○諸姉樣の内に三越呉服店の裁縫女子部の方をくわしく御存じの御方がありましたなら至急御通知下さい御禮はきつと致します又何方なりとも實妹と思つて下さる御方がありましたなら永久に繪ハガキや玉

章の御交際を願ひます（新潟縣刈羽郡荒濱村桑野みち子）○御なつかしき姉上樣方よ妾は露深き田舍に住む極めて不束者なのよどうぞ一時的でなく御交際下さい御返事は必ずく（茨城縣久慈郡幸久村上河合岡田うめ子）○妾誌友の諸姉樣に御交際を求めました所今度三十人もあつてよ其内先着五名へ「エハガキ」を一と組宛送りましたが後の諸姉樣の方へは一々エハガキで御返事致しました故悪からず願ひます。以後あみ物名紙入銀貨入等をお惠下されし御方樣にかぎり松本平名勝寫眞帳を呈上致します五名かぎりです又新小說等お惠の方へも差上ますは（松本市上横田町二、四四四川上めぐむ）○誌友の諸姉樣私は一月號から本誌を愛讀する樣になりました、就ては至つて淺學の者ですが御玉章なり繪葉書なり交換して末長く御交際して頂戴な、（東京市牛込區佐内坂町三十八小山方小林粲子）○誌友の御姉上樣私は至つて淺學の者で御ざりますけれども御見捨て無く永久的にレター、やエハガキの交換を願ひます（越後國北蒲原郡郡村井上貞子）○誌上の愛讀諸嬢よ私は一昨年からの讀者ですがまだ一度も皆さんと御交際申しあげたことがありません不束ものですがまごころを以て御交際をいたしたうございます（福島縣伊達郡桑折町停車場前渡邊方氏家みち）○皆々樣妾は今年迄かなりな教育を受けさして頂いたのよそれに千口惜しいは家の都合で草深き東も西も皆山の山里へ歸る事になつたのよどうか千皆樣妾を憐れと思つて千深いたまづさの交換を願いますよ私は又男子の方と謂どもかまいませんしかし男女ともローマ字にしてよー（京都府宇治郡笠取村池之尾多田己之助方屋子）○誌友御姉上樣私しもこれから御仲間入りをするのです何卒よろしくお願い申ます、（福岡縣久留米市庄島町四二二光益はつよ子）○皆さん私は非常の繪葉書狂ですどうか本誌の愛讀者の内で上等の繪葉書を送つて被下るお方はありませんか若し惠んで被下つたら永久に本誌の親友として交際をしませう玉章でくわしきお話も致しませう然し一時的のは止めますよ又文藝倶樂部。寫眞例題集。新小說。太陽。婦人畫報。女學世界。中學世界。文章世界。が不用になつて居ます故小說と交換を願ますきつと折々はお情深い趣味ある玉章頂戴な左樣なら皆々樣（鳥取縣西伯郡大國村渡邊芳子）○おなつかしい文壇の一人となりましたの、どうか御見捨てなく御願ひですから（福岡市荒戸町四番町舟越みさき）○誌友の諸姉君樣妾は不束者でありますから一時的でなく玉章繪葉書等を新しく御惠ぐみ下され度願かけて祈り上げます（伯耆米子町字法勝寺町糸井八重子）○誌友の諸姉樣私は不束者でありますけれど文章愛讀者の一人でありますから御玉章繪葉書を親しく御惠み下さいどうぞ（伯耆米子町法勝寺町糸井八重子）○誌友の姉上樣妾は龍城の里に住む賤女ですが此後よろしく玉章の御交換をねがひます（岡崎康生町三十九番戸宮田梅子）○誌友の皆樣私も本月から愛讀者の一人となりましたから何卒雜誌や繪葉書や玉章寫眞等の御交際を願ひます（千葉縣長生郡豐田村長尾渡邊いつ子）○誌友の皆々樣玉章あみ物の交換を願います特に寫眞を下さいました方先着十名には見にくき乍ら妾の寫眞を差上ます其他は玉章繪はがき等相當の品で御禮します但し引佐郡内の方は御斷てすよ（遠江國金指局區内坂田麥下樣方すみれ女）○新年號に笑文「買物」を投稿なされた日本橋佐藤蔦子さん同姓同名でおなつかしうございますお差しつかへなくば何卒一片雁の御便り下され度ねがいます（羽前西置賜郡長井町小出桐町佐藤ます子）○内外珍切手政府發行觀兵式觀艦式等祝念紫靑新刊小說漢和大辭林等御惠送下さい繪葉書小說寫眞器等にて酬つて御返禮致し物には御返禮申しません（廣島市國泰寺村一二二森本別宅方内海政江）○誌友の君にも妾も文壇の愛讀者の一人ですが實に片山里に淋しく暮し居る者ですが何卒自今より紙上の御交際を願ひます（千葉縣香取郡日吉村篠本伊都にく子）○おなつかしき誌友のお姉樣方妾は山里深き片田舍に淋しく暮して居る無學の者ですがお情あるお方は何卒永久に御交際を願ひます（岩代耶麻郡鹽川古町栗村かつ）○樂曲。ムーンライトソナタ、古今名曲集御持ちの方は私の箏曲集、方舞、進行曲、ペイオリン新曲、ペイオリン教科書、と御交換を願います。（岩代若松市外東木戸川島信子）○誌友の姉樣妾も昨年から本誌愛讀者の一人になりましたから何卒いつまでも御交際御願い致します尚ほ御玉章や繪葉書の交換を願ます男子の御方は潔くとも御斷り致しまする（大阪東區船越町二丁目五六村上内秋本縣子）○しばらく御無沙汰いたしまして誌上の御姉樣方御健全でおめでたうございますたらわぬ私をお見捨てなう御交り下さいましてほんとに有り難う尙此上ともによろしうそしてみ情深いお姉樣方どうぞお玉章お惠み下さい

お願ひいたしますさようなら（神戸市水木通り四丁目五〇村井方露の玉）〇淋しきホームに友なく哀れに世を送る妾しにも記者様の御引合によりはからづも多くの姉上様を得まして身に餘る嬉しさてあります何卒御心ある皆様よ末長くレター繪はがきの御交際を願います（長野縣小縣郡縣村本海野 武井晴子）〇誌友の皆々様方よ妾事は北海の孤島に淋敷月日を送つて居る誠に淺學の者てすが御心ある 誌友様方以後宜敷御交際の程偏に願上升（函館區鍛冶町四十五番地 佐々木かよ）〇誌友の諸嬢様妾も友無く 本誌を愛讀致すのてすが 何とぞ繪端書や玉章の親密な御交際を永久に御願申ます顔はくば御自作の和歌を一首づゝ書添へて下さいな 御返事は祈に誓つて致しますから 一時的の御方は御斷はり申ます（横濱市元町五ノ二の九川住様方今井瓣子）〇姉様よ妾は誠の友なく淋しく暮して 居者てすが先日より女子文壇を愛讀 して居ます何卒御交際を願ます（日本橋區本町一ノ十四莊司方高橋照子）〇親愛なる皆様よ新さんの私以後御見捨な なく（静岡市高田花枝）〇何卒永久に玉章御寫眞な御永久の御交際願升惠み下いませ 御返禮はきつと〱致します末筆てすが記者御一同様妾は何もしらぬ者てすが宜しく御引立を願ひます。（鳥取市上町百〇五 太田良）〇諸姉様方何時もながら御機嫌うるはしく御勉强の御事と賀上げます 私は昨年よりいたしました 苦學生の一人てすが皆様あはれと思召されましたなら何卒御交さい下さいまし、御ふ用の本シオリ、リボン、ハンカチ手袋何にてもよろしふ御座い ます御めぐみ下さいまし御禮はキツト及ばずなから 繪葉書か玉章

ていたします、（東京神田區小川町一番地宇津木方林發菊生）〇私は冷い人の世に厭き〱致しましたからこれから温い慰者を文學に美術に音樂に求めやうと思ひます、今其第一着として本誌愛讀者のお仲間入りをさせて戴きますから何ゞか熱き血あり涙ある姉妹方にして御志あらば一片のはがきなりとも御惠み下さいまし相當な御返しに致します（京都市上京區川端通下文賢上ル 水村ふゆの）〇誌友の姉上様本年から繪葉書や御玉章寫眞の御交換を又品物を送て頂戴致しました姉上には必ず相當するものを御返禮致します（大阪船越町骨屋町東入村上谷江）〇お情け深い皆様よ妾は伯母の世話になつて淋びしく暮らして居る少女て御座いますが憐れと思召し玉章や繪葉書ても お交換を願ひますそれからは御不用の小說どんな古いのてもかまひませんがお惠み下さいませんか 繪葉書か何かて必御禮はいたしますから（牛込區水道町一〇坪井まさ子）〇萬天下の諸姉上様妾 此の度愛讀者になりましたから御玉章や御寫眞の御交換願ひ上げます 一時的てはなく永久に變らん御交際を願ひますよ必よ御返事は致します（熊本縣葦北郡田浦迫川幸子）〇諸姉上様私は是より皆様と御交際が致し度ありますから繪葉書を（名所舊跡を限る）遠慮なく被下さすれば私も順を追ふて繪葉書を上けます決して取放なしはしません繪の方には何も書かずに表の所へ宿所姓名のみを記して下さい（赤坂檜町六 清野龍子）〇皆様私も今年から女子文だんの愛讀者となりましたから何とぞよろしく又横濱の正女様何うか御まじはり下さい私も實になさけない身の上てすから御たがいに御な

ぐさめやい致します又皆様よはがきレター頂戴な御返事は必ず致します（近江膳所伊勢屋町 藤元方正岡敦惠）〇愛する誌友の皆様私は こんどはじめて御目にかゝる至つて 不束者てすがどうか永久に御交際下さいまし 私はなつかしい故郷の空にさすらいの身てすこの淋しい 友にお情あふるゝ御玉章御めぐみ下さいそれから エハガキリボンシオリ等を御交換して 頂戴な私もきつと御禮申上ますわ（芝區愛宕町四ノ八 小林方樋口みよ子）〇寫眞御送り下さる方には 美しきエハガキお送りします皆さん 送つて頂戴れ（備中小田郡矢掛町江木實枝）〇妾は昔て貯し 繪葉書及不用の雜誌が數多御座いますから 是れから玉章や編物繪葉書の御交換を願いますさよなら （千葉縣長生郡一松村森文子）〇名所エハガキや地方新聞の御交換も切に おねがひ致します、次に皆さんのうちに本誌十二月號おもちの方はお ゆずり下されますまいか 若し一週間以内に御送り下されし御方には伏見名所か京都名所 お何れなりと六枚一組を他の雜誌に 添へて必ず御返禮いたします。（京都府紀伊郡桃大路村齋藤捨吉樣方鈴木松子） 〇誌友の諸嬢よ、妾は、實に、 不束な者てありますが、何卒繪葉書や レターの交換を永久に願ひます、私一時的は大きらひよ、御返事はきつと致します。（熊本市 外古町村 原森あい子）〇誌上の御姉様方よ 妾は北海の草深い處に只一人歳月を送る不幸の身上てすが 何卒皆様淺學の者てすが永久に御玉章の交換を 願ます妾は誰れてもきつと御返事致します。 亦御寫眞送つて下さつた方には妾の小さいハートの内を御知らせ致しますよ（石狩國上川郡奥興村字上宇真

鈴木事務所內 水崎きよ子)○私は姉も妹もなく只母と二人暮してございます、母も私を好みますので家には 文藝倶樂部その他の雜誌たくさん不用ですから何んど小說と御交換ねがひます(和歌山市三木町南町 諏訪たま子)○大阪郵便局遞信會發行絵葉書に 大本營郵便局のスタンプ付を始め數々紀念スタンプ付 絵葉書持つて居ります誌友の 姉上樣記念絵葉書の御寫眞と交換下さい一時的でなく長く〳〵 御交際下さいます方を願ひます(大阪東區船越町貳ノ五六 村上登江子)○御なつかしき誌 友の姉君樣よ私田舍住みの不束者ですが 御交際を御願ひ中上げます御返じはかならず致しますから (山形縣西田川郡 鶴岡窪町二三 菅原きく子) ○賢明なる誌友の姉君よ妾は田舍に住む 淺學の者ですが何卒あはれと思召し寫眞玉章の 交換を 御願ひ致します (武州青梅町日向和田 吉田きん子) ○御なつかしき誌友の皆々樣 玉章や 絵葉書の 御交際を願 ひます必ず〳〵御返禮にはリボン古雜誌 小說やあみもの等を送ります次に皆樣 の御健康を祈る (福島縣耶麻郡喜多方町島坂病院內 山田米子)、○諸姉樣よ相變はらず御交際お願ます 何卒絵葉書でも品物でも結構ですから送りて被下 相當御返禮は致します(京都市富小路通佛光寺下る 清水たれ)

記者と讀者

○今年の お正月からの本誌の 美しくなつたこと、よくとゝのつたこと 記事が多方面に亘つたこと實に驚く斗りです。皆記者樣方のおほねをりですわね。私共愛讀者には此上もない幸ですものキツト淡萬誌友の君も御満足でゐらつしやいませう。(相模國阿夫利の山の麓にて小林英子)(記者曰、未だ其だ行とゞかぬ勝ちですが、ます〳〵勉めて完全なものにいたしたいと思つてゐます)○記者樣此頃私の學校では 女子文壇を讀むものが 大變ふえまして 普通科の生徒まで女子文壇を愛讀して居りますようですから 毎月一日に本屋へ行つても賣切れてありませんのよ 何うしたらいゝでせう敎へて頂戴(武藏、田舍なでしこ)(記者曰、直接に本社に御注文なさる外はありますまい)○記者樣「妾は新體詩が稽古したいのですが新體詩作法と云ふ樣な書物が見るのがよいでせうか又如何するのが最もよい方法ですか」どうぞ御敎へ下さい (大津白ばら)(記者曰、作法も參考の爲め御覽 になればよろしいが、有名な人の作を氣を附けて讀み味ふことが第一です) ○記者樣僭樣乍ら明治和歌集の發行及び定價お知らせ下さいませ (とき子)(記者曰、明治歌集定價八十五錢郵税八錢、京橋區 吉川弘文館發兌)○與田花枝さんに、笑話歌謠は勿論、何んな寄稿でも女子文壇社編輯局宛て よろしい(記者)○青森の梅子さんに、 東京には料理ばかり敎へる學校は澤山にあります(記者)○廣島の田坂芳枝さんに、晶子女史の最近の歌集は『常夏』です、發行所は大倉書店、 定價九十錢)(記者)○大和、森岡しげ子さんに、 散文詩には全く七五だの、五七だの 云ふ格はないのです、 新體詩にはありますが 迚も詳しいことは 茲で述べられません、近來の書物で詩の音律を詳しく書いてあるものと云へば岩野泡鳴氏の「新體詩の作法」なとでせう(記者)○京都府、中川美枝さんに、仰せの事は分りました、記者も大いに 注意して居ります(記者)○大津市、末子。信濃、峯子。おさえ。鳥居邦子。ほその。水藻くに子。みね子。みち子。日本橋、長谷川喜美子。越前、秀眞露子。向島、はる子、埼玉、中山ひろ子。上住ゆり子。新子。紀子。長崎、やよ子。赤心會一女。門司市、吉木麗子。羽前、楓本いつ。德島、佐川かをる。ゆきゑ。三ケ島秋子。伊勢、玉置俊子。辻村愛子。甲斐露子。北海道、かずほ子、森ふみ。金澤、のふ子。大田雛子。伊豫、玉露。鶴子。神奈川、木村春子。堤菊枝。足利、秋田きよ子。森島いさを。すゞきたか子。美濃、林東雲。大坂、島川琴枝。丹波、中川よしえ。越後、貞子。京都、石原つゆ子。伊賀、峯山しめの。以上の諸孃から例の通り御挨拶やらお尋ねやら 一々拜承いたしました、單に芳名を掲げて 御答に代へます、不惡思召下さい(記者)

品物交換

○皆樣先頃より 度々おねがい致しましたる種子も百種以上となりました 謹んでお禮申します尚皆樣中草花作つて見たきお方は妾不用のをお分け申しますから御ゑんりよなく返信料三錢送料袋代二錢とを入れて申し込み下さらば 四月中頃蒔きつける 珍奇の種類色々取合せ四五袋づゝ送呈致します (佐賀縣小城郡小城區姪子町田尻良子)○皆樣の中で ハモニカ手風琴及刺繡獨習書和洋折衷新案菓子製法家庭菓子製法が 御不用になつてゐますならどうぞ 手前におゆづり下さいませぬかひとへにお願ひ奉り升 (島根縣出雲國

大原郡木次町區裁判所門前鈴木安枝）○親しき誌友の諸嬢さま寫眞や繪葉書の交換をなして下さいな見にくき寫眞ですけれども送り致下た御方には是非御送りし升（山城相樂郡加茂村鈴司十三池田入重子）○諸姉様！妾音樂大好よ。どなた様か。ヴアイオリン不用の方は。妾にお譲り下さいな。返禮はきつとよ。ハーモニカでも。手風琴でも。願りますわ……小說や。繪葉書も。少々手許に。ありますよ。（常陸鯛栄村鯛巣齋藤美津子）○皆様の中に寫眞御持の方は御送り下さい（裏面に住所姓名年數をしるし）御禮には職男艦隊模丸の寫眞を送ります 男子の方御斷り拾枚限り（肥前國東松浦郡西唐津大園ひで子）○皆さん妾も本誌愛讀の一人で只今茂原町の女子技藝學校へ通學してゐます 今後は宜しく御交際を願ひます、懐かしい皆さんの御寫眞や御手製の編物其他不用なる圖符が有りましたら何卒御惠み下さい屹度妾の見悟き寫眞へ學校て先生にしかられながら製らへた不出來の編物添えて返禮致します（千葉縣長生郡二宮本郷村新町蒔田芳枝）

讀者通信

○土佐より　御免下さいさて皆様、生系は土佐產物の一てありますから隨つて養蠶が盛んで殊に越知町は高岡郡の北部金峯山（安德帝の御遺傳說地）の麓、仁淀川の南岸てして市街は長く東西に連なつて、二百餘名の工女を有して居る製系會社が有まして朝暮晩に勇ましい汽笛をならして盛んに國益を計つて居ます、追々暖氣を催して三月頃より暖い〳〵桑園の桑が發芽しますからいよ〳〵養蠶期に相成ます、一定の期間を經て上簇期になればなか〳〵繁忙を極むるのです、然し玉なす繭を山と積んだ時の喜悦はとても經驗のない方には分りません左は鄙地の俗謡です

　蠶飼へ〳〵糸取り習へ早く蠶家の嫁にやれ

長物語を失禮てした左樣なら（土佐高橋綾子）

○越後より　軒迄つくと云ふ越後の雪が今年は妙に降りませんのよ僅五寸ばかりてす其かはり寒氣の烈しいことは一通りじやないの每日三十度より上りません書いて居る筆の先が氷つて仕舞ひます一月十三日（志賀美代子）

○青森より　降つもる北國より一筆申上ます當地は雪の量は例年の半分よりも有りませんが寒に入りましてからと云ふものは、もう每日のやうに北風がヒユー〳〵と肌が破らん許りに吹いて、白いものはひら〳〵と絕えず飛んてくるものてすからお寒いことはお話しにもなりません、然し氷どうふや、寒餅の美味はとても暖國の人の想像が付かないてすようれ、無學なのてすが誌上てよろしく願ひますさようなら一月十四日（青森市梅子）

圖書換讀

○立田姫　皆樣の內て、去年の十二月の增刊の立田姫が不用てしたら惠んて下さい。御禮に新體詩學を差し上げます。（愛知縣碧海郡矢作町網目永田舞鶴子）

○歌書俳書　西行法師の山家集の評釋、萬葉短歌全集。木版の三槐和歌集。薫園さんの小詩國。一茶俳句全集。俳諧三佳書、（猿蓑、明烏、五車反古、）子規書簡集の上卷。沙翁全集のオセロ、獨歩集。認識論。俚諺通解。博文館の野外植物。及び國通語自修書。以上の書不用に付皆樣の、白羊宮、二十五絃、藤村詩集。夢の華。海潮音。歌日記。其他の詩歌集と御交換願ひます 御照會は封書に願ひます。（東京牛込區早稲田南町二〇小富山方白麻弓）

○金色夜叉　諸嬢樣の御內に金色夜叉お持のお方は妾に貸して下さいませんか、種々の小說類を以て必ずお禮致します又片戀、カルコ集、血笑記、夏子、乳姉妹、お持ちてしたら妾に交換して頂戴な（廣島市新川場町一〇八ノ一喜祖光子）

○夜雨の詩集　皆樣の內に夜雨先生の詩集花守及二十八宿のいづれてもおゆづり下さる方はございませんか？お手數ながら本欄てお知せ下さいませ勿論お禮は致します（薩摩伊郡佐大口村牛尾小學校逆瀬川俊子）

○辞林　金澤博士著の辞林御不用の御方は妾の壹圓吳服切手（大丸吳服店）のと交換は願へますまいか御承知のお方は早速下名に（三河東加茂郡阿摺村新盛三ヵ鈴木まゆみ）

○小說と造花　誠にあつかましうございますが姉樣方の御中にもしも「破戒」、「眞人の自白」「つきしろ」のうち何なりと御不用のものがございましたらば御讓り下さいますまいか失禮ながら私の手許に國歌集（一、二）叢書の歩、わが生涯、樂天主義、簡易生活、新撰國文（一の卷上

下）がございますから六種ともさし上げます亦「造花術新書」か「造花獨けいこ」かを御送り下さいますならば刺繍術新書と美人ゑはがきとをさし上げます御望みの方が重なるといけませんから一寸御知らせ下さいまし（大阪市南區天王寺松ケ花町龜岡方とら）

○繪畫　皆様の御手許に、三宅克己先生の「水彩畫手引」同先生の「水彩畫指南」同先生の「旅行とスケッチ」中村不折先生の「鉛筆畫法」日本葉書會の「スケッチ畫集」同會の「繪葉書趣味」等若し御不用のが御座いましたら何卒御惠み下さいませんでしようかまことにみにくき私しの寫眞を添へて御禮はきつといたしますから（京都市錦小路室町東入　大森君子）

○賢明なる讀者様方よ妾の手許に晴香疎影が不用になつて居ますから寛風戀風か金色夜叉に寫眞を添へて送られた方に差上げますからお早く送つてください。（福島縣安達郡和木澤村穂澤川名なほ子）○なつかしき誌友の姉上様方よ、其後は何のお變りはなくつて、私は何事なく日々面白う暮して居ますから安心して頂戴よ、そこで姉上様方の御手元に、科學世界、衛生新報、文庫、ホトトギス、婦人畫報などの雑誌がありましたら、何卒送つて下さい、御禮年として女子文壇、少年の友、敷島、成功之少年などの雑誌を差上ます、乾度よ。（佐渡畑野村栗野江谷川かつら子）○皆様の御手元に枕草紙講義か中古の名高い日記、物語講義、天打つ波、呪はれたる女、朝ばれ等おありでしたらわたくしの人の罪、文藝倶樂部、新小説と御交換下さいませ（和歌山市南林木町鈴木傘子）○皆様よ私は文庫新聲へカキ文學太陽中央公論新小説たくさんもつて居りますから三錢切手封入申込めばお送り申上げます（紀伊羽賀郡小倉村音平方神下りき江子）○皆様の手元に青春寛風戀風不用の御方は送つて下さい必ず相當の返禮す着次第私の手にある新文林望みによりては實業之日本を送付す以後永久御交換を乞ふ（千葉縣海上郡飯岡町字井花月）

○私手許に婦系圖、走馬燈、新伏姫、マアテルリンク物語、保元物語、平治物語、土佐日記、脚本金色夜叉、藤村詩集、ハイネ詩、肉彈詩流血、第二明治才媛文集、高等才媛文集、明治才媛歌集、女子遊嬉栞、女子心得、母の務小間使、純十願同、野分等不用に付き望みの方には相當の定價にお讓いたします紹介は往復はがきの事（靜岡縣相良局區内相良町川田様内ゆかり子）○私手許に女の一心、美人の魂、リンコルン、銀山王、汽車の友、學校生話、女學生訓、男哲學、塔中の怪、初航海、第二才媛詞藻、名士名家の夫人、發句自在、女學世界四十年四十一年分女子文壇文藝倶樂部十五、國文學十、婦人雑誌十、ムラサキへ、新小説六、演藝二あり皆様の御手許の小公子、ハムレツト、戀ざめと御交換を乞ふ手許のは皆新しいものばかりです（靜岡縣相良局區川田熱田　富子）○皆さんよ私の手許にれー竹取物語、土佐日紀、方丈記、女道叢話、徒然草講義、菊花餘香、異郷の友垣、わが生涯、初芝居、新文林、應用文章學、若菜集、新體詩學、美文斷鎖うもれ木、内外交際之心得、實用家事經濟學、日本の華文、楊貴妃、明治文庫、樂天の生活、滑稽日本史、お望みのお方は小説本や英學書籍や其他雑誌と交換致すからられー同情の姉さんは下名までよ（岩代若松市市六日町宮原天聲子）○妾の許に昌子先生の白光、黒髮、信綱先生の玉川集、鳴雪俳句選文章世界等がありますから昌子、紫舟、及諸先生の短歌集と御交換を願ひます御本年より愛讀者となりましたから御交際を御願ひ申ます（芝公園廿二號地三中西繁）○誌友の諸姉様よ妾の手許に、文藝倶樂部、中學文壇、女子文壇、婦人世界、日本名勝エハガキ、十二枚組が五組有りますから、御望みの御方は御手製の編物又はお寫眞小説等にて御指定の上御申込み下さい（松本市上横田町二、四四四川上めぐむ）

○妾に獨歩氏の第二不用に付き諸讀の内にて有明氏の春鳥集か梁川氏の病間錄の内一冊と交換願ひたし又白鳥氏の「何處へ」にても宜しく候又女子文壇十數冊不用のものあり名所はがきにて御申越の方に進呈いたし升（山形縣飽海郡松嶺渡川原村長泥町阿部花子）○金色夜叉標踪か戻美人草か夏子か何れにても可し御持ちの方は私の小説血繪室後の三日月新不如歸、又は新文星第一卷第二號より第六號迄、ムラサキ第二卷第七號第八號、姫百合第三卷第二號中學文壇第百三十九號、何れにても御のぞみのものと御交換下さい、勿論一冊御送り下さらば妾にては三冊にても四冊にても御のぞみ次第送くります（青森縣八戸町八幡丁西村みや子）○皆様妾の手もとに小説九十冊ばかりございますので皆様内に紅葉、露伴、水蔭、小波、風葉、天外、美妙、秋聲、柳葉、荷葉、吐芳、眉山、桂舟、幽芳、北星、蘆花、嶺葉、掬汀、鏡花、櫻芳、柳浪、霞亭、桃郎、涙香、宙外、二葉亭、漱石、新泉、雨江、藤村、弔花、夏水、未明、白鳥、春浪、花袋、浪六、青

栞、奴之助、青々園、松葉、仰天、鐵腸、春軒等諸先生方の著しになったのがございましたらはお送り下さいお問合せは往復はがきにかぎります（佐賀縣小城町蛭子町田尻新聞舗内 なほ子より）○妾の許に、新潟縣女子教育會發刊の家庭の栞、一卷の女子文壇、文藝倶樂部、ハガキ文學、小說不如歸、裁縫と編物、産婆全書 看護學、等の書籍があります、女學世界、婦人畫報、少女界、青春、婦人の戀愛、寬風戀風、女學生、戀の変、等の書物と交換してくれませんか（新潟縣魚沼郡水澤村 村山總正宅、潮子）○誌友の皆樣私は何に依らず古物が大好て此度古書畫 又は古錢を集めたいと思ひます 御持合せの方は左の書物と交換して呉れませんか 己が罪、慾芙蓉、金色夜叉夏子、コブシ、濱子、乳姉妹文藝倶樂部其他諸雜誌畫葉書類猶一個にても珍らしき品御送りの方には前記書物の外何々にても御望みの小說を買求めて御送り致します（房州舘山町新井宮本清子）○妾も今度はじめて文壇の愛讀者になりましたのよ、どうぞお交り下さいませ 妾の手元には、言海、女子詠歌辭典、女子の友、女學校用國語中辭林、男女東京遊學案內、文章組立法、渡米案內、思出の記、空想病、向上の一路、家庭の母、ホトヽギス、女學世界、日本女子進化論、などの不用の書がありますのよ、皆樣の內女子用文五千題、作文五千題、 はがき用文、言文一致新用文、青葉若葉、枯野の露、言葉の泉、人生の半面東京パック、大阪パック、婦人畫報、婦人世界、文章世界、女學世界、美文繪葉書一名 名所繪葉書お持ち遊したなら御交換遊してよ、 そしてお恥かしいけれど男子の方にはお禮として手製のシホリやカードをお送り申しますわ（茨城縣結城郡山川村今泉、久保野谷原之函內 久保野谷ふく子）○懐かしい 誌友の皆樣よ皆樣の內に乳姉妹、寬風戀風、女夫波、花寶娘、緣不緣、想夫憐、有情無情、伯爵夫人、己が罪、コブシ、新不如歸、新生涯、雛子、夏子、金色夜叉、晴小袖、結婚と家庭、富と愛、青春怨、戀學生、ハイカラ令孃、多情多恨などお持ち遊したなら どうぞお送り遊して頂戴な、 それに妾美人エハガキ（未使用）リボンお送り下さいましたお方にはお禮に お恥かしいけれど手製の 花形シホリやスミレ花のカードお送り申しますそして男子の方にても 清いお交りなら致してよ（下總國結城郡山川村字 山王坂本千代方坂本はる子）○皆樣の內で 青果集、金色夜叉、落葉、白玉姬、 をお持ちの方は妾のあらゝぎ、獨步集第二、天地有情、風葉集、 中央公論、文藝世界、武藏野、 二十八人集と御交換下さいませんか（神田東紅梅町二番地伊原方松下稻子）○姉樣がたのお手もとに、寬風戀風、三、己が罪三、青春、（春の卷夏の卷）晴小袖、御送下さらば私しの金色夜叉五、 紅葉全集、一卷二卷三卷、夏子前篇 露子夫人、 天うつ波、いづれなり共送ります（北海道樺戶郡浦臼村字黃臼內小四婦美子）○諸孃のお中て、文藝世界、新聲、新潮御不用のお方は妾の、 文藝倶樂部、文章世界、 其の外の多くの雜誌と交換してください（千葉縣君津郡駒山村高濱春子）○皆樣、 皆樣の中に 尾上柴舟氏著靜夜、若山牧水氏著海の聲、興謝野晶子著歌集白光、興謝野寬相聞、その外何ても不用の歌集がありますなら 送つて下さい必す御禮を致します 私の持つて居るは晶子鐵幹合著毒草、兒玉花外ゆく雲、 薄田泣菫暮笛集、 晶子みだれ髮、德田秋聲凋落、 小栗風葉天才同じく鐘子夫人其外二册不用てあります（安房國佐久間村二區髙梨ちゑ子）○私の元に記事作文問答、中學漢文辭典、小年歷史ばなし 尋常小學裁縫教科書等一度目を通した許りてすから 皆さんの言海や一葉全集と御交換下さい（山口縣玖珂郡賀見畑村木村球子）○妾の手許に、 二十五絃[illegible]太夫白羊宮、乳姉妹ハイネの詩青年畫家、 小說世間富と愛女訓の栞、 令孃と勇兵婦人世界 ゲーテの詩、日本大辭林日本新辭林 新體詩入門、日本家庭百科事彙女子書翰文等不用に、 なつて居りますから 左の書と御交際下さい、 言海 美文自在明治才媛文集、 心の波路のゆくへ不如歸、 初恋寬風戀風青春、明治秀才文集 金色夜叉さゝ舟、小猫奏惑新論にせ紫雪月花（千葉縣君津郡駒山村金井長三方金井ふみ子）○皆樣妾の所に、言海と、妙な男、天うつ波、夏子、青春、一葉全集、肉彈、コブシ中編、雛子、蕪村句集會の不用書と、長野共進會紀念甲種六組、乙種十二組、共進會場はがき協贊會東京支部發行 繪畫展覽會 繪はがき 西洋畫の部、四組、日本畫同組全部スタンプ附てす、繪はがきて申込て下さい着順に 差上もし交換も致します（信濃下高井郡住鄕村庚、青木幸子）○寬風戀風三册心の波、草迷宮、花あやめ、月魄上下、母の紀念、母の面影、母の血、黑風、五人娘、小猫、寒潮暖潮、露子、雪だるま、夏子、小弓御所、血のなみだ、沖の小島、たからむすこ、良人の自白、新ナポレオン、立志兄弟、ハイカラ令孃、人のうん命、青年畫家、相夫憐、 世間、夫婦離、 柳さくら、響の兇、火の柱、 等其他新聞切ぬき冒險

讀書もございます 實は小說だけしか交換致しませんので 繪葉書及び雜誌は不用でございます御愛はたへず交換致し居ります のでお氣にめしたのがございましたら三種以上づゝお さし名の上お送り下さいませ （佐賀縣小城郡小城町姫子町田尻貞子）〇私しの手元に 女子文壇女學世界婦人世界文藝倶樂部 新小說文庫世界小女界ムラサキ新潮新聲文庫新文林中學生 中學世界富士山奇觀三十六文豪家 嶋原東新読梅が香すゝか清風草紙世界的青年靴践小星小 翠竹葉焦毛紙畫手藝鉛筆畫手本等ありますから御望の方な絹とロッキ絹エハガキ掛絹栞等の編物で申し込んで下さい早速御送り致します 尚雜誌の御交換も希望致します（近江伊香郡片岡村大字東野 田川ゆう子）〇なつかしき皆様よ、私の手許に不如歸の歌、千鳥鉄一週唱歌が不用になつて居りますから、己が罪、 夜半の悦出の歌御所持なら交換して下さいませんか又古雜誌の交換も願ひます （千葉縣安房郡田原村太尾 阿部けん子）〇左の書が不用になつてるのよ、 上等繪葉書か皆さまのおうつしゑ編物で申込んで頂戴、 お望みのんすぐ送りますわ、先著五人様に私の寫眞添へます 成美人草乳姉妹黑百合 不如歸乙女の操へイカラ令嬢涙命美人自然と人生雜誌では女學世界新文林婦人世界婦人畫報 ムラサキハガキ文學新國民少女の友等で八十冊ばかりあります （秋田縣山本郡藤琴村太良鑛山梅澤ふみ子） 〇私は小督青燈集、美妙先生の狹男兒、 鏡花先生の無憂樹 が持て居ますが皆様の内で桃節帝不知火 若葉裔藤の糸。寫江の火柱、 懺悔録と御交換下さいませんか又溝記數科書全部（原價壹圓五拾錢）及び國文小辭典、物理、化學、生理、衛生、國文、各問答書を持つて居ますから、風葉、鏡花、 花袋、 諸先生の小說又は網島梁川の病間録と御交換下さいませ （岡山縣久米郡打穴村津田秋吟）〇皆様の中に 御不用の辭典や文學雜誌ならば 何程古くとも宜うございますから 御惠送下さい 屹度御禮いたします（山形縣玉川局區内南小國小學校胡尾加江子）〇〇皆様の中で天うつ浪がお持ちの方ありましたら下の登許りて宜しいのですからお惠み下さいませんかお禮として 私の加賀の千代子俳句集小說では武哨ヵ拾萬圓の大賊、 東京ミヤゲ中京講精文藝倶樂部等有りますからお望のを差上 ます又夏子がありましたらお 送り下さい （常陸下館田町木村那賀子）〇皆様の御手許に金色夜叉、ハイカラ令孃、 乳姉妹 玉島、少女の戀、女學生、鮭露注、夏子、 薫子等お持ちのお方は下名へ御送り下さい御禮には手製の編物、 栞、造花、 美人繪葉書（未使用）等いづれにてもお好みのを差上ます私の見悄き寫眞もおのぞみしだい 御送り致します（埼玉縣入間郡所澤町金山肥田野愛子）〇誌友の諸姉様よ炎古雜誌四十冊程有りますから御交換を願ひます （茨城縣筑波郡谷田部局内小野崎中山けい子）

問合せ

〇田中要子様　本誌によく投寄なさる佐賀市の田中要子様の御住所御存じの方がございましたら何卒誌上でお敎へ下さいませ御願ひ致します（辻本愛子）

〇鹿田花子様　京都新町高辻下る處にいらつしやいました方で御座います 五年程以前お別れしたまゝ一度も音信をいたしませんが 只今は何處にいらつしやいますか若し御存じの御方が御座いましたら御知らせ下さいまし 御願ひ申上ます（福岡縣前崎町上社家町神森操）

〇上田誠子様　東京にお住いでした上田誠子様、今は何處で御勉強ですか？ちつともお音信がありませんのね、 誌友の皆様若し御存じのお方がありましたら是非お知らせなれ、きつとお禮は致しますから（備中連島村原こみれ）

〇大槻翠雨様　東京の方で男子です。去年の七月頃まで小樽に居て今は札幌に居るそうです現住所か又元の住所を紙上で御知らせ下さい。御禮はきつと致します（北海道、里見カナ）

〇下館町那賀子様へ　御尋ねの通り私は眞壁郡若柳のもので御座います、 何も出來ません不束かなものですが此後どうぞ御交際を願ひます（初澤さく子）

個人消息

〇四戸政江　左記へ移轉致します（近江國入幡町魚屋町中二九畑卯方四戸政江子）

〇甲斐莊子　豊後上緒方村上年野柳井波彦内甲斐莊子に轉宿す、交際を求む

注意

二號俳句入賞　福井野坂靜子作霙の　は三十八年四月發行大家撰新俳句集の中より

同號俳句入賞　松本惠子作戀衣：：は萬朝報より

同號和歌入賞　竹下濱尾作氷る風：：：は歌集白光より

右何れも剽窃と認む。

今回御注意下されし諸姉は本郷西島敍子〇沼津松音〇東京西野波子〇山里の一少女まさ子

雜報

婦人界消息

○近づける二つの御慶事

竹田宮妃昌子内親王殿下には最早御產期間近くあらせらるゝもかゝはらず、いと御健かに在し御懷胎後一日も御臥床の事もなく日々の御髮上げさへ侍女の手だに借らせ給はず、宮殿下の御左右の事をさへ何くれとなく御差圖遊ばさる、猶は近來と雖も午前中下田、堀江、幸田の三女史を召され、佛語、國語、音樂等の御研究も廢せられず、御胎育として偉人節婦傳等の講義も聞し召され、御母君としての御用意一時も忘らせ給はずと漏れ承ります。

又高輪御殿なる周宮房子内親王殿下御婚嫁の御慶事も進捗しそれ〳〵御成婚委員へ御内命あり、最早諸準備に取掛りましたさうて、御慶典は四月中旬と略御決定の由承ります、此御婚嫁に要する御手道具幷に御裝飾品等調達の爲め、昨年歐洲へ出張せし長崎調度頭は此程歸朝になりましたが、同氏の談ては、殿下の御洋服地は總て英國に御裝飾品は巴里にて購つたので、其御裝飾品中最も高價なものは頸飾の二萬六千餘圓及びダイヤモンド嵌入純金指輪の一萬千餘圓等の御品々だと申すことてす。

○新設婦人會館

今度麴町區永田町一丁目に新築された、大日本婦人教育會々館の落成式は新年會を兼ねて一月三十日午後開催になりました、當日は名譽會員にておはす東伏見宮妃殿下の御臨場を初め、名流夫人令孃百五十名の會衆にて輝やかに華やかな集會であつたさうです、又會館は洋風二階建と日本風二階建とより成りなか〳〵立派なもので、爾後會員の爲めに開放して常集會場とするは勿論、割烹音樂其他の講習も開くと共に、臨時各自の社交場とする計畫の由です。

○女子師範教育の創設者

此程薨去になつた樞密顧問官田中不二麿子は、明治七年文部少輔の時、女教員養成の急要を感じて、東京女子師範學校（今の東京女子高等師範學校）を創設された方ださうです、又子の葬式は遺言に依り行列を全廢し、谷中齋場で極めて質實に故人の理想通り執行されたとのことであります。

異彩ある女流（口繪參看）

▲ベシア、アレキサンドラ、君子孃は尾崎東京市長夫人英子の令妹で、尾崎男爵滯英中英子及び次の令妹雅子と胞を同じうしてお生れだつた相です、極めて眞面目な嚴肅した質で、幼い時からタイプライターと速記を學ばれ、斯道にかけて天才とも云ふべく、廣い倫敦ても名聲高かつたさうで、中の令姉も嫁して南米のブラジルに赴かれたから、一人倫敦に殘つて母に孝養を盡くされて居たが、五年前我邦に見えて横濱の香港上海銀行支店に入り、其無比拔群の技倆を淚ひ高給を取て居られるのです。此方今度瑞典ロ・センバルグのフエンリツクオークテロニイ氏と結婚せられましたのですが、結婚後一年間は依然前記の銀行に勤めて故國の母親を扶養せらるゝ由です。

▲ヘーウツド孃は米國ベザ女子大學出身の文學士で來る四月より立教高等女學校の專攻科の組織を改めて、專攻科を設き、英語教授を一層完成する擴張計畫に就き、新に聘せられ去月十六日赴任せられました。

▲高橋和喜子孃は正金銀行の頭取高橋是清氏の令孃で、學習院女學部に通學中、去る三十九年のこと、觀光の爲め來遊したる米國紐育の富豪シーフ氏夫妻が、孃の無邪氣な態度を愛て、米國へ留學を勸めたので、遂に其の監督の下に伴はれ渡米、彼地の上流教育を授けられました、和喜子の最も優れたるは、語學、鉛筆畫、音樂、わけてピアノに巧みな由です、シーフ夫人は孃を

『日本の我旗』と呼びて、鍾愛措かれなかたさうですが、月の上旬目出度く歸朝される筈だそうです。

女學校の噂

▲三輪田高等女學校　塲所は新見附内に厳めしい門構への大きな學校だ生徒の數六百名以上寄宿舎も第一寮から第六寮迄あつて各寮十名位づゝ家族的に住ひ校長や元道教頭も時々同じ食卓に就くさうである。▲生徒には中流以上の家に勤め人軍人等のお孃さん達が多い他の學校のように父兄を集めて懇話會等も無く注意を要す可き生徒は寮舎て呼び出し教頭が遠慮なく話す事にしてある▲女子商業學校と一口に云へば何だか銀行や會社に雇はれる女子の計算員ても養成する所てあるかの様に感じられるが決してさうてはない▲嘉悦先生は常に生徒に士魂商才といふ事を說き萬事實用的の教育を爲し生徒にも自分の思想を吹き込まるゝ爲め聞て生徒もさう云ふ氣風になり四五人寄り合て話をするのを聞くと『官吏や軍人の奥さんなんて面白くない、共稼ぎの方が餘程趣味があつてよ』と云つてるとは嘉悦さんの直話てある▲女子商業學校位置は神田一ツ橋て昔お大名屋敷其儘の門構へ表札が無ければ一寸學校とは受取れない中は段々増築して尨大なる學校となり尚は盛んに基金を募集して近き内には全校舎を悉く三階建にするといふ凄まじい勢だ▲創設以來既に二十年を經過し卒業生を出す事二千餘名本年も又三百餘名の卒業生を出すとは驚く可きものてある▲元此學校の生徒には老人が多くてお婆さん學校の名があつたが近來老人は少なくなつたが何人ても初めから高級には入れない規則だから十三四位の少女十七八の娘盛りもあれば又三十越した未亡人も交つて居る▲東京女學館　ハイカラの生徒と云へば先づ第一に指を虎の門に折らるゝ程てある學校の方針が既に貴婦人の養成てあるから致し方がない此の學校は家庭の撰擇が八釜しく料理屋待合藝者役者其他之に類する者の女子は入學を許さぬ内規てある相な▲午前九時頃と午後三時頃は此邊り美しく着飾つた女學生が澤山ブラ付いて居るそれが即ち女學館の生徒て近來髮の結ひ方に新式の銀杏返しとマガレツト」が半以上を占めて居る▲赤坂見付けあたりては屢々學習院の女學部の生徒と出遊ひ女學生一流の妙な鞘當とても云ふ風が見えるのは頗る振つて居る『チヨイト學習院よ、威張つて居るわれー』といふ調子だ生徒は中々活潑て瑞典式等のハイカラ體操の外に庭球やクロツケー等も盛んホツケー等も時々試みられて居る本校の現在生徒は二百八十餘名て別に高等科に二十名在學して居る

▲淑徳高等女學校　小石川表町傳通院境内にある新築の學校て明治廿五年に創設せられたものである設立者が有名な輪島聞聲尼てある爲めお尼さん學校と惡口を云ふものもある▲袴の白い筋も三田よりは此學校が先きに着けたのてあるさうなが程度と云ひ生徒の氣風と云ひ此の學校と三田の女學校とは能く似て居る▲然し此學校は宗教的薰陶をするだけに服装も質素てあるし氣風も温順て惡い評判は餘りない▲教室は新らしくて且つ清潔だ教壇の傍らには生徒が代る〳〵持て來て花を生けて居る窓外は傳通院の境内が見え春は櫻の散る頃になれば花片が窓から吹き込む▲東洋英和女學校　東京市に基督教傳道の目的を以て設立せられて居る學校も澤山あるが其の内最も盛んなのは女子學院青山女學院立教女學校普連土女學校及び此東洋英和女學校だ▲此學校は麻布鳥井坂にある黄色い大きな建物て澤山の煙突が立つて居り年中ピアノやオルガンの音が漏れて居る▲此校の生徒て特に目立つのは髮の結び方て何れも揃つて其廂を突出して居る事た中には餘り出過ぎて結髮の統一が困難に見えるのもある日本髮は全然無い▲和洋裁縫女學校　明治三十二年に創立し其の當時は微々たるものてあつたが漸く盛んに成つて今ては生徒が四百

六十名に達し渡邊裁縫女學校なども凌駕せん勢だ▲しかし校舍は頗る狹くて且暗い生徒は教場からはみ出して廊下に呉蓙を敷き其上て裁縫すると云ふ始末だ▲此學校の組織は男子の學校に譬へると正則英語學校の樣なもので別に八釜しい入學規則もなく毎日入學があり毎日卒業が出來ると云ふ呑氣千萬な事てある。

最近の女學界趨勢

都下の某新聞にかう云ふ事を傳へてありました、まづ最初が、

▲女學校出身者の宮仕　て宮中御内儀の事は九重雲深くして一般臣民の知る所てありませぬが、近頃各御用邸各宮家に至るまで文明の敎育を受けた婦人を侍女に召さるゝやに承はります就いて聞いたまゝては女學校出身者にして現に女官の人々に、權典侍從四位園祥子、同正五位姉小路良子、權掌侍從五位藪嘉根子、同吉田鈺子、命婦從六位生源寺伊佐雄子、同樹下定江子の六名は何れも跡見女學校の出身の方、又青山御所に奉仕せるは板野すゞ子、足立孝子、逸見千代子、荒川玉子、清水重子の五名中、荒川女史の外は皆女子高等師範學校の出身だと云ふことです。次に

▲女學校の不景氣　と云ふことて、本年は如何云ふものか都下各女學校何れも入學申込者の數甚だ少なく、學校經營者は困難して居る由てすが、是れに付き某女子敎育家の話された所に依ると、近來各地方の、女子敎育の機關完備の爲め地方の父兄は何れも自己の膝元にて子女を敎育することが最も安全だと知つた所から上京を見合はすに至つたのだと云ふ事てす。

▲女學生間の思潮　はどうかと云ふと、六七年前までは女學生の多くは、敎員として獨立せんと志すもの多數を占めたのが、昨今は之に反し、惣じいつか獨立して、精神的に經濟的に苦痛を受けやうよりは、寧ろ相當の家庭に嫁かうとする者が多くなつて來たので、此の結果として高等女學校以上の專門的學科を修める者が漸く減じたのだと云ふ事てす、又獨立しやうとする者は敎員よりも女醫に志す者多きを占むると聞きます。

春信

都は一日一日と春らしくなります、燥いた空の琥珀の光から、霜どけのじめ/\した土から、探ぐるやうな和みが寄せて來ます、電車は毎日同じところを通るが、濠畔の柳や見附の櫻は芽や花を露はすに先つて枝が艶々と光つて居ます、南椽の日當りに甲羅を乾して凝と見て居ると、火鉢からチラ/\と陽炎が立て、膨らんだ座蒲團の花模樣までが浮き/\と漾つてるやうにも見えます、夜の巷は縁日毎に春めいて其の季節をさゝやく種々の品物が燭の影を浴びて並ぶと云つた有樣てす。此間の紀元節には憲法發布二十年紀念祝典が市下に行はれまして、日比谷、上野等の公園は勿論、旗行列、夜は提灯行列と云つたわけて二重橋近く潮の如き人出て萬歳の聲を九重雲深きわたりにまて及ぶやうにひゞかせたのてす、其他何處もかしこも盛んな賑ひてした。今に梅も盛りを過ぎ雛祭りも濟むと、都下は櫻花の季節てす、去年は雪て傷められたから今年は一層美しいのをと思つてる人もありませう。

文士しらべ

▲現代の文學者中て最年長者は内藤鳴雪翁と、『言海』の著者文學博士大槻文彦氏てす、鳴雪翁は弘化四年四月十九日出生、大槻博士は弘化四年十一月の出生て、畢竟同年てす、而して天保人間は一人もありません▲最年少者は詩人三木露風君て明治二十二年六月二十五日生れてす、同しく詩人川路柳虹君の明治二十年七月二十日出生がある許りて、他に廿年代に生れた人はありません▲文士の職業は教育家、新聞雜誌記者などが最も多いのてすが、中には一寸變つた職業もあるやうてす、伊藤左千夫氏の牛乳搾取業、徳田秋江氏の小間物商、中澤臨川氏の京濱電氣鐵道株式會社技師、太田玉茗氏の曹洞宗建福寺住職、柳田國男氏の内閣法制局參事官兼宮内書記官、小島烏水氏の横濱正金銀行本店預金係

長、森鷗外氏の陸軍軍醫總監醫務局長などが異彩のある方です▲文士の生國に就いても、對照すると地方邊の面白いものがあらうさうです、泉鏡花氏及び德田秋聲が北國の金澤に生れて、彼の暗色ある作が多いことや、坪内逍遙氏が名古屋近くに出生して劇道の事に心を寄せられるのも何か因縁がありさうに思はれる、それは扨て置き今東京で生れた文士を數へて見ると、巖谷小波、服部嘉香、長谷川時雨、戸川殘花、金子薫園、蒲原有明、幸田露伴、吉井勇、武田櫻桃、竹内まさ、長井金風、村山鳥逕、上田敏、川柳春葉、山田美妙、山岸荷葉、山本露葉、山本柳葉、前田曙山、藤澤古雪、小林愛雄、笹川臨風、水野葉舟、柴田流星、平田禿木の諸氏ですが、未だ明治にならぬ前、即ち江戸時代の東京に生れた所謂江戸つ子は塚原蓼洲、內藤鳴雪、夏目漱石、上田萬年、二葉亭四迷、饗庭篁村、嵯峨の屋、宮崎三昧の諸氏です。最も以上の內には生れて直ぐ地方に行つて成育した人もあるやうですけれど、兎に角神田上水なり、東京水道なりで産湯を使つたのに相違ありません。(以上文章世界に依る)

注意すべき作

二月の創作界には注意すべき作が至つて少かつた、一月が賑かであつた反動でもあらうか一體に淋しく見えるが、其の中で二つ注意すべき作がある、一は『新小說』に出た岩野泡鳴氏の『耽溺』で、一は『スバル』に出た『南蠻寺門前』である。『耽溺』は所謂デカダン式のもので、藝妓に惑溺した事柄を隨分長く書いたものだが、描寫の行り方は好いと思ふ、氏の詩よりも、論文よりも、此小說に於て作家たる技倆が一段上つたやうに見える、半熟の作ではない、ところどころ惡い癖もあるやうだけれど、それは先づ微瑕として置いて、全體の情調が熟して居る、中年の人の書くものとしては此邊の行き方が最も現代的であらうと思はれる。『南蠻寺門前』は脚本であるが、劇詩とも云へば云へるやうなものだ。讀む脚本として一種の成功に終るべきものかも知れぬが、才氣紛湧て其の想像力と、考案力には驚嘆せしめる、餘りクラシックの爲に素人受はすまい、けれども眞面目な用意を以て作られたる脚本だから、一讀して新作家の意氣込が窺はれる。

文界彙報

▲田岡嶺雲氏の病氣慰問の爲めに友人諸氏の編輯した『むら雲』は既に出版の運びとなつた、▲雜誌『新天地』は四號限りに廢刊した▲『文藝時報』は編輯者も發行者も變つた▲水野葉舟氏の小說集は『戀夢』と題して近々出版の筈、同氏の第二小品集も追つて出版と決定した▲『秀才文壇』の小川未明氏、西村濤隆氏は客員となり、新に前田夕暮氏が入社した、因に同誌は四月二十日に『大讀者號』を發行する▲目下『東京朝日』に連載中の森田文學士の『煤煙』は約百回に近いものださうだ、文壇に注意を惹いて讀まれてゐる▲小栗風葉氏は『金色夜叉』の續きを書いてゐる▲日比谷圖書館一日觀覽者平均五百八十九人强で、其內婦人は九人の割である▲白馬會展覽會は四月十日より五月十日まで赤坂溜池三會堂に開く。

文學講演會

神田東紅梅町二番地與謝野氏方にては來る四月(より毎週文學講演會を開いて古典古文の講義、和歌新體詩の添削、科外講演等を催ふす由で、與謝野氏夫妻專ら講話の任に當ると云ふことです、特に女子部も設けるさうですから特志の方には便宜でせう。

第二增刊新作家

本誌は第二增刊として來る五月十五日に新らしき編輯法と投書法とによりてなる「新作家」を發行す、詳細は別項廣告

○月の帶　府下神田猿樂町資生堂の『月の帶』といふのは有名な山田逕子と云ふ方が液試して幾多月經帶を調査し、日本婦人に適する樣改良を施し新に製造したものださうで、實地に用ひた人の好評を博して居るらしい、常に婦人に有益なお話しをせらるゝ村井弦齋さんも賞めて居らるゝやうです。

○餘興課題　葉

三月十五日に寄稿をしめきりて、五月一日に發表する餘興の課題は『葉』といたします。

▲春風二十四番の花落盡して、新樹の綠すゞしく瑞枝さし交ふ青葉若葉の頃の心持は誰でもすが〳〵しからうと思ひます、晩春初夏の天地は木の葉草の葉の美を以て飾られます、花の美に就いては古往今來澤山の人に言はれましたが、葉のことに就いては花ほど多く言はれませんが、まだ言ふべきことが澤山あらうと思はれます、▲葉の色、葉の形、夏の新樹、秋の落葉、木の葉のこと、草の葉のこと、注意してみれば葉に就いて言ふことも澤山あるでせう▲何の葉が好きだとか、何の葉は嫌ひだとか、何の葉は面白いとか、何の葉は變つてゐるとか、何の葉を何に使ふとか、何の葉を見ると斯う云ふことを懷ひ出すとか、要するに葉に就いての一切のこと何でもよろしい原稿は十六字詰十行きで、餘興葉と書き添へること其他例の通り▲しめきり本月十五日



寫眞懇請

誌友諸孃にお望みいたします、本誌愛讀者の面影を紙上で紹介致したいと思ひますから、從來の如く盛んに御寫眞の寄送を願ひます、お一人の寫眞に限りません、愛讀者の方々が時々催小集の紀念に撮つた寫眞など最興味があらうと存じられます、或は二三人連れてお友達同士お寫しになつたのも歡迎致します、女子の雜誌ですから家族の寫眞も好いのです、女子の方が多く寫つて居るのを希望します、又可愛らしいお子樣達の寫眞も結構です、なほ人物以外には各地の名所、風景、又は風俗寫眞も勿論掲載致します、風景などは成べく餘り世間に紹介されて居ない新しい場所が好いのです、以上凡て『乞返送』と書添えて下さいますれば、用濟次第直ぐ御返し致します、何卒貸與を懇請致します、且人物風俗其他何れの寫眞にても、奇拔にして餘り世間に類の無い好い寫眞でしたら相當の報酬を差上ることになつて居りますから、其邊の所も御承知置きを願ひます。

▲投稿締切日

凡ての投書は毎月十五日堅く締切ます

○女子文壇投稿各種　懸賞定額（四十二年一月より改正）

（甲乙丙の各欄を通じて最も優秀と認むる作物ある場合に之を呈す）

▲特別賞金五圓

▲甲種（短篇小說、美文）
天賞金參圓。地賞金壹圓五拾錢。人賞金七拾錢。

▲乙種（お伽噺、家庭日記、新論文、書簡文、新體詩、散文詩）
天賞金貳圓。地賞金八拾錢。人賞金四拾錢。

▲丙種（和歌、俳句、短文、餘興、笑話、歌謠、致への庭、少女文壇圖畫は二寸の三寸の大さにて薄き日本紙に限る）
天賞金壹圓。地賞金五拾錢。人賞金貳拾錢。

◎各種とも金壹圓以上の價格の當選者には相當の呉服物。小間物。文房具。日用具等凡て物品にて贈呈す壹圓以下は便利圖書切符を以て贈呈す

●賞品發送は作物發表の翌月末日に贈呈す、（但他人の作物を剽窃したるものは無効とす）

（――社　告――）

女子文壇定價明細表

振替貯金口座　東京第壹七貳九番

○定期發行分（一日定期發行）
▲毎月一回
一冊（一回分）　定價金拾五錢：郵税一錢五厘　計金拾六錢五厘
三冊（三月分）　同前金四拾三錢五厘：同四錢五厘　計金四拾八錢
六冊（半年分）　同前金八拾四錢：同九錢　計金九拾三錢
十二冊（壹年分）　同前金壹圓五拾六錢：同拾八錢　計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分
▲年四回（二月、五月、八月、十一月臨時增刊）
一冊（一回分）　定價金貳拾錢：郵税一錢五厘　計金貳拾一錢五厘
二冊（半年分）　同前金三拾八錢：同三錢　計金四拾壹錢
四冊（壹年分）　同前金七拾貳錢：同六錢　計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部
▲十六回
四冊（三月分）　定價金六拾三錢五厘：郵税六錢　計金六拾九錢五厘
八冊（半年分）　同前金壹圓二拾三錢：同拾貳錢　計金壹圓三拾五錢
十六冊（壹年分）　同前金貳圓三拾八錢：同二拾四錢　計金貳圓六拾貳錢

▼申込注意
一振替にて拂込む時は誌代の外に貳錢を記料增すを、郵便爲替は本材木町局、郵便切手代用は必ず壹割增（收入印紙謝絶）、凡て前金拂込に限る

廣告料金

	特等	上等	普通
一頁	三十圓	廿五圓	廿三圓
半頁	……	……	十二圓
一行			四拾錢

部數多く有効に比し無類の割安　〆切毎號十五日前

特約取扱　○京橋　日本電報通信社　○京橋　明治廣告社　○神田　博報堂

明治四十二年二月廿六日印刷
明治四十二年三月一日發行

改正定價　金拾五錢

不許轉載

東京市京橋區大鋸町十一番地
編輯兼發行者　野口竹次郎
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷者　石川金太郎
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷所　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地
電話〔本局六〇七番〕
女子文壇社

特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

日本青年最好伴侶

第九巻

秀才文壇

第五號

三月一日發行 ● 價一冊金拾參錢 郵稅一錢

▷口繪◁

△ローヅの香（原色寫眞）……ウオターハウス筆

●いみじき樂の音●春の日なか●霸氣の帝王●武士の典型肥後守の遺跡●疲勞●當撰秀才之面影……（六氏）

評論と梗概

○私の文學に對する希望　嵯峨のや主人

○口語、調子論……馬場孤蝶

○醉中語……高濱虛子

○英國批評の過去現在　片上天弦

○アナトール、フランスの著作と生涯　河野桐谷

▲小說 都會の人……德田秋聲

○煙突（詩）……相馬御風

○詩三篇……人見東明

○入社の辭……前田夕暮

○鰹船（小品）……西山筑濱

○前月の歌壇……前田夕暮

○新作川評……矢部白雨

懸賞 青年文壇壹百餘頁には新進青年作家の大筆戰あり

選者 有名大家十四名

發行所 東京神田旅籠町一丁目 文光堂（振替口座一九五五）

賣捌 東京堂 東海堂 ○北隆館 ○上田屋

（坪内製本）

【東京秀英舍印刷】